

令和5年度
文部科学省委託調査

**令和5年度
WWLコンソーシアム構築支援事業
におけるEBPMに向けたデータ収集・
分析、効果検証等のための調査研究**

調査報告書

令和6年3月

株式会社 リベルタス・コンサルティング

目次

第1章 調査概要	1
1-1 調査目的	1
1-2 調査内容	2
第2章 カリキュラム開発拠点校・拠点校へのアンケート調査	4
2-1 調査概要	4
2-2 回答校の属性	5
2-3 AL ネットワークの形成・実施体制	6
2-4 カリキュラムの研究開発・実践	9
2-5 WWL コンソーシアム構築支援事業の成果	29
2-6 管理機関の活動	36
2-7 苦労点・問題点と対応策	39
2-8 まとめ	41
第3章 カリキュラム開発拠点校生徒へのアンケート調査	43
3-1 調査概要	43
3-2 WWL 事業について	44
3-3 日本に関する考え	53
3-4 学校生活について	55
3-5 高校卒業後の進路について	62
3-6 WWL 事業参加生徒の成長の状況	67
3-7 生徒の3年間の成長の状況	79
3-8 まとめ	90
第4章 カリキュラム開発拠点校教員へのアンケート調査	92
4-1 調査概要	92
4-2 WWL 事業への関わり	96
4-3 SGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校での勤務	104
4-4 SGH 事業と比較した際の WWL 事業の違い	105
4-5 苦労点・問題点と対応策	106
4-6 まとめ	109

第5章 卒業生へのアンケート調査	110
5-1 調査概要	110
5-2 高校時代の生活	111
5-3 高校時代のSGH事業やWWL事業の経験	115
5-4 高校卒業時の考えや行動について	117
5-5 高校卒業後から現在までについて	122
5-6 現在の生活とWWL事業.....	128
5-7 現在の自身の考えや行動について	137
5-8 高校と大学の授業の比較	141
5-9 まとめ.....	148
第6章 カリキュラム開発拠点校ヒアリング	150
6-1 事例紹介	150
第7章 まとめ	163
7-1 WWLコンソーシアム構築支援事業の成果.....	163
7-2 課題等.....	165

第1章 調査概要

本調査研究は、文部科学省からの委託を受けて実施したものである。調査概要は、以下のとおり。

1-1 調査目的

社会の大きな変革として **Society 5.0** が訪れようとする中、我が国の新たな社会を牽引する人材の育成が求められており、平成 30 年 6 月に文部科学省「**Society 5.0** に向けた人材育成に係る大臣懇談会」においてまとめられた「**Society 5.0** に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」の中で、新たな時代に向けた学びの変革、取り組むべき施策 (**Society 5.0** に向けたリーディング・プロジェクト) の一つとして、文理両方を学ぶ高大接続改革に基づく、**WWL** (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム (以下「**WWL** コンソーシアム」という。) の創設が提案された。

WWL コンソーシアムは、高度かつ多様な科目内容を、生徒個人の興味・関心・特性に応じて履修可能とする高校生の学習プログラムの開発と実践を担うものとして想定されており、将来的に、高校生 6 万人あたり 1 か所を目安に、各都道府県で国立、公立及び私立の高等学校等を拠点校として整備し、全ての高校生が選抜を経てオンライン・オフラインで参加することを可能とする仕組みを持つことが目指されている。

WWL コンソーシアム構築支援事業 (以下「**WWL** 事業」という。) では、**Society 5.0** において共通して求められる力 (①文章や情報を正確に読み解き対話する力、②科学的に思考・吟味し活用する力、③価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探究力等) を基盤として、将来、新たな社会を牽引し、世界で活躍出来るビジョンや資質・能力を有したイノベティブなグローバル人材を育成するため、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組み「アドバンスト・ラーニング・ネットワーク」(以下「**AL** ネットワーク」という。) を形成した拠点校を全国に配置することで、将来的に、**WWL** コンソーシアムへと繋げることを目的としている。

本調査研究においては、**WWL** 事業の各事業拠点校の管理機関内に設置された **AL** ネットワーク運営組織における政策効果検証 (測定) と評価、その成果の普及を行うとともに、併せて、成果効果の測定に重要な関連を持つ情報や統計等を活用した **EBPM** を推進し、政策

の有効性を高め、国民の行政への信頼確保に資する機能を果たすことを目指す。

1-2 調査内容

WWL 事業のカリキュラム開発拠点校及び管理機関にご協力頂き、下記の調査を実施した。

調査名		対象
拠点校アンケート		33校 (令和元年度指定拠点校10校 令和2年度指定拠点校12校 令和3年度指定拠点校6校 令和4年度指定拠点校2校 令和5年度指定拠点校3校)
生徒アンケート	WWL 事業参加生徒	拠点校において WWL 事業に参加している全生徒 約19,500名
	WWL 事業非参加生徒	拠点校で WWL 事業に参加していない生徒 8校
教員アンケート		拠点校33校の教員全員
卒業生アンケート		WWL 事業・SGH 事業の卒業生を輩出している 拠点校のうち21校
拠点校ヒアリング		拠点校のうち令和3年度指定校6校

1-3 委員会の開催

運営指導委員会による委員会を開催し、上記調査の設計・分析に関するご意見を頂いた。
委員は下記の通り（50音順）。

木村 昌臣	芝浦工業大学 工学部 情報工学科 教授 国際交流センター センター長
佐藤 真久	東京都市大学 環境学部 教授
須藤 康介	明星大学 教育学部 准教授
椿 広計	情報・システム研究機構 統計数理研究所 所長
濱中 淳子	早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授
松本 茂	東京国際大学 言語コミュニケーション学部 教授 国際コミュニケーション教育研究所 所長
矢野 眞和	東京工業大学 名誉教授

委員会開催日程は下記の通り。

第1回	令和5年6月1日
第2回	令和5年11月6日
第3回	令和6年3月19日

第2章 カリキュラム開発拠点校・拠点校へのアンケート調査

2-1 調査概要

全カリキュラム開発拠点校・拠点校へアンケートを実施し、各取組みの達成状況のデータ収集及び効果を明らかにした。

2-1-1 調査対象

拠点校 33 校（令和元年度 10 校、令和 2 年度 12 校、令和 3 年度 6 校、令和 4 年度 2 校、令和 5 年度 3 校）。

2-1-2 調査方法

e メールによる調査票の発送及び回答票回収

2-1-3 調査時期

令和 5 年 12 月 1 日～令和 5 年 12 月 27 日

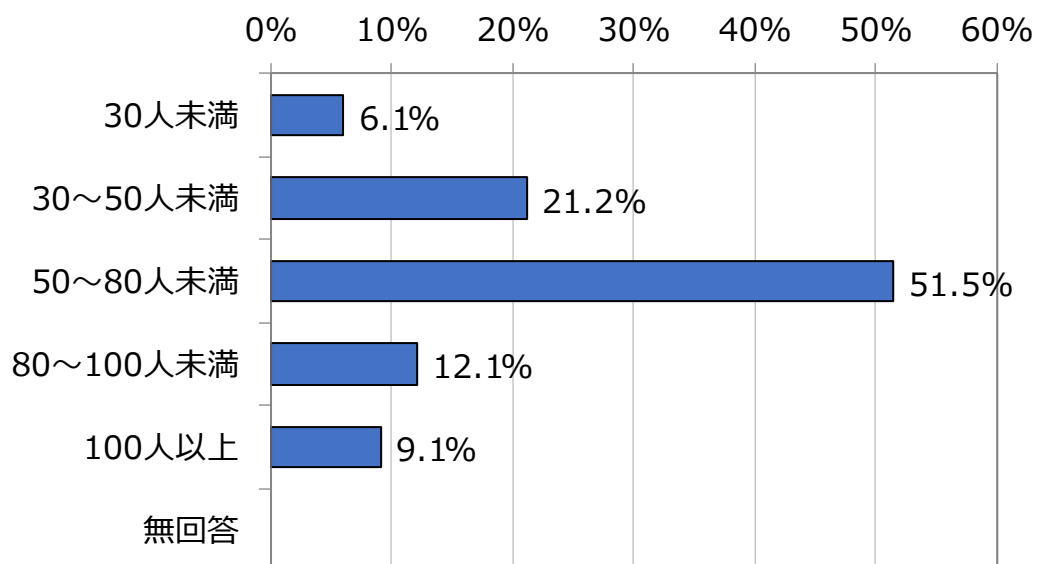
2-1-4 回収状況

33 件（回収率 100%）

2-2 回答校の属性

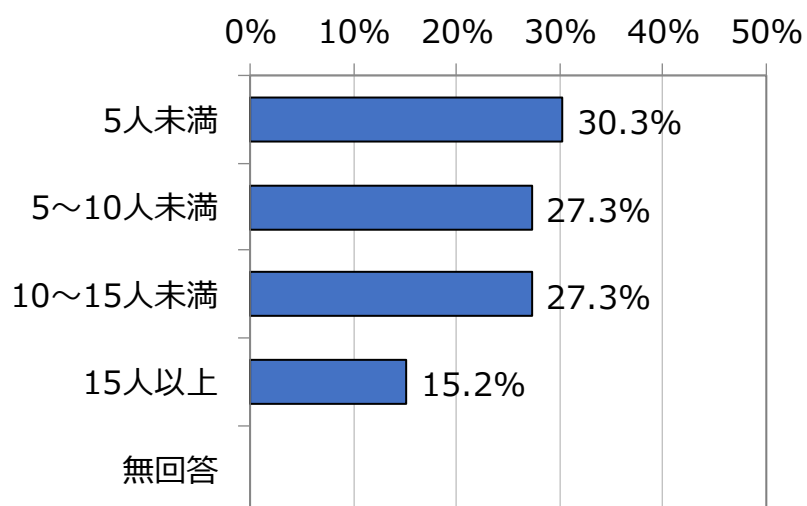
2-2-1 全教員数

図表 2-1 全教員数 (n=30)



2-2-2 WWL 事業の主担当となっている教員数

図表 2-2 WWL 事業の主担当となっている教員数 (n=30)



2-3 AL ネットワークの形成・実施体制

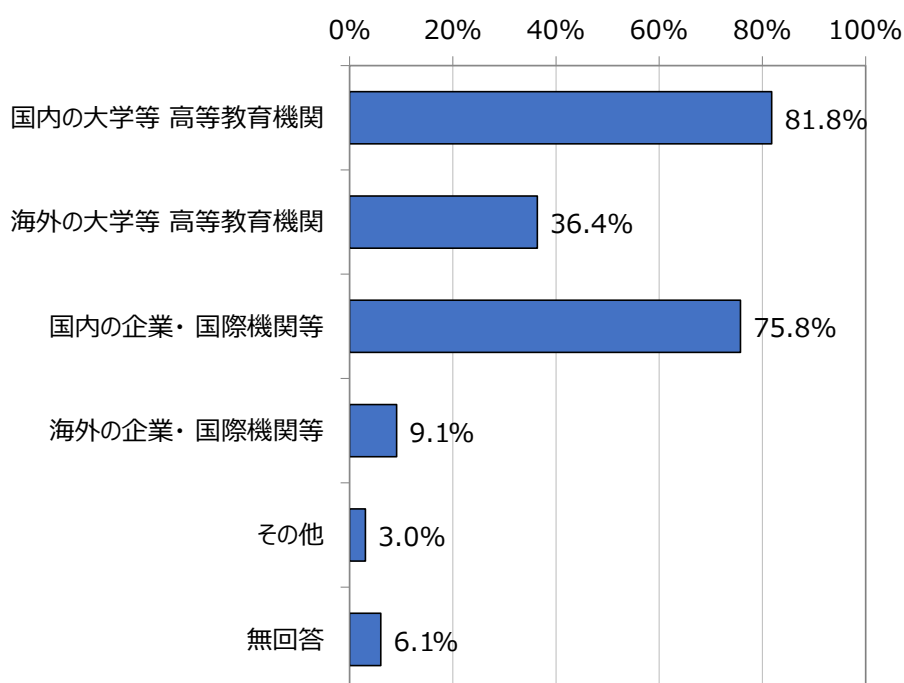
2-3-1 AL ネットワークに参加している機関

AL ネットワークの参加機関は、「国内の大学等高等教育機関」の割合が高い。

33 ネットワークの総計で「国内の企業・国際機関等」が 145、「国内の大学等高等教育機関」が 83、参加している。

なお、「共同実施校」は 8、共同実施校以外の「国内高校（連携校）」が 289、「海外高校」が 119、参加している。

図表 2-3 AL ネットワークに参加している機関（複数回答）（n=33）



図表 2-4 参加している機関数（33 ネットワークの合計）

機関数	共同実施校	国内高校 (連携校)	海外高校	国内の大学等 高等教育機関	海外の大学等 高等教育機関	国内の企業・ 国際機関等	海外の企業・ 国際機関等	その他
合計	8	289	119	83	27	145	9	1

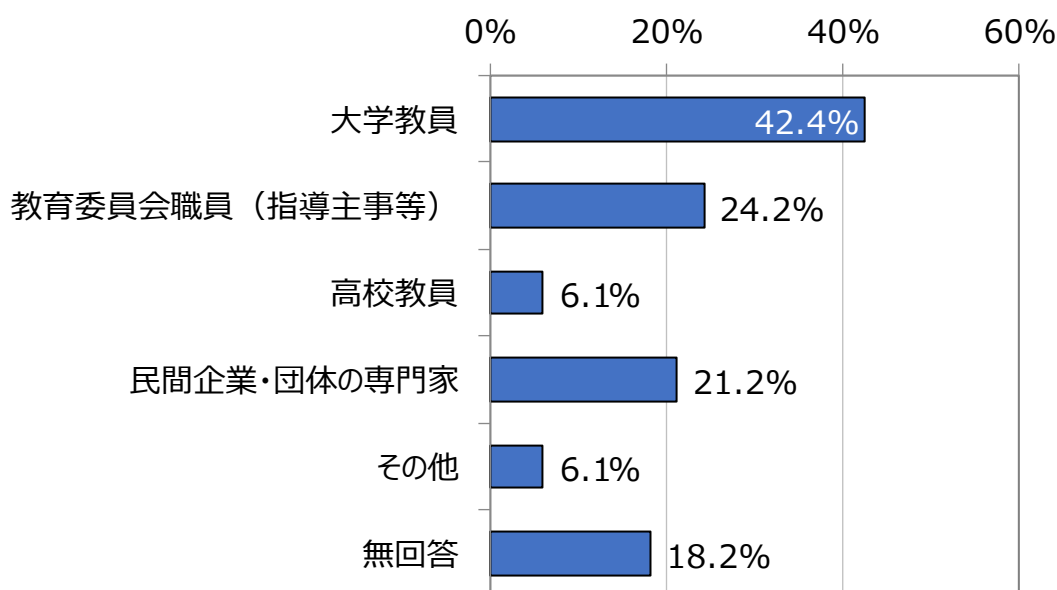
※「共同実施校」「国内高校（連携校）」「海外高校」の学校数…文部科学省 HP「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」カリキュラム開発拠点校 一覧（令和 5 年 8 月 21 日現在）より

2-3-2 AL ネットワークのカリキュラムアドバイザー

カリキュラムアドバイザーの属性は、「大学教員」が 42.4%と最も割合が高く、次が「教育委員会職員（指導主事等）」で 24.2%。

人数ベースは、「大学教員」が最も多く、33 ネットワークの総計で 37 人、次いで「教育委員会職員（指導主事等）」で 11 人、「民間企業・団体の専門家」が 9 人。

図表 2-5 AL ネットワークのカリキュラムアドバイザー（複数回答）（n=33）



図表 2-6 カリキュラムアドバイザーの人数（33 ネットワークの合計）

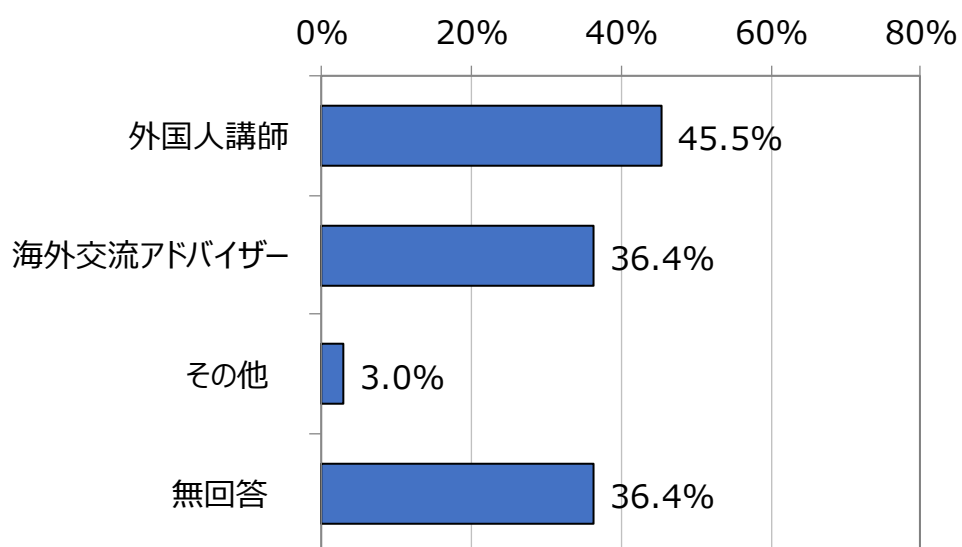
カリキュラム アドバイザー	大学教員	教育委員会職員 （指導主事等）	高校教員	民間企業・団 体の専門家	その他
合計	37	11	7	9	2

2-3-3 WWL 事業に関わる外国人講師及び海外交流アドバイザー

WWL 事業に関わる割合は「外国人講師」が 45.5%、「海外交流アドバイザー」が 36.4% である。

総人数は「外国人講師」が多く 62 人、「海外交流アドバイザー」は 15 人。

図表 2-7 WWL 事業に関わる外国人講師及び海外交流アドバイザー
(複数回答) (n=33)



図表 2-8 外国人講師及び海外交流アドバイザーの人数 (33 ネットワークの合計)

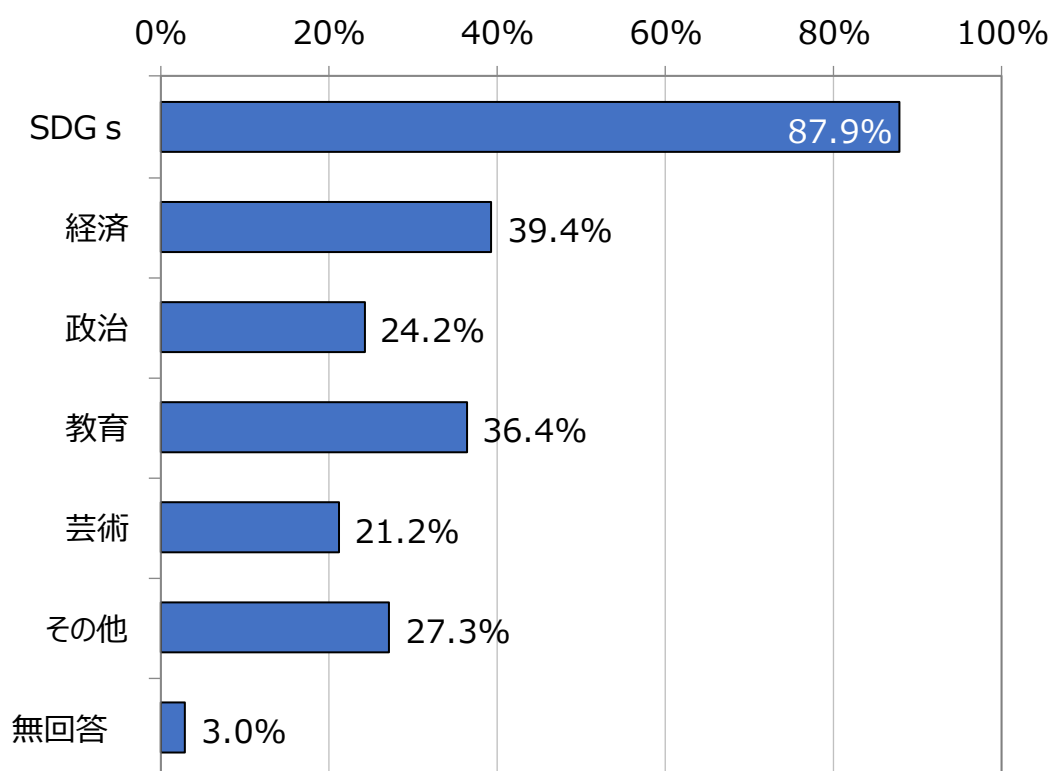
外国人講師等	外国人講師	海外交流アドバイザー	その他
合計	62	15	1

2-4 カリキュラムの研究開発・実践

2-4-1 カリキュラム開発において設定していたテーマの分野

カリキュラム開発で設定したテーマで最も割合が高いものは「SDGs」で、87.9%の拠点校がテーマとして設定していた。

図表 2-9 カリキュラム開発において設定していたテーマの分野（複数回答）（n=33）



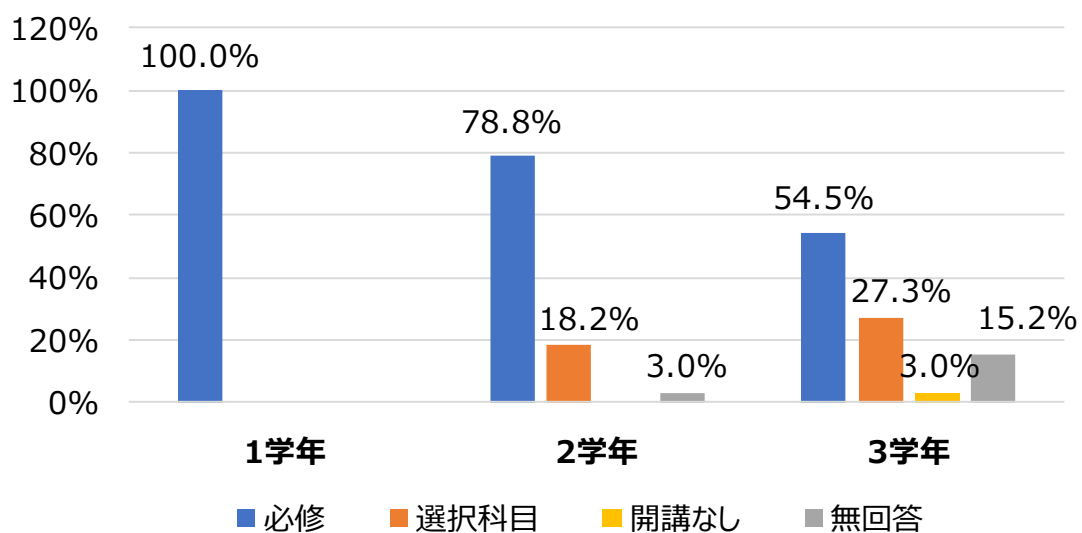
2-4-2 探究型学習

(1)各学年の科目の種別

探究型学習の実施方法についてみていく。

1 学年では「必修」の割合が高いが、学年が上がるにつれて割合は下がり、「選択科目」の割合が増加する。

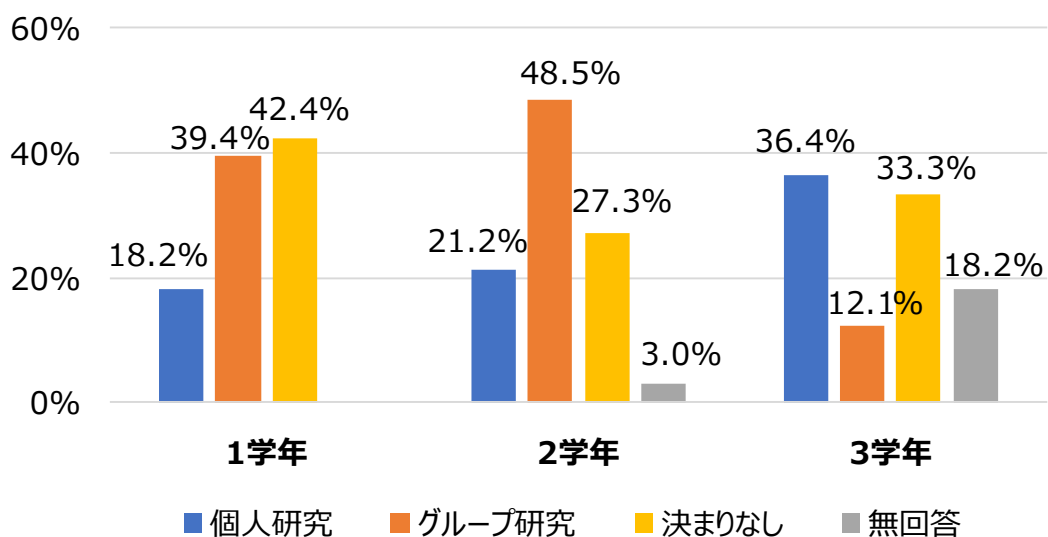
図表 2-10 探究型学習の各学年の科目の種別 (n=33)



(2)各学年の主な活動の単位

1、2 学年では「グループ研究」の割合が高いが、3 学年では「個人研究」の割合が高くなる。

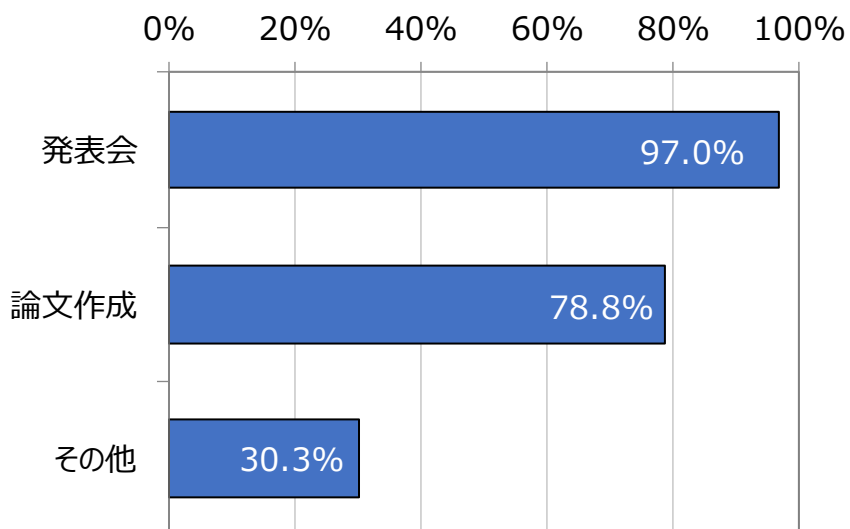
図表 2-11 探究型学習の各学年の主な活動の単位 (n=33)



(3)成果の取りまとめ方

「発表会」で成果の取りまとめを行った学校が9割以上である。

図表 2-12 成果の取りまとめ方（複数回答）（n=32）



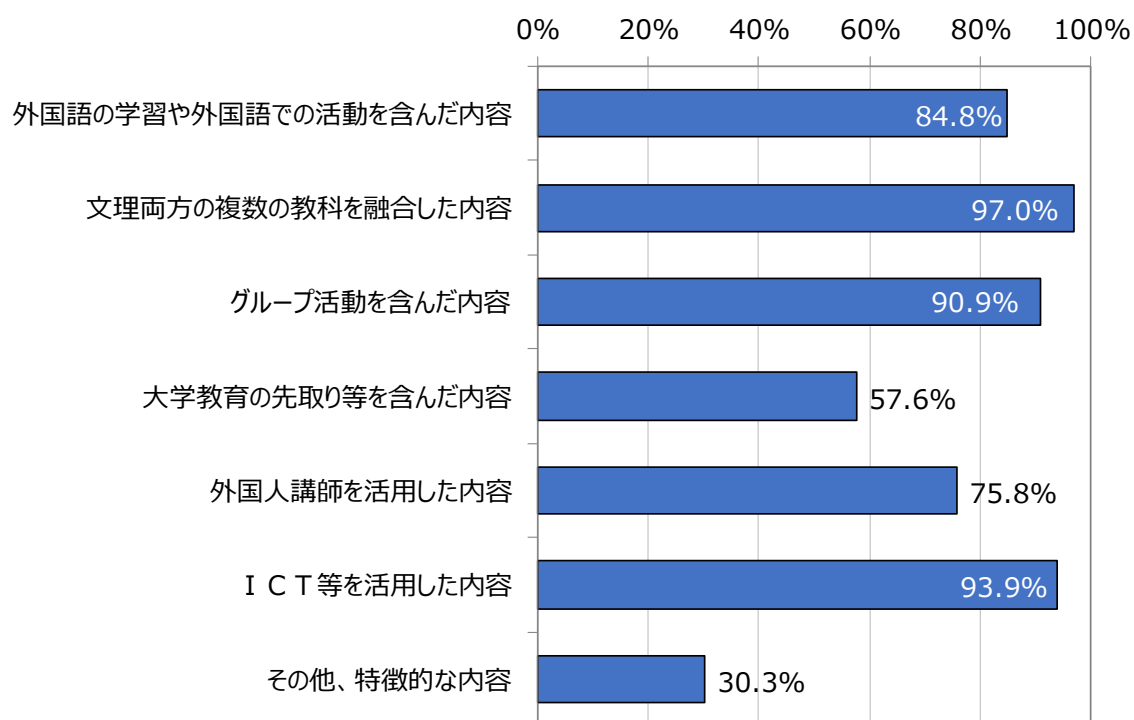
図表 2-13 成果の取りまとめ方（33 ネットワークの合計）

成果の取りまとめ	発表会	論文作成	その他
合計	32	26	10

(4)探究型学習の内容

探究型学習は、8割以上の学校が「文理両方の複数の教科を融合した内容」「ICT等を活用した内容」「グループ活動を含んだ内容」「外国語の学習や外国語での活動を含んだ内容」としている。

図表 2-14 探究型学習の内容 (n=33)

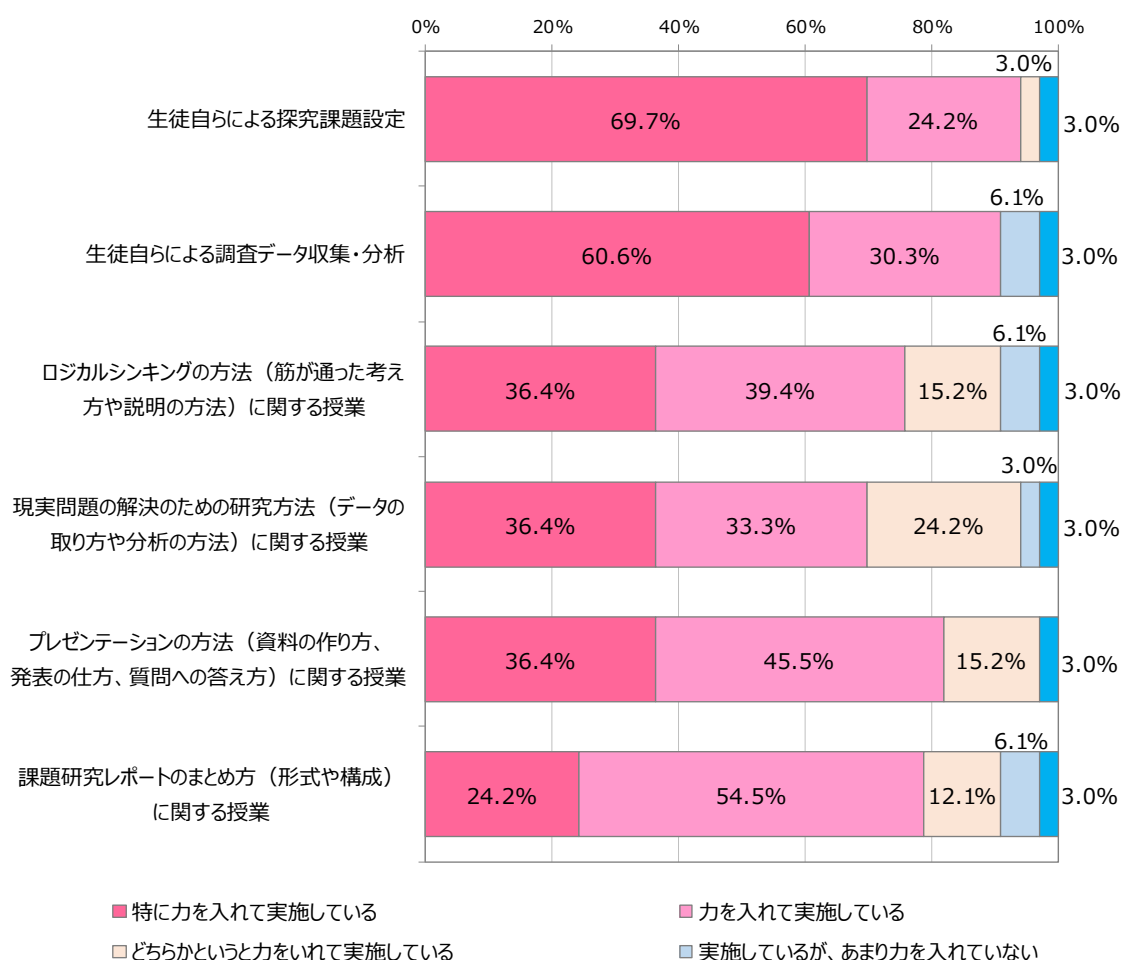


(5) 探究型学習の実施度合い

探究型学習についての各項目は、いずれの学校もほとんどの項目が「力を入れて実施している（特に力を入れて実施している+力を入れて実施している）」と回答。

「生徒自らによる探究課題設定」「生徒自らによる調査データ収集・分析」では、6割以上の学校が「特に力を入れて実施している」と回答した。

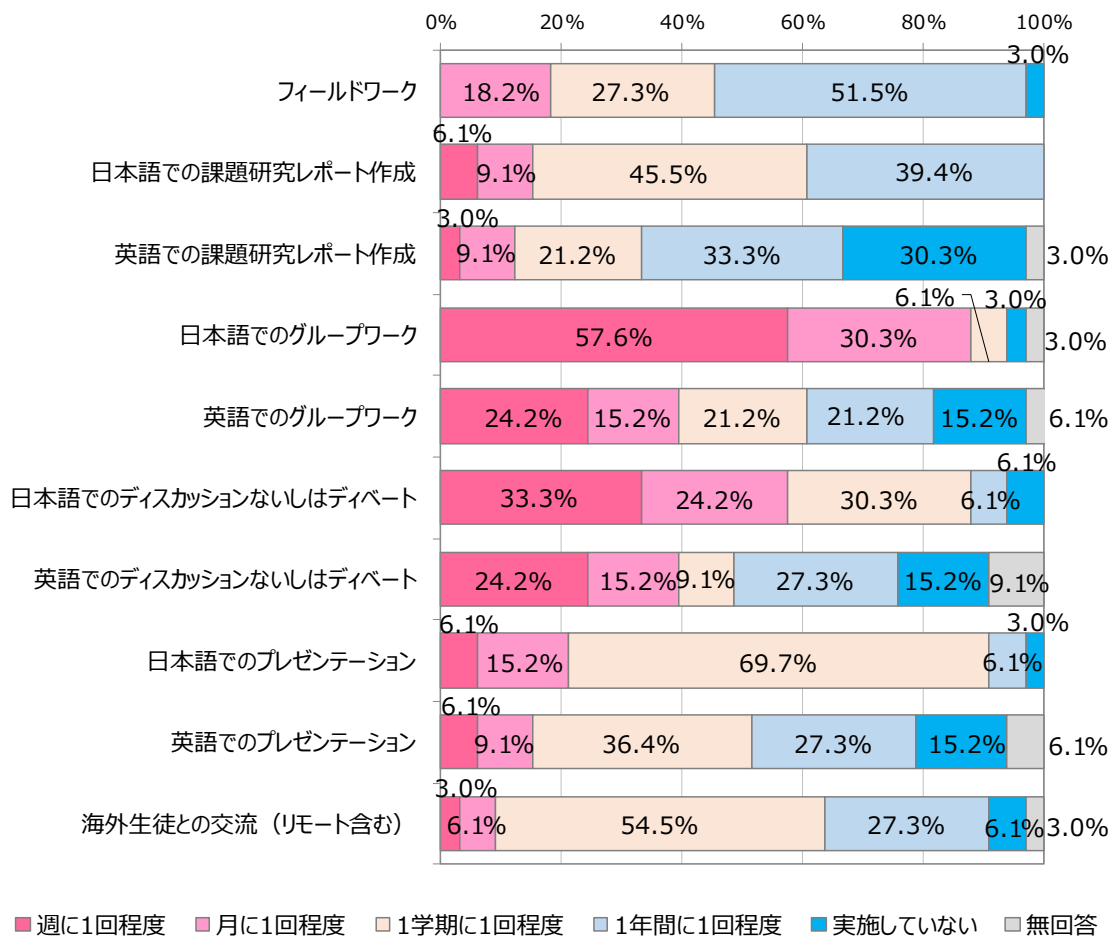
図表 2-15 探究型学習の実施度合い (n=33)



(6)探究型学習の実施頻度

探究型学習の実施頻度については、「日本語でのグループワーク」は、5割の学校が、「週に1回程度」実施している。

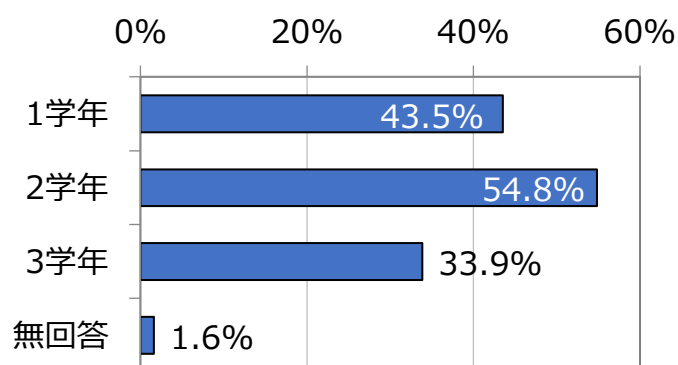
図表 2-16 探究型学習の実施頻度 (n=30)



2-4-3 外国語や文理両方の複数教科を融合した内容の教科・科目

外国語や文理両方の複数教科を融合した内容の教科・科目は、33校で62科目設定されている。学年別では、第2学年の科目がやや多い。62科目のうち、6割以上の科目は、生徒全員が受講対象になっている。

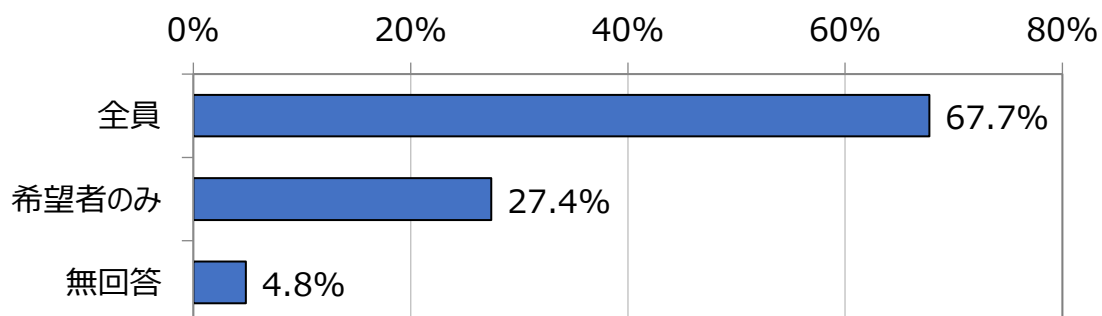
図表 2-17 対象学年（複数回答）（n=62）



図表 2-18 各学年の単位数

単位数	1学年 (n=27)	2学年 (n=35)	3学年 (n=21)
平均	1.72	1.93	1.90

図表 2-19 受講者（n=62）



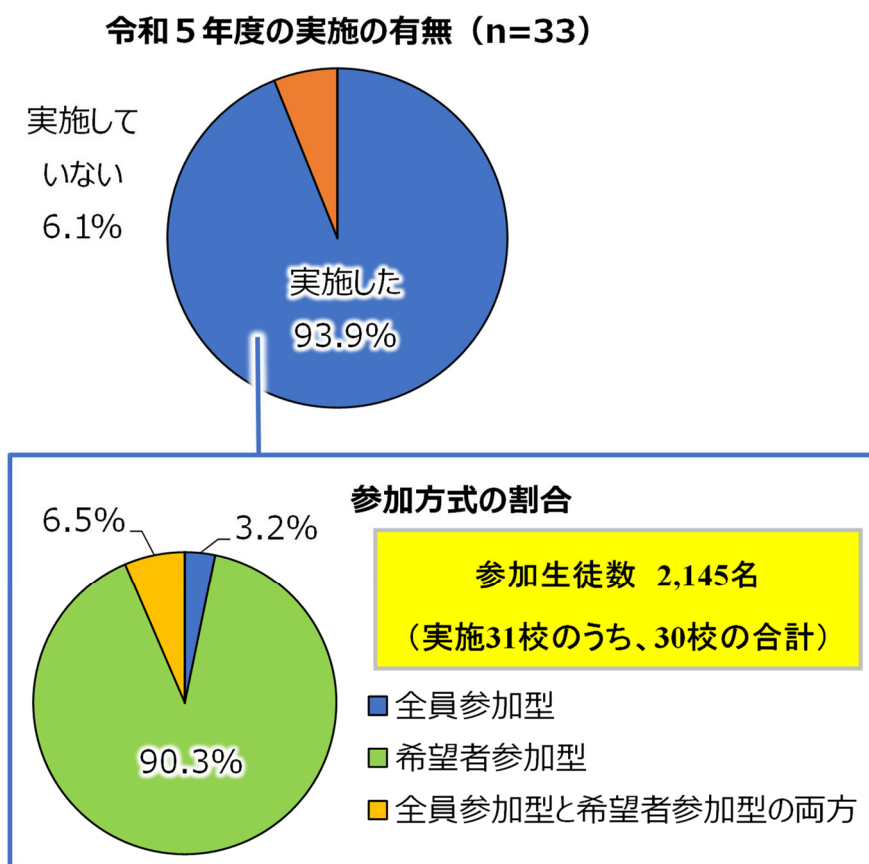
2-4-4 短期・長期留学及び海外研修等

(1)実施状況

令和5年度、短期・長期留学及び海外研修等を実施した拠点校は31校で、93.9%だった。

令和5年度、短期・長期留学及び海外研修等を実施した拠点校31校のうち、90.3%が「希望者参加型」だった。30校の合計参加生徒数は2,145名だった

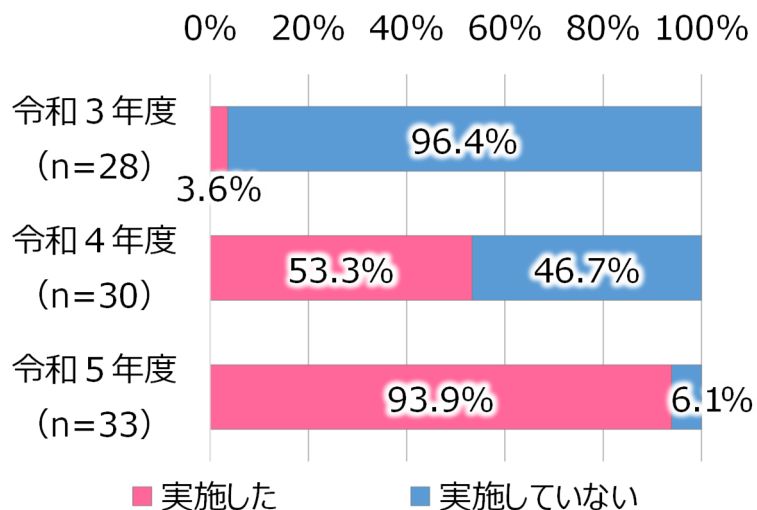
図表 2-20 短期・長期留学及び海外研修等の実施状況



(2)海外研修・交流の実施割合の推移

令和3年度、9割以上の学校で短期・長期留学及び海外研修等を中止していたが、令和4年度には半数の学校で再開し、令和5年度には9割以上の学校で再開している。

図表 2-21 海外研修・交流の実施割合の推移

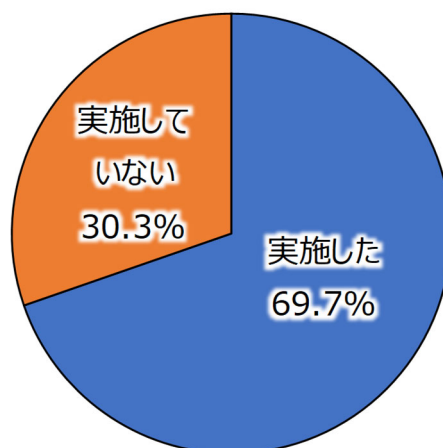


2-4-5 高校生国際会議

(1)高校生国際会議の実施状況

令和5年度に高校生国際会議を実施した拠点校は23校で、69.7%だった

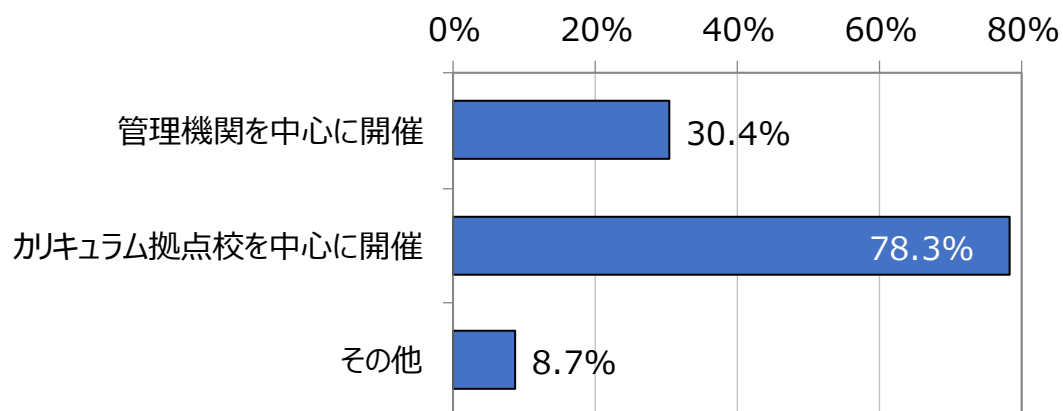
図表 2-22 高校生国際会議の実施状況 (n=33)



(2)開催方法

高校生国際会議の開催方法は、「カリキュラム拠点校を中心に開催」が78.3%、「管理機関を中心に開催」が30.4%である。

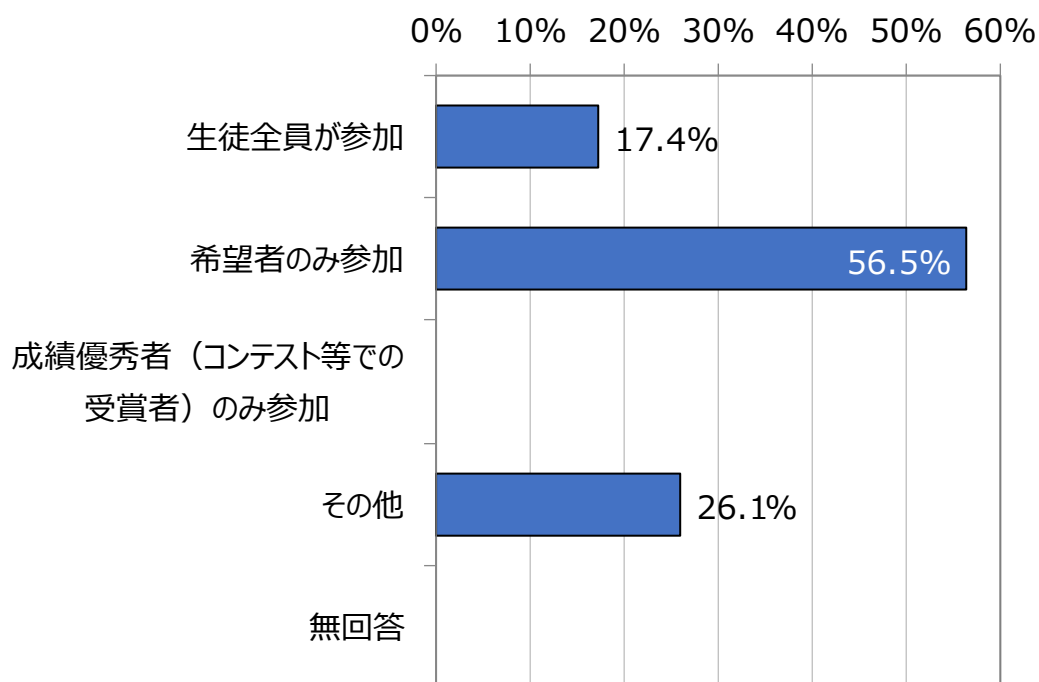
図表 2-23 高校生国際会議の開催方法 (n=23)



(3)カリキュラム開発拠点校における高校生国際会議の位置づけ

高校生国際会議は、「希望者のみ参加」型が 56.5%、「生徒全員が参加」型が 17.4%である。

図表 2-24 カリキュラム開発拠点校における高校生国際会議の位置づけ (n=23)



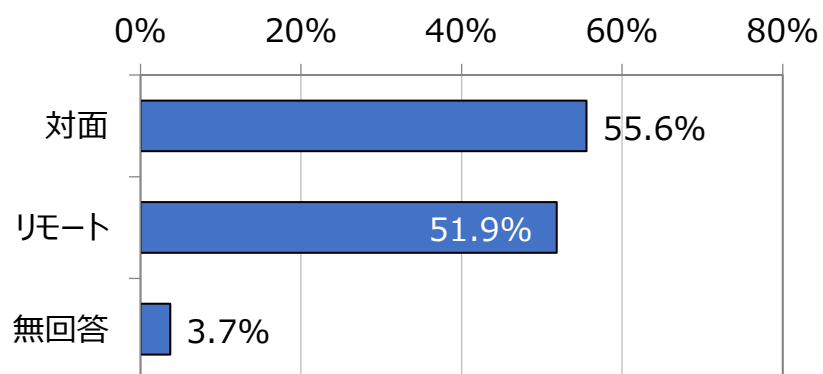
(4)高校生国際会議の実施状況

高校生国際会議は、令和 5 年度、33 ネットワークの合計で 27 回開催された。延べ 351 校、拠点校生徒 2,428 名、拠点校以外の国内生徒 1,392 名、海外生徒 506 名が参加した。

図表 2-25 参加状況 (33 ネットワーク 27 回の合計値)

	平均参加国数	参加学校数	参加生徒数 (拠点校)	参加生徒数 (拠点校以外)	参加生徒数 (海外)
合計	4.00	351	2,428	1,392	506

図表 2-26 参加方法 (n=27)

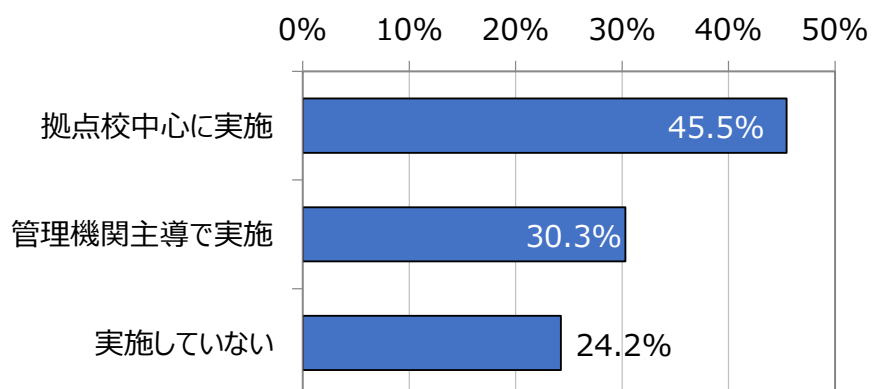


2-4-6 高大連携による大学教育の先取り履修に関する取組みの実施状況

(1) 取組みの実施の有無

高大連携による大学教育の先取り履修については、45.5%が「拠点校中心に実施」している。

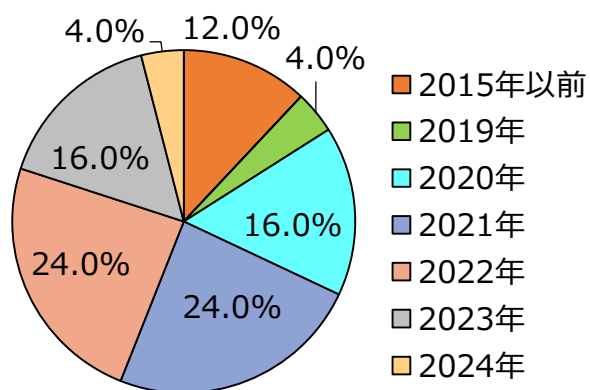
図表 2-27 実施の有無 (n=33)



(2) 取組みの開始時期

高大連携による大学教育の先取り履修を「実施」した 25 校のうち、8 割以上が 5 年以内に取組みを開始した。

図表 2-28 取組みの開始時期 (n=25)



(3)大学との連携状況

高大連携による大学教育の先取り履修を実施している学校が連携している大学の合計数は38校だった。また、授業数104だった。

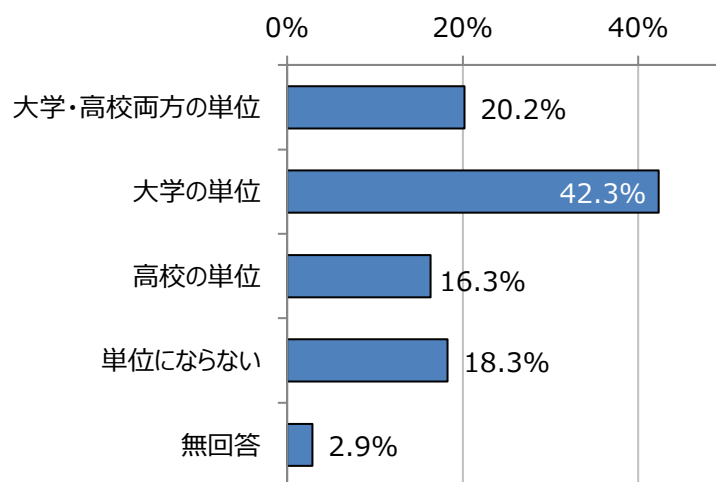
図表 2-29 大学との連携状況

高大連携	大学数 (n=24)	授業数 (n=24)
合計	38	104

(4)単位化の状況

104授業のうち、「大学・高校両方の単位」になる授業が20.2%、「大学の単位」になる授業が42.3%、「高校の単位」になる授業が16.3%となっている。

図表 2-30 単位化の状況 (n=104)



図表 2-31 令和5年度の参加者数 (n=104)

令和5年度	参加者数	単位取得人数
合計	3,235	1,314

2-4-7 WWL 事業の各活動を通じて実施した取組み状況

WWL 事業の各活動を通じて実施した取組み状況は、下記のとおり。

令和5年度は新型コロナの5類移行の影響もあり、海外との直接の交流が増えている。

図表 2-32 海外研修

海外研修	実施回数	渡航日数計
合計	97	4341
令和元年度 (n=10)	23	319
令和2年度 (n=22)	5	100
令和3年度 (n=28)	7	265
令和4年度 (n=30)	62	3657
令和5年度 (n=33)	109	2139

図表 2-33 留学生受入

留学生受入	受入人数	うち対象人数	留学元 国・地域数
合計	141	98	112
令和元年度 (n=10)	41	20	25
令和2年度 (n=22)	19	18	18
令和3年度 (n=28)	22	20	22
令和4年度 (n=30)	59	40	47
令和5年度 (n=33)	98	85	49

図表 2-34 帰国子女受入

帰国子女	受入人数	うち対象人数	帰国前 国・地域数
合計	1828	973	272
令和元年度 (n=10)	224	224	43
令和2年度 (n=22)	255	235	69
令和3年度 (n=28)	259	259	56
令和4年度 (n=30)	1090	255	104
令和5年度 (n=33)	626	626	64

図表 2-35 短期訪問

短期訪問	受けた回数	国・地域数
合計	34	30
令和元年度 (n=10)	19	18
令和2年度 (n=22)	0	0
令和3年度 (n=28)	1	1
令和4年度 (n=30)	14	11
令和5年度 (n=33)	57	71

図表 2-36 テレビ会議等リモートによる国外の学生との交流及び所在国・地域数

リモート交流	国・地域数
合計	261
令和元年度 (n=10)	6
令和2年度 (n=22)	58
令和3年度 (n=28)	86
令和4年度 (n=30)	111
令和5年度 (n=33)	60

図表 2-37 フィールドワーク

フィールドワーク	国内		国外	
	回数	日数	回数	日数
合計	605	433	71	361
令和元年度 (n=10)	34	75	33	232
令和2年度 (n=22)	43	57	12	21
令和3年度 (n=28)	105	139	7	9
令和4年度 (n=30)	423	162	19	99
令和5年度 (n=33)	368	206	37	213

図表 2-38 英語による生徒の成果発表回数

英語による成果発表回数	校内	校外	海外
合計	809	241	82
令和元年度 (n=10)	253	32	18
令和2年度 (n=22)	219	44	15
令和3年度 (n=28)	228	93	35
令和4年度 (n=30)	109	72	14
令和5年度 (n=33)	526	82	40

図表 2-39 取組みの一環として主催した国際会議の回数、開催日数(高校生国際会議含む)

主催した国際会議回数	回数	開催日数
合計	75	93
令和元年度 (n=10)	18	3
令和2年度 (n=22)	13	20
令和3年度 (n=28)	21	32
令和4年度 (n=30)	23	38
令和5年度 (n=33)	27	34

図表 2-40 連携校との交流回数

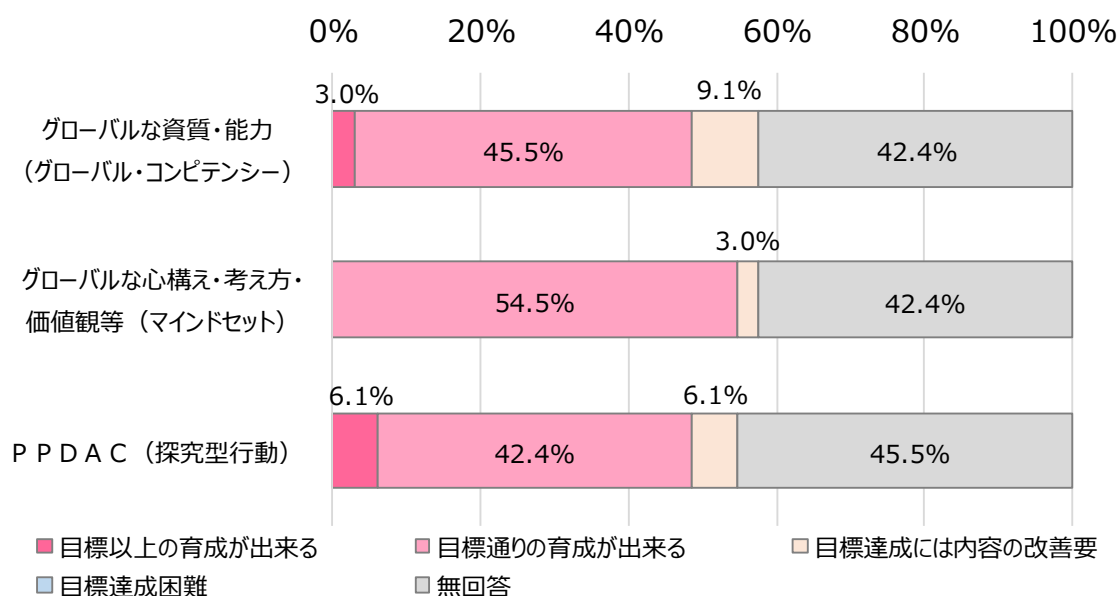
連携校との 交流回数	国内	国外
合計	329	222
令和元年度 (n=10)	19	23
令和2年度 (n=22)	75	42
令和3年度 (n=28)	104	72
令和4年度 (n=30)	131	85
令和5年度 (n=33)	222	161

2-5 WWL コンソーシアム構築支援事業の成果

2-5-1 育成項目の開発・実践したカリキュラムによる達成度

WWL コンソーシアム構築支援事業の育成項目について、開発・実践したカリキュラムによる達成度をきいたところ、「グローバルな心構え・考え方・価値観等（マインドセット）」の割合が最も高く、5割以上だった。

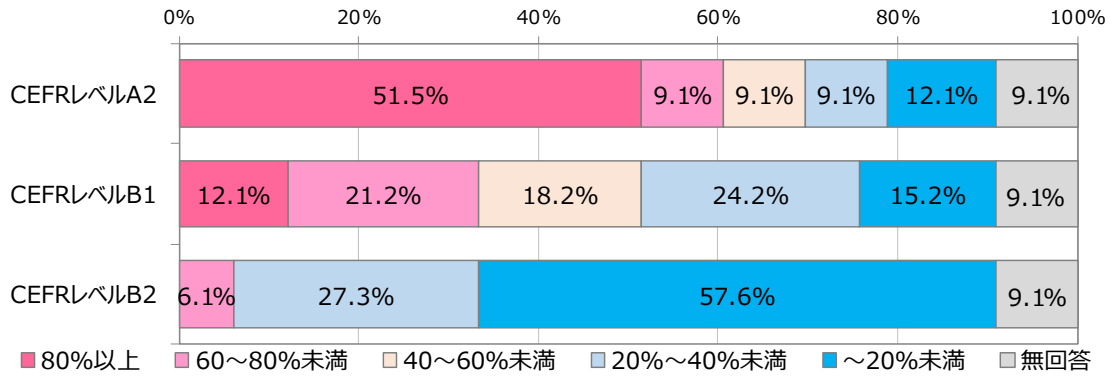
図表 2-41 開発・実践したカリキュラムによる達成度 (n=33)



2-5-2 生徒の CEFR レベル

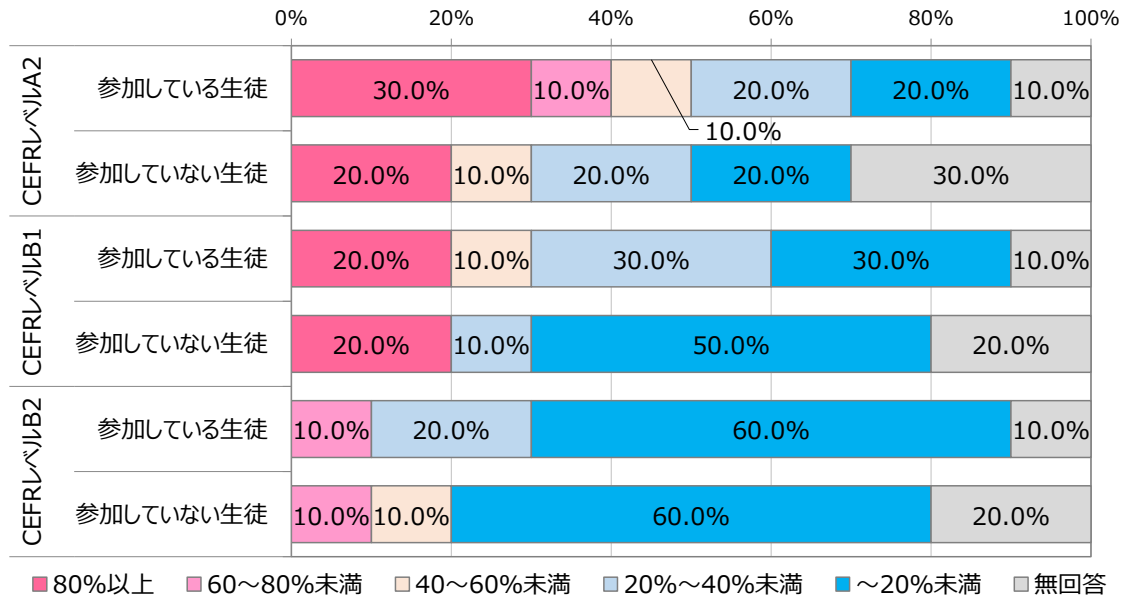
生徒の CEFR レベルをみると、CEFR レベル「A2」達成者の割合が「80%以上」と回答した拠点校は、51.5%となっている

図表 2-42 生徒の CEFR レベル (n=33)



図表 2-43 生徒の CEFR レベル

(参加している生徒・参加していない生徒の比較) (n=10)



2-5-3 WWL 事業に参加した生徒の海外大学への進学者

令和5年12月時点で、WWL 事業に参加した生徒の海外大学への進学者数は52名となっている。地域・分野は、下記のとおり。

図表 2-44 地域別進学者数 (n=33)

地域別	
進学者数	合計
アジア (日本以外)	16
中東	1
ヨーロッパ	8
アフリカ	0
北米	25
中南米	0
オセアニア	2
その他	0
合計	52

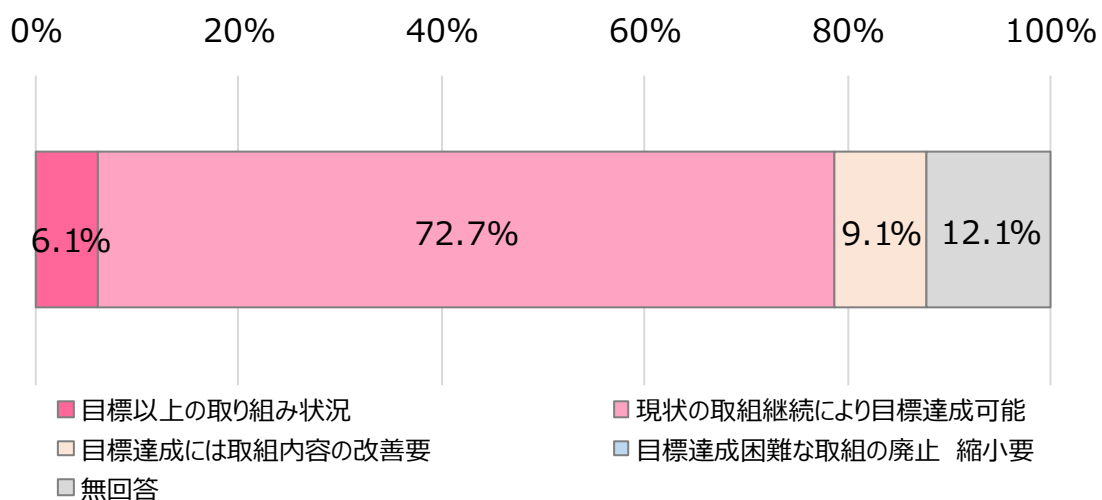
図表 2-45 分野別進学者数 (n=33)

分野別	
進学者数	合計
文学・史学・哲学・心理関係学部	4
海外文化・国際コミュニケーション等を含む人文学関係学部	21
教育関係学部	1
法学・政治学関係学部	0
商学・経済学関係学部	6
社会学・社会事業関係学部	2
理工学関係学部	10
農学関係	1
医学・薬学・看護学など保健関係学部	1
芸術関係学部	2
その他	4
合計	52

2-5-4 カリキュラムの研究開発・実践における本年度の自己評価

拠点校のカリキュラムの研究開発・実践における令和5年度の自己評価をみると、72.7%の拠点校において「現状の取組継続により目標達成可能」と回答している。

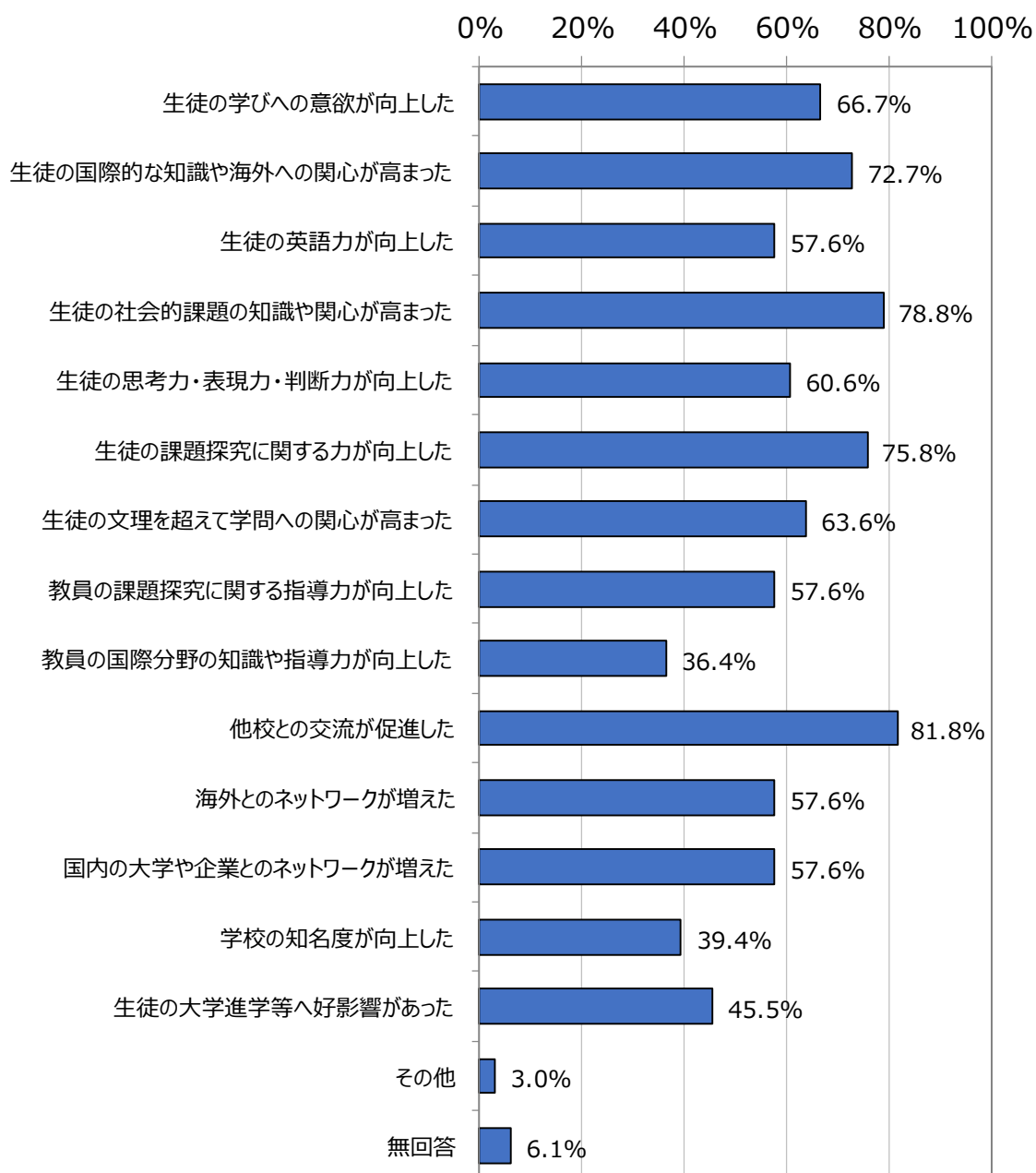
図表 2-46 カリキュラムの研究開発・実践における本年度の自己評価 (n=33)



2-5-5 WWL 事業の実施による学校への影響や変化

WWL 事業の実施による学校への影響や変化については「他校との交流が促進した (81.8%)」「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった (78.8%)」「生徒の課題探究に関する力が向上した (75.8%)」「生徒の国際的な知識や海外への関心が高まった (72.7%)」など多くの項目が挙げられている。

図表 2-47 WWL 事業の実施による学校への影響や変化 (複数回答) (n=33)

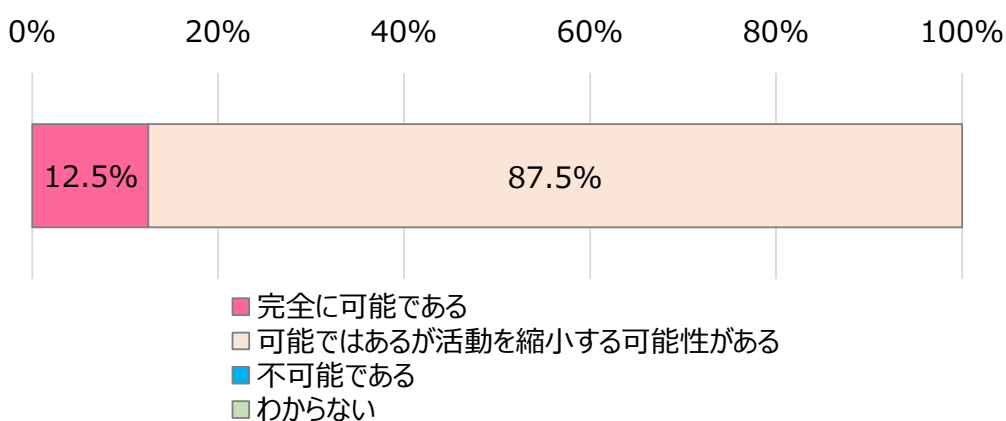


2-5-6 事業終了後の自走継続の可否

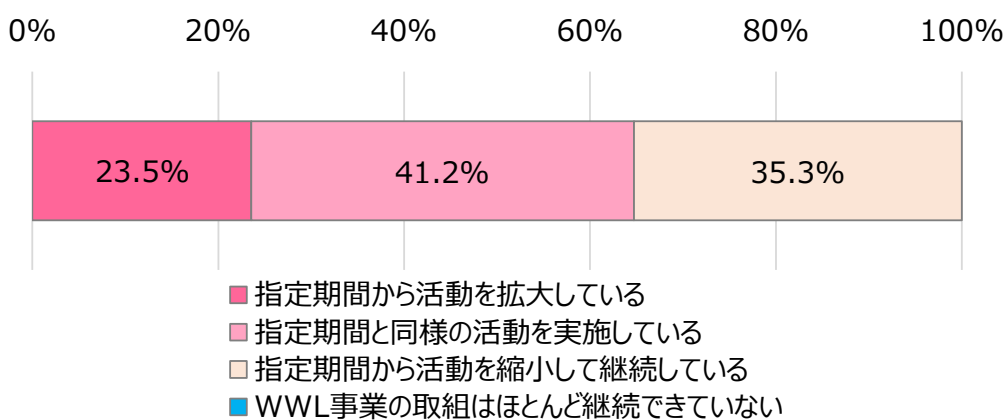
カリキュラム開発指定期間内の拠点校に、WWL 事業終了後の自走継続の可否をきいたところ、87.5%が「可能ではあるが活動を縮小する可能性がある」と回答。

カリキュラム開発指定期間が終了した拠点校の 41.2%は「指定期間と同様の活動を実施している」と回答。

図表 2-48 事業終了後の自走継続の可否
カリキュラム開発指定期間内の拠点校 (n=16)



図表 2-49 事業終了後の自走継続の可否
カリキュラム開発指定期間が終了した拠点校 (n=17)



WWL 事業の指定期間が終了した学校のうち、指定期間から活動を拡大・縮小した学校に、拡大・縮小の内容をきいた。その結果、拡大した学校においては、国内外との学校の連携拡大や、WWL 事業関係科目の拡大、行事との連携等を行っていた。

一方、活動を縮小した学校では、費用面等との問題から海外研修や外部人材等招聘の縮小・見直しを図っている。

図表 2-50 指定期間から拡大した活動の内容

- ・ イベントを期待する他の高校からのニーズ増加
- ・ 海外連携校の相互受け入れを拡大。
- ・ 国内連携校をさらに増やし、交流授業や相互授業を展開。
- ・ 探究型授業の科目数を増加。修学旅行等の宿泊行事を探究型に移行。

図表 2-51 指定期間から縮小した活動の内容

- ・ 海外研修の縮小（全員参加から希望制へ）（予算的課題とコロナの影響）
- ・ 海外研修の見直し（費用高騰のため）
- ・ 外部人材の招聘回数の縮小（費用面の問題）
- ・ 融合科目の変更（新教育課程に伴うカリキュラム編成変更）
- ・ 国際会議を非開催。

2-6 管理機関の活動

2-6-1 運営指導委員会の年間開催回数

管理機関による運営指導委員会の年間開催回数は、下記のとおり。

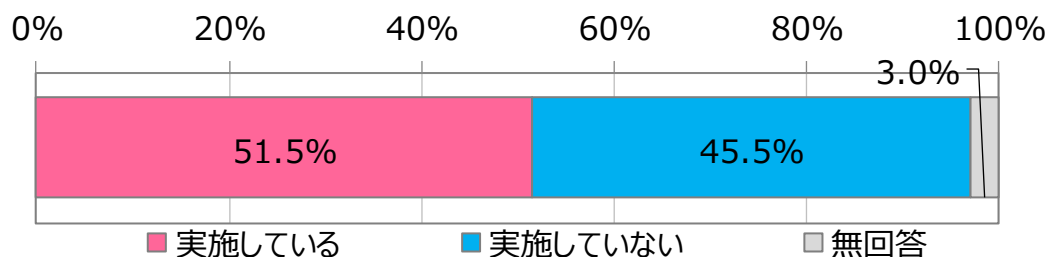
図表 2-52 運営指導委員会の年間平均開催回数

運営指導委員会 年間開催回数	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
平均	1.80	1.55	1.75	1.73	1.31

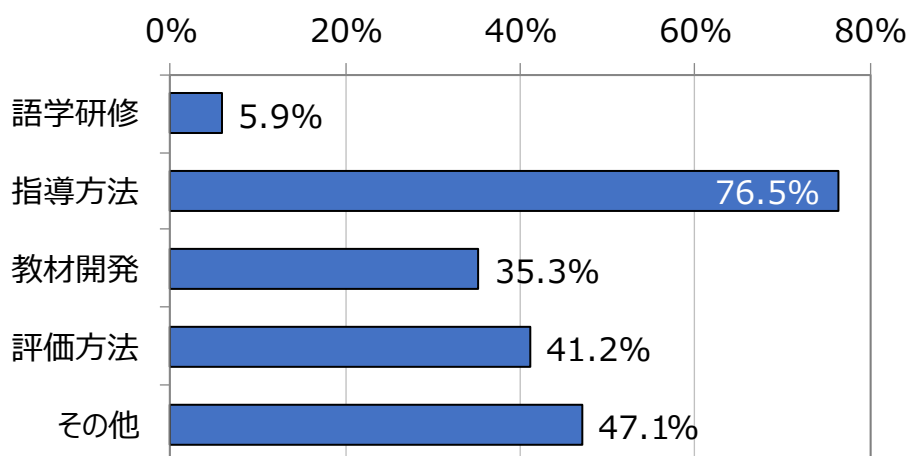
2-6-2 教職員育成の研修・セミナー等の実施状況

51.5%の管理機関が、教職員育成の研修・セミナー等を実施している。実施内容は、「指導方法」の割合が76.5%と高い。

図表 2-53 教職員育成の研修・セミナー等の実施の有無 (n=33)



図表 2-54 教職員育成の研修・セミナー等の実施内容 (複数回答) (n=17)



図表 2-55 教職員育成の研修・セミナー等の年間実施回数 (総計)

研修等の年間実施回数	令和元年度 (n=10)	令和2年度 (n=22)	令和3年度 (n=28)	令和4年度 (n=30)	令和5年度 (n=18)
合計	82	92	125	180	193

図表 2-56 教職員育成の研修・セミナー等の総参加者数 (総計)

研修等の年間参加者数	令和元年度 (n=10)	令和2年度 (n=22)	令和3年度 (n=28)	令和4年度 (n=30)	令和5年度 (n=16)
合計	1,967	2,475	1,861	4,561	3,088

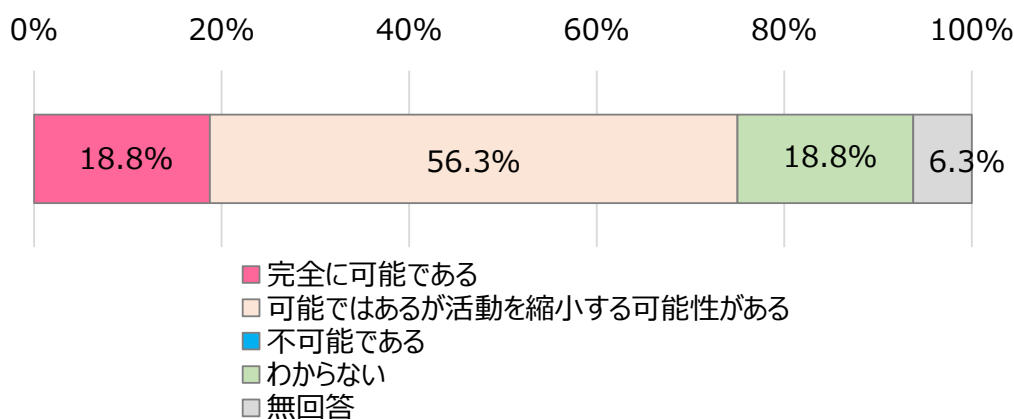
2-6-3 事業終了後の自走継続の可否

カリキュラム開発指定期間内の管理機関に、WWL 事業終了後の自走継続の可否をきいたところ、56.3%が「可能ではあるが活動を縮小する可能性がある」と回答。

カリキュラム開発指定期間が終了した管理機関の 52.9%が「指定期間から活動を縮小して継続している」と回答。

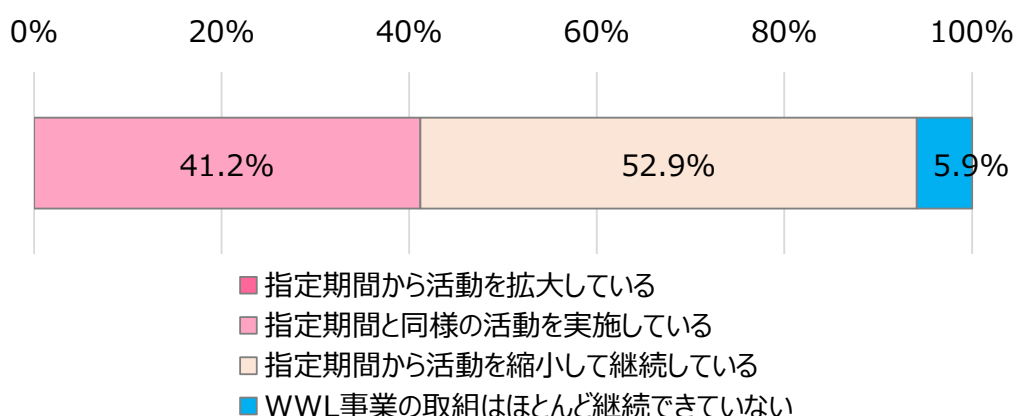
図表 2-57 事業終了後の自走継続の可否

カリキュラム開発指定期間内の管理機関 (n=16)



図表 2-58 事業終了後の自走継続の可否

カリキュラム開発指定期間が終了した管理機関 (n=17)



2-7 苦労点・問題点と対応策

拠点校に対し、自由記述で「WWL 事業において一番苦労をした点や、大変だった問題点と、その苦労点・問題点についての対応方法（どのように乗り越えたか）」きいたところ以下のような回答が得られた。

実施期間中においては、学内外の連携体制の構築が多くの学校において課題となっている。また、コロナ禍における活動制限も、課題であった。

自走段階では、学内体制の見直し、ノウハウの継承、予算確保などが課題となっている。

(1)実施期間中

苦労点・問題点	対応策（例）
<ul style="list-style-type: none"> ●学内の教員間の意識あわせ ・探究に対する価値観の違いや学問分野の違いを議論してすりあわせることが難しかった。 ・教員間での意識や理解に差があり、その溝を埋めることに苦労した。 ・WWL 事業についての校内での理解を深めること 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議等で情報共有を密に行った。 ・管理職の適切な人員配置。中核となる管理職とミドルリーダー、若手のキーマンでの意識合わせ。 ・取りまとめる人間の対話力、忍耐力。
<ul style="list-style-type: none"> ・外部との連携、調整 ・連携校との各種折衝・調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧に説明し、地道に説得し、事業の意義を訴え続けるのが基本
<ul style="list-style-type: none"> ・海外連携校との連絡・調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・地道に連絡メールを送る。
<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍における海外研修に関連が深い課題研究への対応 ・コロナ禍における活動制限 	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生から情報を得るなどして対応 ・リモートを活用

(2)自走段階

苦労点・問題点	対応策
自走になったことによる体制の見直し（主催をどこが担うか、どこに後援をとるか、など）	イベントの組織図のようなものを再デザインした上で、各関係者に再度お願いをした。
・人事異動により途切れがちな教員のノウハウの継承。 ・転勤等で教員の異動があり、WWLの取り組みを経験したことのない教員が増えたため、自走期間における教員全体での取り組みに係る情報の共有に苦労した。	会議を重ね、意見を交えることとともに、イベントに対して前年度踏襲ではなく意味を再確認して取り組むよう意識した。
自走期間に入った後の各種プログラム実施のための予算確保	予算措置を行う。

2-8 まとめ

カリキュラム開発拠点校・拠点校アンケートより、令和5年度現在、33のALネットワークの総計で「共同実施校」は8、「共同実施校以外の国内高校（連携校）」が289、「国内の企業・国際機関等」が145、「海外高校」が119、「国内の大学等高等教育機関」が83、参加していることがわかった。

また、令和5年度のWWL事業の実績、成果として次のようなことが明らかになった。

- ・探究型学習：1学年は、全ての学校で必修科目化。1・2年次はグループ研究とする学校が多い。9割以上の学校が「発表会」を開催。8割以上の学校が「グループ活動を含んだ内容」「ICT等を活用した内容」「文理両方の複数の教科を融合した内容」「外国語の学習や外国語での活動を含んだ内容」として実施。また、半数以上の学校が「生徒自らによる探究課題設定」に特に力を入れて実施。
- ・外国語や文理両方の複数教科を融合した教科・科目：33校で62科目設定。
- ・短期・長期留学及び海外研修等：令和5年度は33校中31校が実施、ほとんどの学校において「希望者参加型」として実施。合計参加生徒数は2,145名。
- ・高大連携による大学教育の先取り履修：24ネットワークが実施し、連携大学数38校、授業数104であった。104授業のうち、「大学・高校両方の単位」になる授業が20.2%、「大学の単位」になる授業が42.3%、「高校の単位」になる授業が16.3%であり、計1,314名が単位を取得。
- ・高校生国際会議：全体の約8割が「カリキュラム拠点校を中心に開催」し、希望者参加型が6割弱、全員参加型が2割弱となっている。令和5年度は、33ネットワーク合計で27回開催し、延べ351校、拠点校生徒2,428名、拠点校以外の国内生徒1,392名、海外生徒506名が参加。

WWL事業の実施により約8割の学校が「他校との交流が促進した」「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった」「生徒の課題探究に関する力が向上した」と認識している。さらに、WWL事業に参加した生徒の52名が海外大学へ進学している（令和5年12月時点）。

カリキュラム開発指定期間が終了した拠点校の全てが指定期間終了後も活動を継続。41.2%は「指定期間と同様の活動を実施」、23.5%が「指定機関から活動を拡大」と回答。縮小した学校では、費用面等との問題から海外研修や外部人材等招聘の縮小・見直しを図っ

ている。

活動を振り返っての苦勞をした点や大変だった問題点は、実施期間中においては、学内外の連携体制の構築が多くの学校において課題となっている。自走段階では、学内体制の見直し、ノウハウの継承、予算確保などが課題となっている。

第3章 カリキュラム開発拠点校生徒へのアンケート調査

3-1 調査概要

3-1-1 調査対象

拠点校 33 校（令和元年度 10 校、令和 2 年度 12 校、令和 3 年度 6 校、令和 4 年度 2 校、令和 5 年度 3 校）において WWL 事業に参加している全生徒約 19,500 名。

3-1-2 調査方法

Web アンケート

3-1-3 調査時期

第 1 回：令和 5 年 6 月 12 日～令和 5 年 6 月 30 日

第 2 回：令和 5 年 12 月 1 日～令和 5 年 12 月 22 日

3-1-4 有効回答数

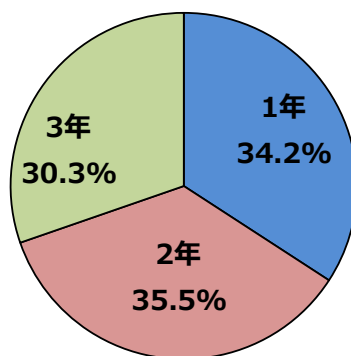
第 1 回：14,250 件

第 2 回：13,987 件

なお、本報告書では、主に第 2 回アンケートの結果を中心に紹介する。

3-1-5 回答者属性

図表 3-1 学年 (n=13,987)



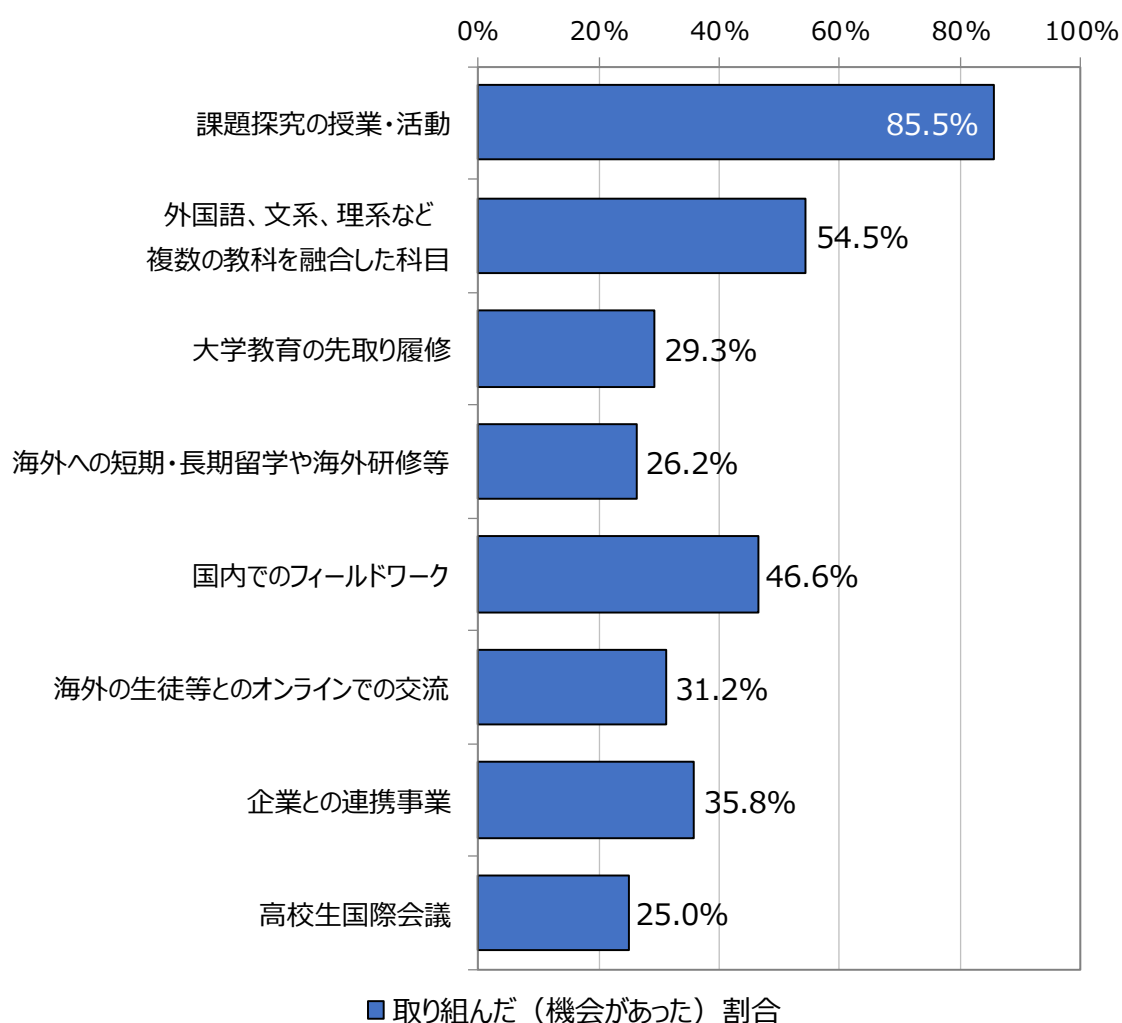
3-2 WWL 事業について

3-2-1 WWL 事業の活動の熱心度

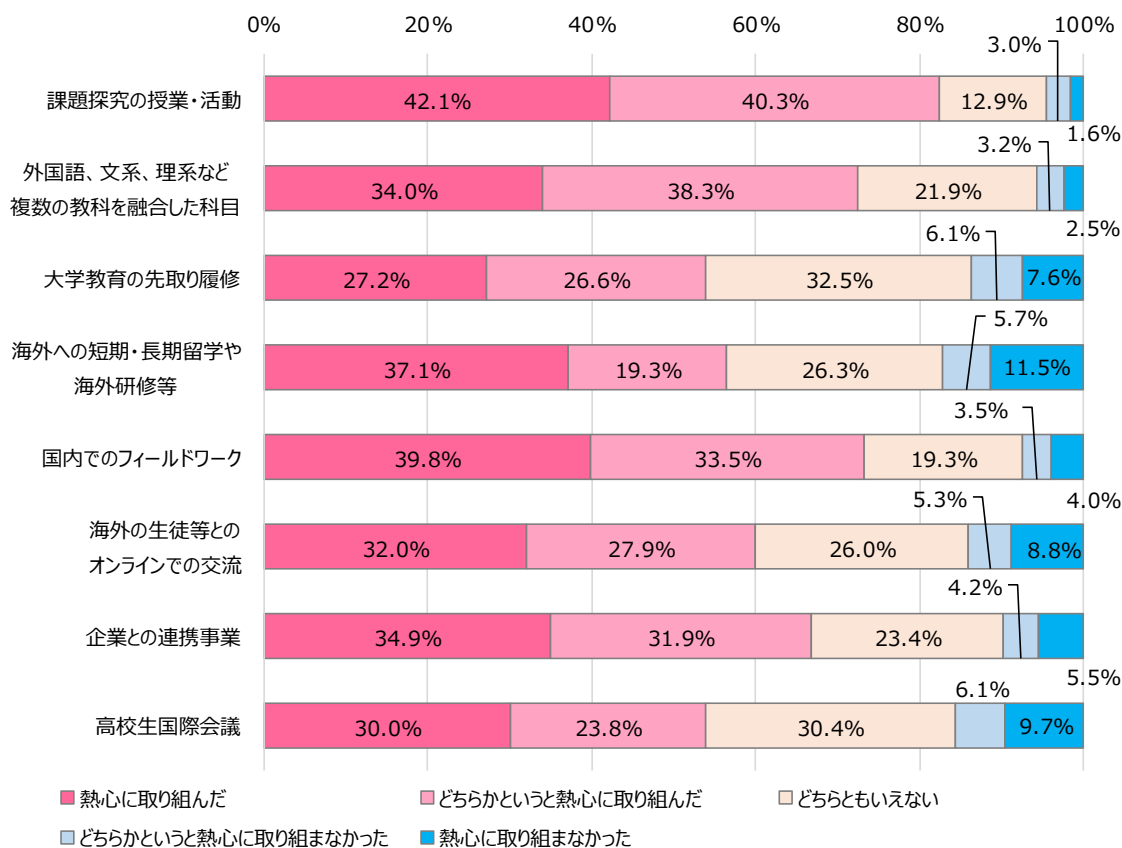
「課題探究の授業・活動」は、9割近くの生徒が取り組んだと回答している。

取り組んだ活動のうち、「課題探究の授業・活動」「国内でのフィールドワーク」「海外への短期・長期留学や海外研修等」「企業との連携事業」「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」の順に、「熱心に取り組んだ」割合が高い。

図表 3-2 WWL 事業の活動に取り組んだ割合（複数回答）（n=13,987）



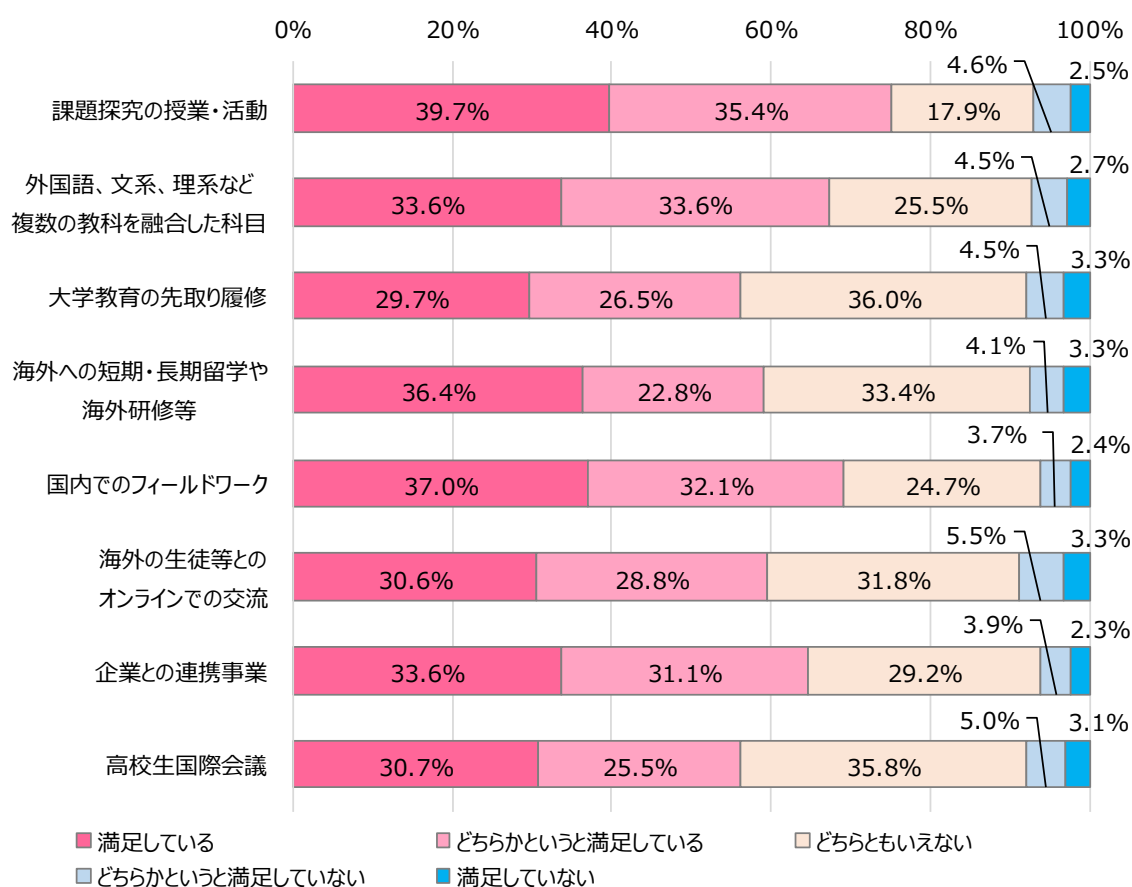
図表 3-3 WWL 事業の活動の熱心度（機会があったもののみ）



3-2-2 WWL 事業の活動の満足度

参加した活動のうち、「課題探究の授業・活動」「国内でのフィールドワーク」「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」「企業との連携事業」は「満足している（満足している＋どちらかという満足している）」割合が6割を超え高い

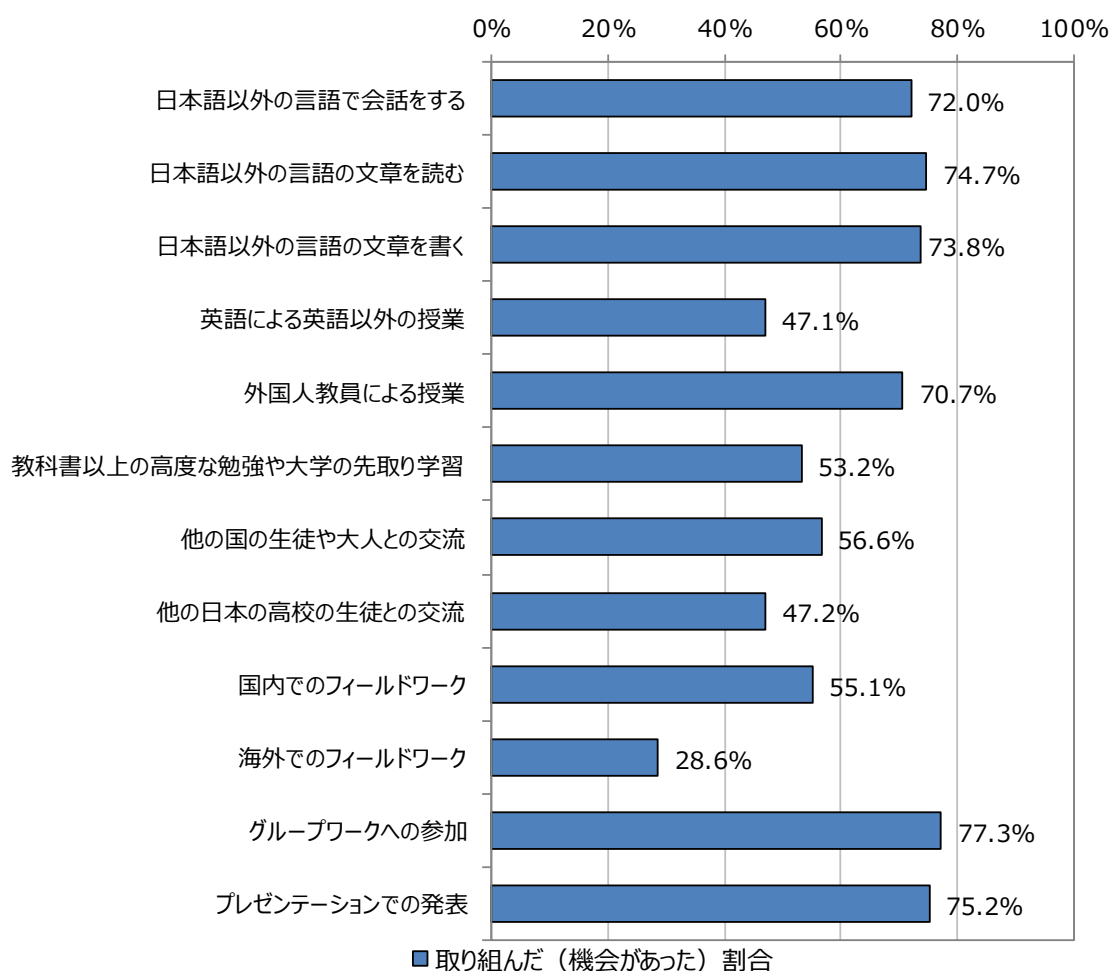
図表 3-4 WWL 事業の活動の満足度（機会があったもののみ）



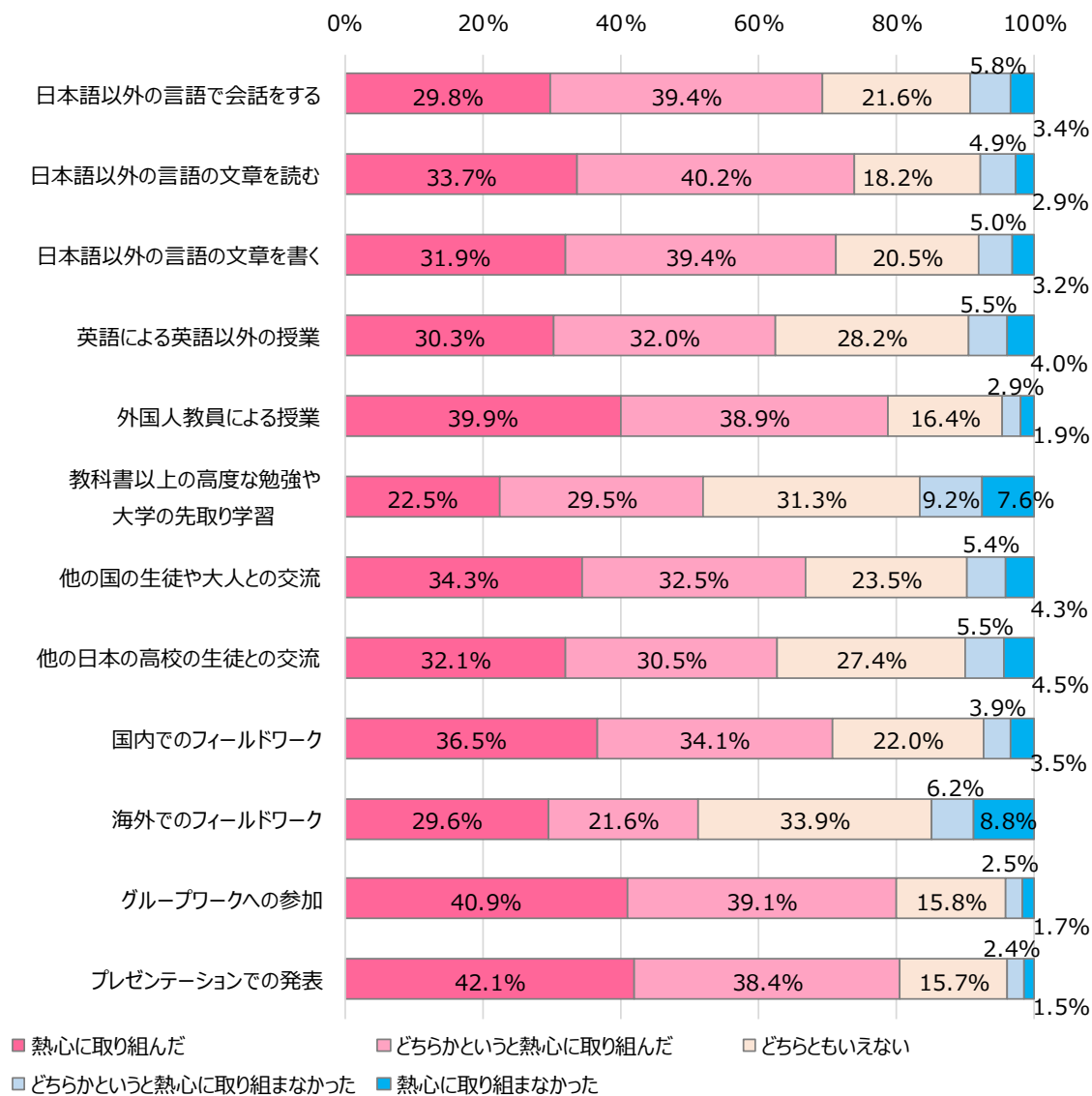
3-2-3 WWL 事業の取組みの熱心度

「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」は取り組む機会が多く、熱心に実施している割合も高い。「日本語以外の言語」で話す・読む・書く、「外国人教員による授業」についても7割以上が実施しており、熱心に実施している割合も高い。コロナ禍の影響もあり「海外でのフィールドワーク」は取り組んでいる割合が低い。

図表 3-5 WWL 事業の取組みの機会（複数回答）（n=13,987）



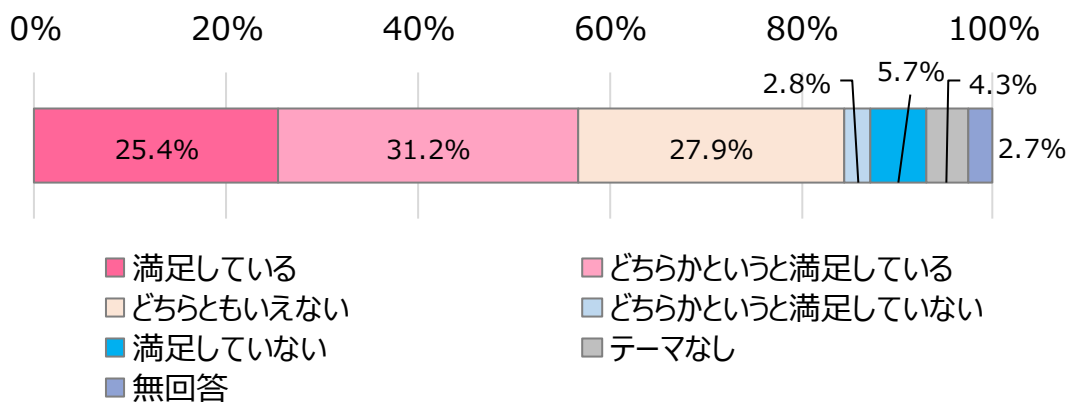
図表 3-6 WWL 事業の取組みの熱心度（機会があったもののみ）



3-2-4 WWL 事業テーマの満足度

WWL 事業のテーマについて、5 割以上の生徒が「満足している（満足している+どちらかという満足している）」と回答している。

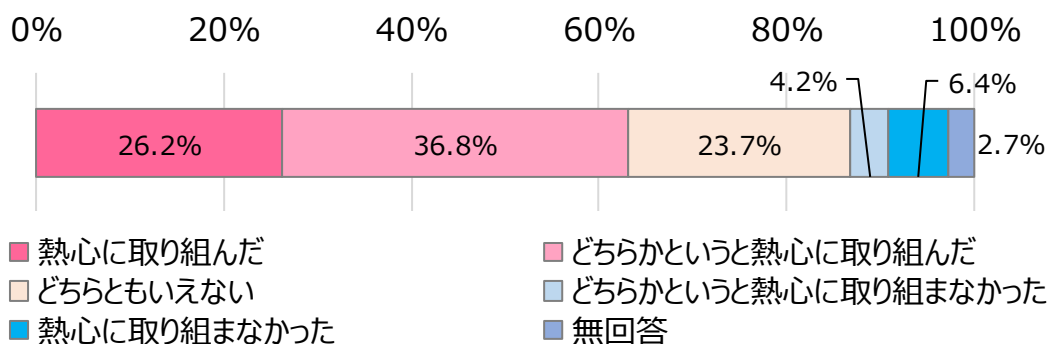
図表 3-7 WWL 事業テーマの満足度 (n=13,987)



3-2-5 WWL 総合熱心度

総合的にみて WWL 事業に熱心に取り組んだかをきいたところ、63%の生徒が「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ+どちらかという熱心に取り組んだ）」と回答。

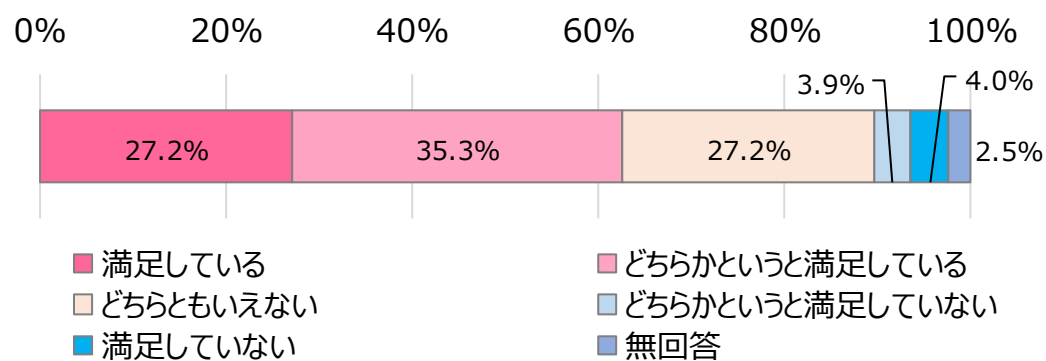
図表 3-8 WWL 総合熱心度 (n=13,987)



3-2-6 WWL 総合満足度

総合的にみて WWL 事業に満足しているかをきいたところ、62.5%の生徒が「満足している（満足している+どちらかという満足している）」と回答。

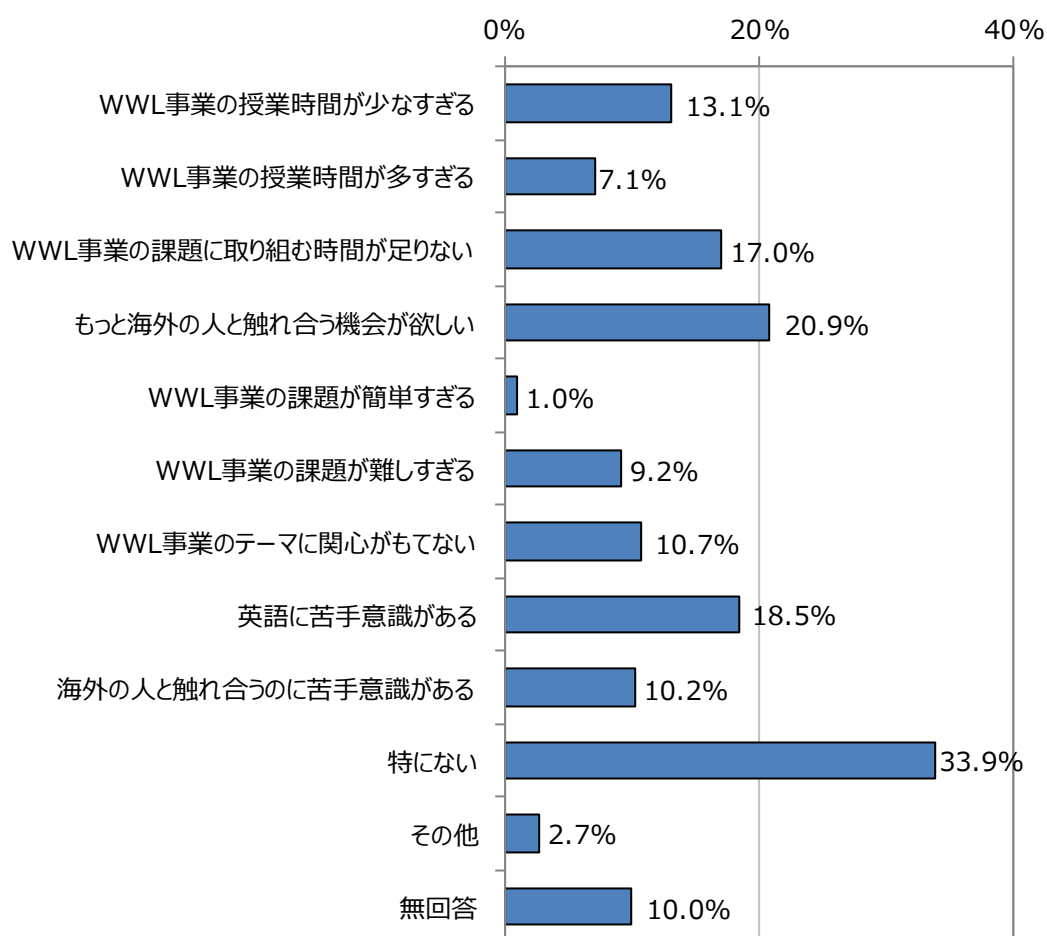
図表 3-9 WWL 総合満足度 (n=13,987)



3-2-7 WWL 事業の問題点・困っていること

WWL 事業の問題点・困っていることについては、「特にない」が 33.9%と最も割合が高く、次いで「もっと海外の人と触れ合う機会が欲しい」が 20.9%、「英語に苦手意識がある」が 18.5%と続く。

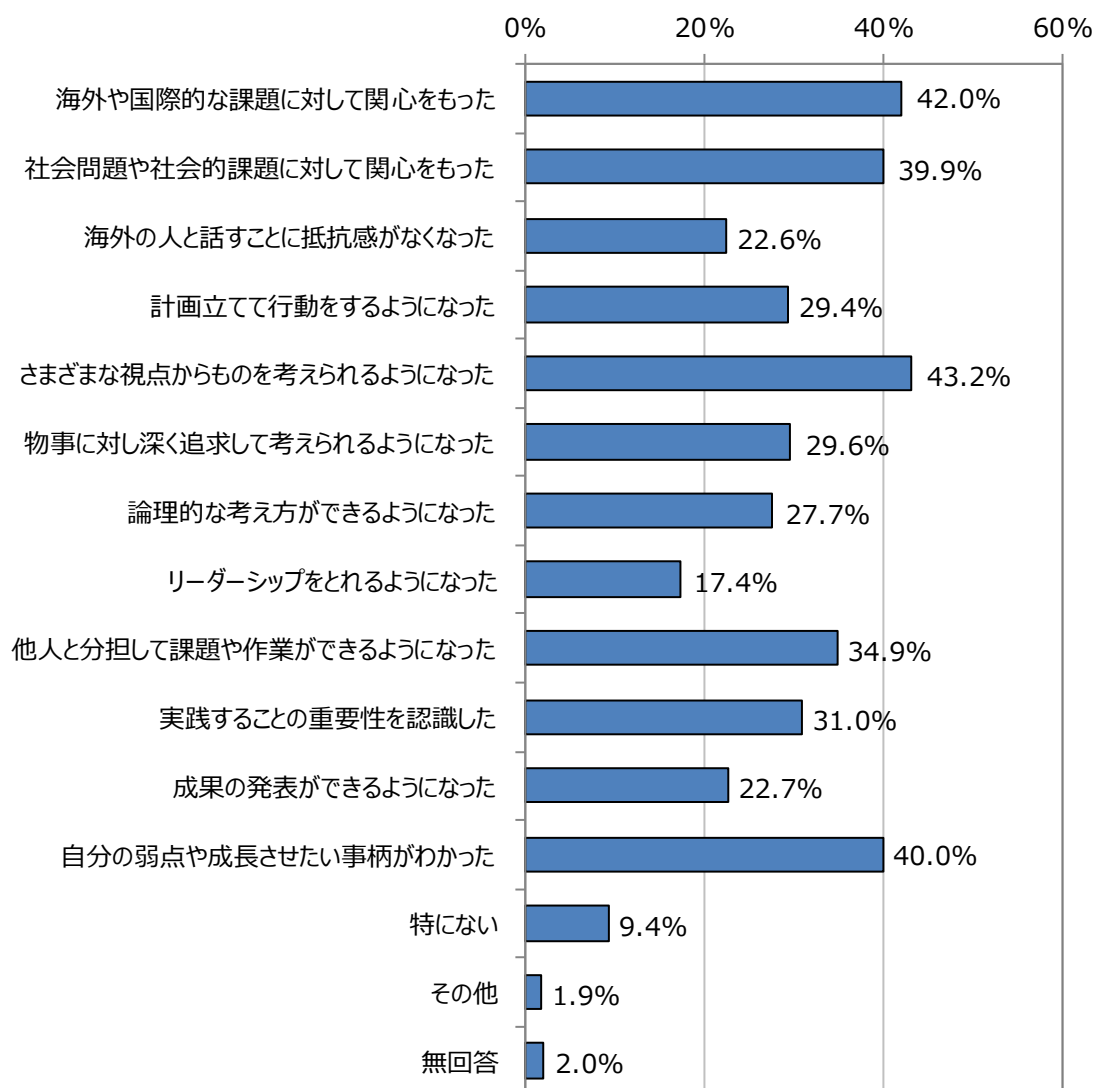
図表 3-10 WWL 事業の問題点・困っていること（複数回答）（n=13,987）



3-2-8 高校生活を通じて身についたこと・成長したこと

WWL 事業を含め高校生活を通じて身についたこと・成長したことについてきいたところ、「さまざまな視点からものを考えられるようになった」「海外や国際的な課題に対して関心をもった」「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」「社会問題や社会的課題に対して関心をもった」が4割程度と、WWL 事業等を通じて生徒の世界や視野が広がっている様子が伺える。

図表 3-11 高校生活を通じて身についたこと・成長したこと（複数回答）（n=13,987）

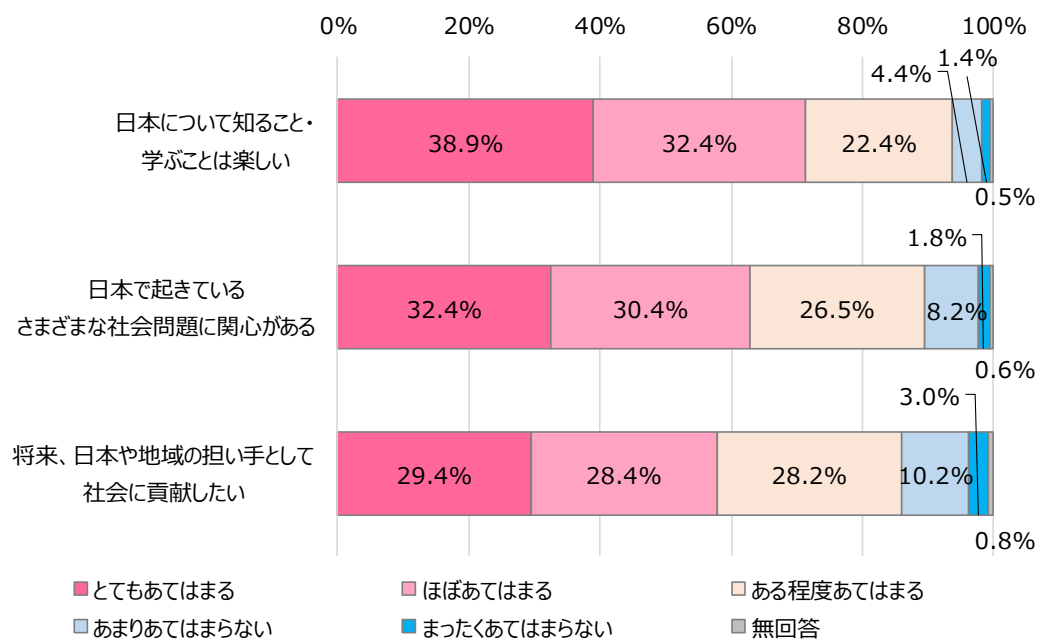


3-3 日本に関する考え

3-3-1 日本への関心

日本への関心についてきいたところ、9割が「日本について知ること・学ぶことは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答。他の2項目でも8割以上が「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答

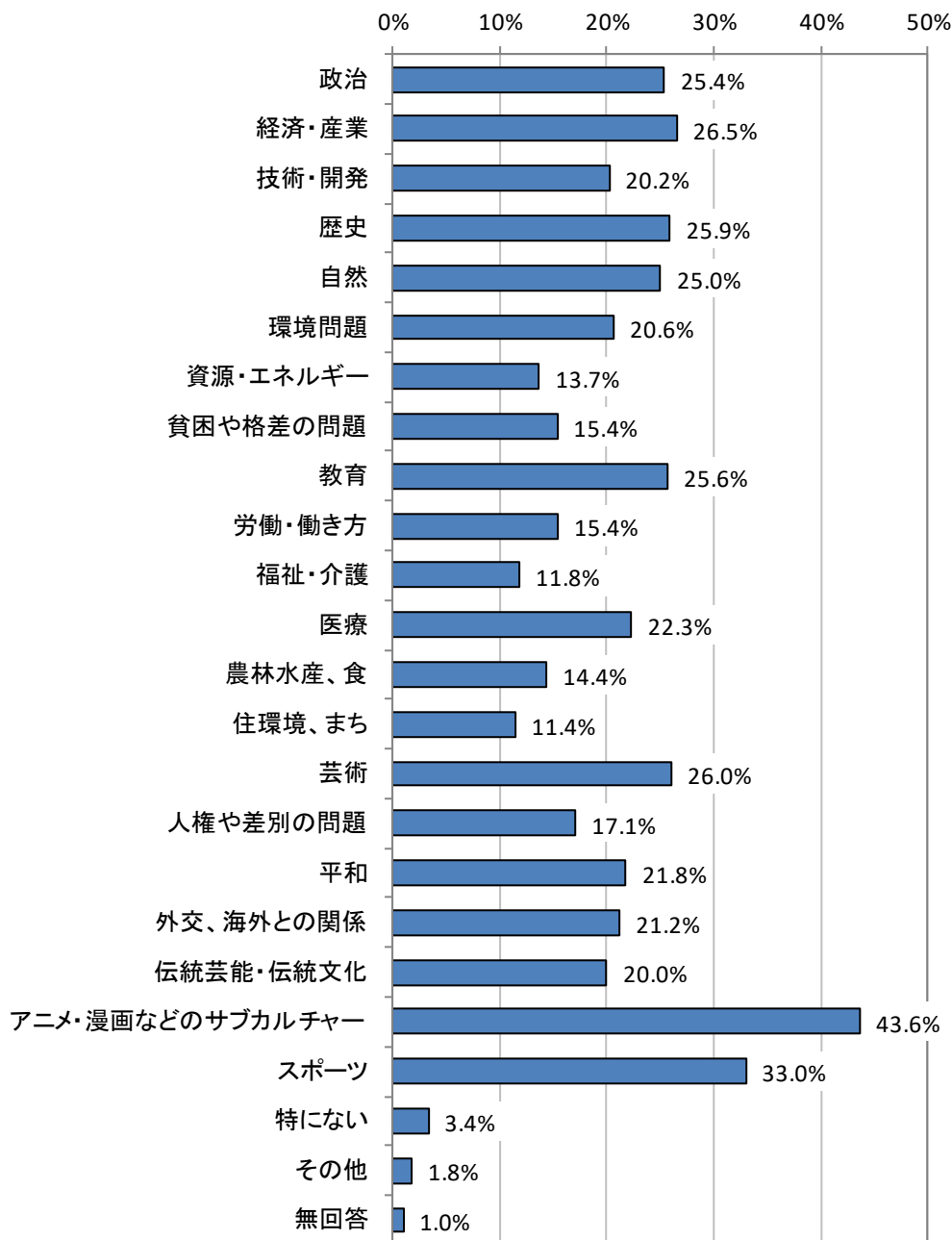
図表 3-12 日本への関心 (n=13,987)



3-3-2 関心がある分野

日本について関心がある分野についてきいたところ、「アニメ・漫画などのサブカルチャー」が43.6%と最も割合が高く、次いで「スポーツ」が33.0%、「経済・産業」が26.5%と続く。

図表 3-13 関心がある分野 (n=13,987)

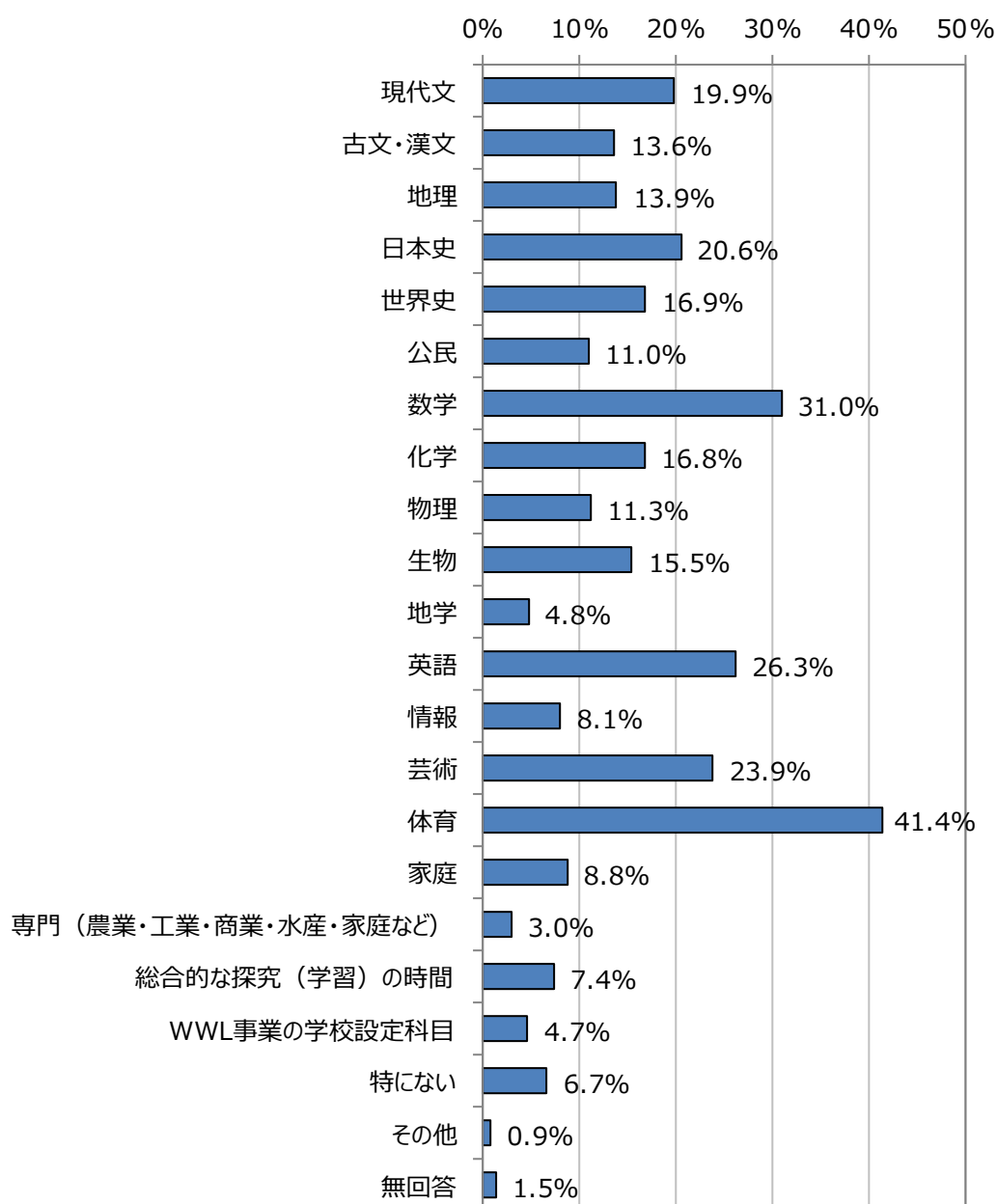


3-4 学校生活について

3-4-1 好きな科目

好きな科目については、「体育」(41.4%)、「数学」(31.0%)、「英語」(26.3%)の割合が高い。

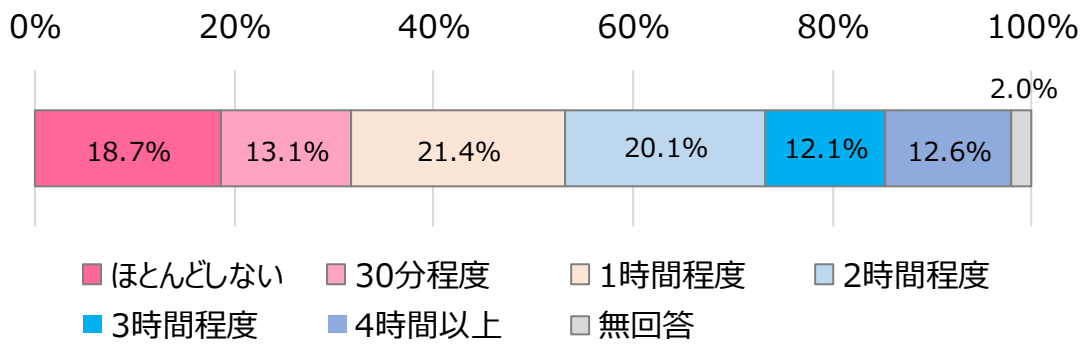
図表 3-14 好きな科目（複数回答）（n=13,987）



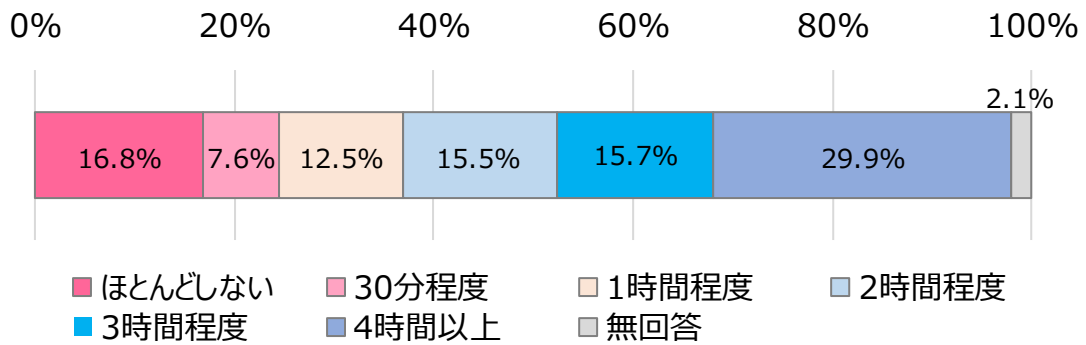
3-4-2 1日の勉強時間

1日の勉強時間は、平日は「1時間程度」が21.4%、「2時間程度」が20.1%である。土日は「4時間以上」が29.9%、「ほとんどしない」が16.8%である。

図表 3-15 1日の勉強時間（平日）（n=13,987）



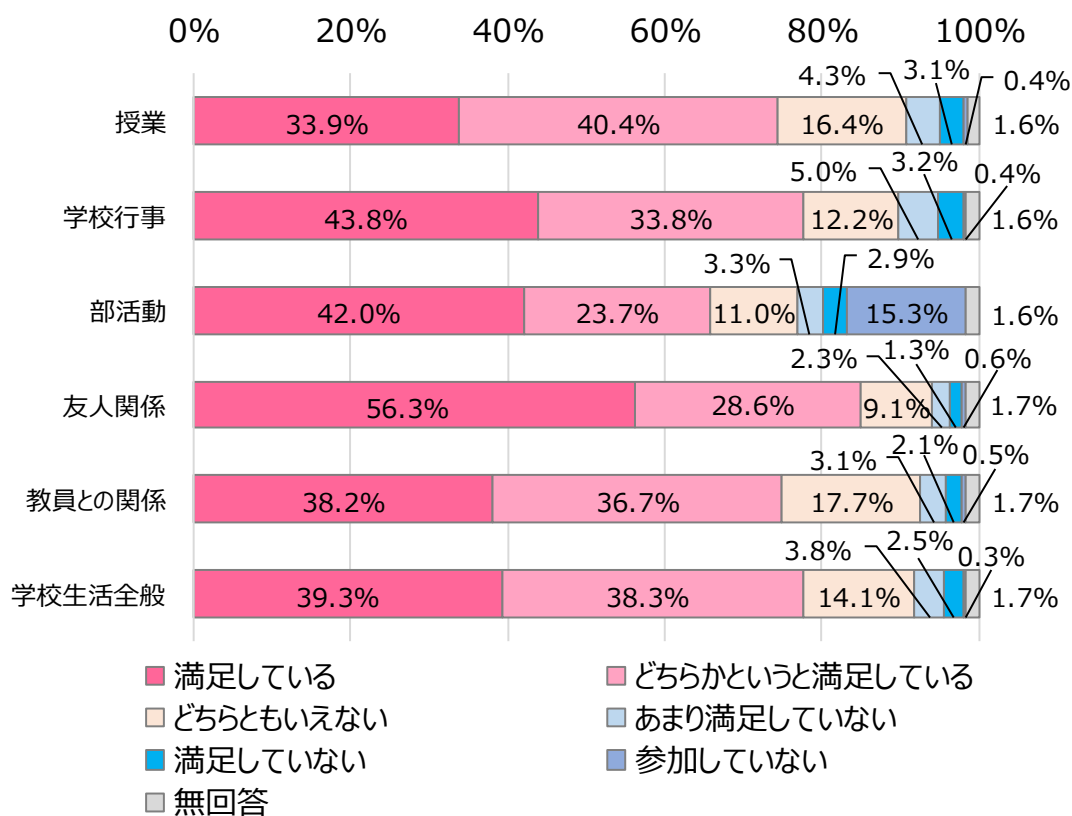
図表 3-16 1日の勉強時間（土日）（n=13,987）



3-4-3 学校生活への満足度

学校生活への満足度は、いずれの項目も「満足している（満足している+どちらかという
と満足している）」が6~8割と高い。特に、「友人関係」については84.9%が満足している。

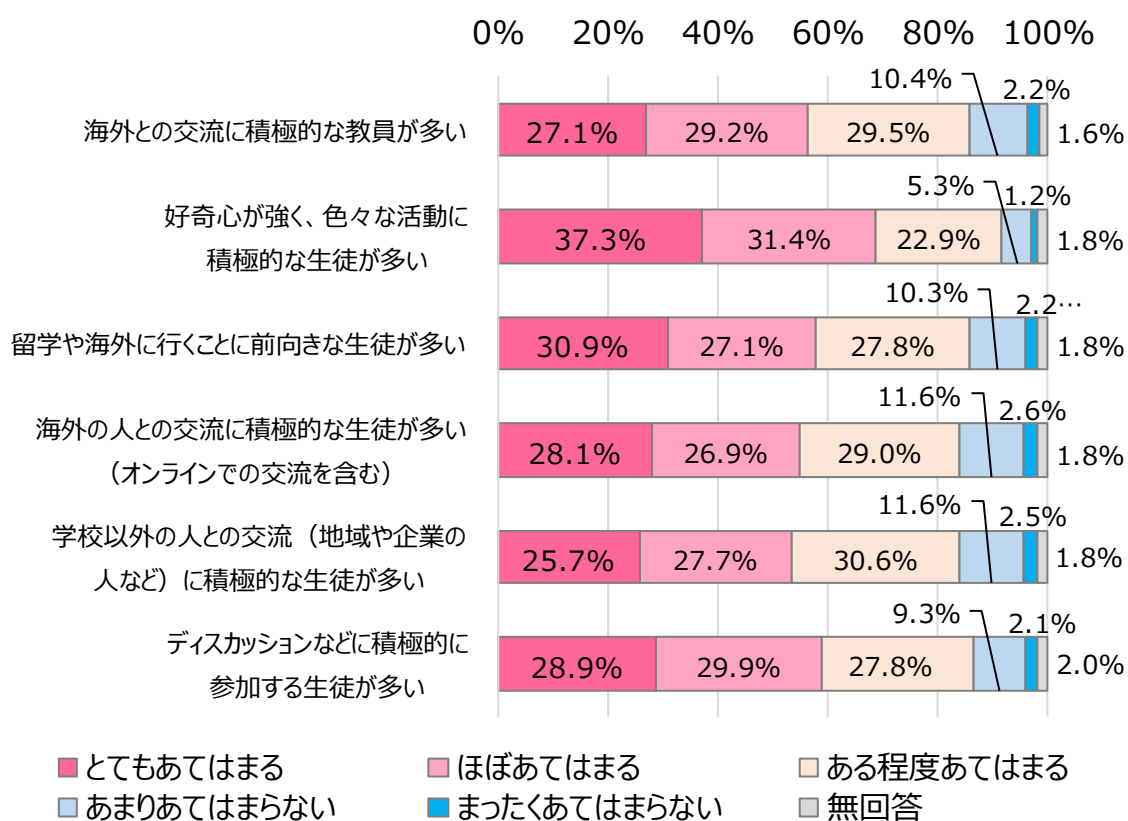
図表 3-17 学校生活への満足度 (n=13,987)



3-4-4 学校及び周囲の生徒について

学校及び周囲の生徒については、「好奇心が強く、色々な活動に積極的な生徒が多い」に「とてもあてはまる」と回答した割合が37.3%と高い。

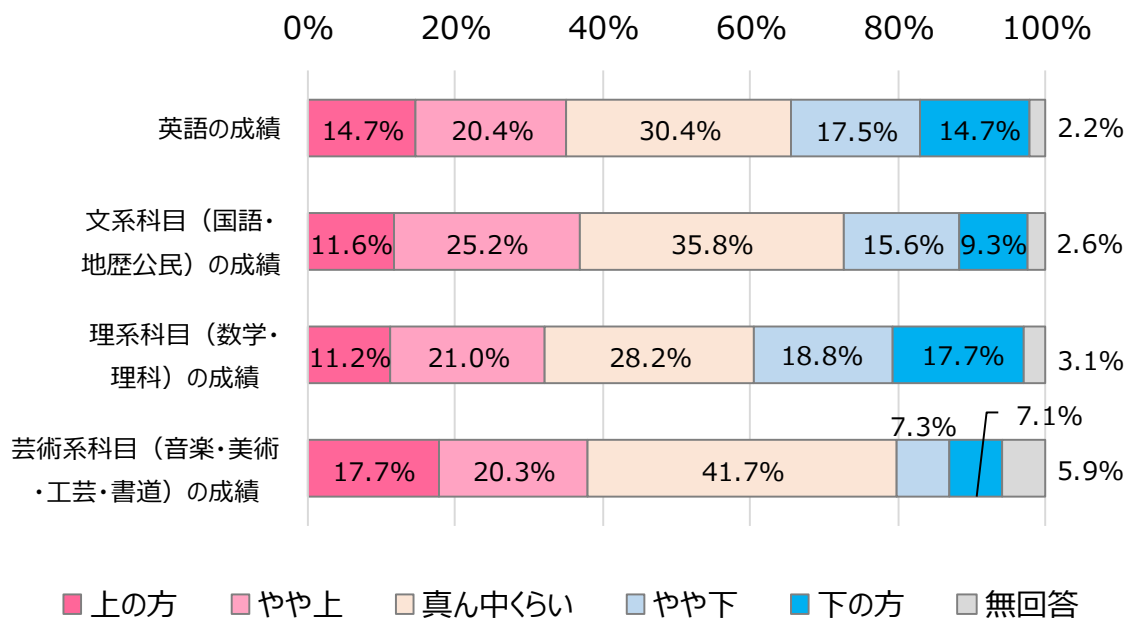
図表 3-18 学校及び周囲の生徒について (n=13,987)



3-4-5 学校の成績について

学校の成績については、下記のとおり。「理系科目（数学・理科）の成績」について、「下（やや下+下の方）」と回答した割合が、他と比べて高い

図表 3-19 学校の成績 (n=13,987)

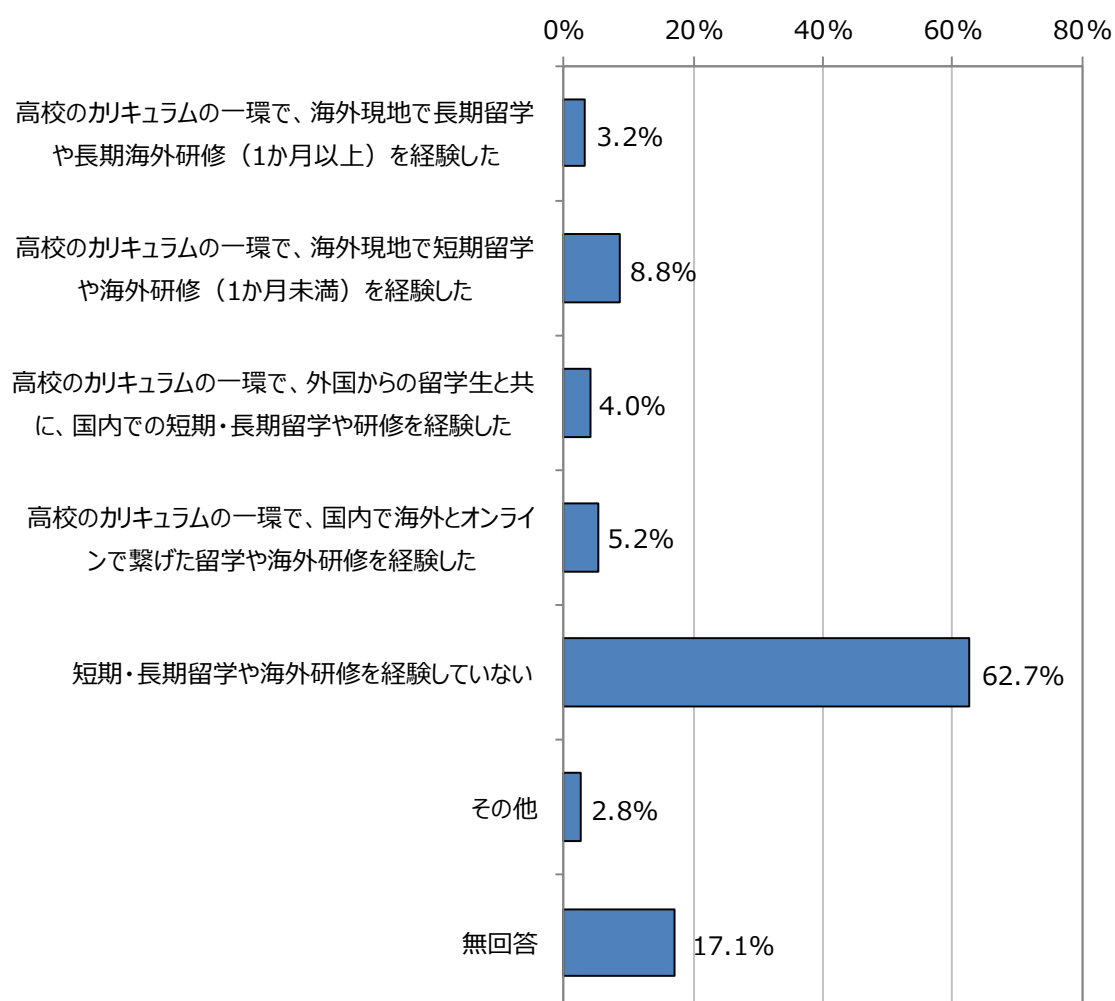


3-4-6 海外研修

(1)海外研修経験

海外研修経験については、62.7%の生徒が「短期・長期留学や海外研修を経験していない」と回答している。

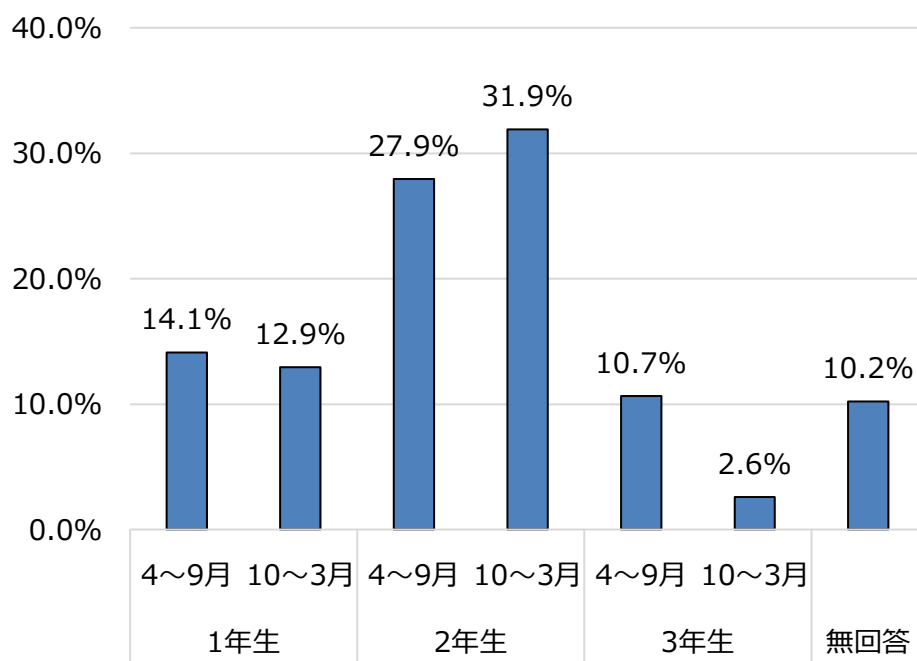
図表 3-20 海外研修経験 (n=13,987)



(2)海外研修の出発時期

(1)海外研修経験の質問で「海外現地で長期留学や長期海外研修（1か月以上）を経験した」、および「海外現地で短期留学や海外研修（1か月未満）を経験した」と回答した生徒に、出発時期をきいた。2年生の10～3月の出発が31.9%と最も割合が高い。

図表 3-21 海外研修の出発時期（海外現地での研修経験のある生徒のみ）（n=1,614）

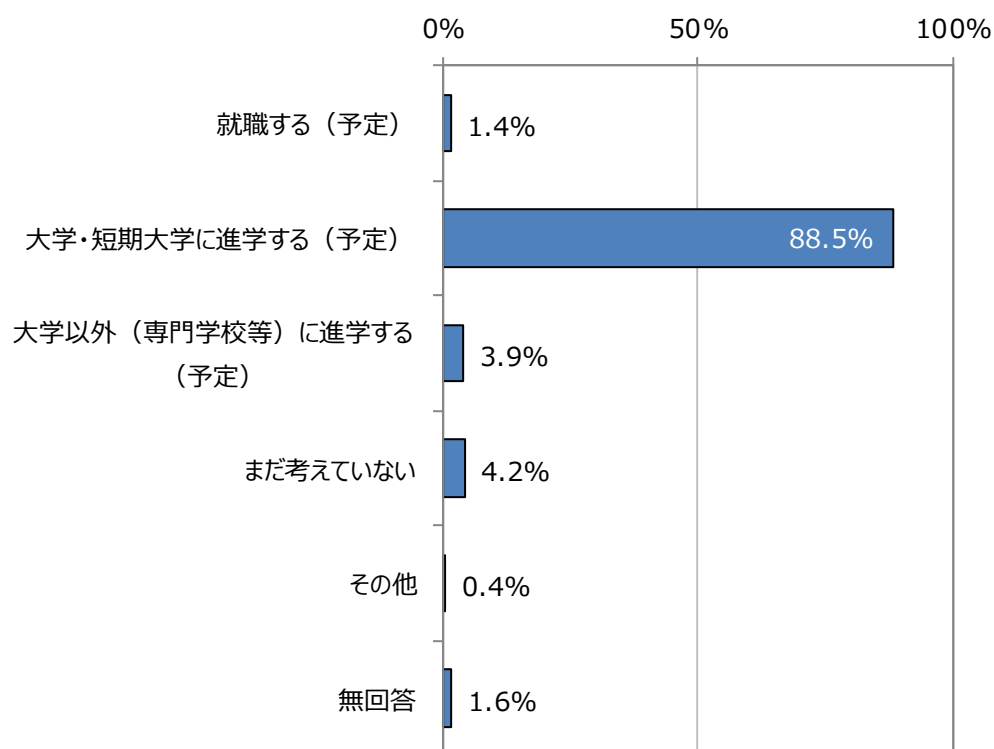


3-5 高校卒業後の進路について

3-5-1 高校卒業後の進路

高校卒業後の進路は、88.5%の生徒が「大学・短期大学に進学する（予定）」と回答している。

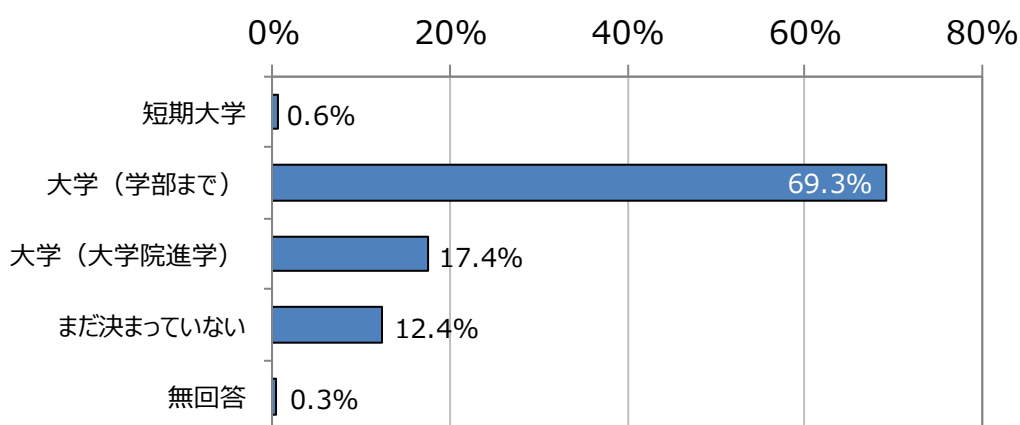
図表 3-22 高校卒業後の進路 (n=13,987)



3-5-2 目指している最終学歴

大学・短期大学に進学予定者に、目指している最終学歴をきいたところ、「大学（学部まで）」が69.3%と最も割合が高い。

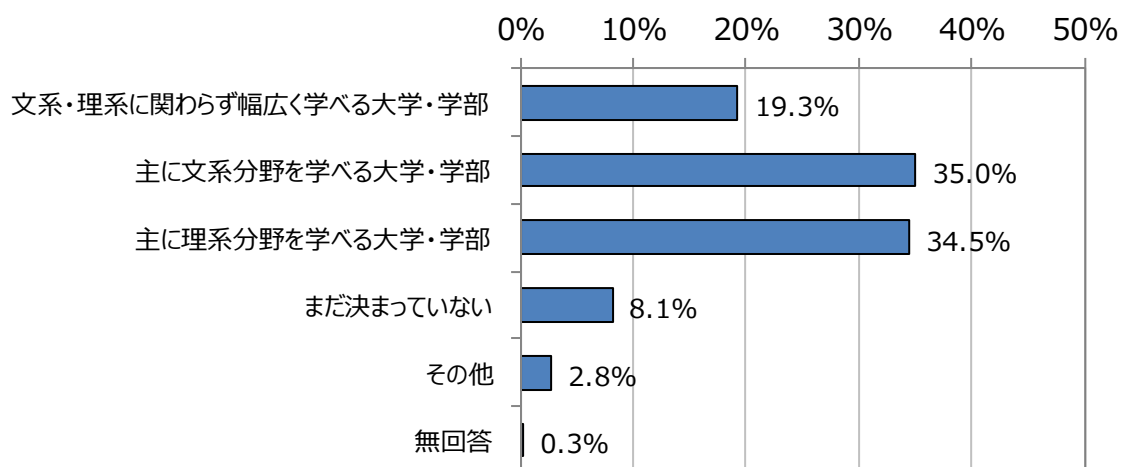
図表 3-23 目指している最終学歴（n=12,376：大学・短期大学に進学する（予定）のみ）



3-5-3 目指している進学先

大学・短期大学に進学予定者に、目指している進学先をきいたところ、「主に文系分野を学べる大学・学部」「主に理系分野を学べる大学・学部」がそれぞれ3割以上であった。

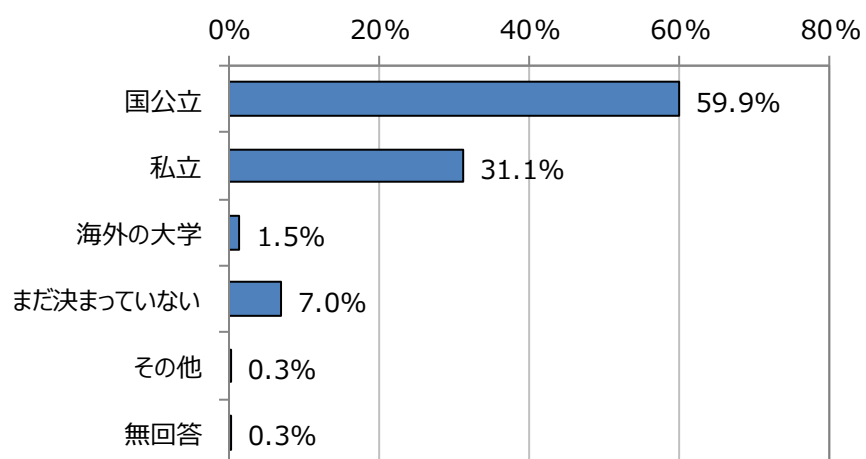
図表 3-24 目指している進学先（n=12,376：大学・短期大学に進学する（予定）のみ）



3-5-4 第一志望の進学先

大学・短期大学に進学予定者に、第一志望の進学先をきいたところ、59.9%が「国公立」を志望している。

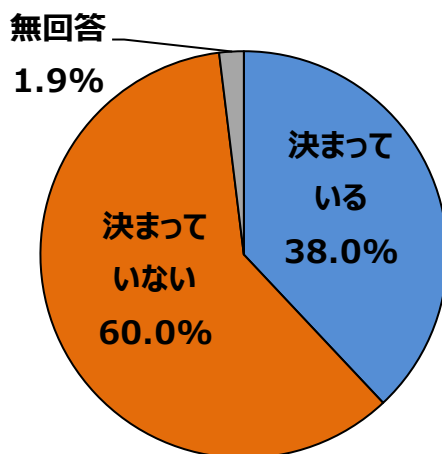
図表 3-25 第一志望の進学先 (n=12,376 : 大学・短期大学に進学する(予定)のみ)



3-5-5 将来なりたい職業

将来なりたい職業が決まっているかきいたところ、38.0%が「決まっている」と回答した。

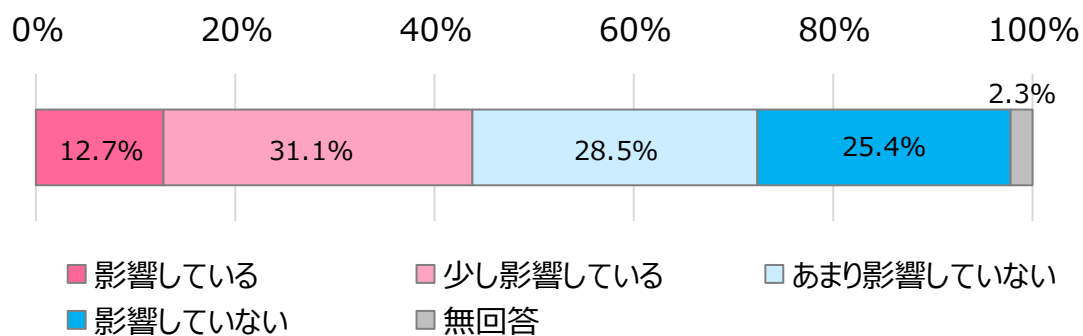
図表 3-26 将来なりたい職業 (n=13,987)



3-5-6 高校卒業後の進路選択やなりたい職業へのWWL事業の経験による影響

高校卒業後の進路選択や将来なりたい職業について、WWL事業での経験は、影響しているかきいたところ、43.8%の生徒が「影響している（影響している+少し影響している）」と回答した

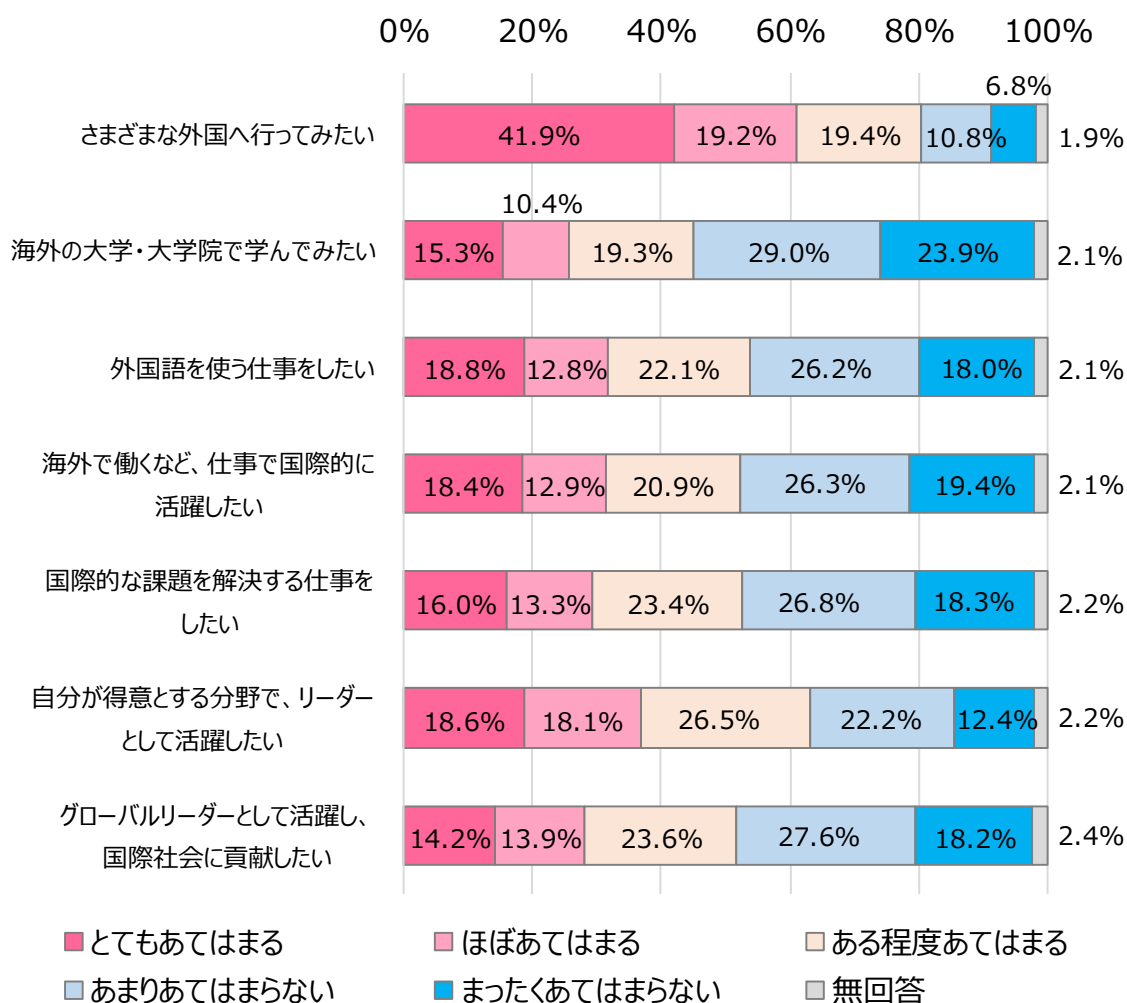
図表 3-27 高校卒業後の進路選択やなりたい職業へのWWL事業の経験による影響 (n=13,987)



3-5-7 将来の希望

将来の希望についてきいたところ、80.5%の生徒が「さまざまな外国へ行ってみたい（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答

図表 3-28 将来の希望 (n=13,987)



3-6 WWL 事業参加生徒の成長の状況

3-6-1 分析の枠組み

WWL 事業の成果目標として、「グローバルなマインドセット」「グローバルな資質・能力 (グローバル・コンピテンシー)」「PPDAC(探究型行動)」が挙げられている。

生徒アンケートにおける下記項目により、WWL 事業参加生徒のこれらの項目の達成度を分析した。

図表 3-29 分析フレーム

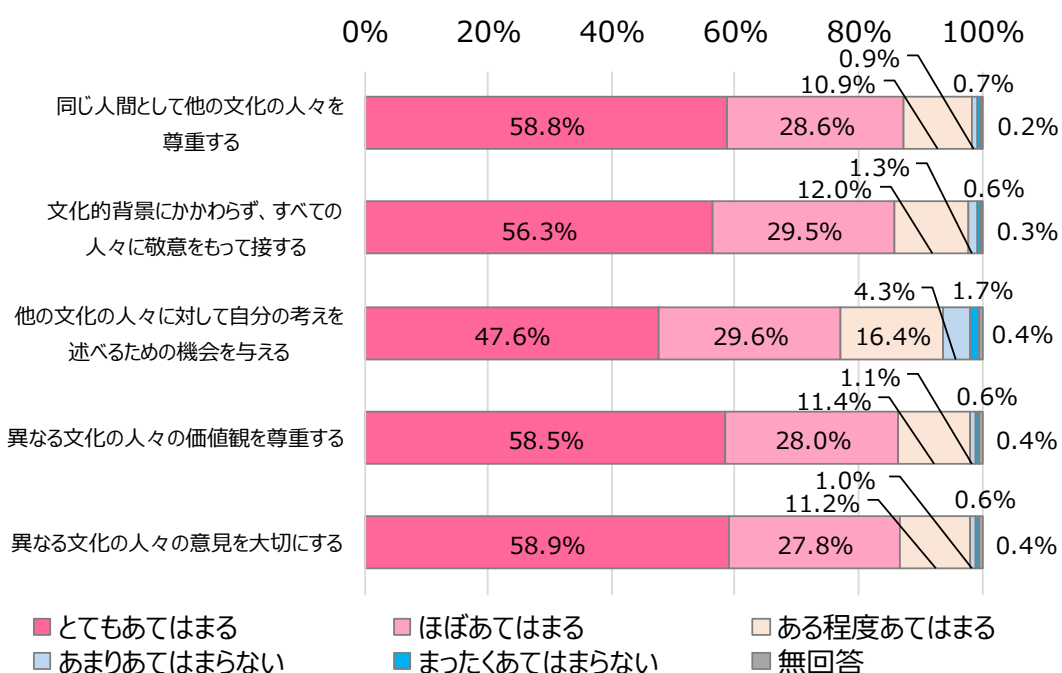
	グローバル コンピテンス (他文化の人々の尊重)	グローバル コンピテンス (グローバル思考)	異文化対応 コンピテンシー	外国語リテラシー	PPDACスキル
出典	OECD-PISA2018	OECD-PISA2018	筑波大学SGH事業調査	-	筑波大学SGH事業調査
質問文	次のようなことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(5段階)	次のようなことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(4段階)	あなたは、文化の違いから生じる、困った(困惑した)出来事(例えば、出会った外国人との言葉の壁、ジェスチャー・生活習慣・価値観の違い)に直面した際、その解決のため、以下に挙げる行動をとれると思いますか。(6段階)	次のことは、あなたにどのくらいあてはまりますか。(5段階)	あなたは、学校のグループワークや総合的な探究(学習)の時間での課題を解くときに、次のようなことができますか。(6段階)
選択肢	同じ人間として他の文化の人々を尊重する	自分自身を地球市民として考えている	必要ならば、最初に決めたことを変える	外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい	さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる
	文化的背景にかかわらず、すべての人々に敬意をもって接する	世界の一部の人が暮らしている劣悪な条件について、何かしなければと責任を感じる	自分と異なる立場の人の価値観を尊重する	日本語以外の本やインターネットを読むことができる	問題の重要度の根拠を見つけることができる
	他の文化の人々に対して自分の考えを述べるための機会を与える	自分の行動は他の国の人々に影響を与えることができると考えている	複数の視点から問題の原因を考える	外国の人と日本語以外の言語で会話ができる	生じている問題について、知識や経験を通して説明できる
	異なる文化の人々の価値観を尊重する	劣悪な職場環境で従業員を働かせていることで知られている企業の商品を買わないことは正しい	複数の選択肢を考える	英語でメールや文章が書ける	問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる
	異なる文化の人々の意見を大切ににする	世界の問題について、自分は何かできる	相手が意見を述べやすいように心がける	社会問題などについて英語でディスカッションできる	問題解決に向けて仮説を立てることができる
		地球環境について、気にかけることは重要である	相手との協力関係を築くように心がける		問題解決に合ったデータや情報を選択できる
			反対意見にも耳を傾ける		集めたデータや情報の正確さがわかる
					分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる
					提案を適切にプレゼンテーションできる
					自分の発表に対する質問に適切に回答できる

3-6-2 各項目の実態

(1) グローバルコンピテンス (他文化の人々の尊重)

グローバルコンピテンス (他文化の人々の尊重) については、いずれの項目も、「あてはまる (とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる)」の割合が9割を超えている。

図表 3-30 グローバルコンピテンス (他文化の人々の尊重) (n=13,987)



図表 3-31 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）

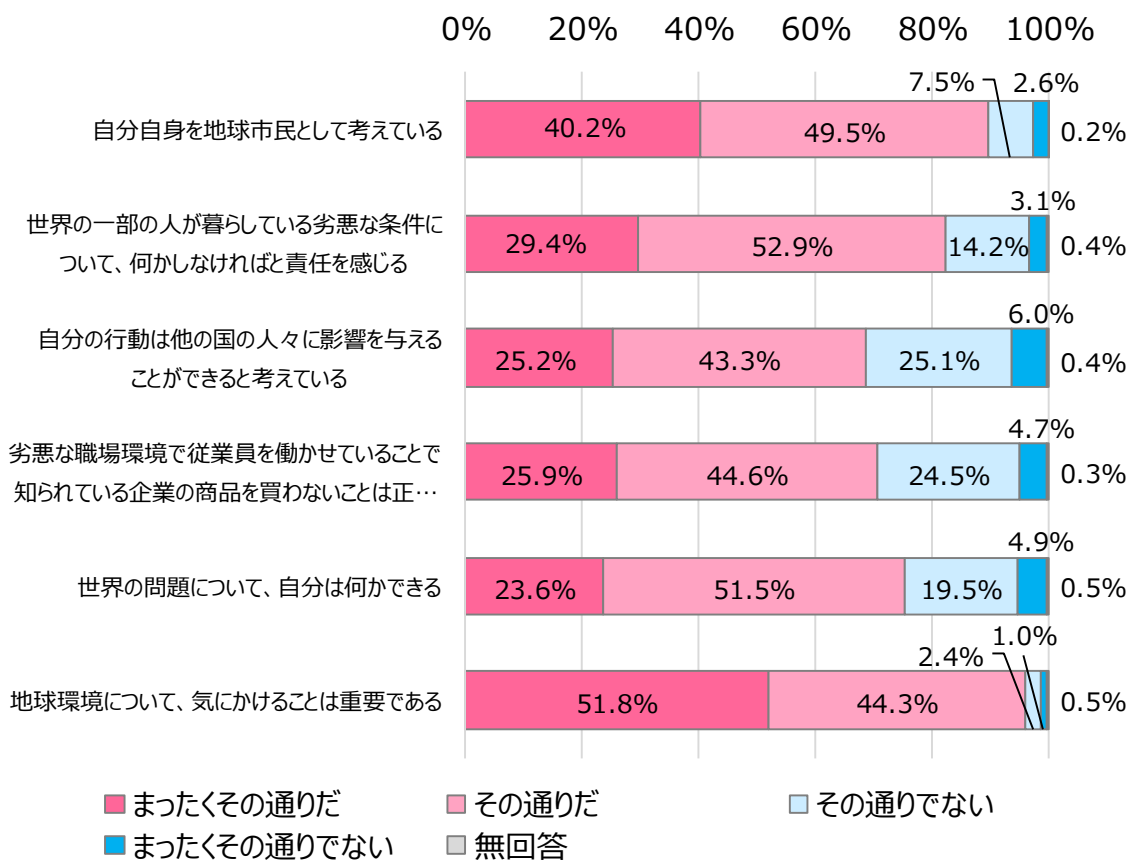
「とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる」の合計と平均

「とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる」	合計
同じ人間として他の文化の人々を尊重する	98.2%
文化的背景にかかわらず、すべての人々に敬意をもって接する	97.8%
他の文化の人々に対して自分の考えを述べるための機会を与える	93.6%
異なる文化の人々の価値観を尊重する	97.9%
異なる文化の人々の意見を大切にする	98.0%
平均	97.1%

(2) グローバルコンピテンス (グローバル思考)

グローバルコンピテンス (グローバル思考) については、「地球環境について、気にかけることは重要である」に「その通りだ (まったくその通りだ+その通りだ)」と回答した割合は、96.0%と高い。次いで「自分自身を地球市民として考えている」が 89.6%となっている。

図表 3-32 グローバルコンピテンス (グローバル思考) (n=13,987)



図表 3-33 グローバルコンピテンス（グローバル思考）

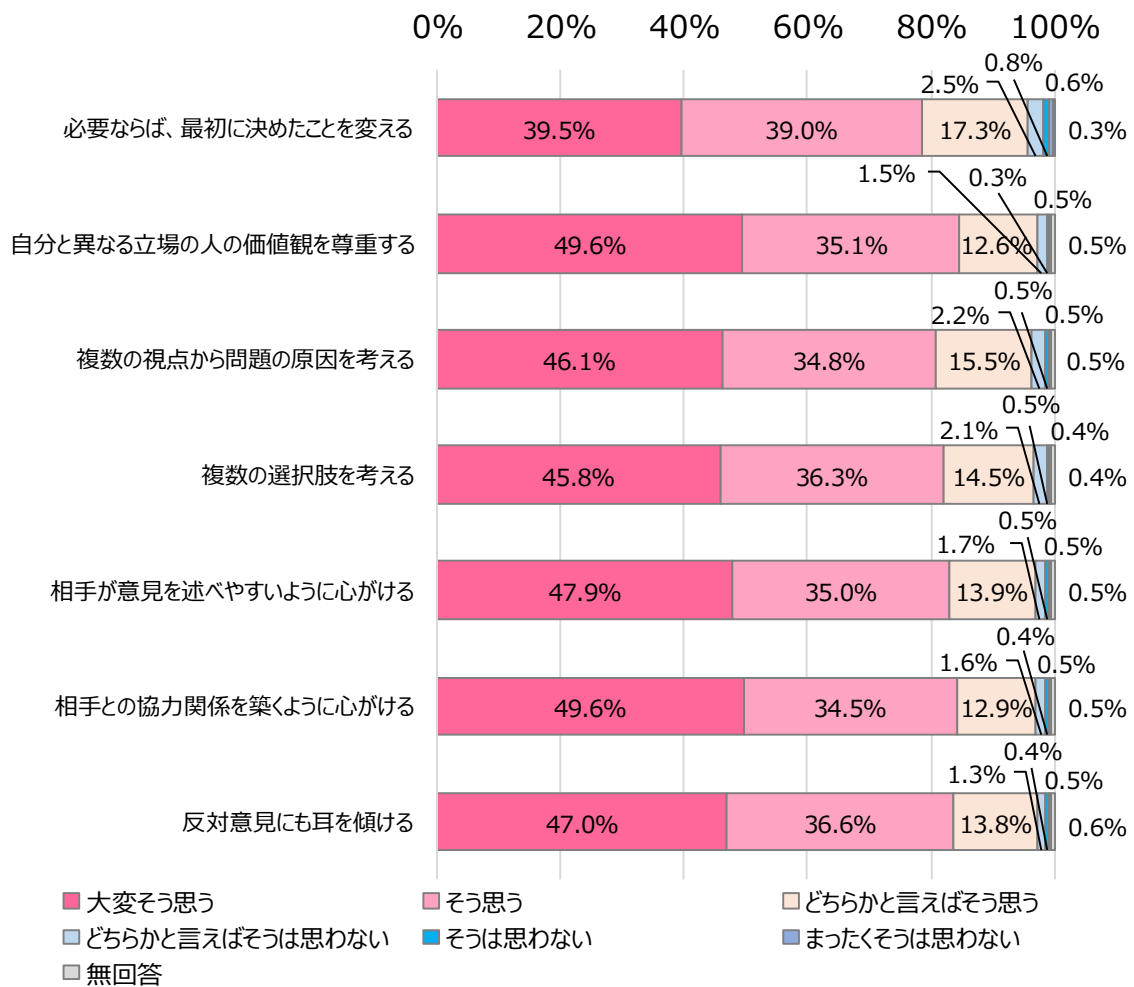
「まったくその通りだ+その通りだ」の合計と平均

「全くその通りだ+その通りだ」	合計
自分自身を地球市民として考えている	89.6%
世界の一部の人々が暮らしている劣悪な条件について、何かしなければと責任を感じる	82.3%
自分の行動は他の国の人々に影響を与えることができると考えている	68.5%
劣悪な職場環境で従業員を働かせていることで知られている企業の商品を買わないことは正しい	70.5%
世界の問題について、自分は何かできる	75.1%
地球環境について、気にかけることは重要である	96.0%
平均	80.3%

(3)異文化対応コンピテンシー

異文化対応コンピテンシーについては、いずれの項目も9割を超えて「そう思う（大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う）」と回答している。

図表 3-34 異文化対応コンピテンシー (n=13,987)



図表 3-35 異文化対応コンピテンシー

「大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う」の合計と平均

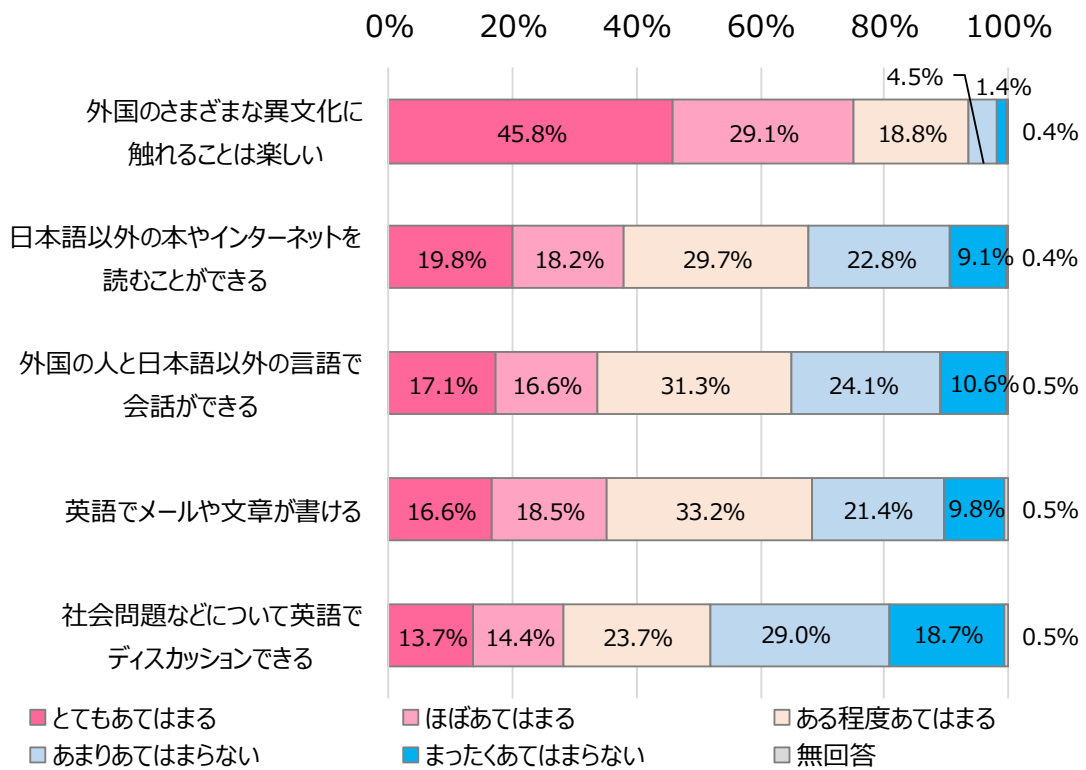
「大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う」	合計
必要ならば、最初に決めたことを変える	95.8%
自分と異なる立場の人の価値観を尊重する	97.3%
複数の視点から問題の原因を考える	96.4%
複数の選択肢を考える	96.6%
相手が意見を述べやすいように心がける	96.8%
相手との協力関係を築くように心がける	97.1%
反対意見にも耳を傾ける	97.3%
平均	96.8%

(4)外国語リテラシー

外国語リテラシーについては、「外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答した割合が93.7%と高い。

その他の項目については6割程度にとどまり、「社会問題などについて英語でディスカッションできる」は、51.8%となっている

図表 3-36 外国語リテラシー (n=13,987)



図表 3-37 外国語リテラシー

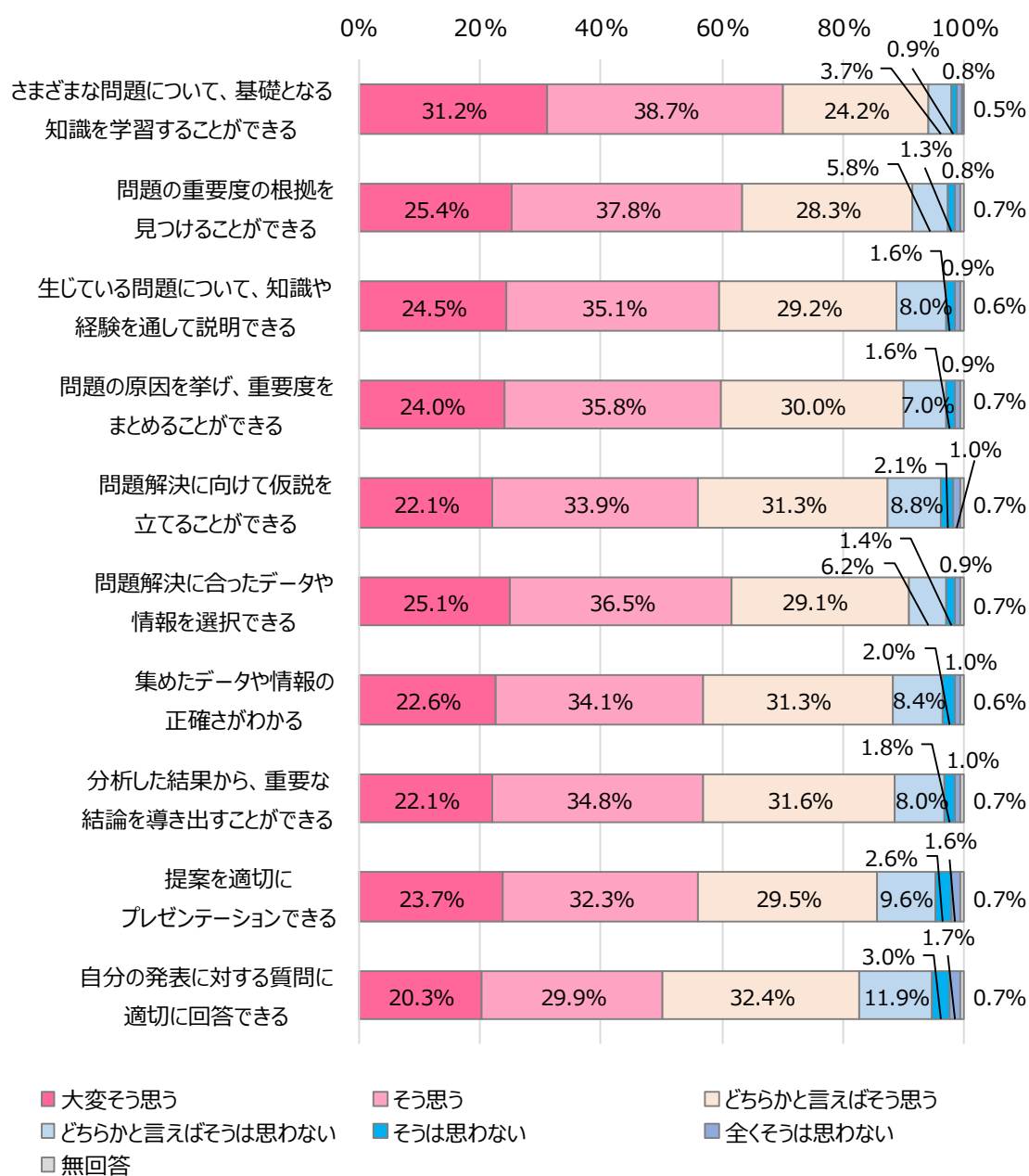
「とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる」の合計と平均

「とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる」	合計
外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい	93.7%
日本語以外の本やインターネットを読むことができる	67.7%
外国の人と日本語以外の言語で会話ができる	64.9%
英語でメールや文章が書ける	68.3%
社会問題などについて英語でディスカッションできる	51.8%
平均	69.3%

(5) PPDAC スキル

PPDAC スキルについては、「さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる」「問題の重要度の根拠を見つけることができる」「問題解決に合ったデータや情報を選択できる」に、「そう思う（大変そう思う＋そう思う＋どちらかと言えばそう思う）」と回答した割合は9割を超えて高い。

図表 3-38 PPDAC スキル (n=13,987)



図表 3-39 PPDAC スキル

「大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う」の合計と平均

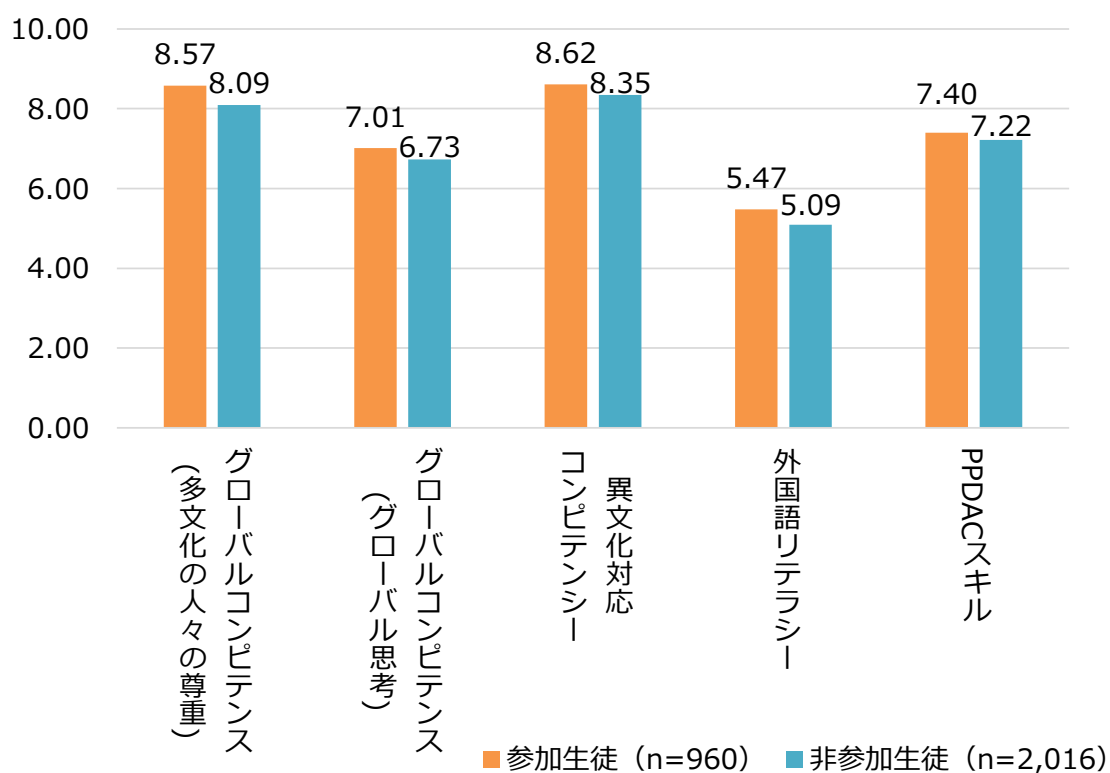
「大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う」	合計
さまざまな問題について、基礎となる知識を学習することができる	94.1%
問題の重要度の根拠を見つけることができる	91.5%
生じている問題について、知識や経験を通して説明できる	88.8%
問題の原因を挙げ、重要度をまとめることができる	89.8%
問題解決に向けて仮説を立てることができる	87.3%
問題解決に合ったデータや情報を選択できる	90.8%
集めたデータや情報の正確さがわかる	88.0%
分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる	88.5%
提案を適切にプレゼンテーションできる	85.6%
自分の発表に対する質問に適切に回答できる	82.6%
平均	88.7%

3-6-3 WWL 事業参加生徒と非参加生徒の比較

WWL 事業参加生徒と非参加生徒（拠点校で WWL 事業に参加していない生徒）の 5 項目の比較を行った。前ページまでの 5 つの項目を 0~10 点で点数化して比較を行う。学年は 1、2 年生を対象とした。

その結果、いずれの項目も WWL 事業参加生徒が高くなっている。特に、「グローバルコンピテンス（多文化の人々の尊重）」の差が大きい。

図表 3-40 5 つの項目の比較



3-7 生徒の3年間の成長の状況

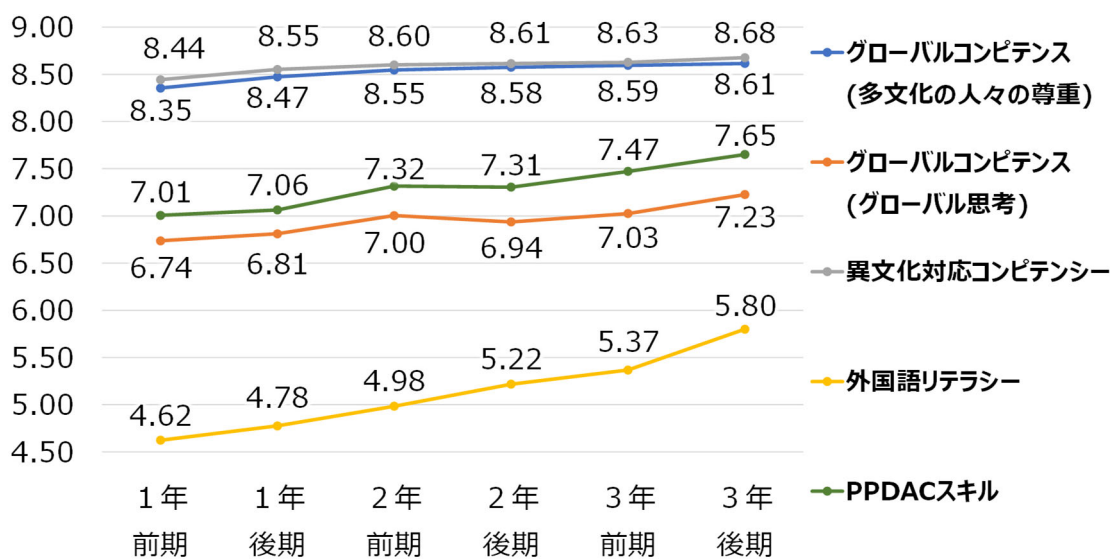
3-7-1 5つの能力項目

本節では、生徒アンケートを3年間6回とも回答した今年度3年生を対象に、前節の5項目の成長度を分析する。

前ページの5つの項目を0～10点で点数化し、1年生から2年生にかけての変化をみた。その結果、いずれの項目も、1年前期と比較して3年後期までに点数が高くなり、3年間の成長がみられる。

特に「外国語リテラシー」については6回の調査で大きく上昇している。「PPDACスキル」については、学年が上がるタイミングでの上昇が大きい。

図表 3-41 5つの項目の変化（アンケート6回参加3年生 n=1,781）



3-7-2 問題・課題

WWL 事業の問題点や困っていることについて、3 年間の結果を比較する。その結果、1 年生の時には最も割合が高かった「英語に苦手意識がある」の回答が、3 年生では割合が大きく低下している。

同様に、「海外の人と触れ合うのに苦手意識がある」「WWL 事業の課題が難しすぎる」「WWL 事業のテーマに関心が持てない」の回答割合も 3 年生で低下している。WWL 事業を 3 年間続けることで、英語や国際交流、SDGs 等の社会課題に対する苦手意識が軽減されている。

また、3 年生の段階では選択制になる学校も多いため、「WWL 事業の課題に取り組む時間がない」の割合も低下している。

図表 3-42 WWL 事業について、問題点や困っていること
(アンケート 6 回参加 3 年生 n=1,781)

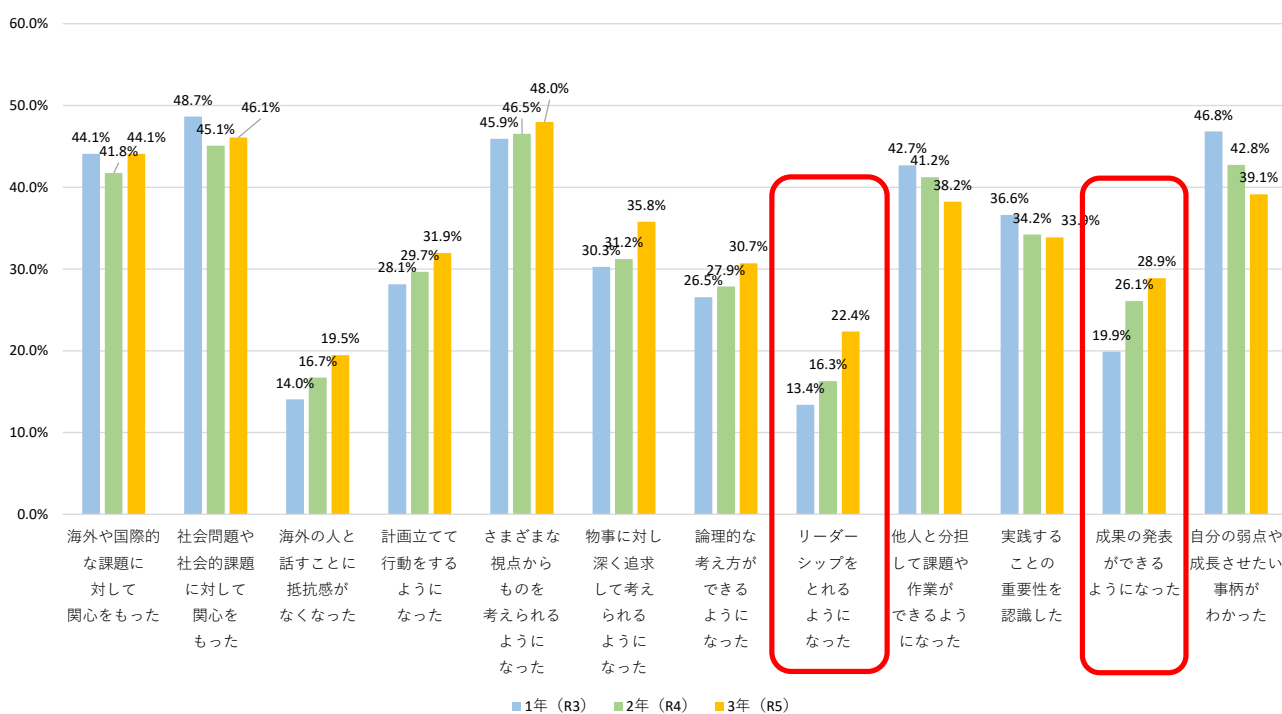


3-7-3 成長したこと

高校生活を通じて身についた・成長したと思うことについて、3年間の結果を比較する。その結果、1年生の時と比較して、3年生の時には「リーダーシップをとれるようになった」「成果の発表ができるようになった」と回答する生徒の割合が大きく増加している。また、「物事に対し深く追求して考えられるようになった」も3年生で割合が高くなっている。WWL事業を通じて、リーダーシップ、プレゼンテーション力、思考力などの力が伸びていることが伺える。

一方で、「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」については、1年生から3年生にかけて低下していることから、1年生の段階では自分の課題をみつけ、その後次の段階へと移っていった生徒が一定数いることがわかる。

図表 3-43 高校生活を通じて身についた・成長したと思うこと
(アンケート6回参加3年生 n=1,781)

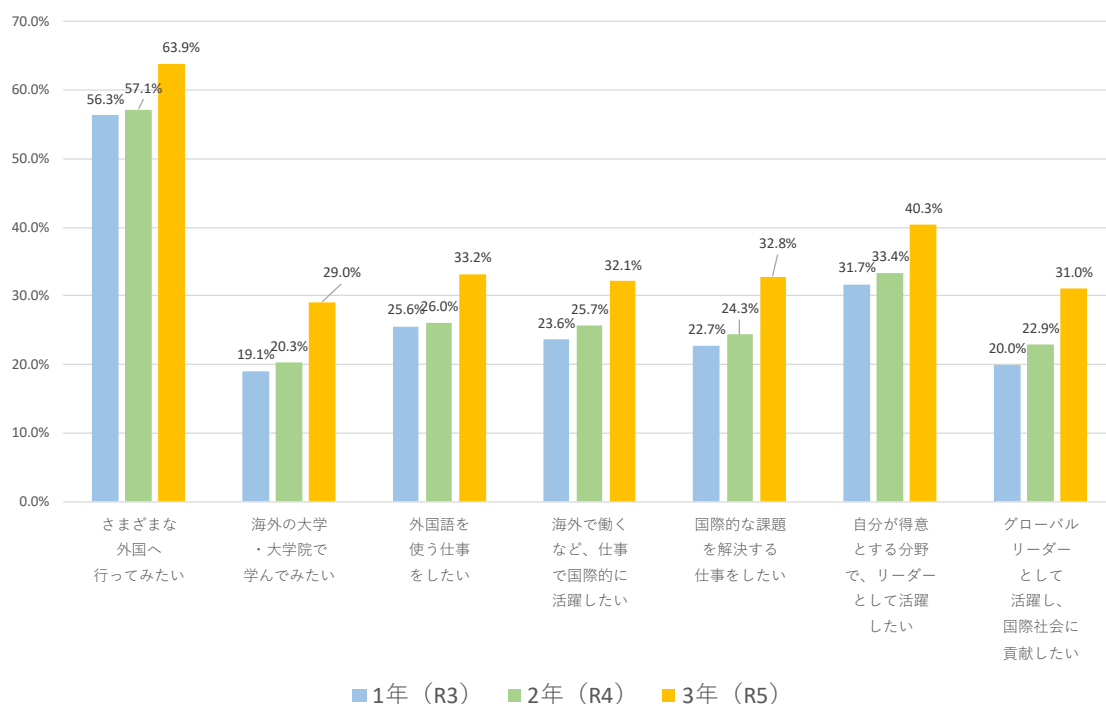


3-7-4 将来に対する考え方

将来に対する考え方について「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる）」の割合を、3年間の結果で比較する。

その結果、いずれの項目も3年生で「あてはまる」割合が1, 2年生の時と比較して大きい。WWL事業を通じて成長し、進路選択など将来のことを考える機会が増える3年生において海外志向やリーダーとして将来活躍するといった志向が高まるのではないかと考えられる。

図表 3-44 将来に対する考え方（とてもあてはまる+ほぼあてはまるの割合）
（アンケート6回参加3年生 n=1,781）



3-7-5 熱心度との関係

WWL 事業への取り組み方で、生徒の成長がどのように変わるのかについて検証を行う。

WWL 事業の総合熱心度（5段階）別に、5つの項目の変化をみていく。

WWL 事業への熱心さで生徒を次の4グループに分類した。

- ・ずっと熱心（1年次から2年次まで熱心に活動）
- ・熱心になった（1年次は熱心ではないが、2年次は熱心に活動）
- ・熱心でなくなった（1年次は熱心に活動していたが、2年次では熱心でない）
- ・ずっと熱心でない（1年次も2年次も熱心に活動していない）

図表 3-45 WWL 事業への熱心度による分類（1, 2年生時の回答をもとに分類）

		2年生1月					
		全体	熱心に取り組んだ	どちらかという熱心に取り組んだ	どちらともいえない	どちらかという熱心に取り組まなかった	熱心に取り組まなかった
1 年 生 1 月	全体	2976 (100.0%)	690 (23.2%)	1201 (40.4%)	787 (26.4%)	199 (6.7%)	99 (3.3%)
	熱心に取り組んだ	609 (100.0%)	316 (51.9%)	226 (37.1%)	50 (8.2%)	10 (1.6%)	7 (1.1%)
	どちらかという熱心に取り組んだ	1292 (100.0%)	264 (20.4%)	680 (52.6%)	268 (20.7%)	63 (4.9%)	17 (1.3%)
	どちらともいえない	807 (100.0%)	87 (10.8%)	248 (30.7%)	362 (44.9%)	78 (9.7%)	32 (4.0%)
	どちらかという熱心に取り組まなかった	188 (100.0%)	20 (10.6%)	38 (20.2%)	69 (36.7%)	40 (21.3%)	21 (11.2%)
	熱心に取り組まなかった	80 (100.0%)	3 (3.8%)	9 (11.3%)	38 (47.5%)	8 (10.0%)	22 (27.5%)

	熱心(変わらず)
	より熱心になった
	どちらかという熱心(変わらず)
	熱心になった
	熱心でない(変わらず)

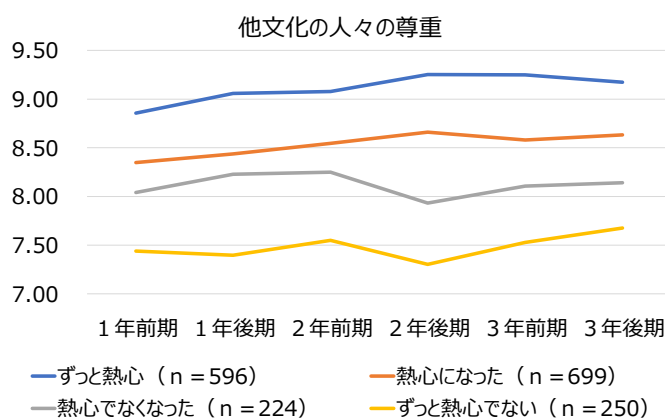
その結果、「ずっと熱心」な生徒は、5項目の得点が高く、かつ3年間で順調に5つの項目が伸びている。一方で「ずっと熱心でない」生徒は、5項目の得点が低く、1年生から3年生にかけて得点は伸びているものの、伸び方は一様ではなく凹凸がある。

「熱心になった」生徒と「熱心でなくなった」生徒については、1年生の前期では、5項目の得点が同程度であった。2年生になると「熱心になった」生徒は順調に得点が伸びているのに対し、「熱心でなくなった」は一時的に低下するなど得点の伸びに凹凸がある。

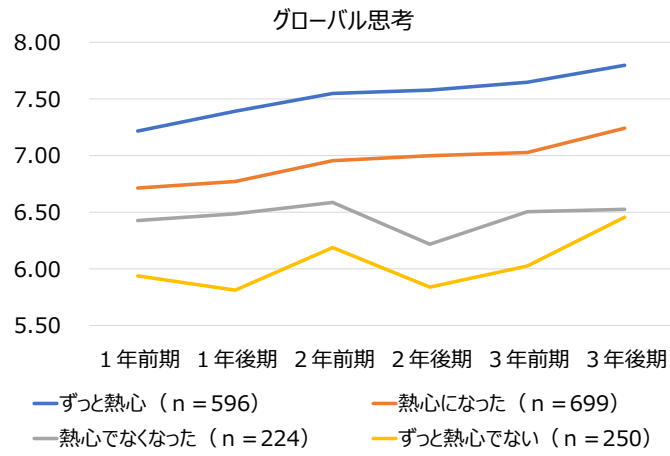
これらの結果より、グローバル・マインドセット/コンピテンシーや PPDAC スキルのような能力が育成されるは、生徒自身が熱心に（主体的に）取り組むことが重要だと推察される。

ただし、5項目のうち、外国語リテラシーや PPDAC スキルについては、熱心度が低くても、他の項目と比較するとゆるやかではあるが上昇傾向がみられる。WWL 事業は、熱心に取り組めていない生徒に対しても一定の教育効果はあることがわかる。

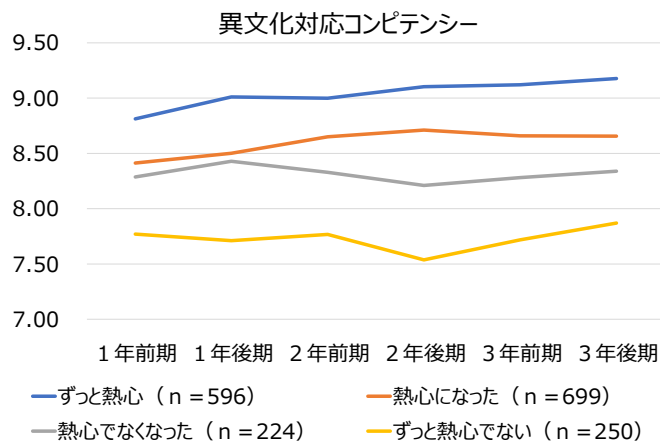
図表 3-46 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）



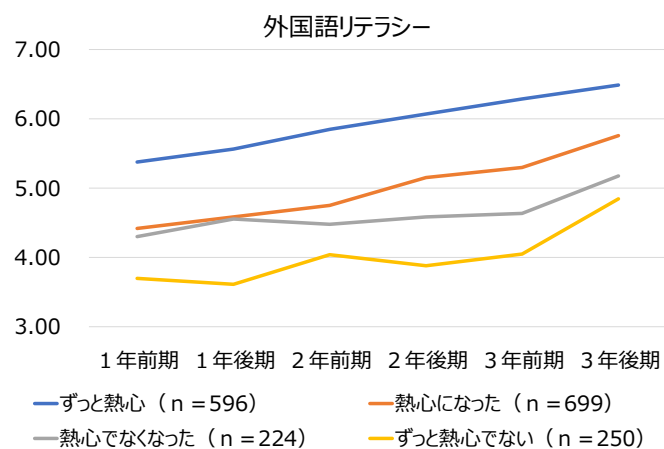
図表 3-47 グローバルコンピテンス（グローバル思考）



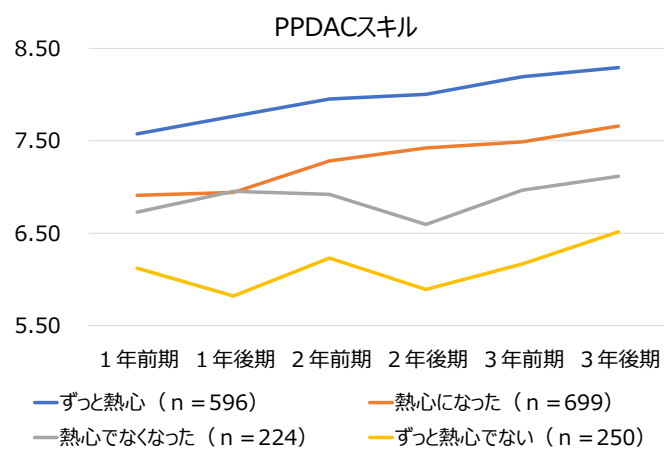
図表 3-48 異文化対応コンピテンシー



図表 3-49 外国語リテラシー



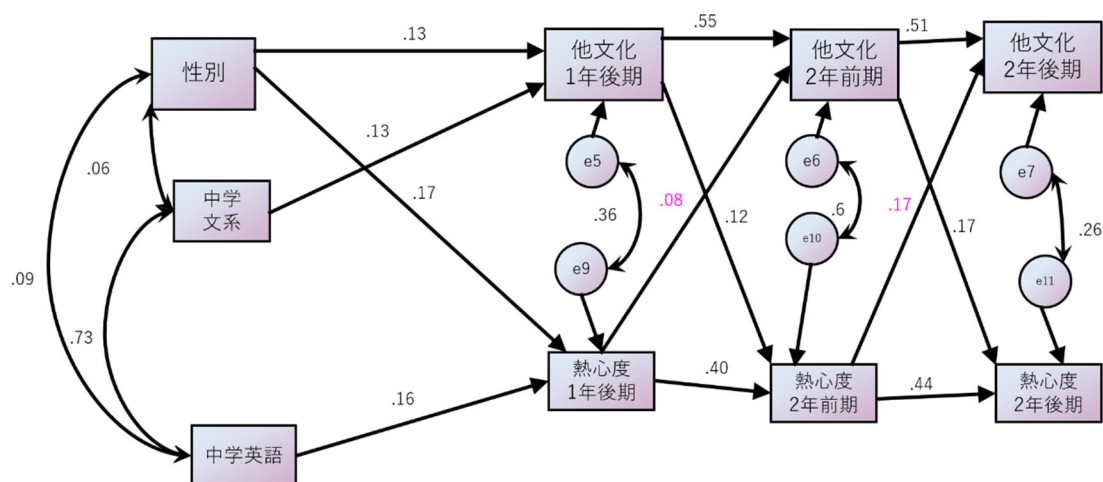
図表 3-50 PPDACスキル



ここまでの結果は「能力の高い生徒ほど、熱心に活動を行っている」ことを示しているだけかもしれない。そこで、「能力」と「熱心さ」はどのような関係にあるのかを、2つ以上の変数間の相互作用を検証するためのモデルである「交差遅延効果モデル」を用いて分析する。

その結果、「能力」は「熱心さ」に正の影響を及ぼし、「熱心さ」は「能力」に正の影響を及ぼしていた。1年生の段階では「能力⇒熱心さ」の係数が大きいことから、「能力の高い生徒が、より熱心に活動を行う」傾向が強いものの、活動が進むにつれ「熱心に活動を行う生徒の能力が高まる」「能力の高い（高まった）生徒が、より熱心に活動を行う」ことの循環がなされるようになっている。熱心に取り組む生徒ほどスキルが高くなり、スキルが高い資質・能力生徒ほど熱心に取り組むという相互作用が確認された。

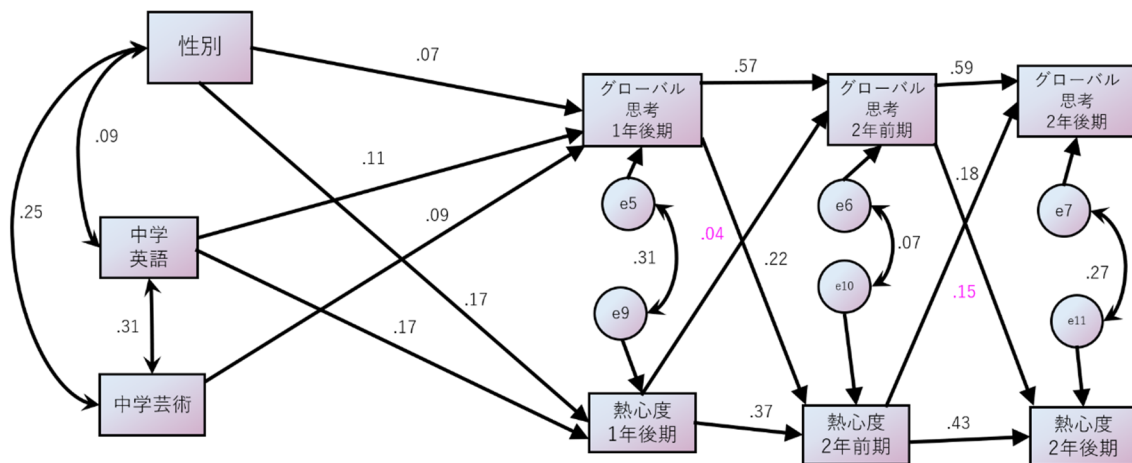
図表 3-51 交差遅延効果モデル分析：グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）



GFI=.961

RMSEA=.101

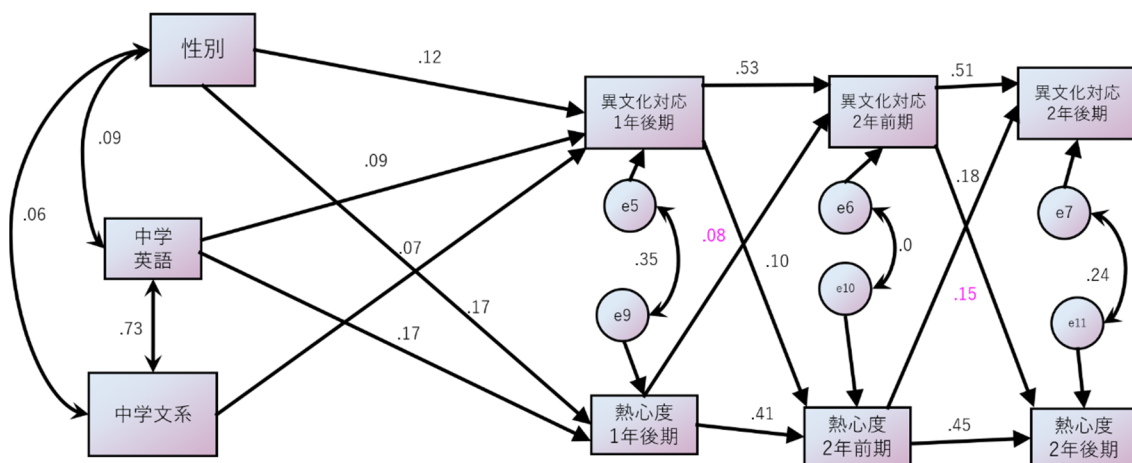
図表 3-52 交差遅延効果モデル分析：グローバルコンピテンス（グローバル思考）



GFI=.949

RMSEA=.120

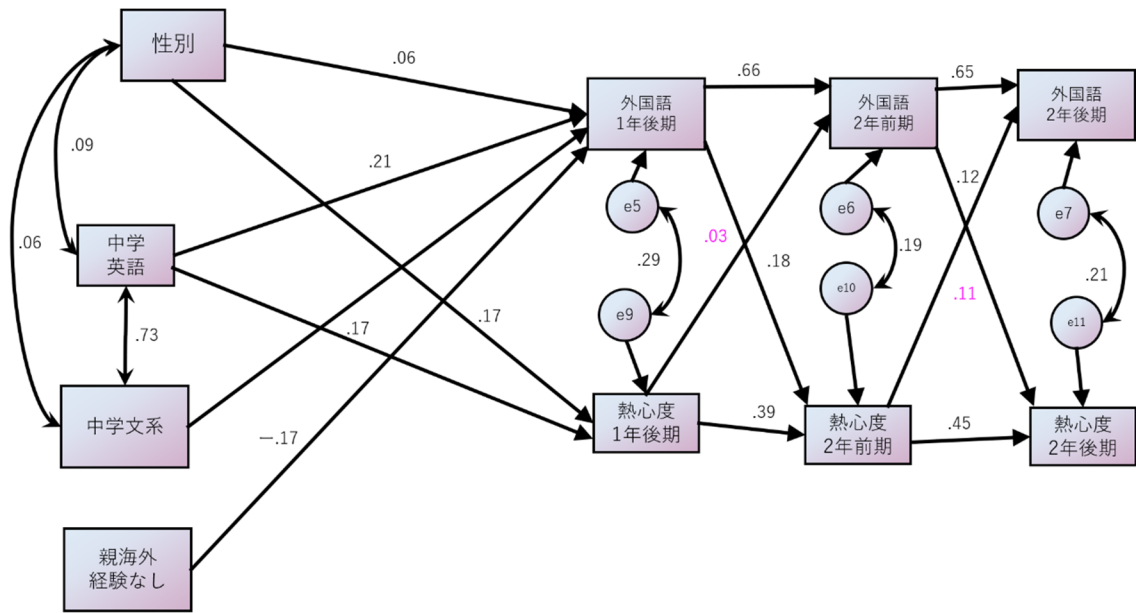
図表 3-53 交差遅延効果モデル分析：異文化対応コンピテンシー



GFI=.961

RMSEA=.103

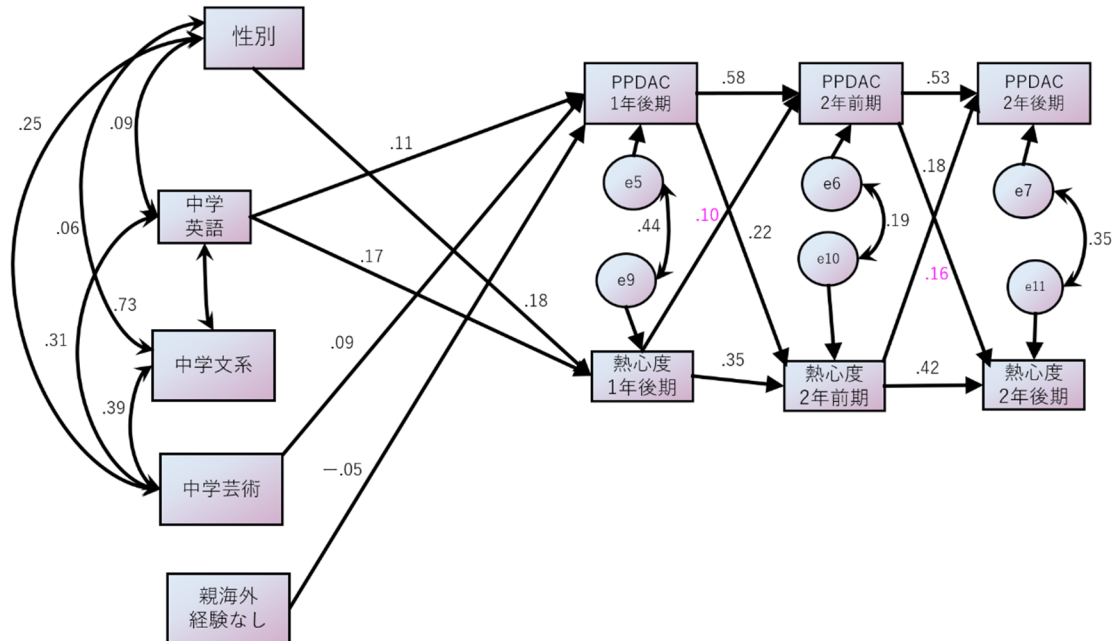
図表 3-54 交差遅延効果モデル分析：外国語リテラシー



GFI=.945

RMSEA=.105

図表 3-55 交差遅延効果モデル分析：PPDAC スキル



GFI=.957

RMSEA=.085

3-8 まとめ

生徒アンケートからは、以下のようなことが明らかになった。

<活動状況>

- ・「課題探究の授業・活動」「外国語、文系、理系など複数の教科を融合した科目」「国内でのフィールドワーク」は、参加率が高く、熱心度・満足度も高い。取り組み内容としては、「グループワークへの参加」「プレゼンテーションでの発表」は取り組む機会が多く、熱心に実施している割合も高い。「日本語以外の言語」での活動も活発に実施されている。
- ・総合的にみて、6割以上の生徒がWWL事業に熱心に取り組み、満足している。
- ・4割以上の生徒が「さまざまな視点からものを考えられるようになった」「海外や国際的な課題に対して関心をもった」「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」「社会問題や社会的課題に対して関心をもった」と回答。

<成長状況>

- ・WWL事業の成果目標である「グローバルなマインドセット」「グローバルな資質・能力（グローバル・コンピテンシー）」「PPDAC(探究型行動)」の育成について達成状況を確認した。グローバルなマインドセットのうち「他文化の人々の尊重」は項目平均97.1%、「グローバル思考」は項目平均80.3%の生徒が達成。グローバルな資質・能力のうち「異文化対応コンピテンシー」は項目平均96.8%の生徒が、外国語リテラシーは項目平均69.3%の生徒が達成している。PPDACは項目平均88.7%の生徒が達成している。
- ・この5項目について3年間の成長度をみると、いずれの項目も1年生時と比較して2年生、3年生と点数が高くなっており、3年間での成長がみられる。特に特に「外国語リテラシー」については6回の調査で大きく上昇している。「PPDACスキル」については、学年が上がるタイミングでの上昇が大きい。
- ・WWL事業の問題点や困っていることについて3年間の結果を比較すると、1年生時と比べ3年生では「英語に苦手意識がある」「海外の人と触れ合うのに苦手意識がある」「WWL事業の課題が難しすぎる」「WWL事業のテーマに関心が持てない」の回答割合が低下している。WWL事業を3年間続けることで、英語や国際交流、SDGs等の社会課題に対する苦手意識が軽減されている。

- ・高校生活を通じて身についた・成長したと思うことについて、3年間の結果を比較すると、「リーダーシップをとれるようになった」「成果の発表ができるようになった」が3年時に割合が高い。
- ・将来に対する考え方について、「さまざまな外国へ行ってみたい」など、いずれの項目も3年生で「あてはまる」割合が1, 2年生の時と比較して大きい。WWL事業を通じて成長し、進路選択など将来のことを考える機会が増える3年生において海外志向やリーダーとして将来活躍するといった志向が高まるのではないかと考えられる。

<活動と成長の関係>

- ・WWL事業の熱心度別にみると、熱心度が高いほど5項目の点数は高い。また、熱心に活動している生徒ほど順調に3年間での成長がみられる。
- ・ただし、熱心さと成長の関係は、「能力の高い生徒ほど、熱心に活動を行っている」ことを示している可能性もある。そこで「能力」と「熱心さ」の関係を「交差遅延効果モデル」を用いて分析した。その結果、「能力」は「熱心さ」に正の影響を及ぼし、「熱心さ」は「能力」に正の影響を及ぼしていた。熱心に取り組む生徒ほどスキルが高くなり、スキルが高い資質・能力生徒ほど熱心に取り組むという相互作用が確認された。

第4章 カリキュラム開発拠点校教員へのアンケート調査

4-1 調査概要

4-1-1 調査対象

カリキュラム開発拠点校 33 校に勤務する全教員 2,194 名

4-1-2 調査方法

Web アンケート

4-1-3 調査時期

令和 5 年 12 月 11 日～令和 5 年 12 月 22 日

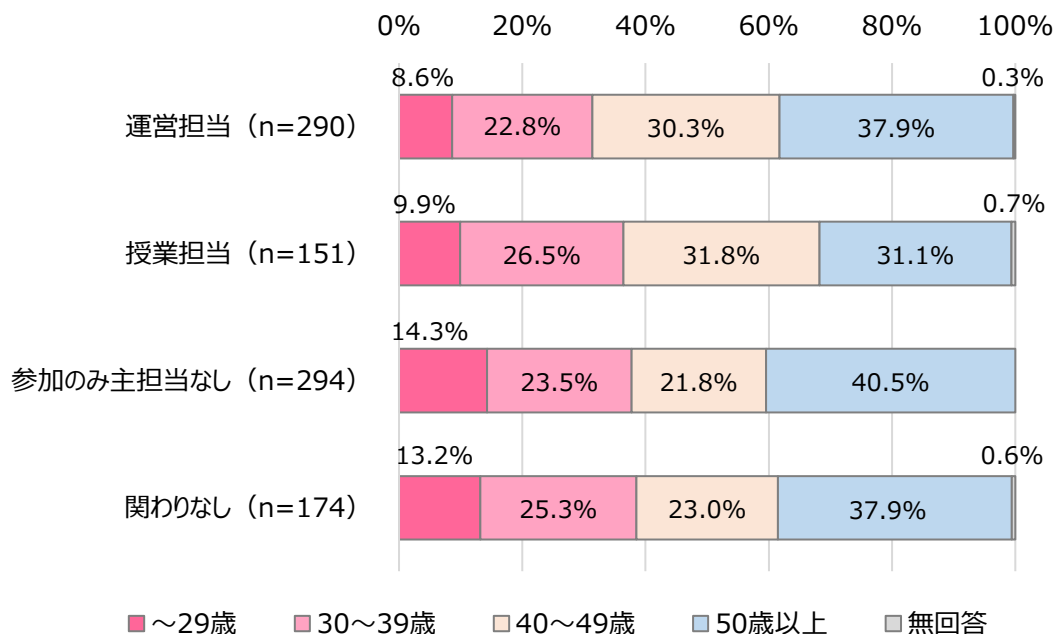
4-1-4 回収状況

991 件（回収率 45.2%）

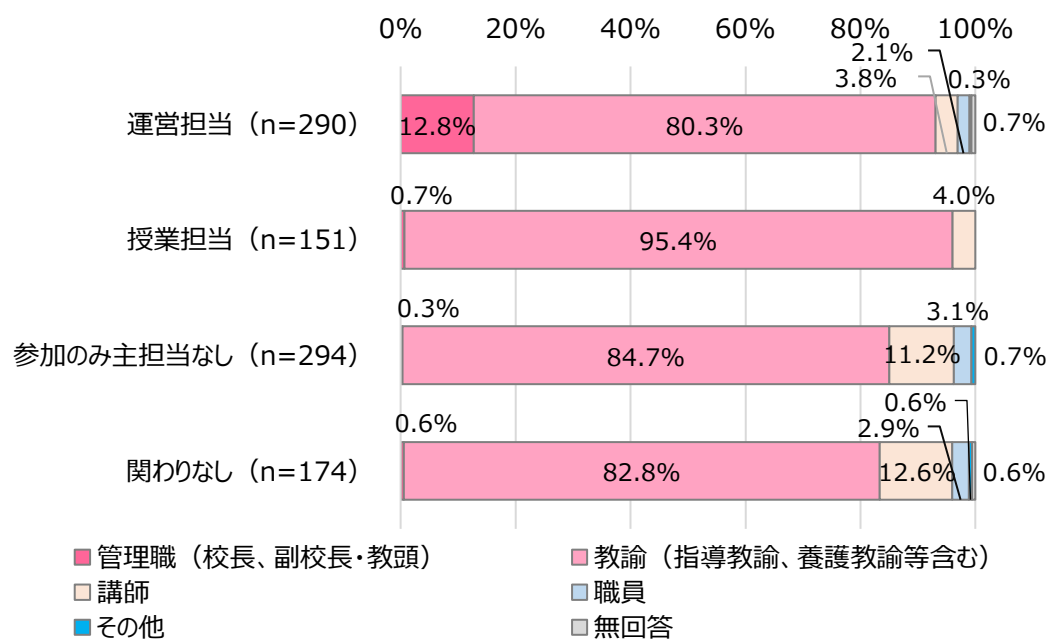
なお、本報告書では、回答者を「運営担当」「授業担当」「参加のみ主担当なし」「関わりなし」に分けて分析した。

4-1-5 回答者属性

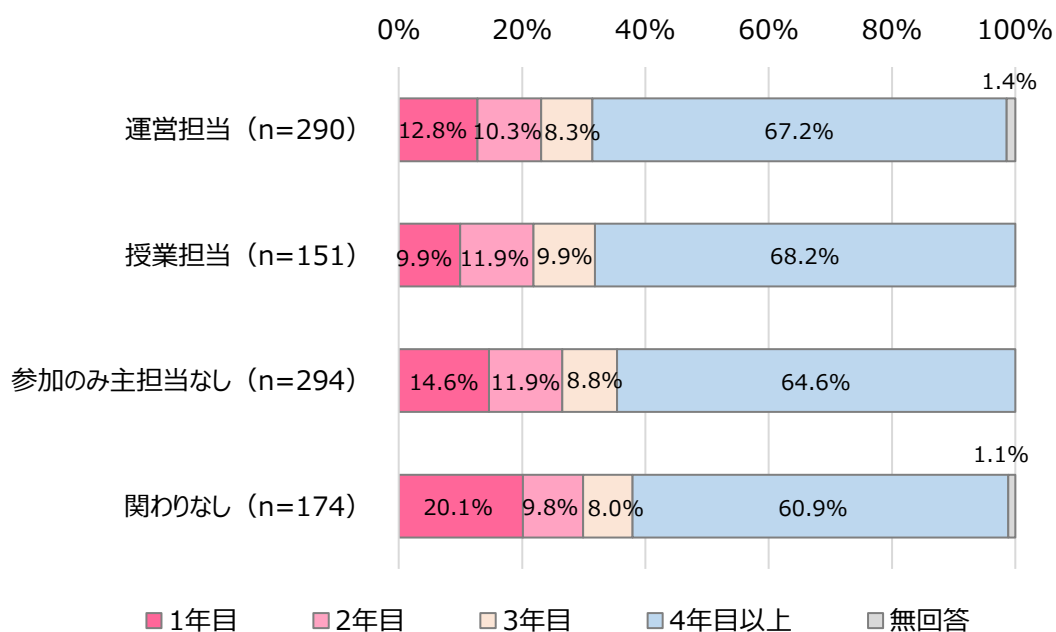
図表 4-1 年齢



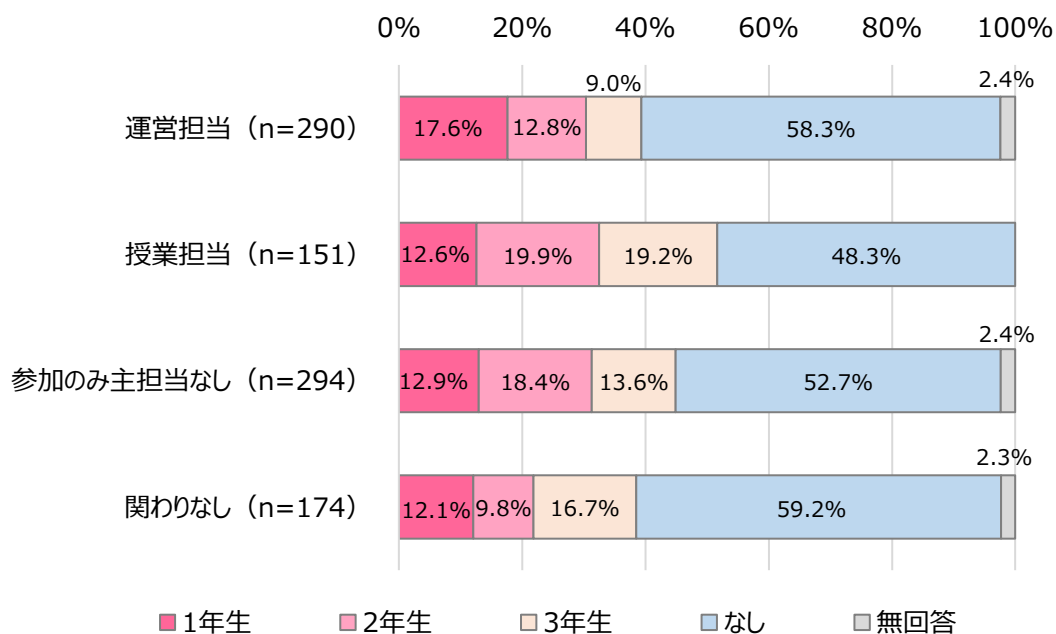
図表 4-2 職名



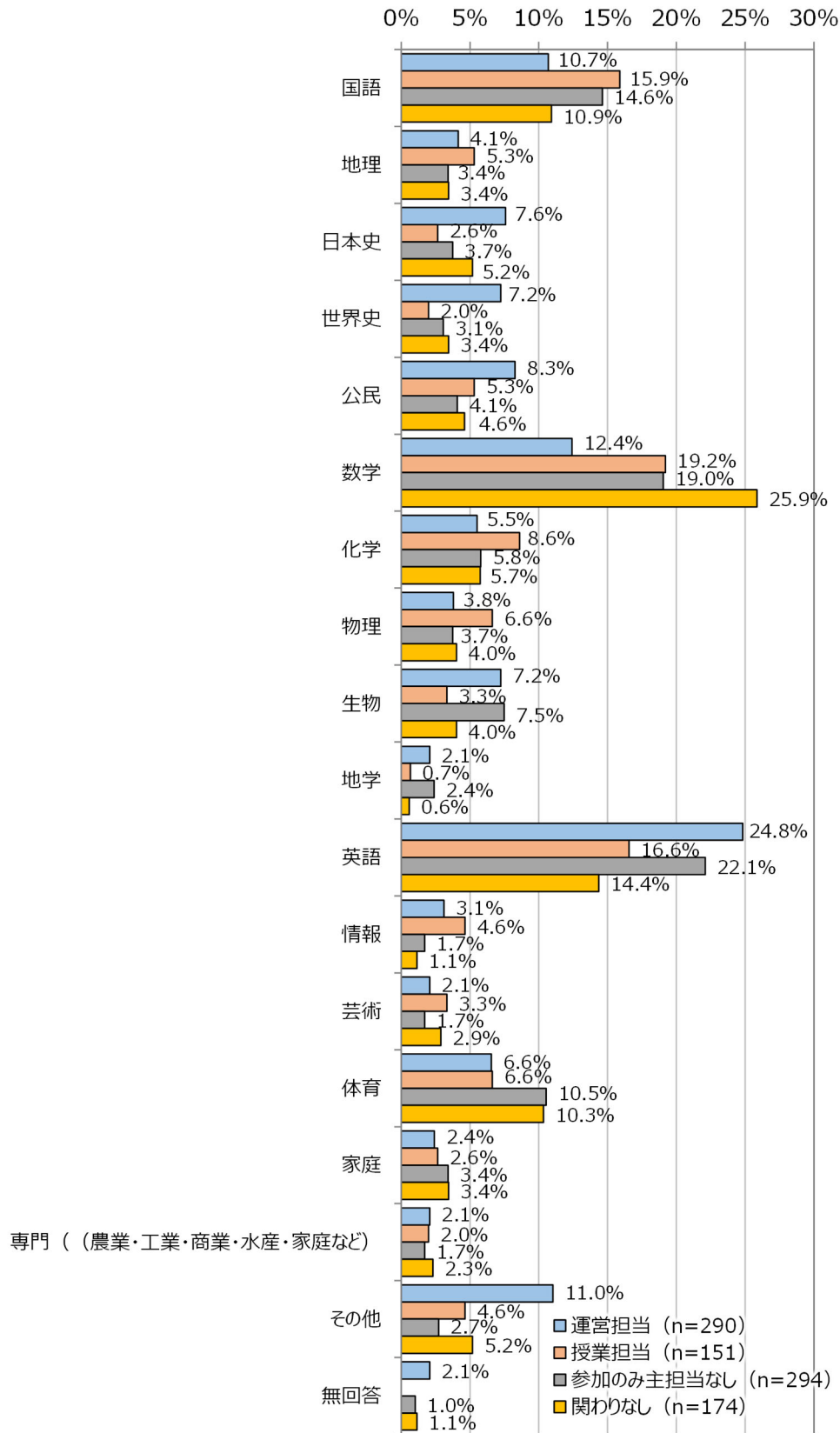
図表 4-3 現在校の勤務期間



図表 4-4 学級担任の有無



図表 4-5 担当教科

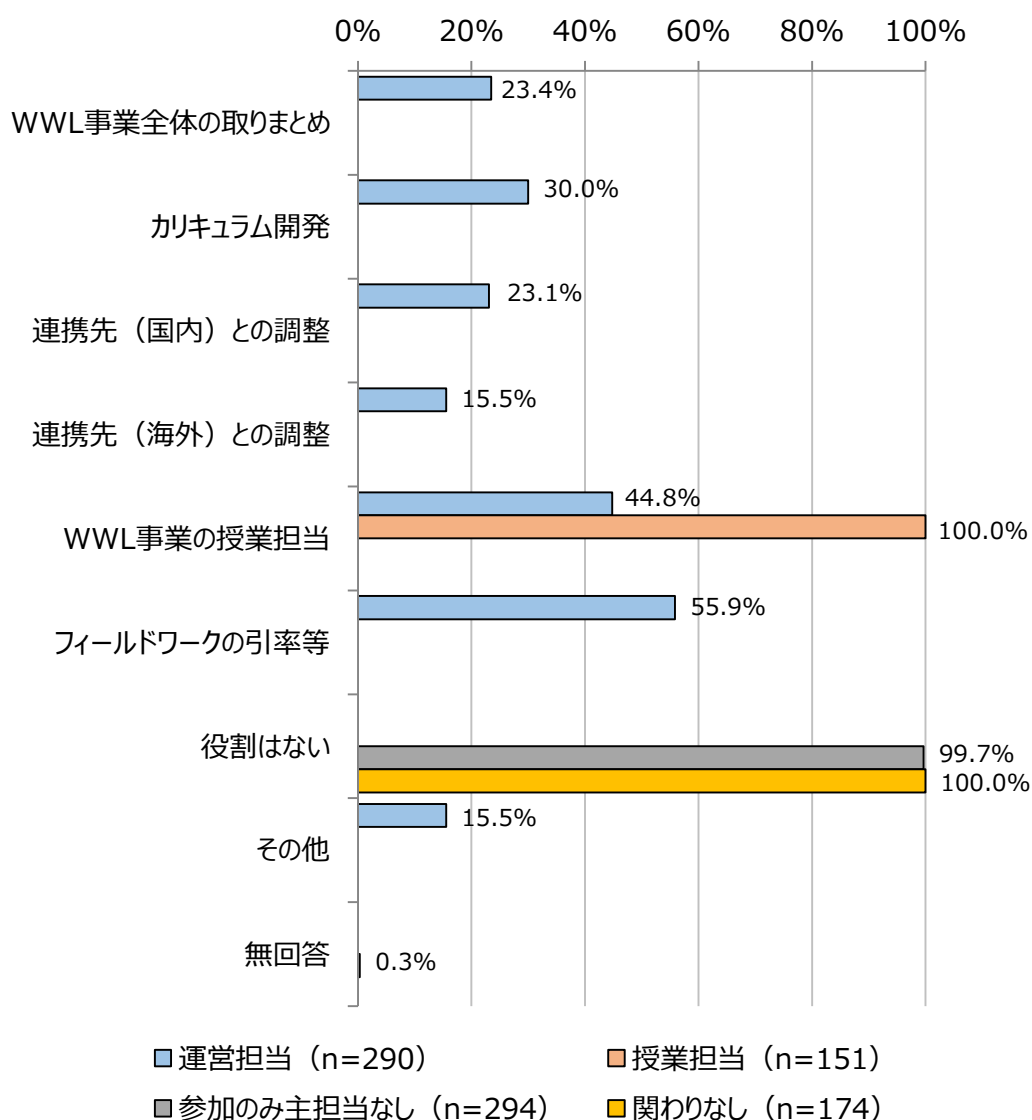


4-2 WWL 事業への関わり

4-2-1 WWL 事業における役割

WWL 事業における役割については、「運営担当」は「フィールドワークの引率等」を担当する割合が 55.9%と最も高く、次いで「WWL 事業の授業担当」が 44.8%、「カリキュラム開発」が 30.0%となっている。

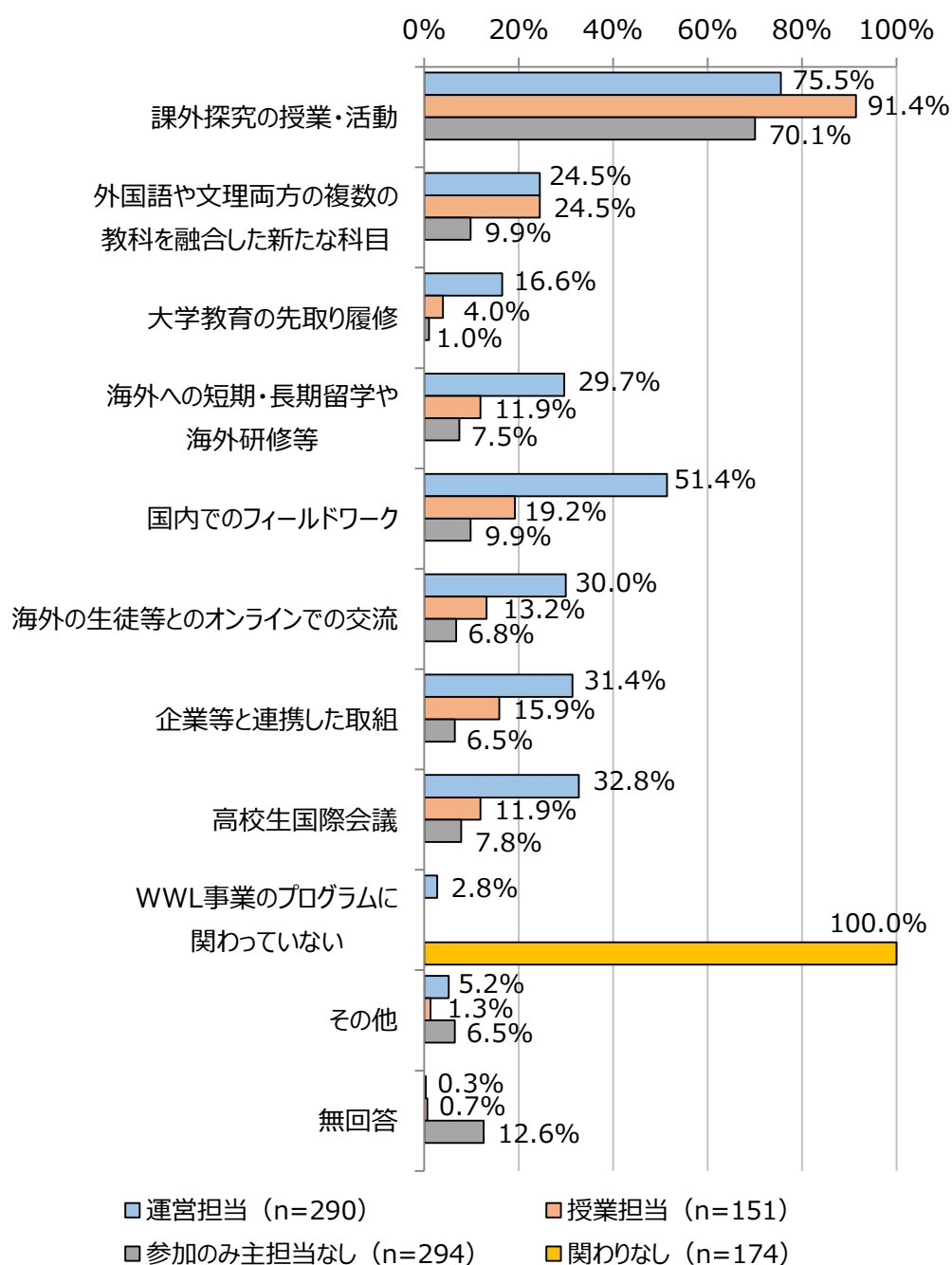
図表 4-6 WWL 事業における役割（複数回答）



4-2-2 WWL 事業において関わったプログラム

WWL 事業において関わったプログラムは、下記のとおり。WWL 事業に担当がない「参加のみ主担当なし」でも、「課外探究の授業・活動」で関わった教員が多いことがわかる。

図表 4-7 WWL 事業において関わったプログラム（複数回答）

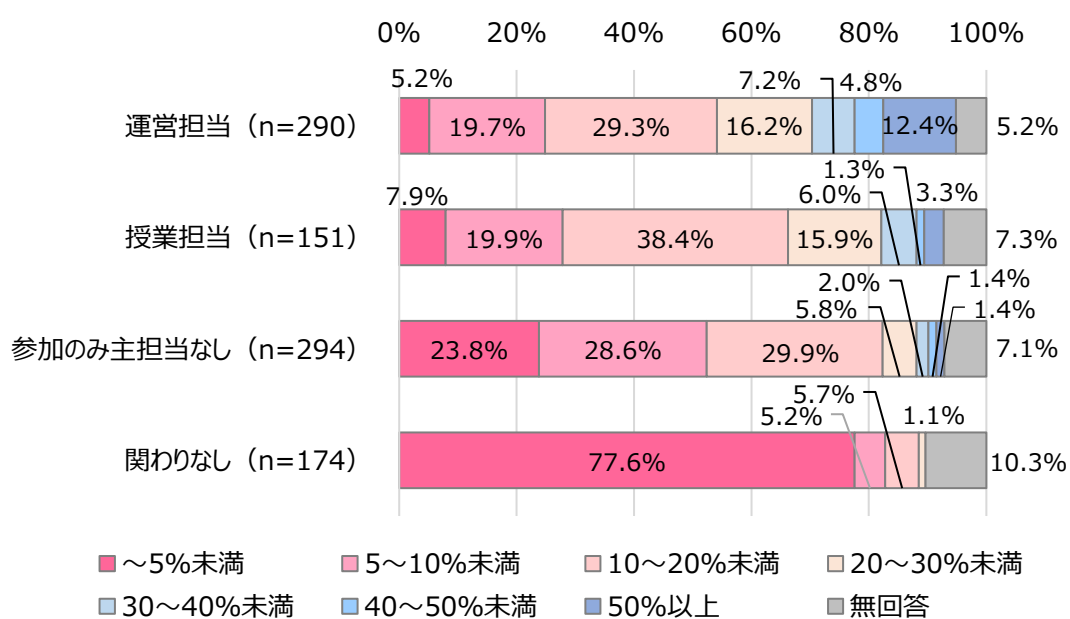


4-2-3 業務時間全体に占める WWL 事業の割合

運営担当の教員ほど業務時間全体に占める割合が高い。運営担当では、「50%以上」と回答した教員も 12.4%存在する。授業担当の職員は「10~20%」の割合が最も割合が高い。

参加のみ主担当なし、関わりなしの教員は、「10%未満」の回答割合が 50%以上を占めている。

図表 4-8 業務時間全体に占める WWL 事業の割合



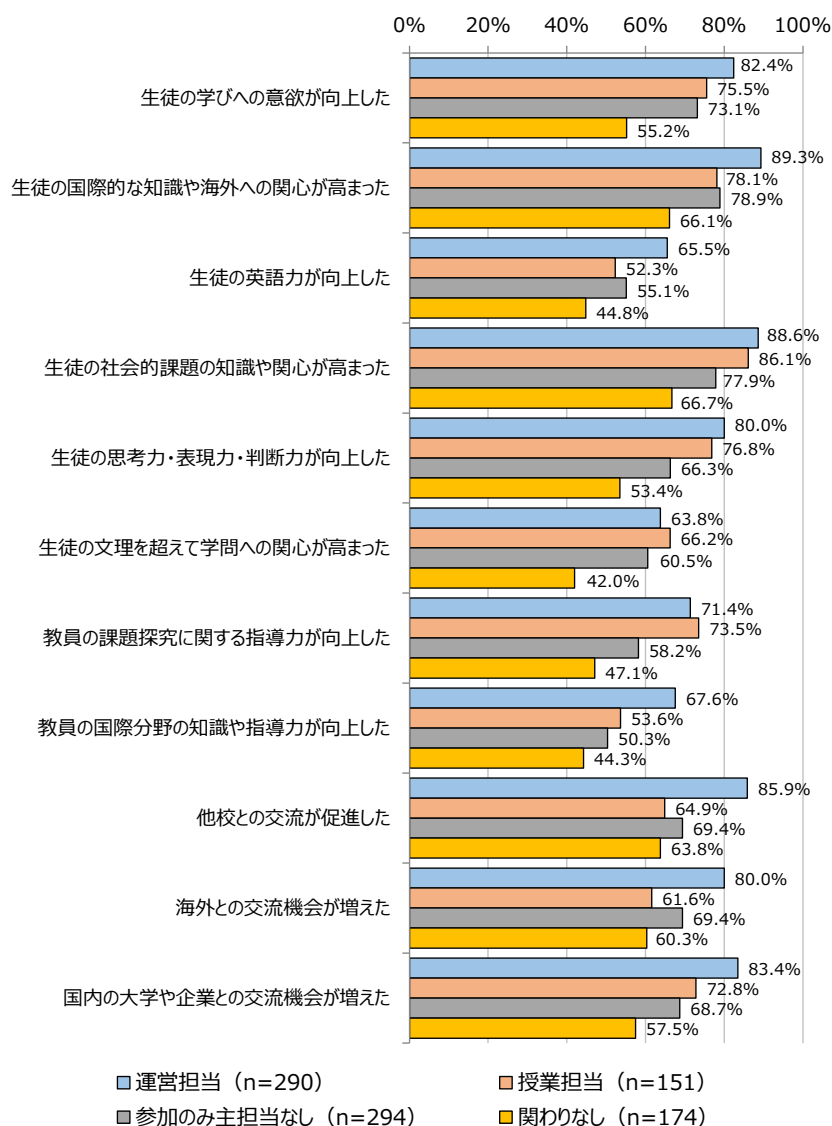
4-2-4 学校への影響や変化

WWL 事業の学校への影響や変化について「あてはまる（あてはまる＋どちらかというにあてはまる）」と回答した割合をみる。

「運営担当」の教員は「生徒の国際的な知識や関心が高まった」が 89.3%、「授業担当」の教員は「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった」が 86.1%と最も高い割合となっている。「運営担当」「授業担当」は他にも、生徒の成長に関する多くの項目で割合が高い。

さらに、「運営担当」の教員は、「国内の大学の企業との交流機会が増えた」など交流や教員の指導力に関する項目について、他の教員と比べてあてはまる割合が高い。

図表 4-9 学校への影響や変化（「あてはまる」＋「どちらかというにあてはまる」の割合）

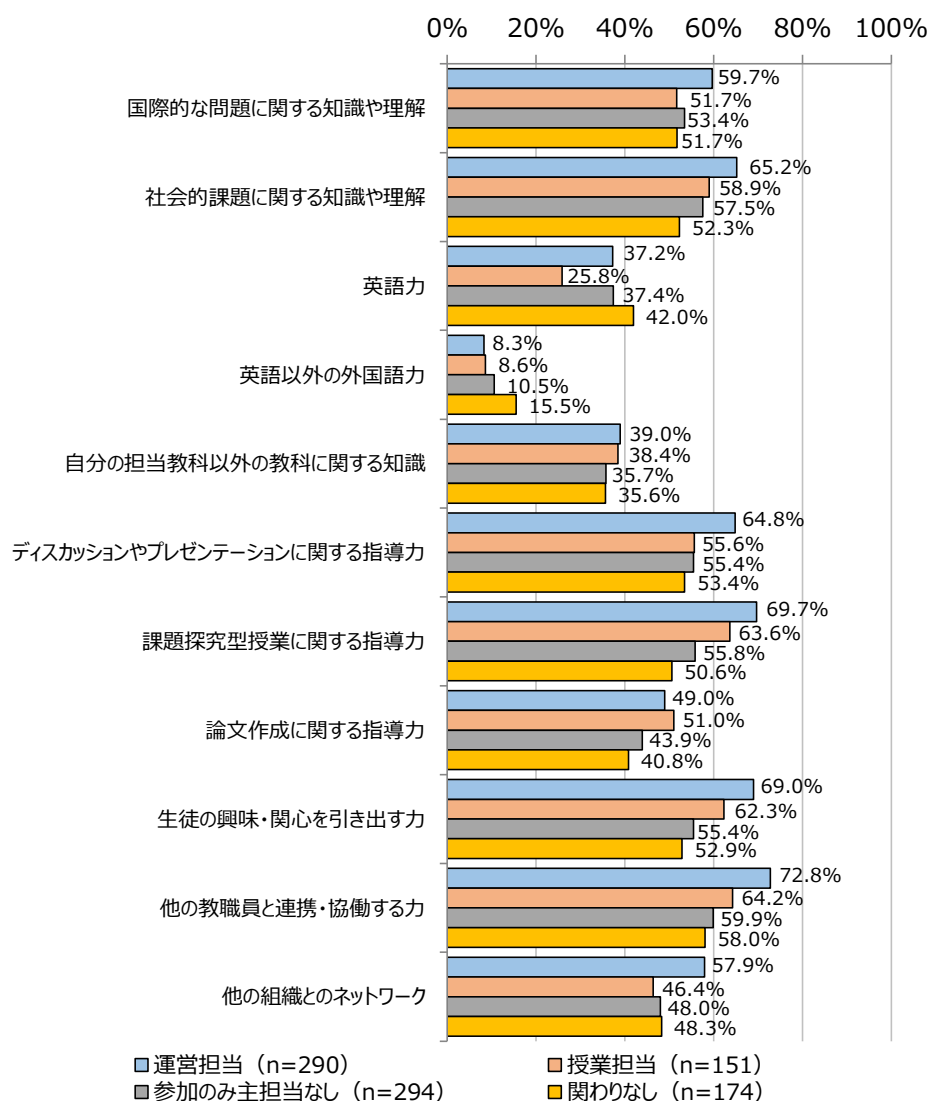


4-2-5 指導にあたっての資質や能力

指導にあたって必要だと感じる資質や能力は、WWL 事業に運営担当・授業担当として参加した教員は、「社会的課題に関する知識や理解」「課題探究型授業に関する指導力」「生徒の興味・関心を引き出す力」「他の教職員と連携・協働する力」を必要と考える割合が高い。関わりのない教員においては、これらの項目は必ずしも高くなく、WWL 担当と担当していない教員でギャップがあることが分かる。

「他の組織とのネットワーク」については、運営担当の教員のみが割合が高い。

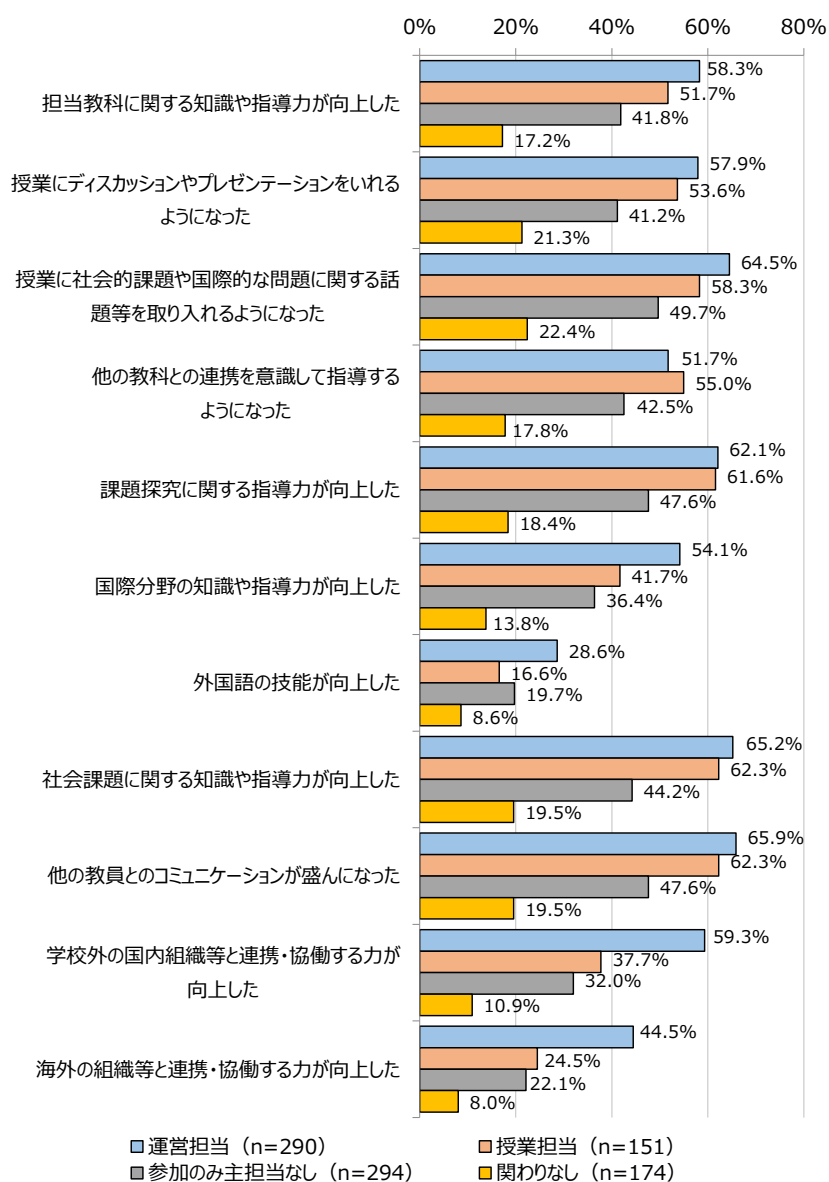
図表 4-10 指導にあたっての資質や能力（「あてはまる」の割合）



4-2-6 WWL 事業による自身への影響や変化

WWL 事業による自身への影響や変化について、運営担当・授業担当の教員は、「他の教員とのコミュニケーションが盛んになった」など、多くの項目で「あてはまる（あてはまる＋どちらかというにあてはまる）」と回答する割合が高い。

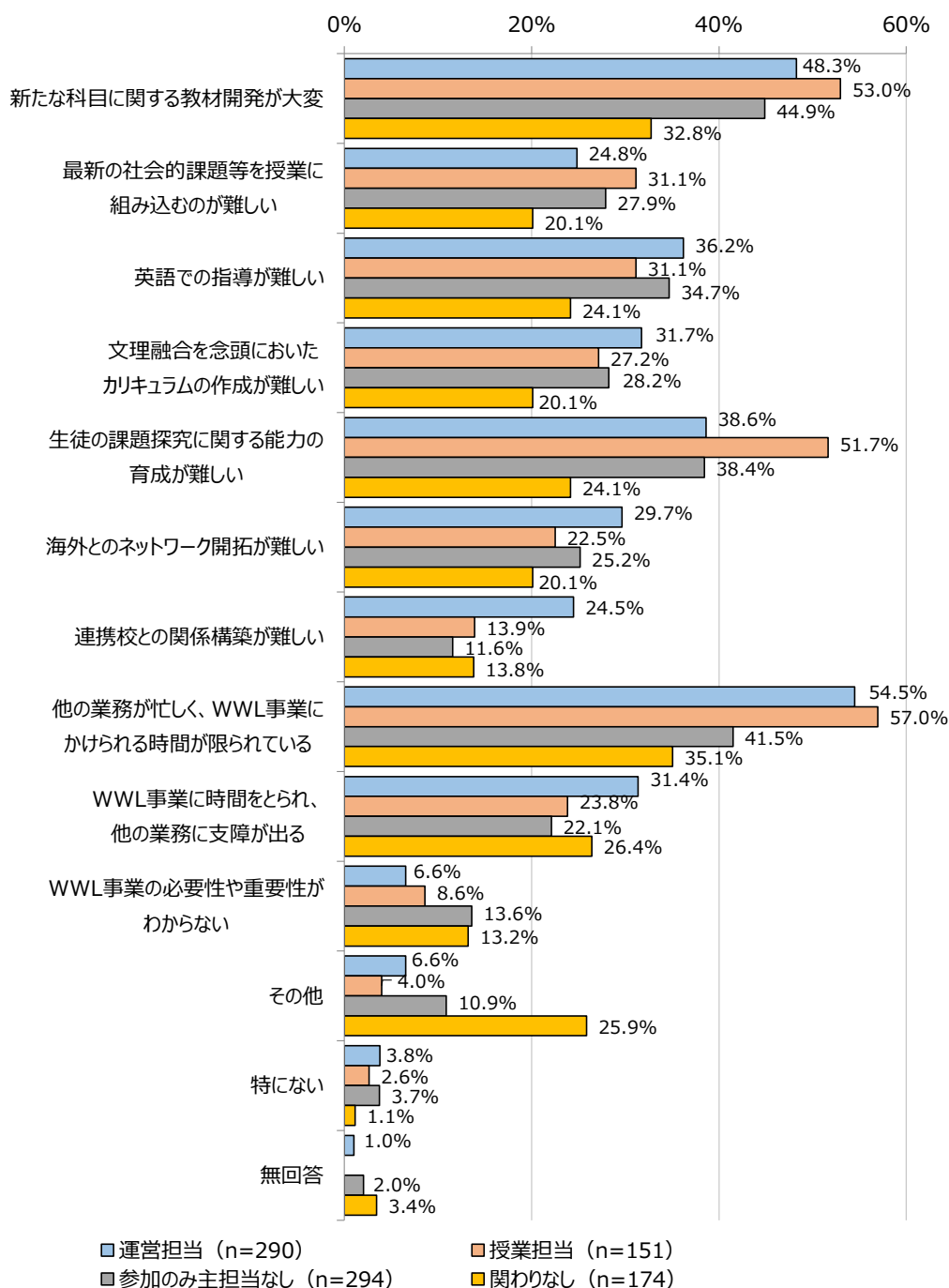
図表 4-11 自身への影響や変化（「あてはまる」＋「どちらかというにあてはまる」の割合）



4-2-7 WWL 事業の課題や問題点

「新たな科目に関する教材開発が大変」「他の業務が忙しく、WWL 事業にかけられる時間が限られている」を課題・問題点と認識している割合が高く、運営担当・授業担当の教員の回答は約 5 割である。

図表 4-12 WWL 事業の課題や問題点（複数回答）

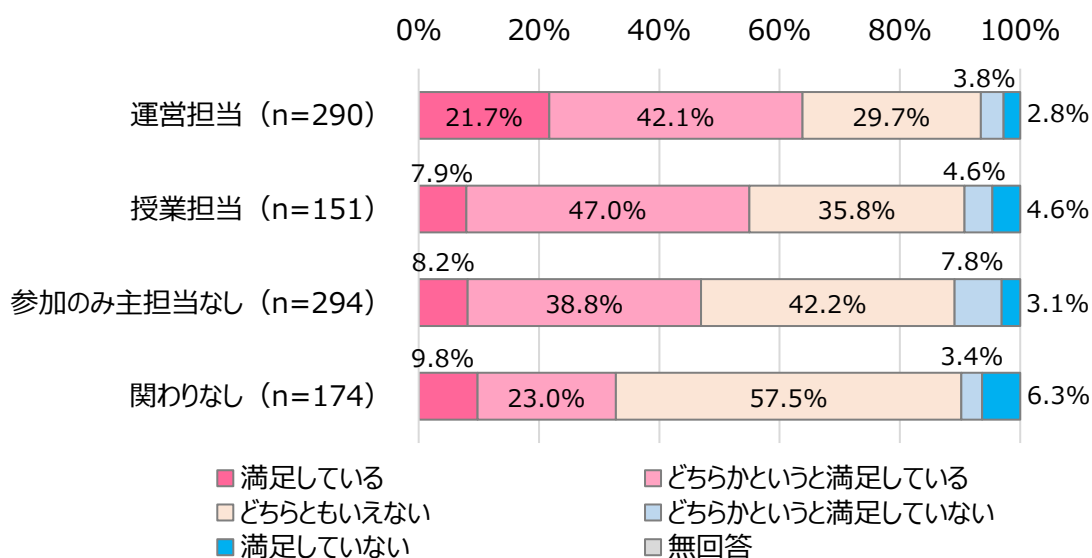


4-2-8 WWL 事業への満足度

WWL 事業への満足度については、運営担当の教員では「満足している（満足している＋どちらかという満足している）」の割合が 63.8%となっている。授業担当の教員では 55.0%となっている。

参加のみ主担当なし、関わりなしの教員は「どちらともいえない」の割合が高い。

図表 4-13 WWL 事業への満足度

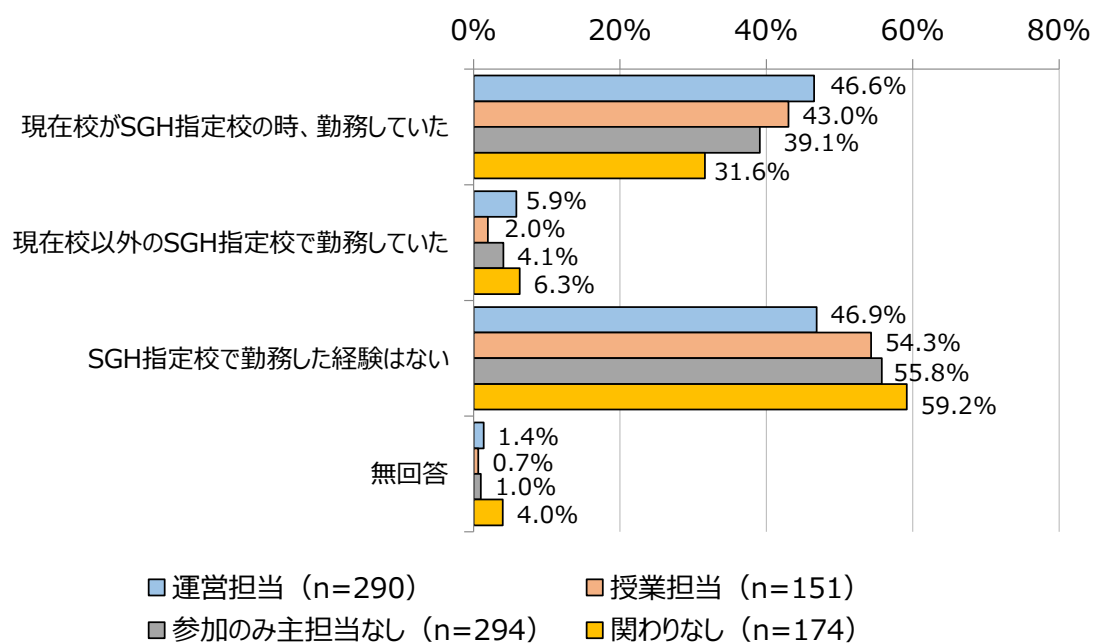


4-3 SGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校での勤務

4-3-1 スーパーグローバルハイスクールでの勤務経験

3～4割程度の教員は、現在校がSGH指定校の時に勤務経験がある。運営担当の教員は、その割合が高い。

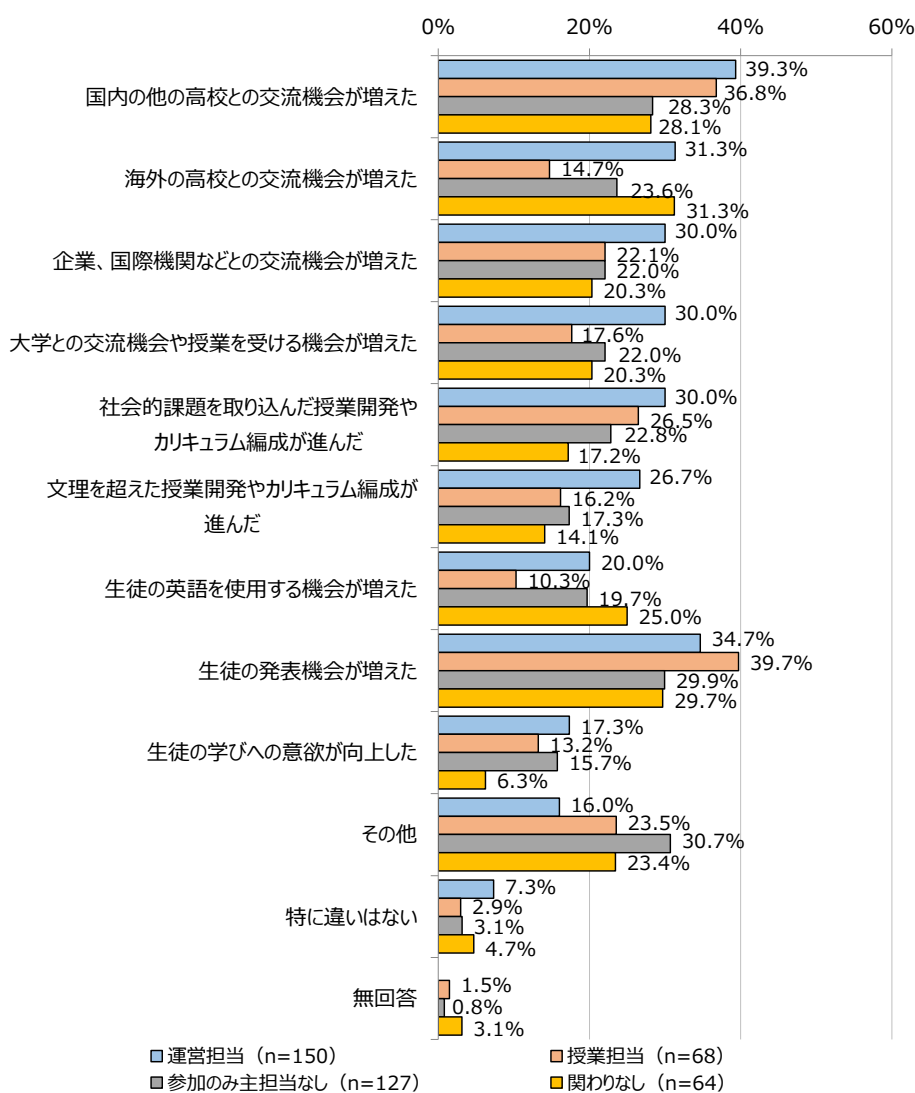
図表 4-14 スーパーグローバルハイスクールでの勤務経験（複数回答）



4-4 SGH 事業と比較した際の WWL 事業の違い

運営担当・授業担当の教員からみて、SGH 事業と WWL 事業の違いとして「国内の他の高校との交流機会が増えた」「生徒の発表の機会が増えた」等の割合が高い。

図表 4-15 SGH 事業と比較した際の WWL 事業の違い
(複数回答：SGH 指定校での勤務経験ありのみ)



4-5 苦労点・問題点と対応策

WWL 事業の苦労点・問題点、およびそれに対する対応策を自由記述できいた。教員間及び外部機関など「連携」に関わること、課題研究のテーマ決めや生徒のモチベーションなど「生徒の活動の自律化」に関わること、指導方法や時間確保など「教育方法」に関わること、その他、事業継続のための資金不足などが苦労点・問題点としてあげられた。

苦労点・問題点	対応策（例）
<p>●教員間の連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前年度までの取組がしっかり引き継がれていないと、担当になってから授業内容を把握したり考えたりするのが難しい。 ・WWL 事業を進めるにあたって教員間の協力体制を築くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・経験のある先生にアドバイスをいただきながら授業を進めた。 ・WWL 事業を展開していく中でその重要性を話し理解を求めた。
<p>●外部機関との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各連携校との連絡協議会などのスケジュール調整。 ・連携校との AL ネットワーク会議の時間調整。 ・海外の連携先を広げること 	<ul style="list-style-type: none"> ・Forms やメールなどを利用して、手間暇かけて丁寧に調整したり、同内容の協議会を複数回行うという方法をとった。 ・AL ネットワーク会議を複数回実施することで対応した。 ・県内の SSH 校の海外の連携校に依頼して、連携が図れることになった。国によって制度の違いから、連携において齟齬が生じることがあり、県の国際交流員にアドバイスをもらった。
<p>●課題研究のテーマ決め</p> <ul style="list-style-type: none"> ・既存のものではなく、高校生ならではの新しい視点でアイデアを出すこと ・1 人の教師が 7～8 名の生徒の指導に当たっている。探究のテーマもバラバラな中 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の疑問に対して、教員が答えたり、生徒たちで調べたり、専門の企業の方や大学教授にオンラインでフィールドワークを行ってもらい対応した。

<p>で、問題を見つけ、課題を設定する段階まで全員を持っていくのに苦労した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒それぞれの社会問題や地域についての知識量が不足していることが問題点として挙げられる。社会の課題に対して問題意識を持つための知識が足りていないため、課題設定が甘くなってしまう生徒が多い。そのため、仮説を立ててもその検証に何が必要かを考えるための手段がわからないということが多々あった。 	<ul style="list-style-type: none"> 対応として、教員が限られた時間ではあるが、一人一人の対話をして、「こういう文献はないか?」、「こういう角度から課題を設定してはどうか?」などの声掛けを行った。 仮説の検証方法について、その方法をどうするかといった問題点については、ネットワーク参加企業などに相談をすることにより問題点の解消に向けたアクションを行うことができた。
<ul style="list-style-type: none"> ●生徒のモチベーションを高めること 学校が設定してしまうので、生徒の自主性が削がれてしまう。 生徒の探究活動へのモチベーションの維持が難しく、「やらされている」意識を取り去ることができない。 	<ul style="list-style-type: none"> 枠内での生徒の興味関心を無理やりこじつける。 いろいろな論文検索をして生徒に次の研究のヒントを与えたりすることで、研究を継続できるよう試みている。
<ul style="list-style-type: none"> ●指導方法 専門外の内容を指導すること。 探究活動の指導。 社会的課題や国際的課題の実状についての知識を身に付けること、それらを生徒が理解しやすい形で紹介すること。生徒の意見に対して適切なアドバイスすることなどが難しいと思った。 形だけで終わらない本物の探究能力を育成するのが大変難しいこと（単純に育成の難易度が高いというだけでなく、探究に使える時間や人員の問題、指導方法に確固たる正解がない点なども含む）。 	<ul style="list-style-type: none"> 書籍やネットから情報を得て対応した。 他教員と協力してファシリテーターとして生徒の資質・能力の向上に努めた。 WWL 事業の中心となってくださる研修課長が先頭に立って活動して下さり、多くの先生方と共に活動する中で徐々に対応できるようになった。 現在のところ、指導カリキュラムの開発・分析・改善を、細かく丁寧に根気よく徹底的に行うことで対応している。

<p>●活動のための時間の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とにかく行事やイベントごとの検証と報告が多すぎる。 ・本校で高校生国際平和会議を主催したが、それに関する業務全般がかなり多く、大変だった。 ・生徒に関して、他の教科の学習時間を確保するために、探究に割く時間が限られている。教員陣も同様に、探究に割く時間の確保が困難である。 ・必要な基礎知識を得るための講義や話し合いで本来の授業時間を大きく超えて活動させる必要が出てきたこと、また知識、考え方の補強のための教材づくりに大きく時間を割かなければならないことが大変だった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の教職員と分担した。 ・他の先生方とも協働をしながらプログラムなどを作成した。 ・昼休みや放課後の時間を用いて対応した。 ・本来の授業時間を超えた分は放課後や土日祝日などの時間外に行うことで対応した。
<p>●事業継続のための資金不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・WWL 事業について文部科学省からの金銭的支援がなくなったため、これまでに開発したレベルの教育を実際できなくなった。 ・資金面。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資金不足を補うために他の団体に援助を求めたが、うまくいっていなかったので、活動を大幅に縮小した。 ・PTAから補助を出す方向となった。

4-6 まとめ

教員については、WWL 事業に役割を持って参加したかどうかで、生徒・学校の変化、指導に当たって必要な資質・能力、自身の変化等に関する認識が異なっていた。

「運営担当」「授業担当」の教員は、「生徒の国際的な知識や海外への関心が高まった」「生徒の社会的課題の知識や関心が高まった」などの変化を感じている。また、「課題探究に関する指導力が向上した」など多くの項目で変化を感じている。

指導に当たって必要な資質・能力についても、「運営担当」「授業担当」の教員は、「社会的課題に関する知識や理解」「課題探究型授業に関する指導力」「生徒の興味・関心を引き出す力」「他の教職員と連携・協働する力」を必要と考える割合が高い。また、「他の教員とのコミュニケーションが盛んになった」など、多くのことについて自身の変化・成長を感じている。

さらに、WWL 事業への満足度についても 5～6 割と高くなっている。

一方で、「運営担当」「授業担当」の教員は、「新たな科目に関する教材開発が大変」「他の業務が忙しく、WWL 事業にかけられる時間が限られている」を課題・問題点と認識している割合が高く、5 割を超えている。「運営担当」「授業担当」に負担が集中しない体制づくりも WWL 事業を行う上での課題となる。

この他、自由記述からは、WWL 事業の苦労点・問題点として「連携」に関わること、「生徒の活動の自律化」に関わること、「教育方法」に関わることなどがあげられた。

第5章 卒業生へのアンケート調査

5-1 調査概要

5-1-1 調査対象

WWL 事業（SGH 事業）の卒業生を輩出している拠点校のうち 21 校の卒業生

5-1-2 調査方法

郵送・メール配布、Web による回答

5-1-3 調査時期

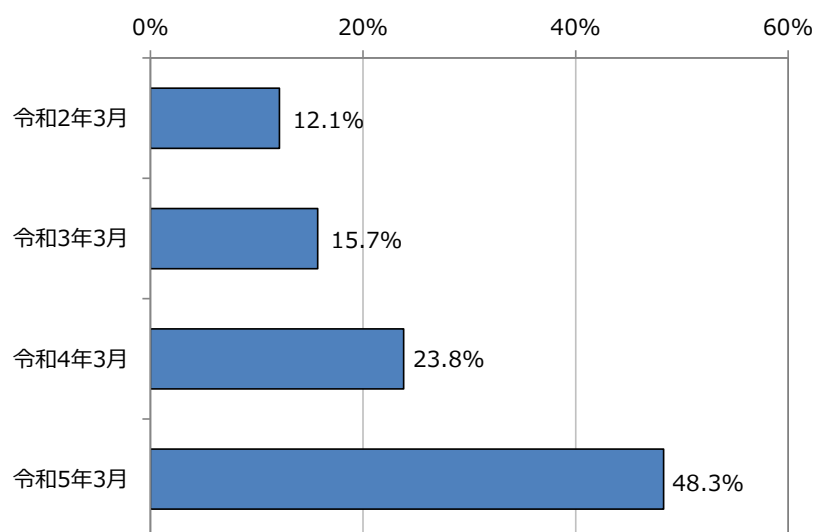
令和 5 年 12 月 14 日～令和 6 年 1 月 29 日

5-1-4 有効回答数

642 件

5-1-5 回答者属性

図表 5-1 卒業年次 (n=642)

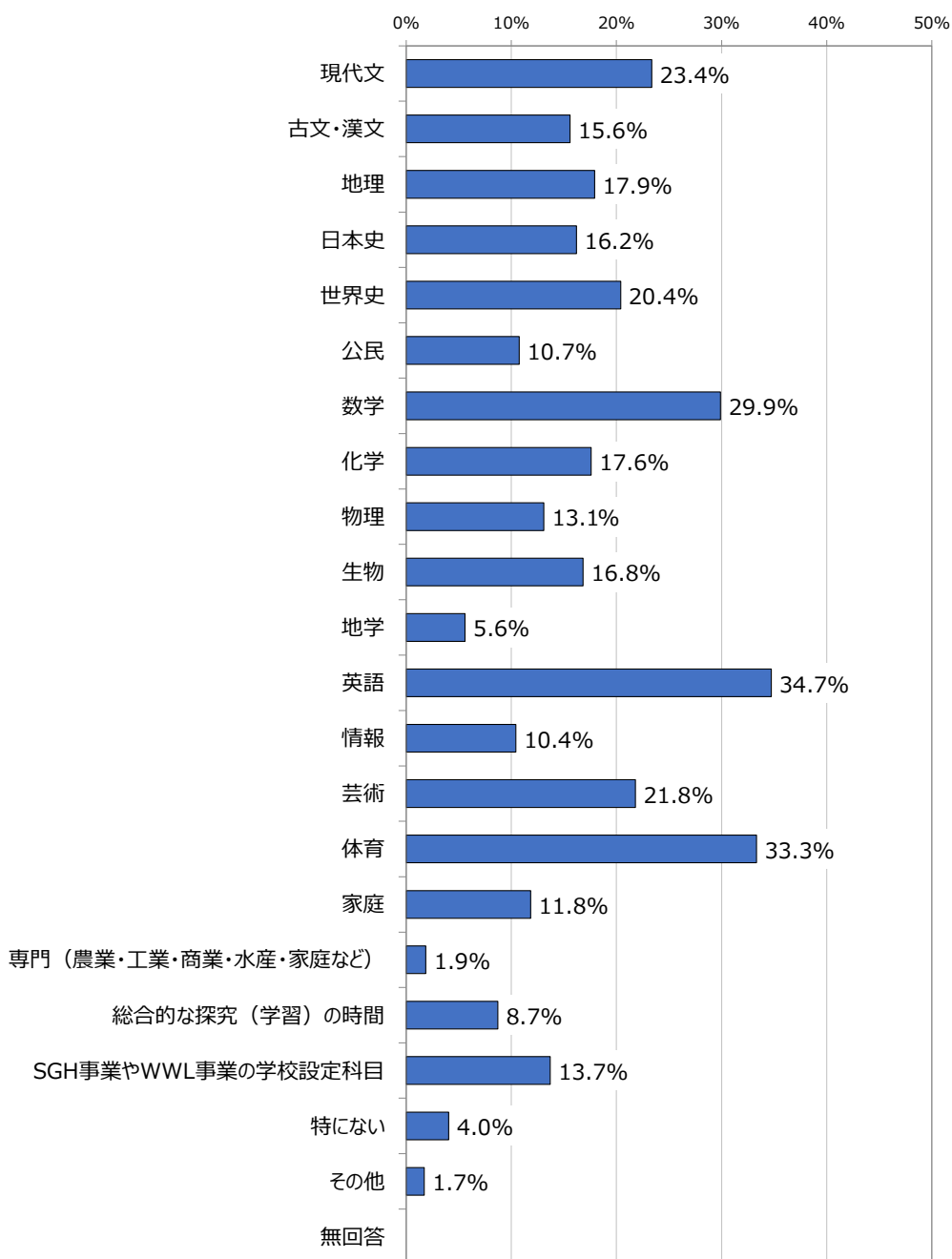


5-2 高校時代の生活

5-2-1 好きだった科目

最も割合が高いのは「英語」で34.7%。次いで「体育」が33.3%、「数学」が29.9%と続く。

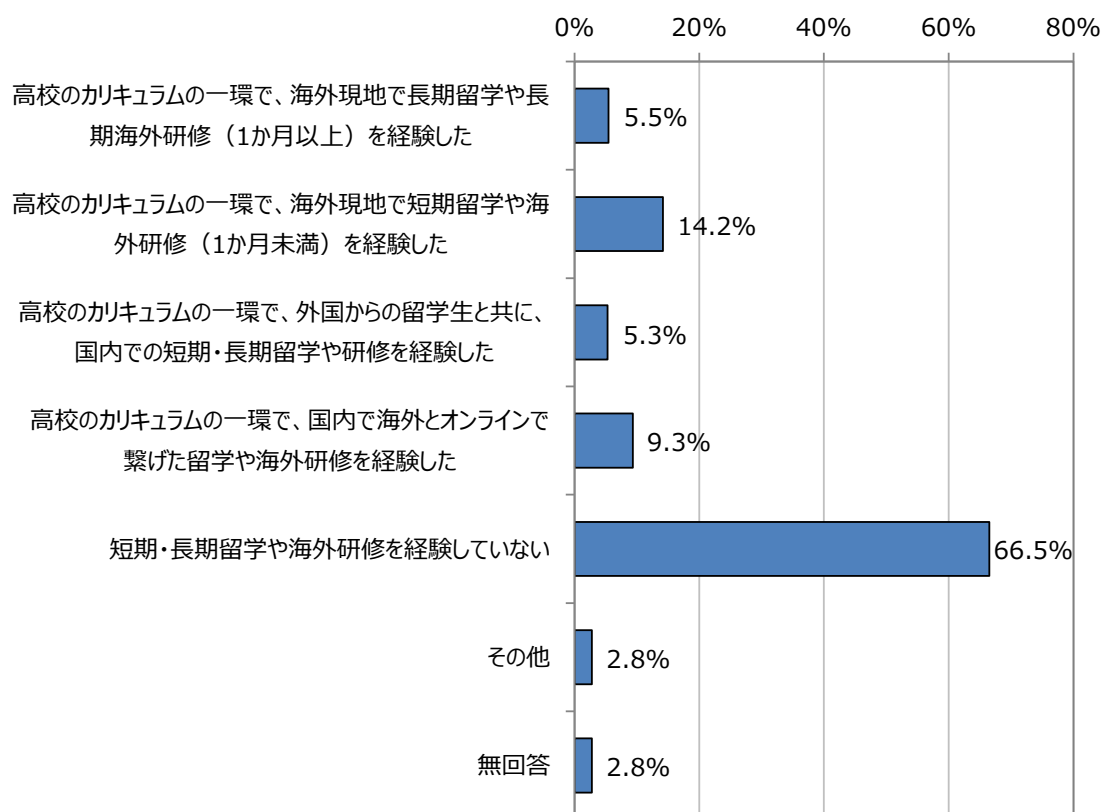
図表 5-2 好きだった科目（複数回答）（n=642）



5-2-2 短期・長期留学や海外研修の経験

留学経験や海外研修の経験については、「経験していない」と回答した割合が66.5%と最も割合が高く、次いで「高校のカリキュラムの一環で、海外現地で短期留学や海外研修（1か月未満）を経験した」が14.2%である。

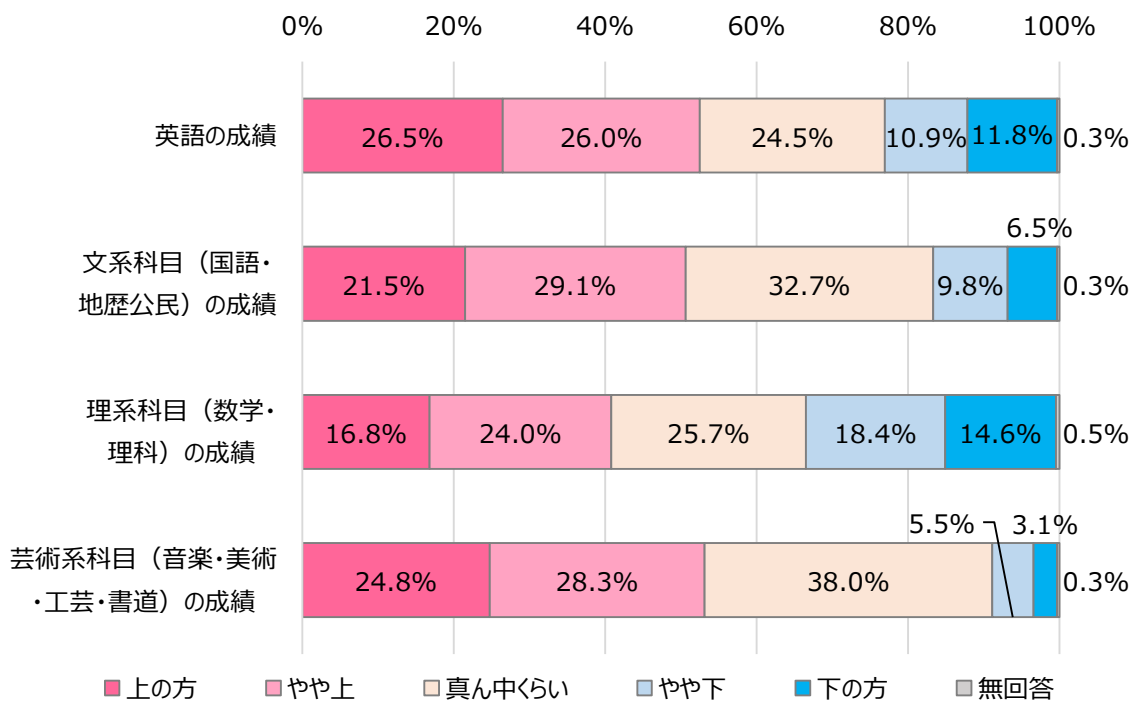
図表 5-3 短期・長期留学や海外研修の経験（n=642）



5-2-3 高校時代の成績

高校時代の成績については、「上の方」と回答した割合が英語の成績は26.5%、芸術系科目では24.8%と、他の科目と比べて高い。

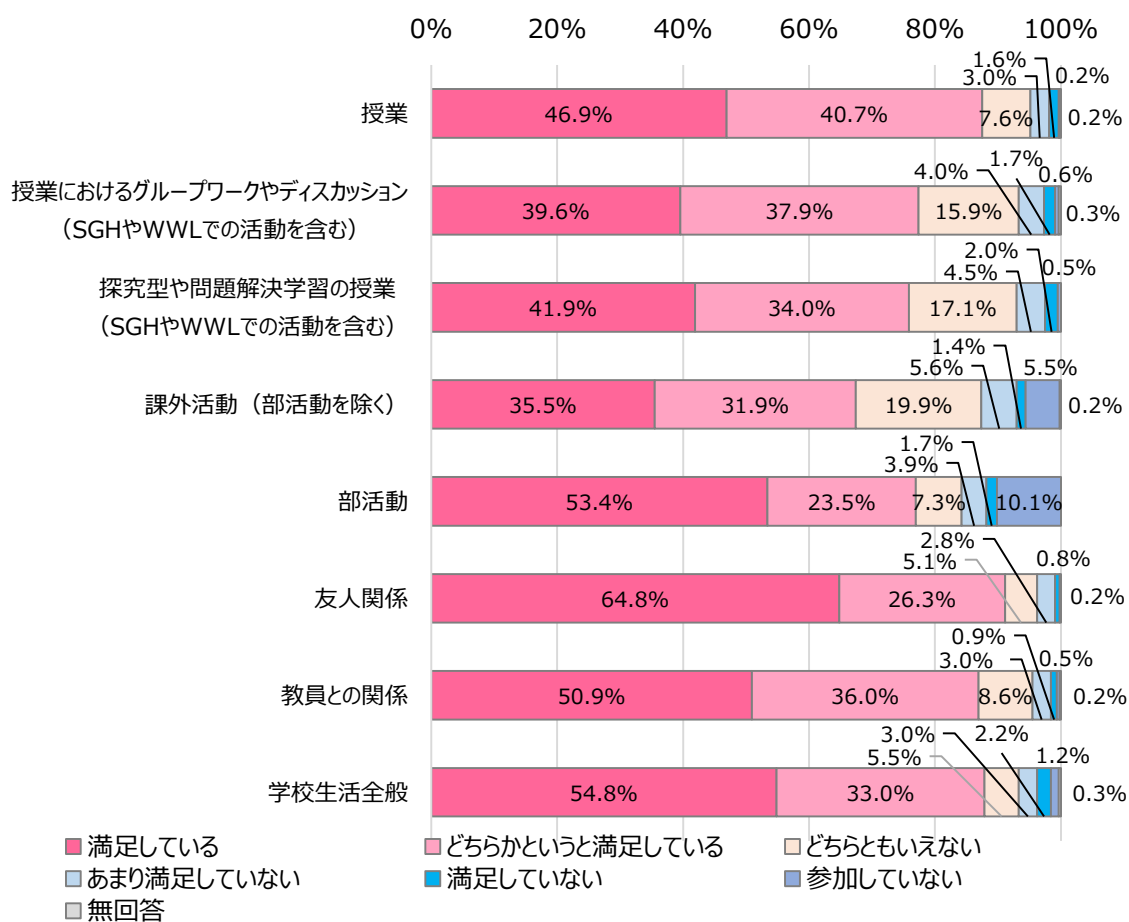
図表 5-4 高校時代の成績 (n=642)



5-2-4 高校生活の事柄における満足度

高校生活の事柄における満足度については、「部活動」「友人関係」「教員との関係」「学校生活全般」が「満足している」が5割を超えて高い。

図表 5-5 高校生活の事柄における満足度 (n=642)



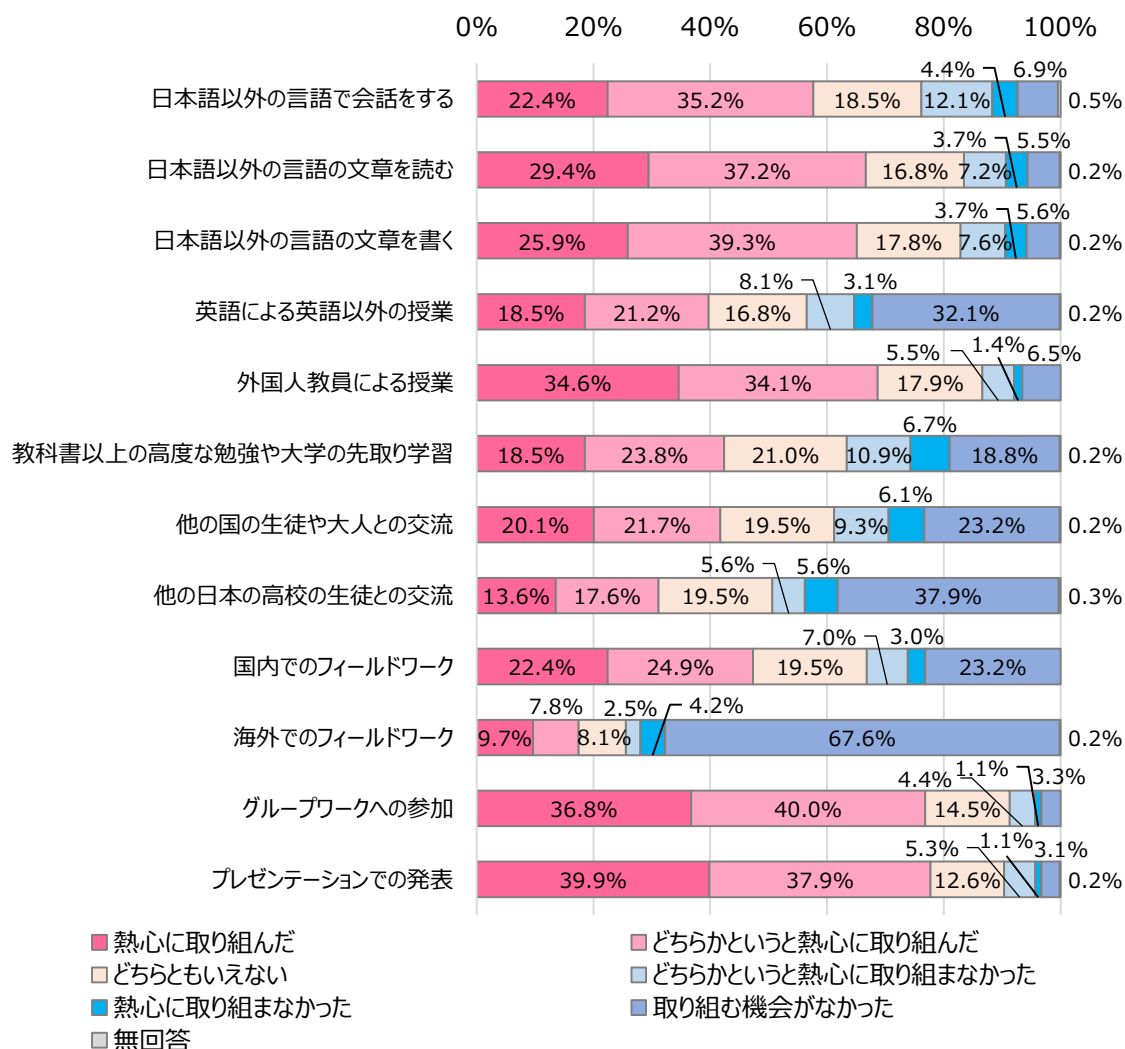
5-3 高校時代の SGH 事業や WWL 事業の経験

5-3-1 各活動への熱心さ

「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ+どちらかという熱心に取り組んだ）」と回答したのが多い活動は、「グループワークへの参加」「日本語以外の言語の文章を書く」「プレゼンテーションでの発表」の順である。

「海外でのフィールドワーク」は、「取り組む機会がなかった」が 6 割以上となっている。

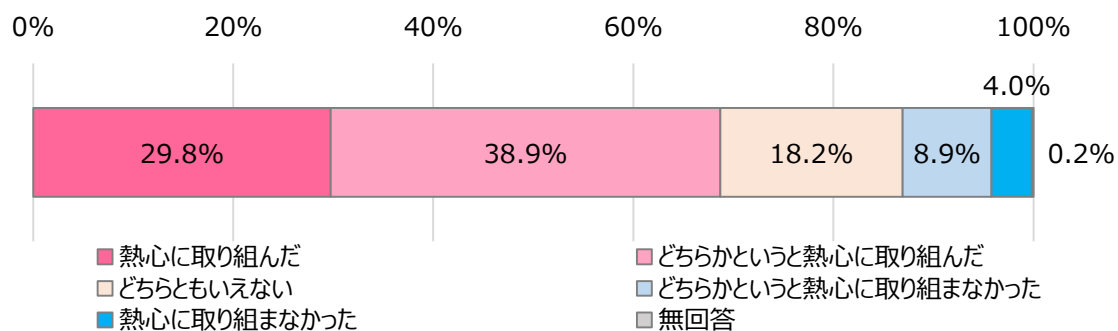
図表 5-6 各活動への熱心さ (n=642)



5-3-2 総合的にみた高校時代の各事業への熱心さ

SGH 事業・WWL 事業について、卒業生は、約 7 割が「熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ+どちらかという熱心に取り組んだ）」と回答している。

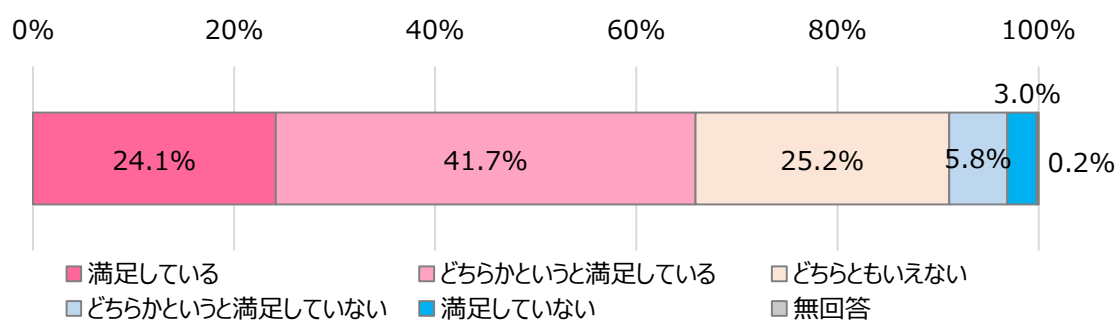
図表 5-7 総合的にみた高校時代の各事業への熱心さ (n=642)



5-3-3 総合的にみた高校時代の各事業への満足度

SGH 事業・WWL 事業について、卒業生は 6 割以上が「満足している（満足している+どちらかという満足している）」と回答している。

図表 5-8 総合的にみた高校時代の各事業への満足度 (n=642)

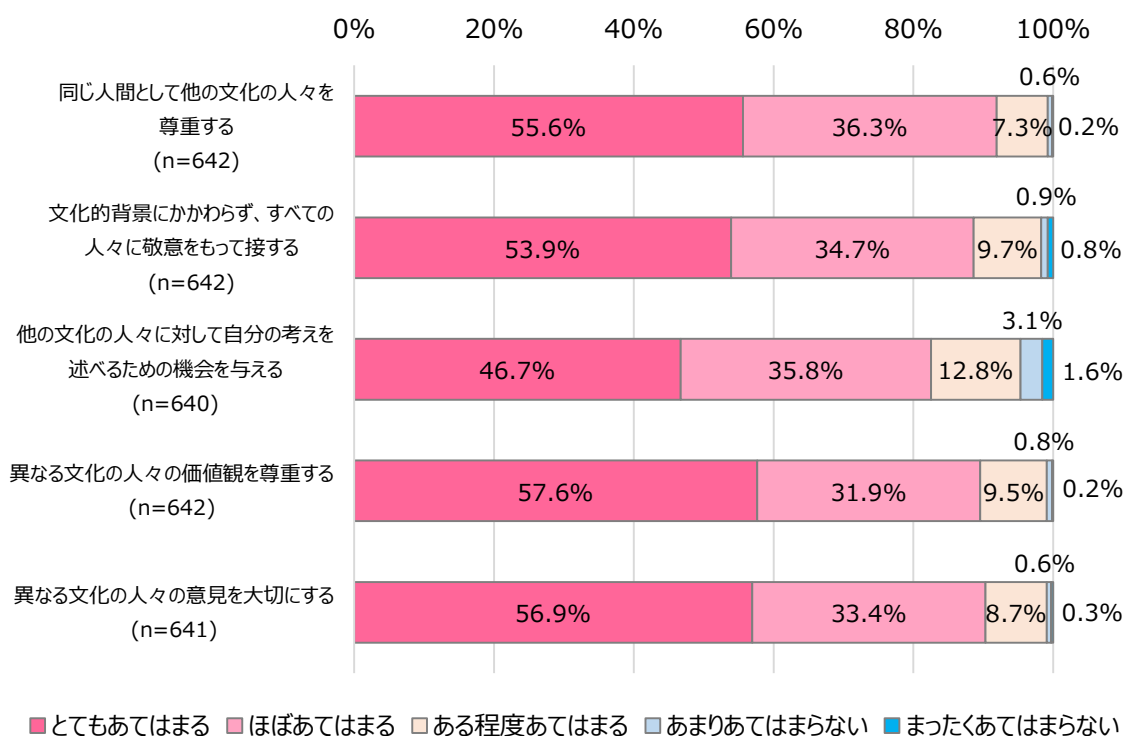


5-4 高校卒業時の考えや行動について

5-4-1 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）

グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）については、いずれの項目も「あてはまる（とてもあてはまる+あてはまる）」の割合が8割以上となっている。

図表 5-9 グローバルコンピテンス（他文化の人々の尊重）

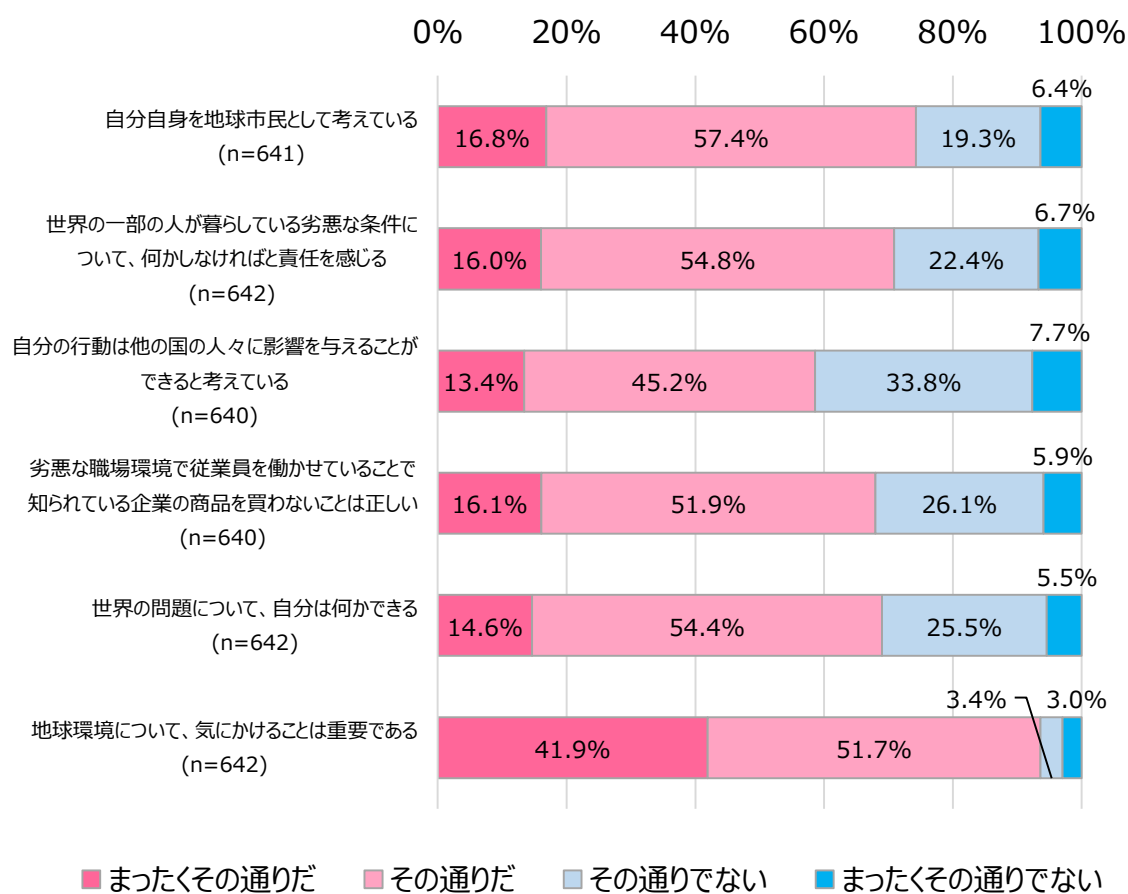


※無回答は除外

5-4-2 グローバルコンピテンス（グローバル思考）

グローバルコンピテンス（グローバル思考）については、「地球環境について、気にかけることは重要である」に「その通りだ（まったくその通りだ+その通りだ）」と回答する割合が9割以上と高い。次いで「自分自身を地球市民として考えている」「世界の一部の人が暮らしている劣悪な条件について、何かしなければと責任を感じる」が続く。

図表 5-10 グローバルコンピテンス（グローバル思考）

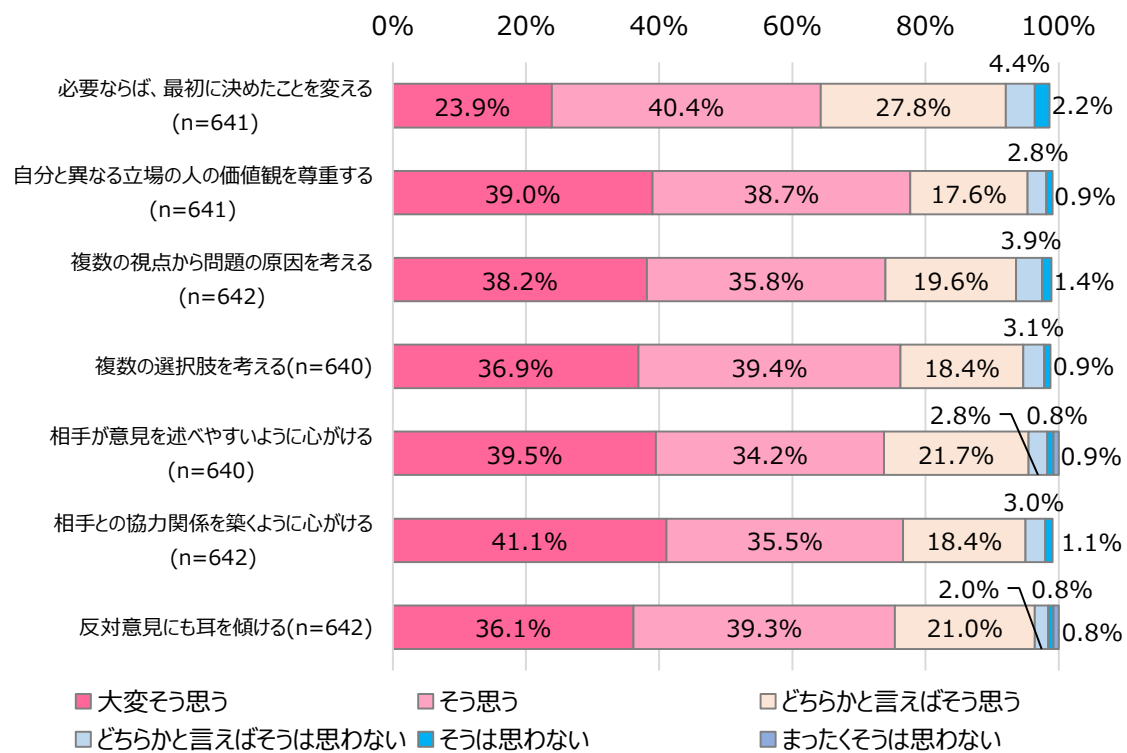


※無回答は除外

5-4-3 異文化対応コンピテンシー

異文化対応コンピテンシーについては、いずれの項目も「そう思う（大変そう思う＋そう思う＋どちらかと言えばそう思う）」と回答した割合が9割以上となっている。

図表 5-11 異文化対応コンピテンシー



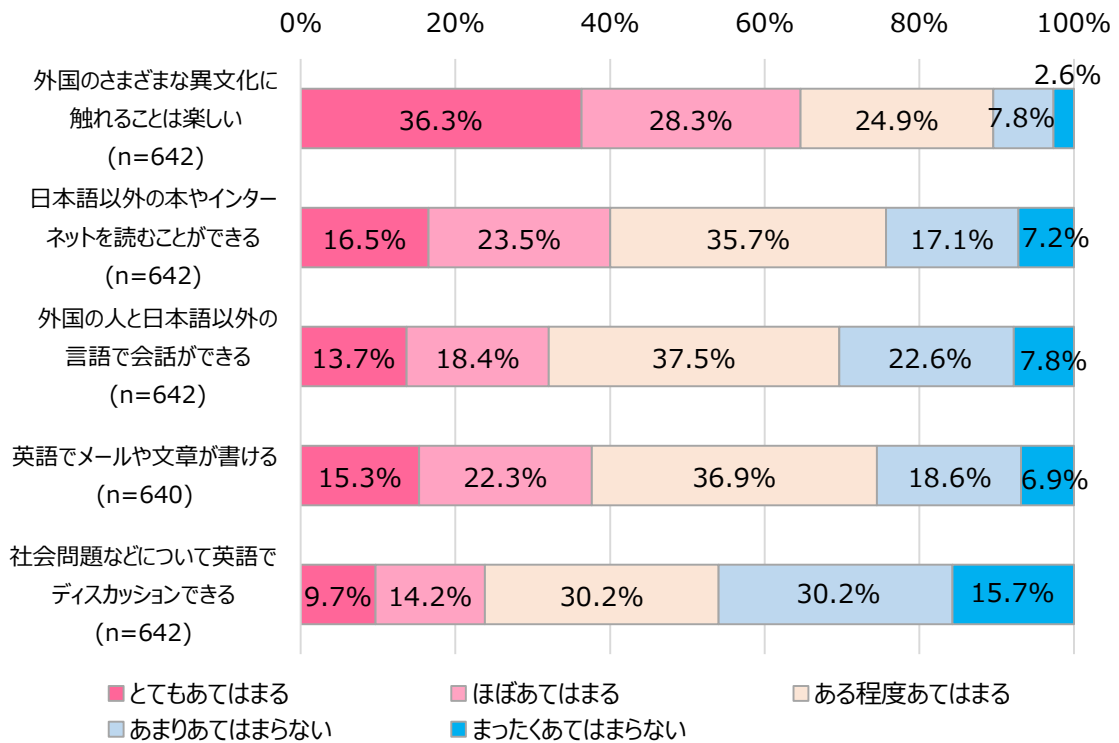
※無回答は除外

5-4-4 外国語リテラシー

外国語リテラシーについては、「外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答した割合が約9割となっている。

一方で、「社会問題などについて英語でディスカッションできる」は、5割程度に留まっている。

図表 5-12 外国語リテラシー

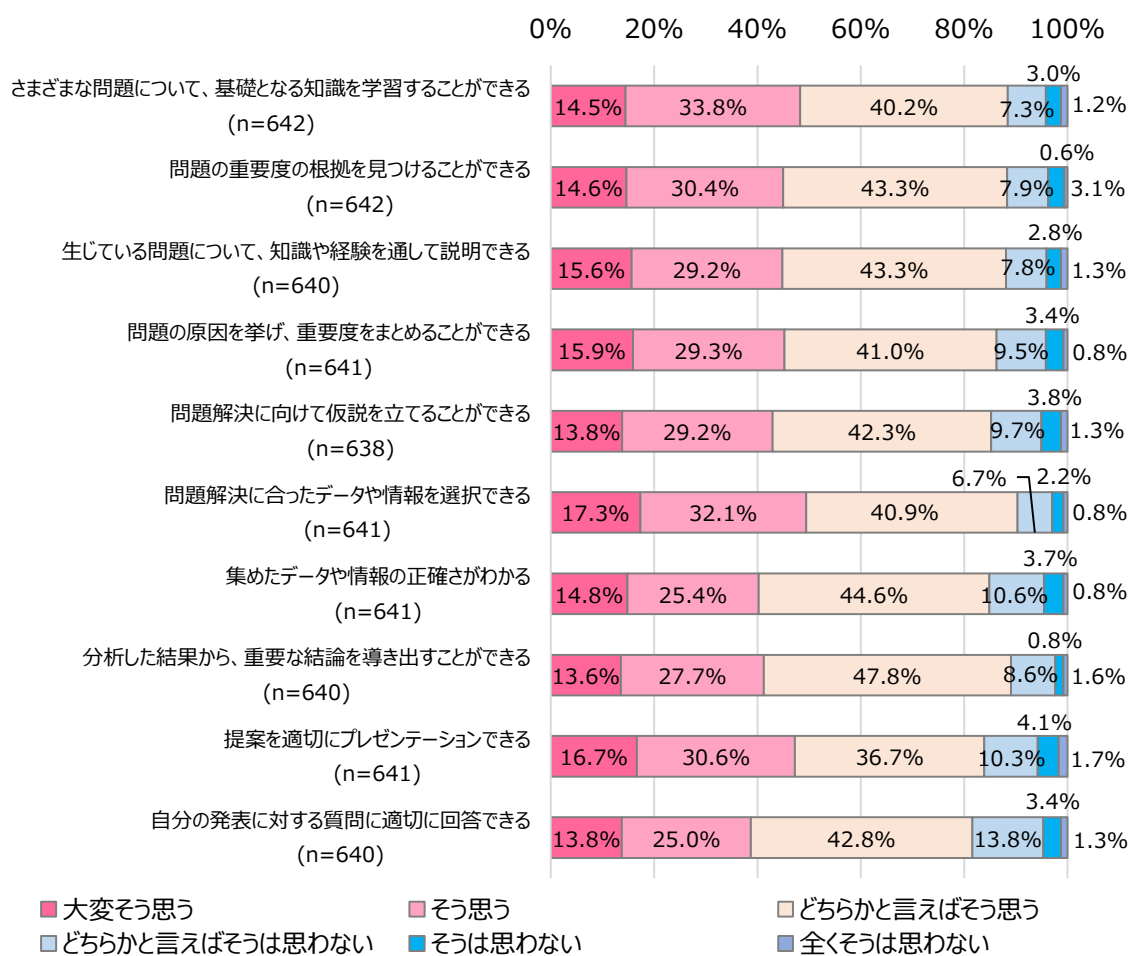


※無回答は除外

5-4-5 PPDAC スキル

PPDAC スキルについては、「問題解決に合ったデータや情報を選択できる」「分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる」に「そう思う（大変そう思う+そう思う+どちらかと言えばそう思う）」の割合が約 9 割と高い。

図表 5-13 PPDAC スキル



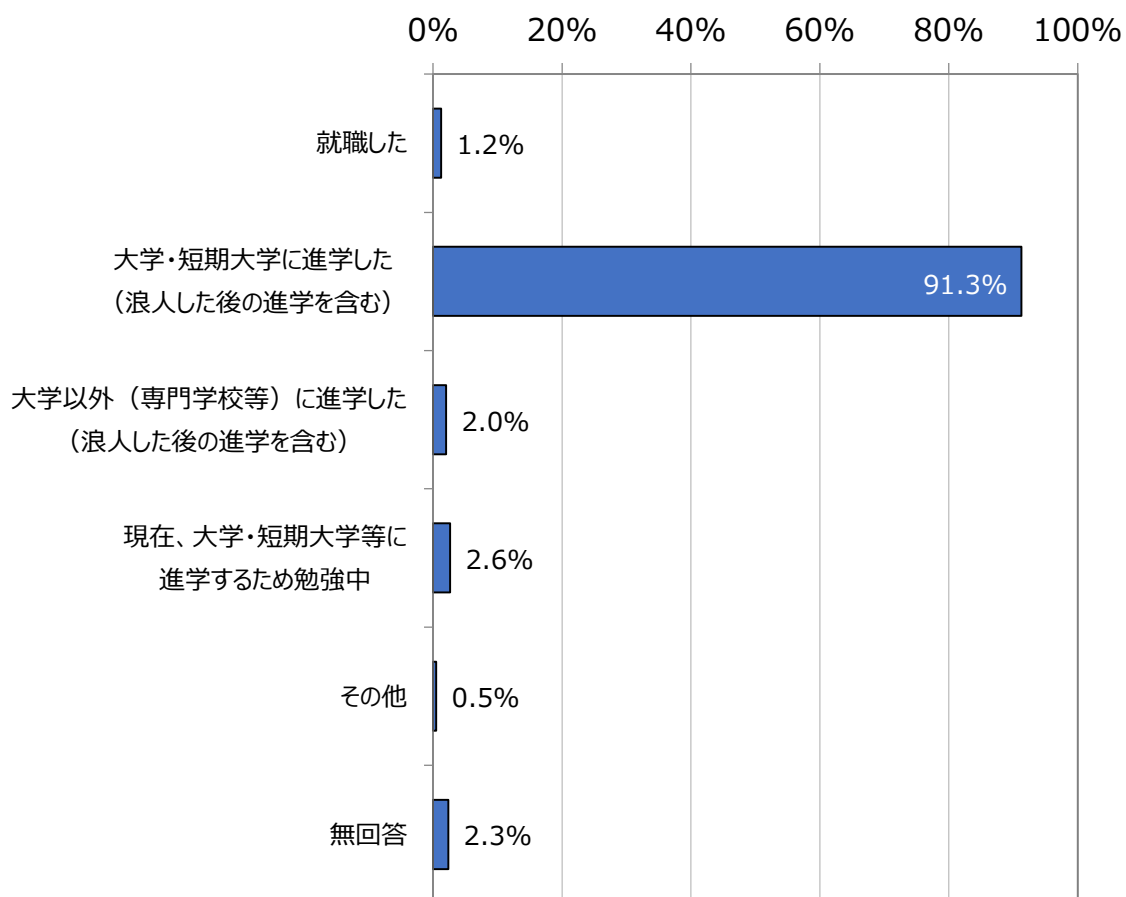
※無回答は除外

5-5 高校卒業後から現在までについて

5-5-1 高校卒業後の進路

高校卒業後は「大学・短期大学に進学した」が最も割合が高く 91.3%である。

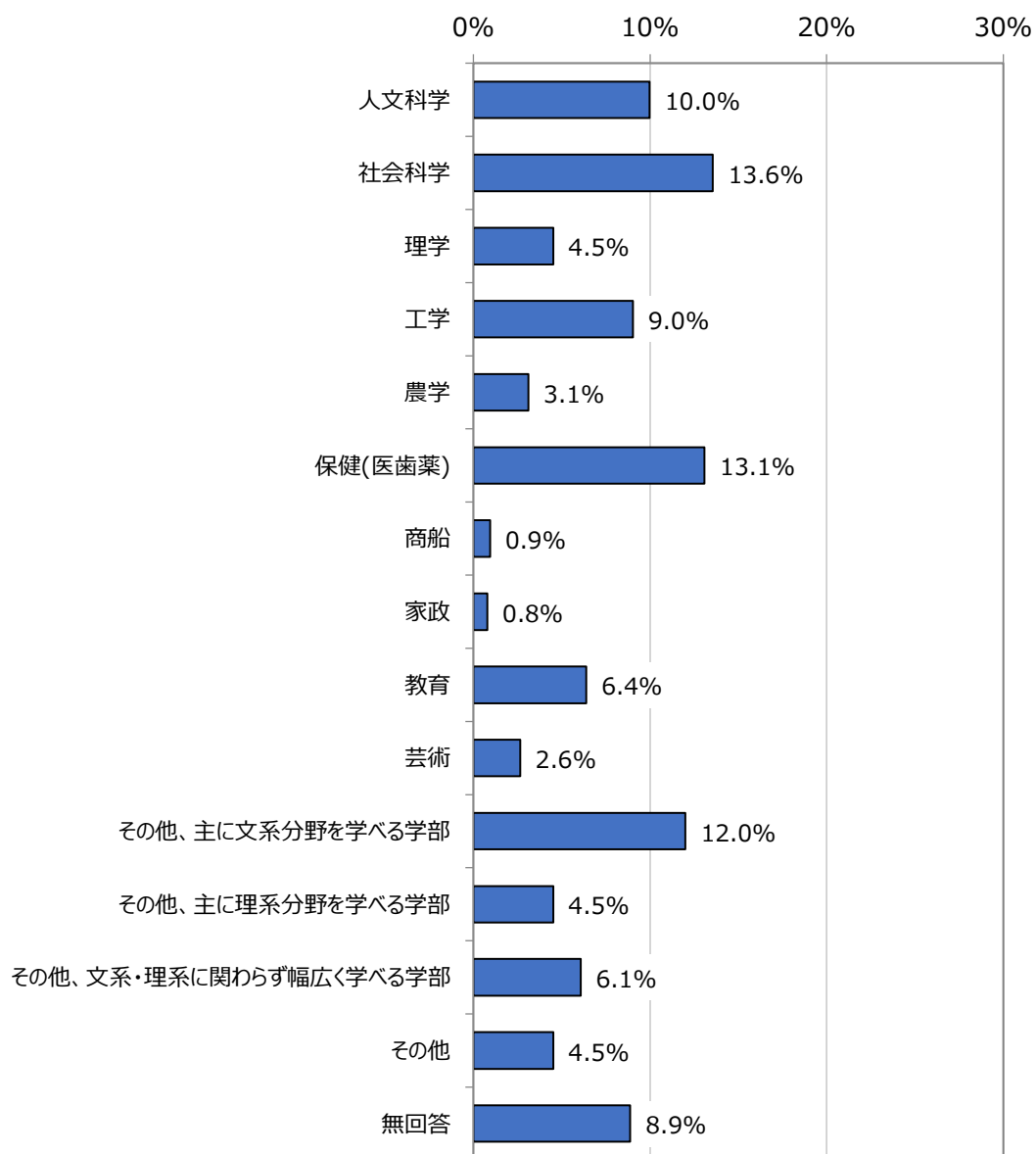
図表 5-14 高校卒業後の進路 (n=642)



5-5-2 高校卒業後に通った（通っている）大学等の学部

高校卒業後に通った（通っている）大学等の学部は、「社会科学」が13.6%。「保健（医歯薬）」が13.1%と続く。

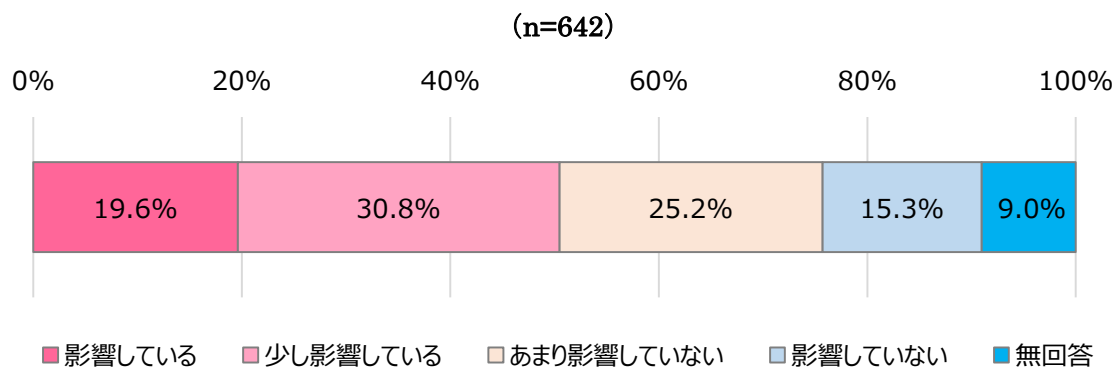
図表 5-15 高校卒業後に通った（通っている）大学等の学部（n=642）



5-5-3 高校卒業後の大学の進路選択へのSGH事業及びWWL事業の経験による影響

SGH事業及びWWL事業の経験が高校卒業後の大学の進路選択へ「影響している（影響している+少し影響している）」と回答した割合は50.4%となっている。

図表 5-16 高校卒業後の大学の進路選択へのSGH事業及びWWL事業の経験による影響



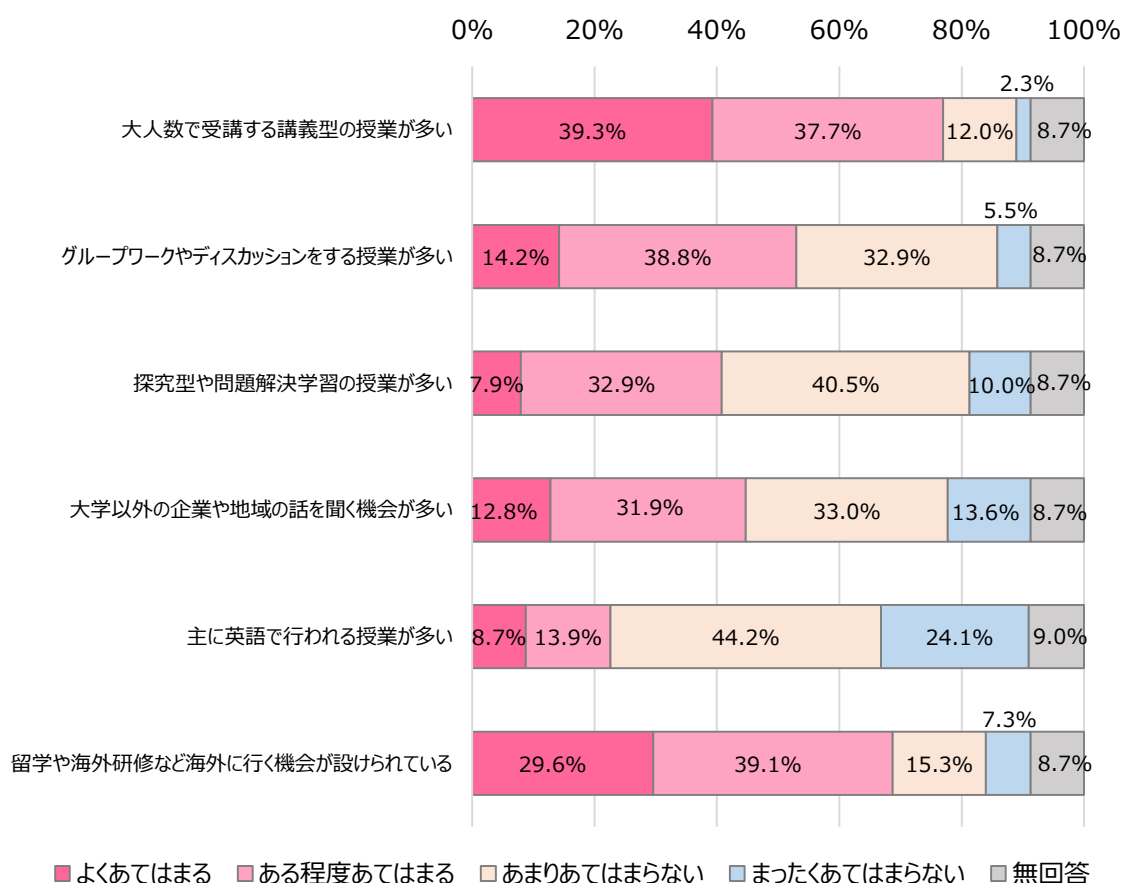
5-5-4 大学の授業について

大学の授業について「大人数で受講する講義型の授業が多い」に「あてはまる（よくあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答した割合が最も高く、76.9%となっている。

また、「留学や海外研修など海外に行く機会が設けられている」にあてはまる割合は、68.7%と高い。

一方で「グループワークやディスカッションをする授業が多い」は53.0%、「探究型や問題解決学習の授業が多い」は40.8%と、必ずしもWWL事業で行っていたような授業形式の活動が行われているわけではない。

図表 5-17 大学の授業について (n=642)

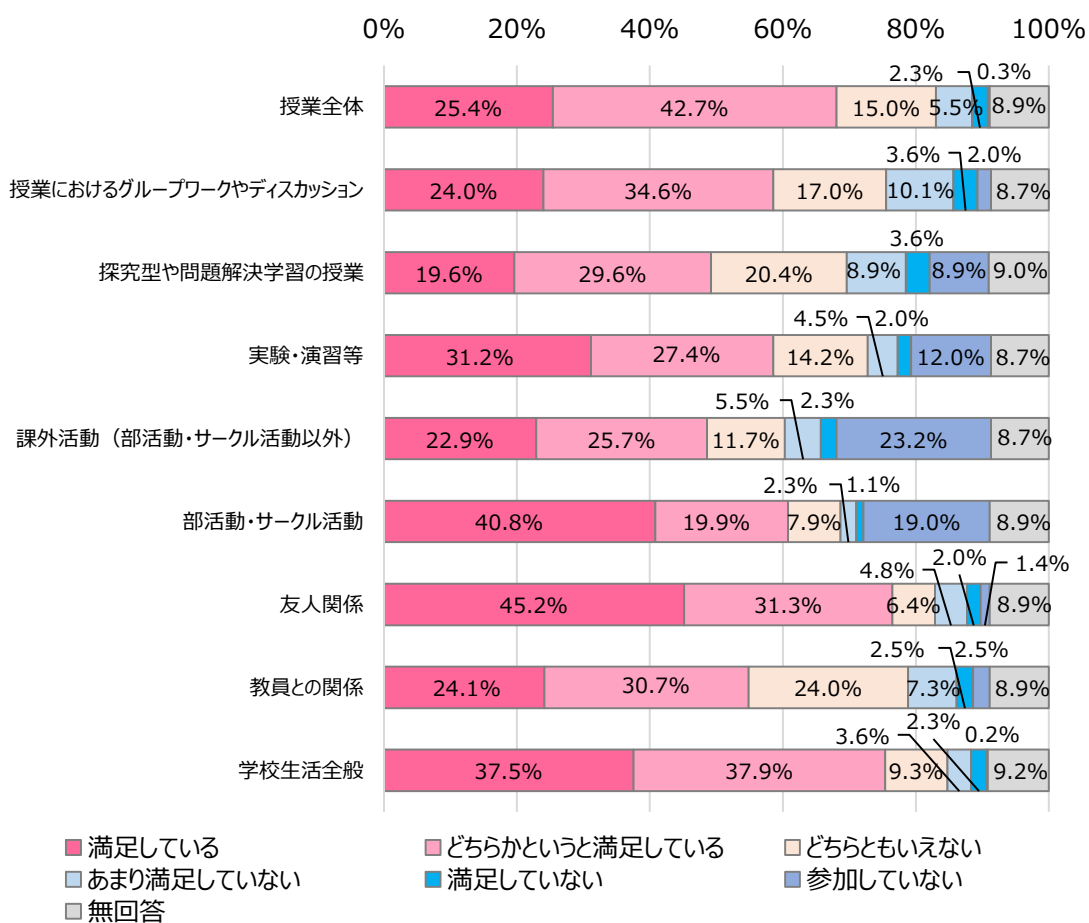


5-5-5 大学生生活への満足度

(1) 満足度

大学生生活への満足度の割合が高いのは「友人関係」「学校生活全般」で7割以上となっている。

図表 5-18 大学生生活への満足度 (n=642)

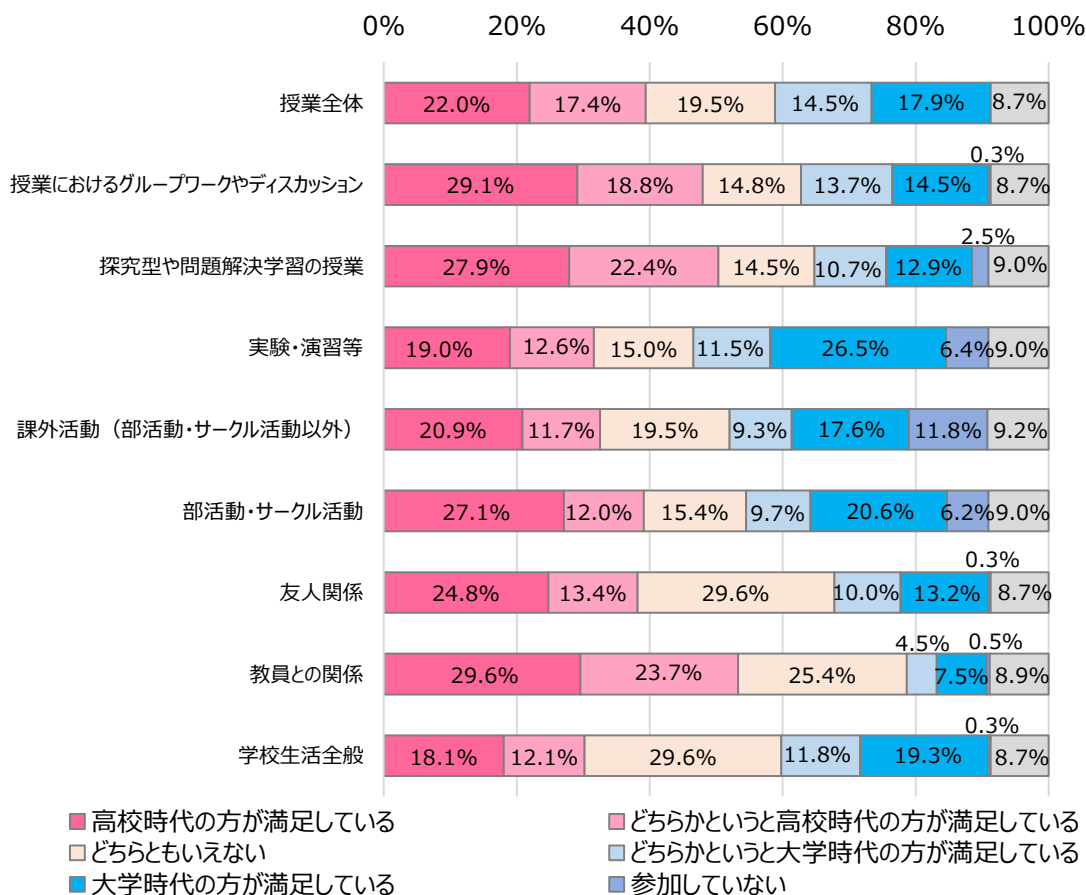


(2)高校時代との比較

授業内容等について、高校時代と大学時代の満足度を比較したところ、「実験・演習等」「学校生活全般」以外の項目は、「高校時代の方が満足（満足、どちらかという満足）」している割合が高い。

特に、「教員との関係」「探究型や問題解決学習の授業」「授業におけるグループワークやディスカッション」についてが、高校時代の方が満足とする割合が高い。

図表 5-19 高校時代と大学時代の学校生活の満足度の比較 (n=642)

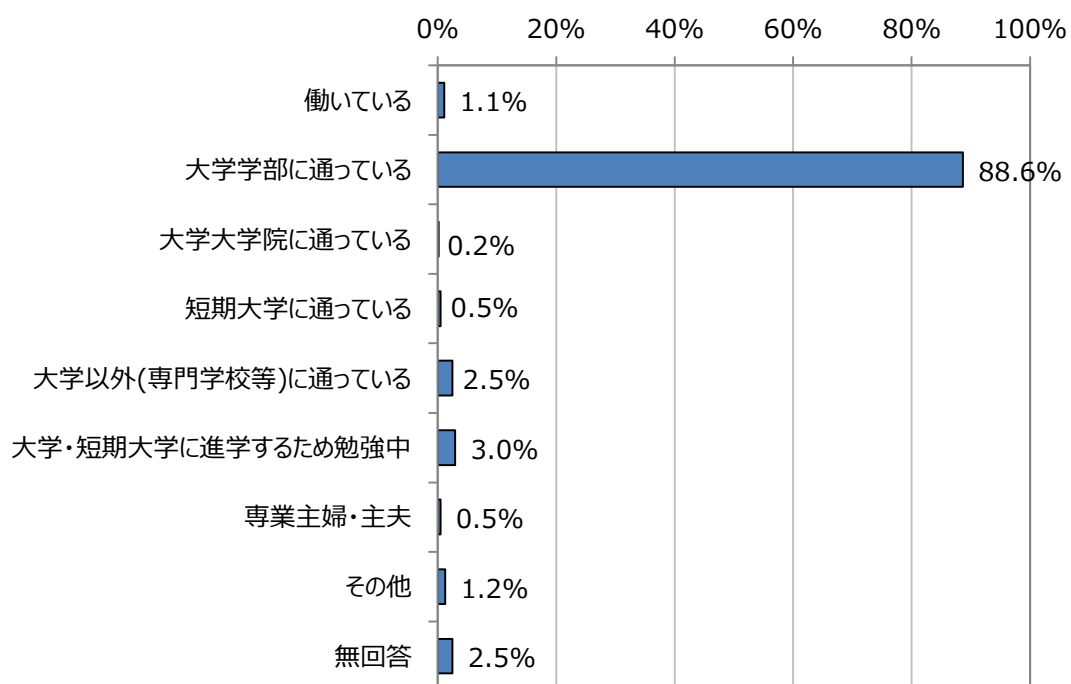


5-6 現在の生活と WWL 事業

5-6-1 現在の状況

現在、「大学学部に通っている」が 88.6%と最も割合が高い。

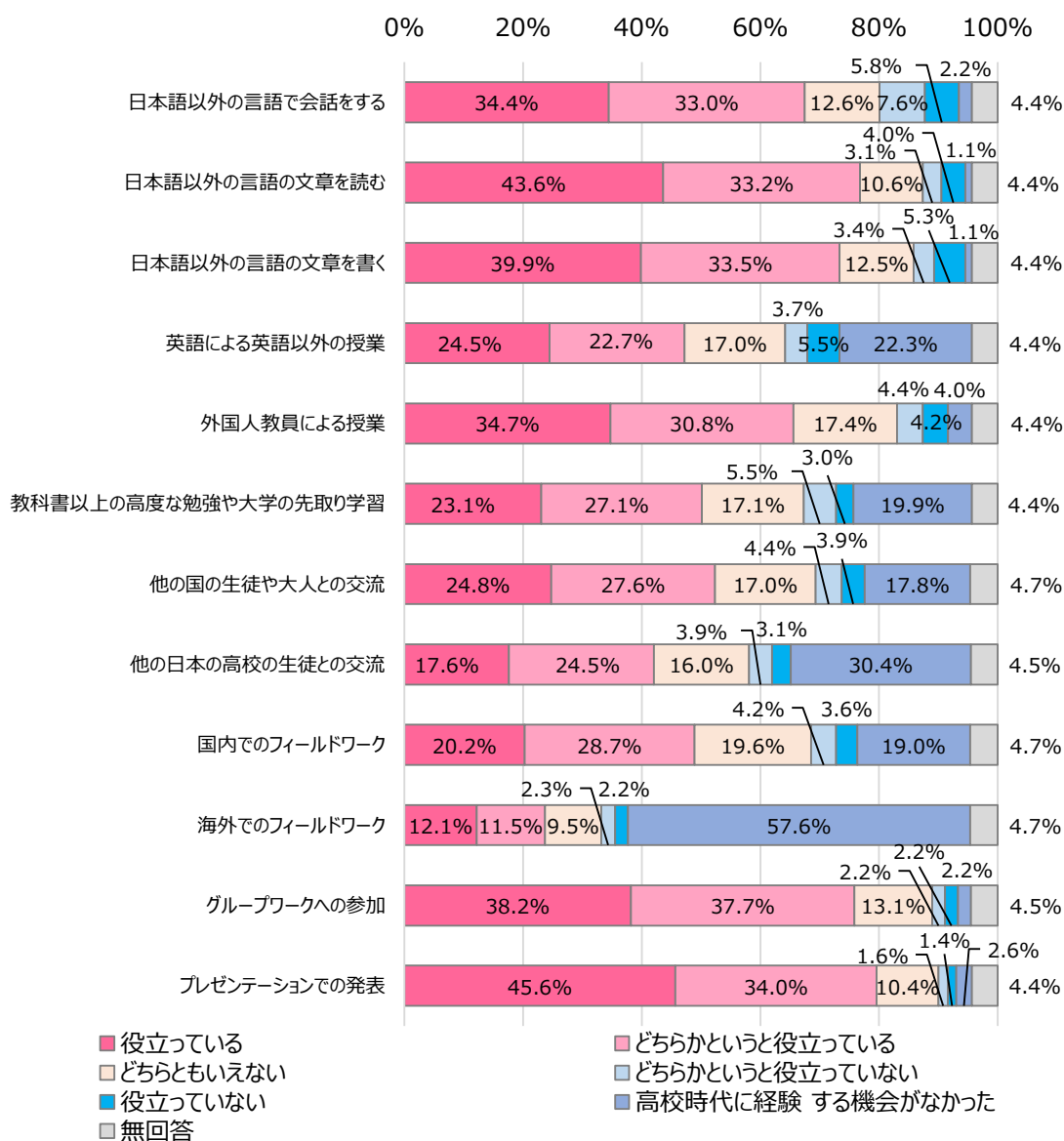
図表 5-20 現在の状況 (n=642)



5-6-2 現在の生活に役立っている高校時代の経験

高校時代の経験が現在の生活に役立っているかどうかについては、「プレゼンテーションでの発表」「日本語以外の言語の文章を読む」「グループワークへの参加」が役立っている割合が高い。

図表 5-21 現在の生活に役立っている高校時代の経験 (n=642)



また、現在のあなたの学校生活や仕事に役に立っている高校時代の経験について自由記述で具体的にきいたところ、以下のような回答が得られた。WWL 事業の活動経験は、幅広い場面で役立っていることがわかる。

<p>大学のレポート作成</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高校時代、WWL 事業の代表として参加して国内会議などの運営を行った。そこで身についた課題解決能力、コミュニケーション力をもちいて、大学でのレポート作成やディスカッション、海外での語学研修に参加して質の高い経験ができています。 ・高校時代、授業中にプレゼンテーションをする機会がたくさんあったため、大学に行ってもその経験が活かされた。また、レポートを書く機会が WWL の授業であったため、大学生活でレポートを書くのが楽だった。 ・大学受験の知識は大学の授業を受ける基礎となっている。高校時代に論文擬きを書いた経験は、量的データを扱うレポートを書く練習にはなったかもしれない。 ・問題点や注目すべき点を簡潔に、正確にまとめるということは、大学の課題でのレポートなどに大きく役立っている。 ・総合的な探究の時間でのグループでの活動は大学に入ってから探究活動に活かされている。また、推薦入試の際に文章を書く練習をしたことも現在のレポート作成に活かされている。 ・大学生になった現在、役立っていると感じる高校時代の体験は探究活動と論文執筆をしたことだと思います。2 年間にわたる自主的な探究活動を通して、知識を得るための調べ学習から論文執筆までの手順を学ぶことができました。
<p>大学のサークル活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な探究の時間で行った、解決案を考えて意見を投げ合うという行為は、サークルでの意見だしや企画実行に活かしている。似たようなプロセスだからである。 ・論理的な問題解決能力を身につける授業を受講した経験が、今大学のサークルでぶつかる様々な壁を乗り越える力となっています
<p>大学の授業</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高校でレポートを書いたり、プレゼンテーションをしたりする授業が頻繁にあったので、大学で苦労しなかった。挑戦する力を身につけた。 ・プレゼンテーションの経験や研究のために調べる作業は大学で役にたっていると感じます。 ・高校時代に資料を作成し他の人に向けてプレゼンテーションをする機会があり、大学でのパソコン活用教室や資料作りの時に困ることなく進めることが出来た。 ・経済など特殊な授業を選択出来たので、大学進学時に自分がどの道を進みたいかより情報

	<p>を得た状態で決断できたと思っています。芸術に進みましたが、アートの授業、そして経済などの授業もすごく役立っています。特に、すべての授業で培ったりリサーチする力に助けられています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界史や政経で勉強したことは現在の大学での学びの基礎なので、役に立っている。 ・課題研究発表会や授業内でのプレゼンテーションなど、何かを調べたり研究したりするだけでなく、それを他者に伝えて双方向のコミュニケーションとして学びを深めるスタイルの学習は、大学での学習に活かされている。 ・高校時代に行った、グループでのプレゼン発表や、個人でやった課題研究での経験はとても役立っていると感じる。そこで学んだ知識を大学の授業内で応用することができた。 ・論文の書き方やプレゼン、ディスカッションなどは大学であまり教えてくれないので、高校で学んだ基礎が身についていたことで発揮しやすかったし、成績もよかった ・高校で大学の講義の先取りができたこと。特に統計学が高校では選択だったところ大学では必修科目であった為、単位取得にとっても役立った ・高校時代に生物で大学の範囲に近い内容を先取りで学習しており、大学の生物学の授業で既習内容を復習することができて学習に役立った。
<p>大学の研究</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・法学部で学んでいるが、高校時代の一年間の留学及び、その後のプログラム内でのフィールドワークで得た社会問題に対する知見がとても役に立っていると感じている。高校時代、様々なバックグラウンドを持つ人々に対する差別の問題を解決する為の活動を取り扱い、特段興味関心を抱いていたが、その興味関心が現在の法分野上の問題意識や、問題の本質を掴む為にとっても有用な経験であると感じている。 ・探究の活動で、実際に大学に行かせていただくなどの高校生にとっては高度な研究をさせていただけただけだが、大学での研究や実験要領の理解の早さに繋がっている。 ・高校の探究の授業で、自分たちで課題をみつけてそれについて仮説をたて、その課題を解決するためにフィールドワークを行ったり何らかのアクションを起こし、考察するという研究を行ったが、この一連の流れは大学でも使用するものなので、先取りして学べて良かったと思う。 ・高校時代の研究発表活動のために複数の論文などのデータを参照して必要な情報を得るという経験が、大学の課題解決や課外活動で何らかの調査をするときに効率よくデータを取得するのに役立っている。
<p>ディスカッショ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンの設計の仕方がわかることで、グループディスカッションにおいて役割分担ができるように

ン	<p>なった。他人の意見を楽しみ、自分の意見を丁寧に発信できるようになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校時代に英語をよく聞き、話す授業が多かったため、英語の論文について議論する際に役立っている ・ディスカッションのスキルは今でも問題解決に非常に役立っています。 ・グループワークに参加したことや、プレゼンテーションの機会が豊富にあったことから、自分の意見をまとめあげ、その場で発信する力になったと考えている。チーム医療の練習として医療系学部が集まって討論する機会などに発揮出来る力で、現在に限らず将来的にも必ず役に立つ力になると考えている。
プレゼンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ・高校時代にプレゼンテーションをする機会がたくさんあったため、人前での発表に躊躇する気持ちがあまりない。 ・プレゼンをする場面が多いため、高校生のうちに何度か経験しておいてよかったと思う ・高校時代、学校の授業や学外のイベントに参加した際に、プレゼンを作って発表する機会が多かったため、現在の大学で行なっているグループワークでの発表や個人の発表に役立っていると思う。 ・国際的な問題に英語を使用して調べて、ビジネスプランを作ったり解決策を考えたりしてそれをプレゼンで発表するというのを何度も行ったことは、英語にアクセスするハードルを低くしたり、人前で話したり、物事を論理的に考えたり、さまざまなことを考慮して経済的な問題への解決策などを考える力を身につけることができた。 ・プレゼンテーションをする際のスライドの作成の仕方や、構成の仕方を高校で学ぶことができ、大学の授業内で役に立っていると思う。 ・パソコンの使い方をはじめ、パワーポイントにも慣れているので、グループ発表の際にそのスキルが生きた。また、人前で発表することも慣れているため時間を意識しながら、うまく説明することができた。 ・オールイングリッシュでの英語の授業は、大学での英語の授業にすぐ慣れる要因だと思う。また、高校からパワーポイントなどを使って自分の意見を発表する場面を持つことで、大学では他の人より早く勉強方法に馴染めたと思う。困ることがなかった。 ・英語に対して、よりポジティブに大学では取り組めるようになった。高校時代にパワーポイント等を使って発表をしていた経験が、大学で何か発表する際に結論ファーストや、パワポ作成技術に活かしている。

<p>グループワーク</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・誰かがグループの中で司会役をして、グループワークを進める流れは、大学でも役立っている。 ・グループワークが高校の時から多かったので、人の意見を聞いたり違う意見を聞いたりすることも大学ではあるから役に立っています。 ・グループワークにおける振る舞い方(司会をする、アイデアを出すなど)を高校時代によく身につけられたため、大学でグループワークの授業が行われた際話し合いをスムーズに進めることができ、有意義な結果が得られた。他の高校から来た学生から高校時代にグループで何かを成すという経験に乏しかったという話を聞き、そのような学生に比べて WWL 関連の授業を受けた学生は大学でイニシアチブを得ているのではないかと思った。 ・そもそもグループワークへの参加を物怖じせずに参加できること、また高校時代グループワークを沢山経験したおかげで、そのグループがどんな状況(意見が乱立している、誰も積極的に参加してない etc)でも、そのグループにとってどういう人、どういう意見があれば前に進めるかを見つけ出し、提案・その役割に回れること。 ・ジェンダーや AI などの答えが定まっていない課題についてグループで話し合う際、自分の意見をはっきりと言える環境で議論できたという経験が、大学生活での同じ場面で役に立っている。 ・大学で外国人教員による英語のみを使った授業があるが、高校時代に実践的な英語を学んだことで、英語でコミュニケーションを取ることが順調にできた。アカデミックな文章を英語でまとめることも難なくできた。また、英語に限らずグループワークや発表を高校時代は様々な科目で行った経験があり、大学で同じようにグループワークの時間がある時には、率先してチーム内で発言し、引っ張ることができた。 ・授業でグループワークや発表をする機会が多かったため、大学でも苦手意識を持たずに取り組んでいる ・プレゼンテーションを企画・実行したり、大人数の前での発表に参加する機会が多く設けられていたので、大学でそのような機会があってもあまり緊張せずに人の前に立つことができると感じる。また、グループワークの機会も多く設けられていたので、大学の授業で自分の知っている人以外とグループワークをする状況になっても、ある程度のコミュニケーション力とリーダーシップを持ってグループ内の意見をまとめたりできるようになったと感じる。 ・1 年生の時から総合の時間に行っていた生徒がグループまたは個人であるテーマを研究し発表(5,6 年生は論文も作成)する授業の経験が大学でのゼミナールでの論文に役立った。地理の時間に行ったプレゼンテーションも大学でのゼミナールや英語プレゼンテーションの授業に役立
----------------	---

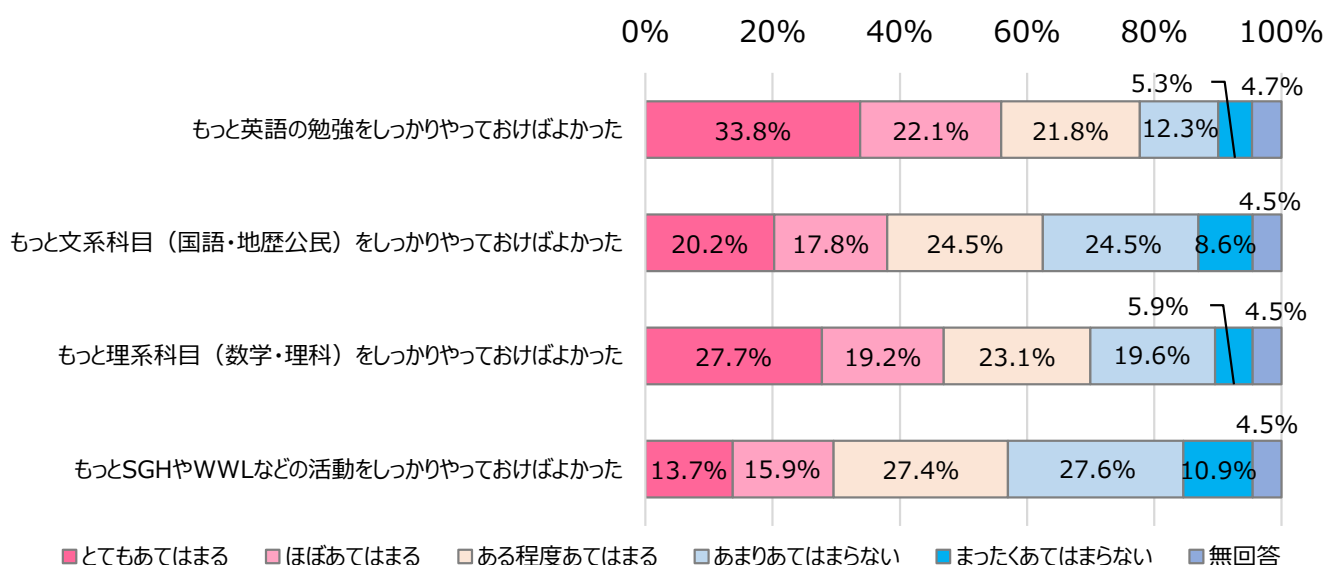
	<p>っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校でグループワークを何度か行っていたので、大学ではグループでプレゼンテーションを作成する際に、最初に決めなければいけないことやディスカッションの手順が他に比べるとある程度把握できているのではと感じる。
留学生活	<ul style="list-style-type: none"> ・高校での海外研修が、大学での海外留学やフィールドワークへのモチベーションに繋がった ・英語ディベート部での活動や、海外研修での経験は、今の長期留学の生活において大いに役立っています。 ・現在中国の大学に留学しているので、高校時代に経験した英語でのディスカッションやグループワークの経験が、中国語においても役に立っている
外国人と触れる場面	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が生活する範囲外の人や、人種や国籍に関係なく様々な思考や文化を持っていて、彼らを尊重して異なる考え方を受け入れるという姿勢は、高校時代に培うことができ、大学生生活で最も役に立っている。 ・他国の高校生と英語でディスカッションをした経験は、大学において留学生と英語で会話する際などに役立っている。 ・海外の学生と協働して活動を行い成果を英語で発表を行った経験が海外の人との交流や協働において大いに活かされている。
外国に関する事柄に触れる場面	<ul style="list-style-type: none"> ・英語に触れる機会が多かったことで、英語に対するハードルが下がり英語や英語圏の文化に親しみやすくなった。 ・他人の主張や意見について誤謬を見抜く授業や、自分の意見を客観視しながら適切に述べる授業によって、現在周囲で起こっている事柄について自分の立場を明確に持つことが出来ている。また英語でコミュニケーションをとるカリキュラムのお陰で、動画サイトのコメントの英語や海外の方の会話を積極的に理解し、自分からも英語で喋ろうとする意欲が身についた。
海外大学での活動	<ul style="list-style-type: none"> ・エッセイの書き方といったことは海外大学に進学した今時々役に立っていると感じますし、何より受験勉強において必要だった愚直に勉強をする姿勢が今も大学の勉強に向き合う際の根幹を成していると思います。 ・高校では IB コースに通っていたので、勉強の仕方や取り組み方を分かっており、海外の大学に進学した際に勉強面において何も問題はなかった。 ・SGH,WWL 事業とは具体的に高校時代の何を指しているかあまりわかりませんが、高校時代にインターナショナルバカロレアを取ったことが今海外大学での生活に凄く役に立っています。

	す。
アルバイト	<ul style="list-style-type: none"> ・外国語教員とのコミュニケーションを取ったおかげで、アルバイト先での英語対応ができた。 ・高校生活で英語を身につけたことで、家庭教師で英語を教えることや大学の英語の授業で良い成績を取ることに役立っている ・クラスメイトに勉強を教えていたことは、自分の知識定着だけでなく、現在のアルバイトにもかなり役立っている。 ・部活動では友人関係や自分の成績不振に悩みながらも地道に努力することやリーダーシップを学び、現在の自分の自信に繋がっています。アルバイトやサークル活動でも役立っていると思います。
起業	・言語力、課外活動中に展開していた起業設立の準備を大学在学中にエストニアにて実行。

5-6-3 高校時代を振り返っての自身の考え

高校時代を振り返って「もっと英語の勉強をしっかりとっておけばよかった」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合が77.7%と最も高く、次いで「もっと理系科目（数学・理科）をしっかりとっておけばよかった」と回答した割合が69.9%である。

図表 5-22 高校時代を振り返っての自身の考え (n=642)

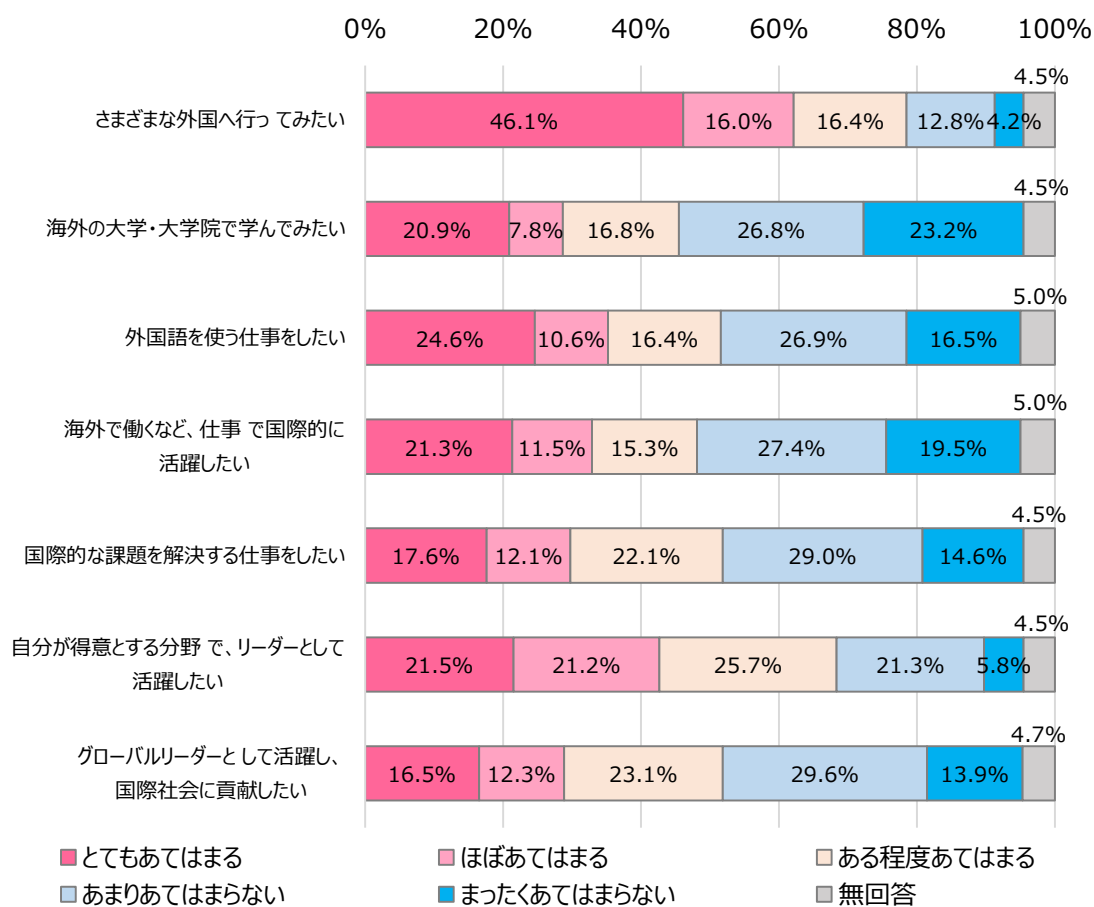


5-7 現在の自身の考えや行動について

5-7-1 将来の希望

現在の自身の考えとして「さまざまな外国へ行ってみたい」に「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答した割合が78.5%と最も高く、次いで「自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい」の割合が高い。

図表 5-23 将来の希望 (n=642)

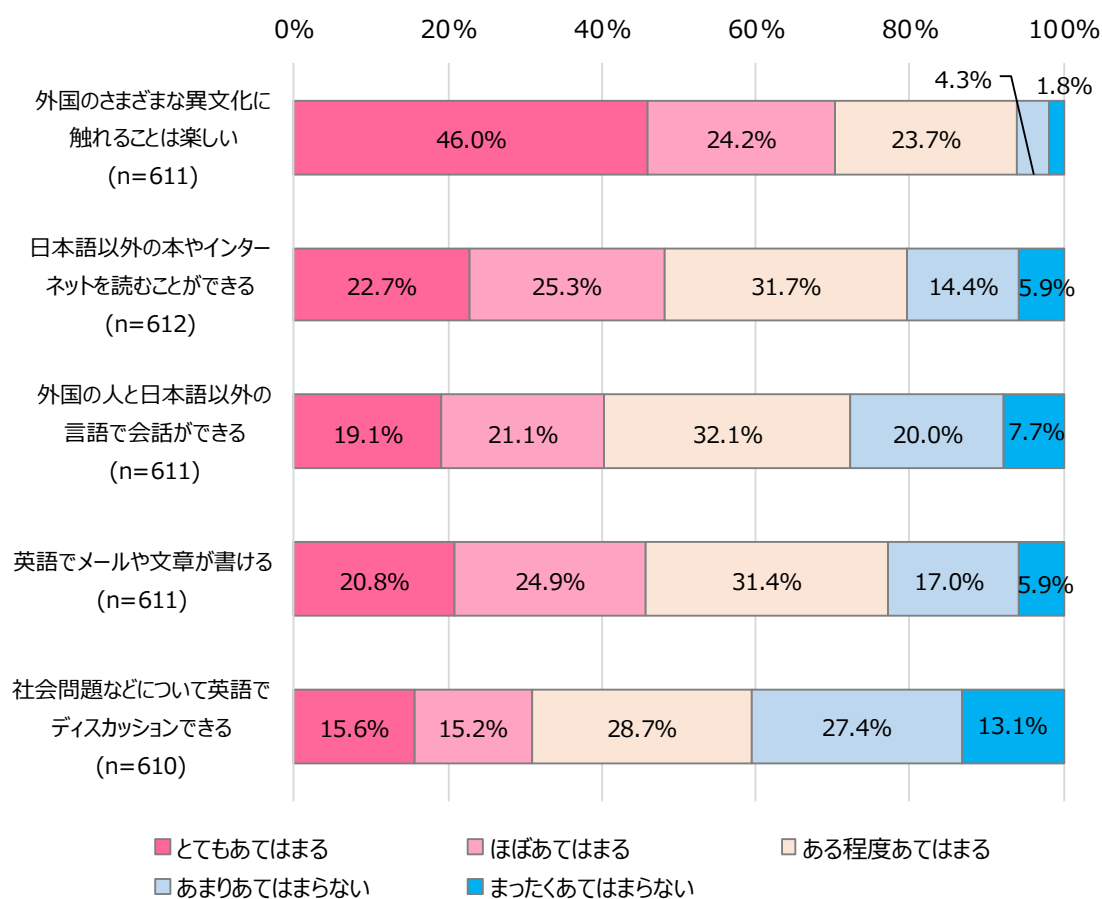


5-7-2 外国語リテラシー

「外国のさまざまな異文化に触れることは楽しい」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合が最も高く、約9割となっている。

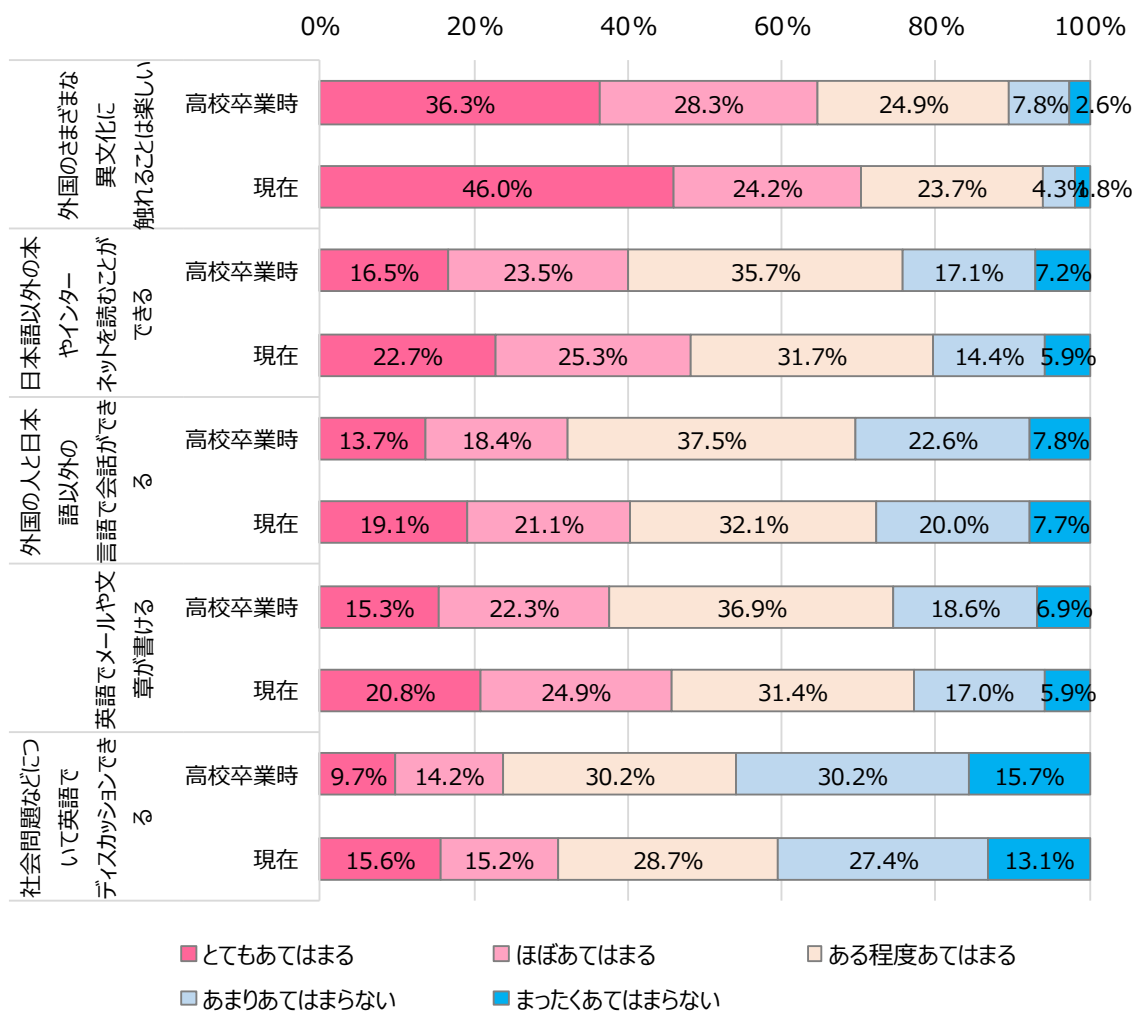
「社会問題などについて英語でディスカッションできる」に「あてはまる（とてもあてはまる＋ほぼあてはまる＋ある程度あてはまる）」と回答した割合は約6割だが、その他の項目については約7割となっている。

図表 5-24 外国語リテラシー (n=642)



※無回答は除外

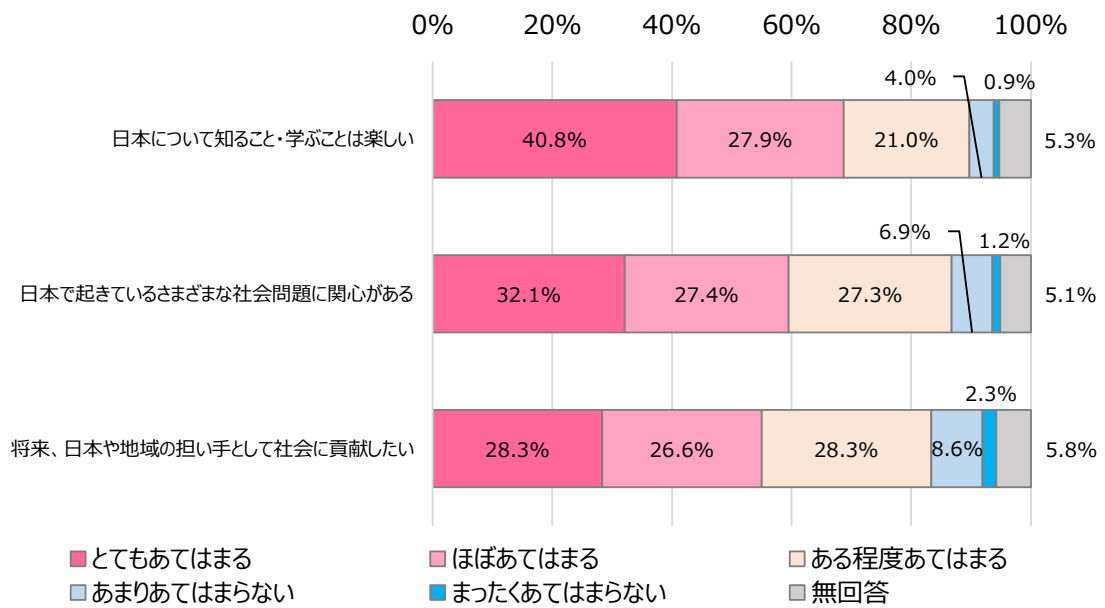
図表 5-25 外国語リテラシー 高校卒業時と現在の比較



5-7-3 日本への関心

日本への関心については、すべての項目で「あてはまる（とてもあてはまる+ほぼあてはまる+ある程度あてはまる）」と回答した割合が高く、8割以上となっている。

図表 5-26 日本への関心 (n=642)

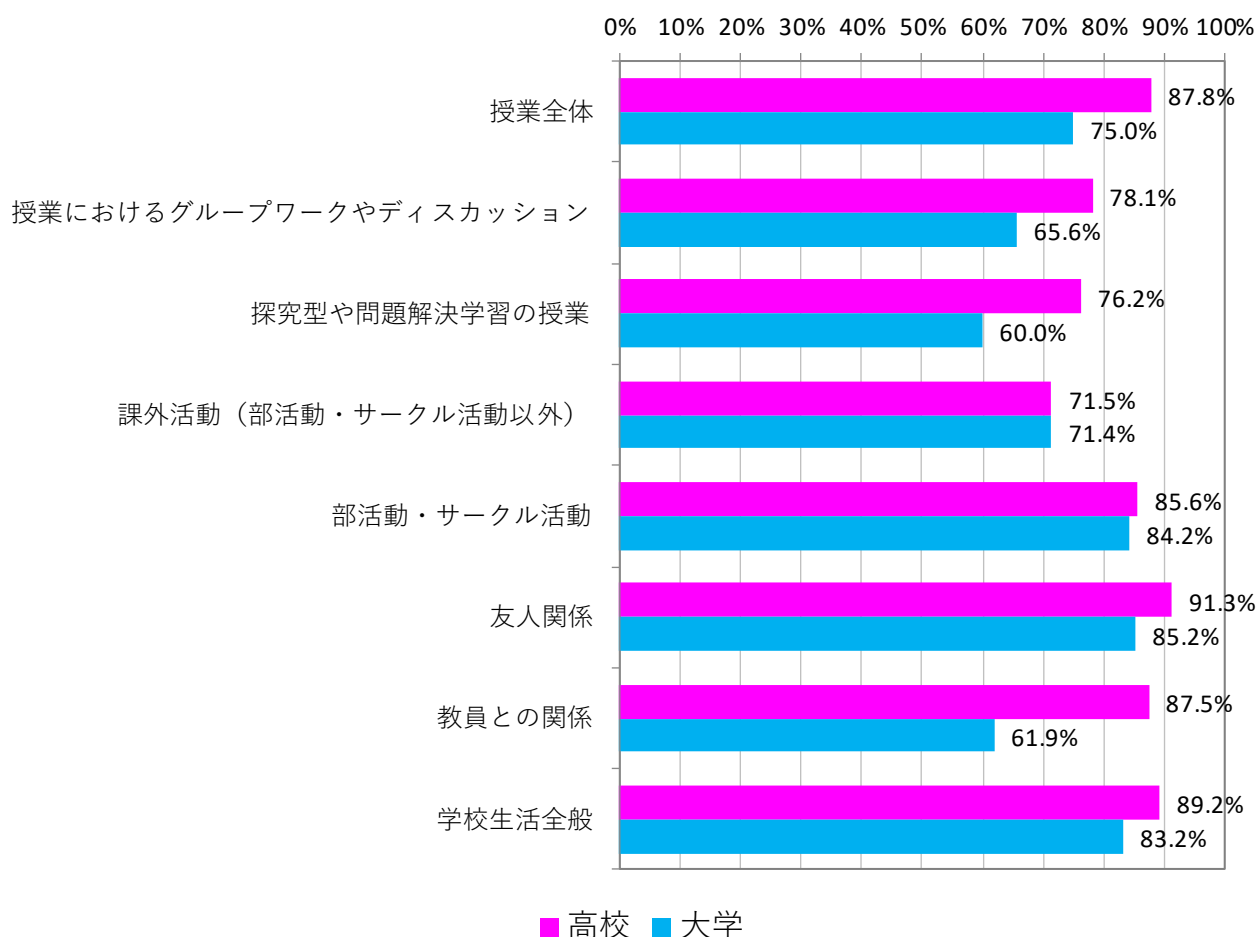


5-8 高校と大学の授業の比較

5-8-1 高校生活・大学生生活の満足度

学校生活の各満足度について、高校時代と大学時代の比較を行った。その結果、高校時代、大学時代、いずれの項目も6割を超えている。ただし、「教員との関係」及び「探究型や問題解決学習の授業」「授業におけるグループワークやディスカッション」「授業全体」については、高校の方が大学よりも満足度が高い。特に、「教員との関係」は25ポイント、「探究型や問題解決学習の授業」は16ポイント、高校の満足度が高い。

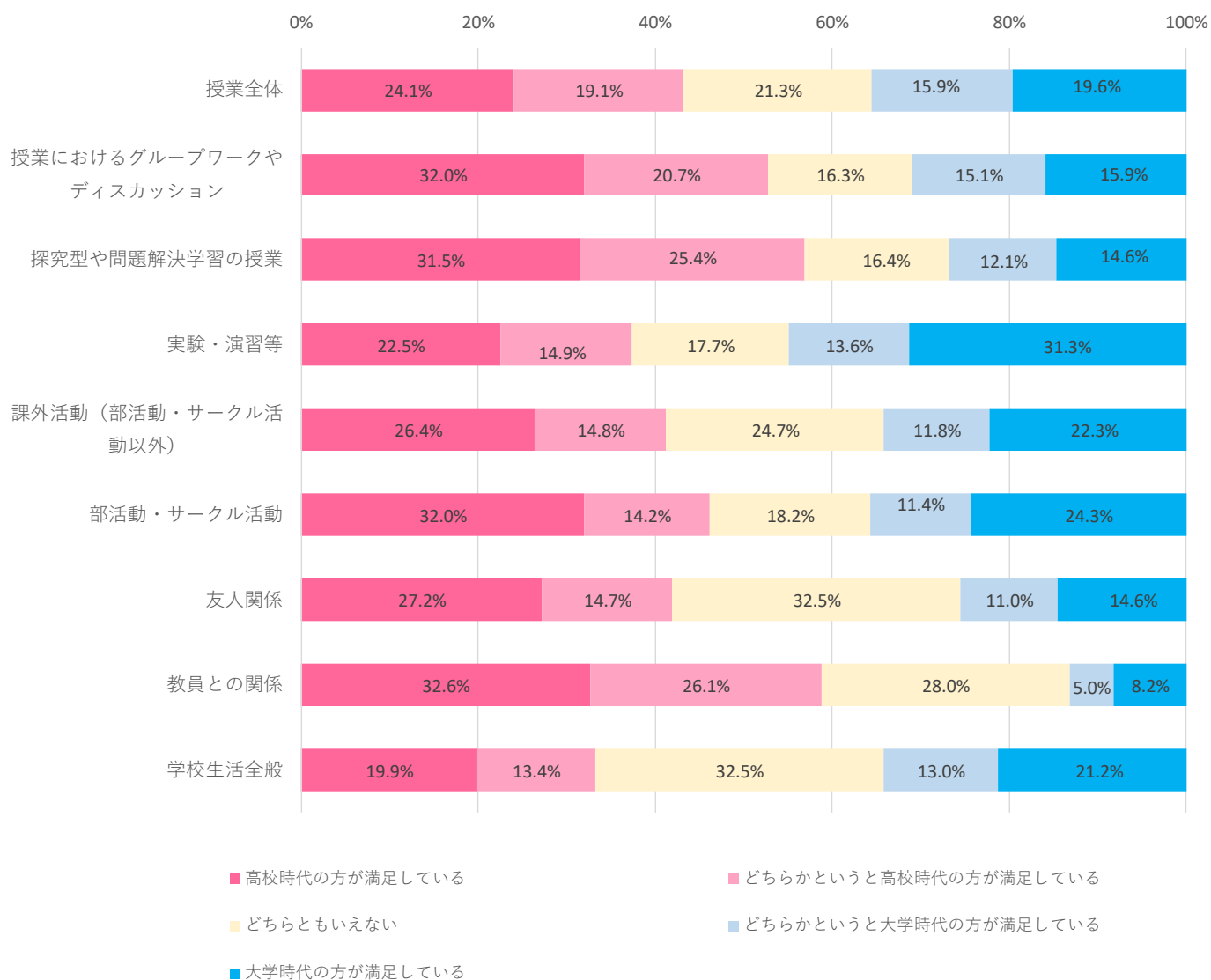
図表 5-27 高校生活・大学生生活の各満足度（満足している・計の割合）（n=642）



※各項目、「参加していない」「無回答」の回答は除外して100%となるように算出。

なお、高校時代と大学時代の満足度を比較した設問でも同様の傾向がみられ、「教員との関係」「探究型や問題解決学習の授業」において、「高校時代の方が満足している」とする回答割合が高い。

図表 5-28 高校時代と大学時代の学校生活の満足度の比較



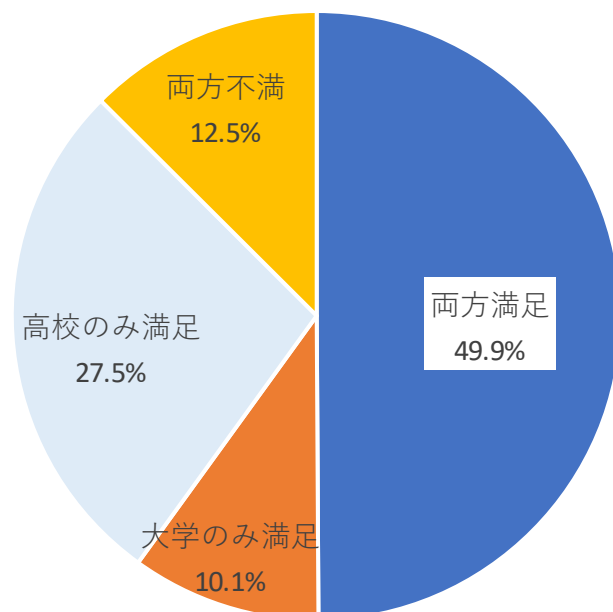
※各項目、「参加していない」「無回答」の回答は除外して 100%となるように算出。

「探究型や問題解決学習の授業」について、高校時代と大学の満足度の分布をみる。その結果、卒業生の約半数は、高校・大学の両方で「探究型や問題解決学習の授業」に満足している。

一方で、27.5%の卒業生は、「探究型や問題解決学習の授業」について高校時代は満足しているが大学では満足していない。

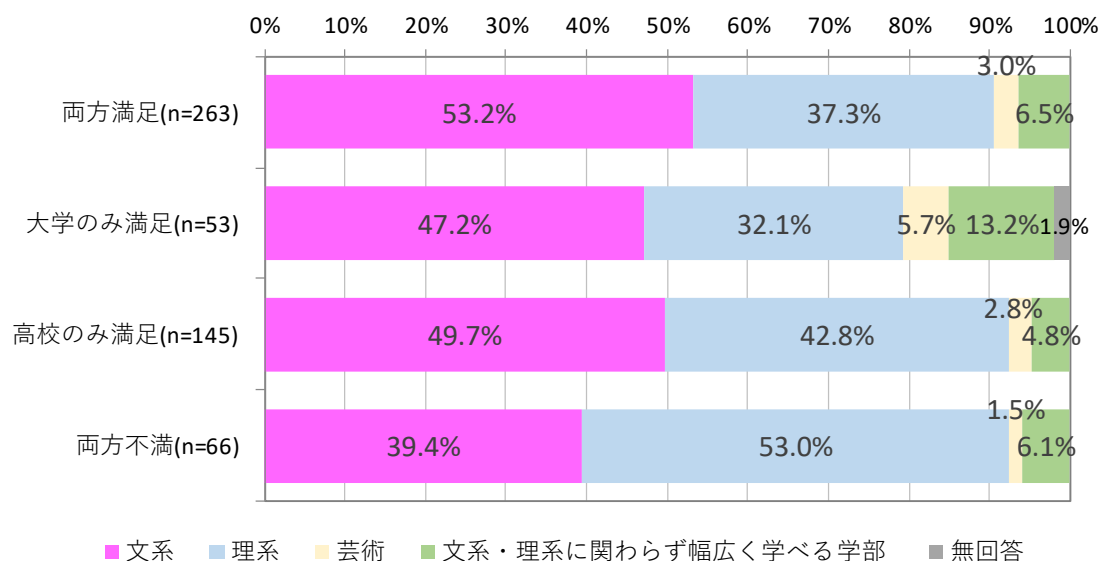
卒業生の1/4程度が、大学で高校時ほどの探究型学習を継続できていない可能性がある。

図表 5-29 探究型や問題解決学習の授業の満足度 (n=527)



探究型授業等の高校・大学満足度別に、大学の所属学部をみると、「両方満足」に比べ「高校のみ満足」の方が、やや理系の割合が大きいものの、全体の構成比として大きな差はない。なお、「大学のみ満足」では「文系・理系に関わらず幅広く学べる学部」、「両方不満」では「理系」の割合が他と比べて高い。

図表 5-30 探究型等授業満足度別 所属学部

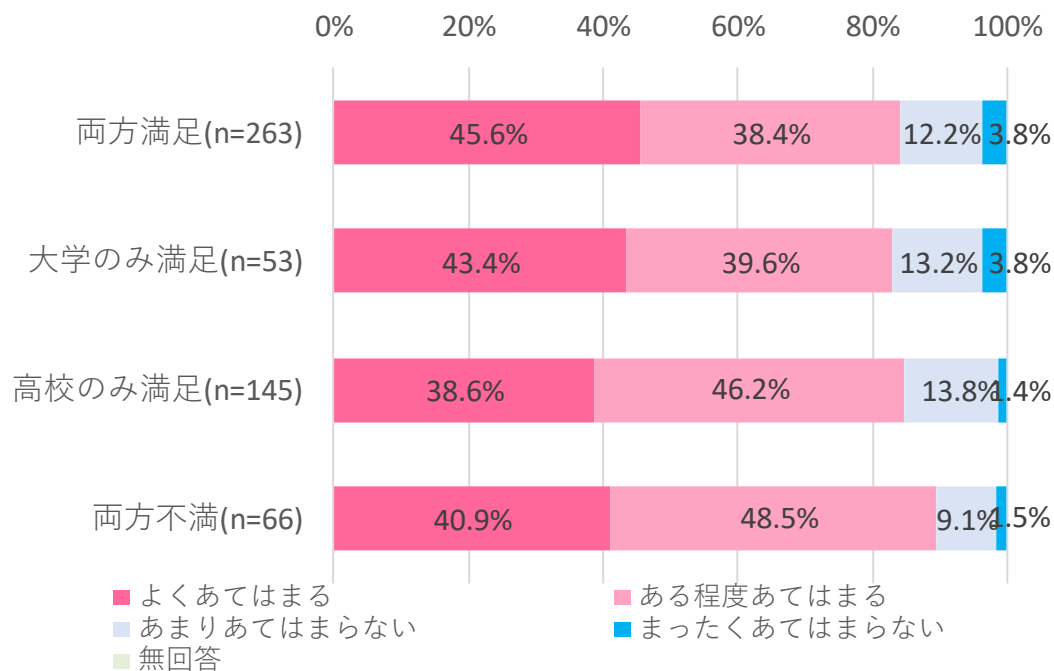


	全体	人文科学	社会科学	理学	工学	農学	保健(医歯薬)	商船	家政	教育	芸術	その他、主に文系分野を学べる学部	その他、主に理系分野を学べる学部	その他、文系・理系に関わらず幅広く学べる学部	その他	無回答
全体	527 (100.0%)	56 (10.6%)	78 (14.8%)	26 (4.9%)	55 (10.4%)	19 (3.6%)	75 (14.2%)	5 (0.9%)	5 (0.9%)	39 (7.4%)	14 (2.7%)	69 (13.1%)	26 (4.9%)	33 (6.3%)	26 (4.9%)	1 (0.2%)
両方満足	263 (100.0%)	33 (12.5%)	41 (15.6%)	10 (3.8%)	25 (9.5%)	13 (4.9%)	37 (14.1%)	2 (0.8%)	3 (1.1%)	20 (7.6%)	7 (2.7%)	35 (13.3%)	10 (3.8%)	17 (6.5%)	10 (3.8%)	0 (0.0%)
大学のみ満足	53 (100.0%)	3 (5.7%)	9 (17.0%)	2 (3.8%)	5 (9.4%)	2 (3.8%)	5 (9.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	4 (7.5%)	3 (5.7%)	8 (15.1%)	2 (3.8%)	6 (11.3%)	3 (5.7%)	1 (1.9%)
高校のみ満足	145 (100.0%)	16 (11.0%)	21 (14.5%)	9 (6.2%)	11 (7.6%)	4 (2.8%)	23 (15.9%)	2 (1.4%)	2 (1.4%)	10 (6.9%)	3 (2.1%)	18 (12.4%)	10 (6.9%)	6 (4.1%)	10 (6.9%)	0 (0.0%)
両方不満	66 (100.0%)	4 (6.1%)	7 (10.6%)	5 (7.6%)	14 (21.2%)	0 (0.0%)	10 (15.2%)	1 (1.5%)	0 (0.0%)	5 (7.6%)	1 (1.5%)	8 (12.1%)	4 (6.1%)	4 (6.1%)	3 (4.5%)	0 (0.0%)

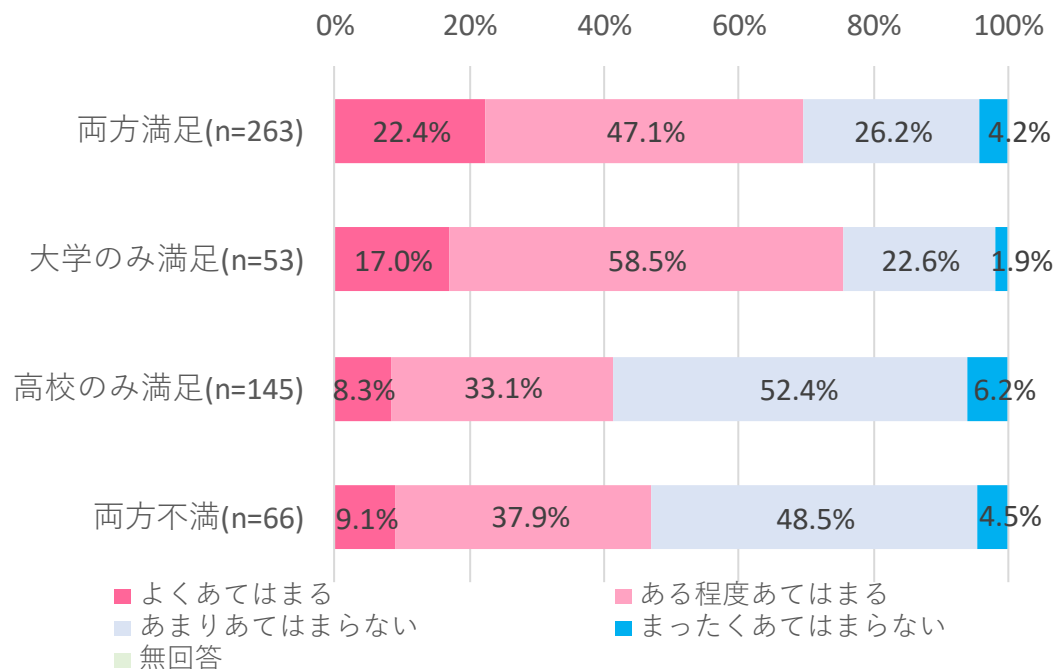
探究型授業等の高校・大学満足度別に、大学の授業の状況をみると、「大人数で受講する講義型の授業」について差はみられないが、「グループワークやディスカッションをする授業」「探究型や問題解決学習の授業」「大学以外の企業や地域の話聞く機会」については、「両方満足」「大学のみ満足」している大学では多い割合が高く、「高校のみ満足」「両方不満」の大学で割合が低い。

なお、「探究型や問題解決学習の授業」の実施状況は、学部分野での差は大きくはないため、分野の性質のためというよりは、大学の取組状況の違いが、卒業生の満足度に影響していることが伺える。

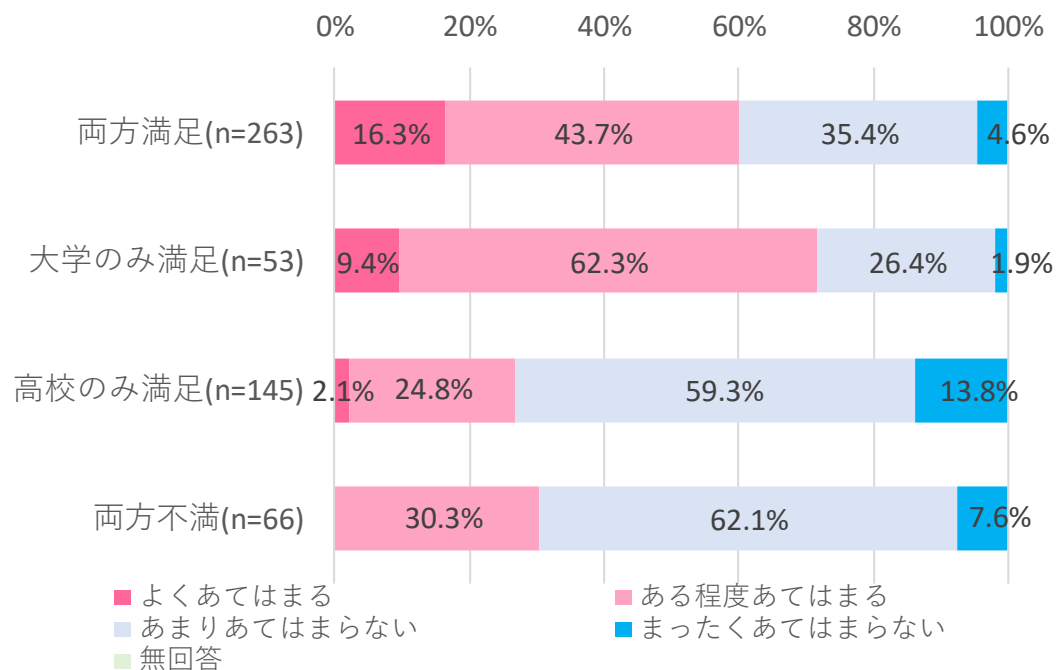
図表 5-31 探究型等授業満足度別 大人数で受講する講義型の授業が多い大学・学部



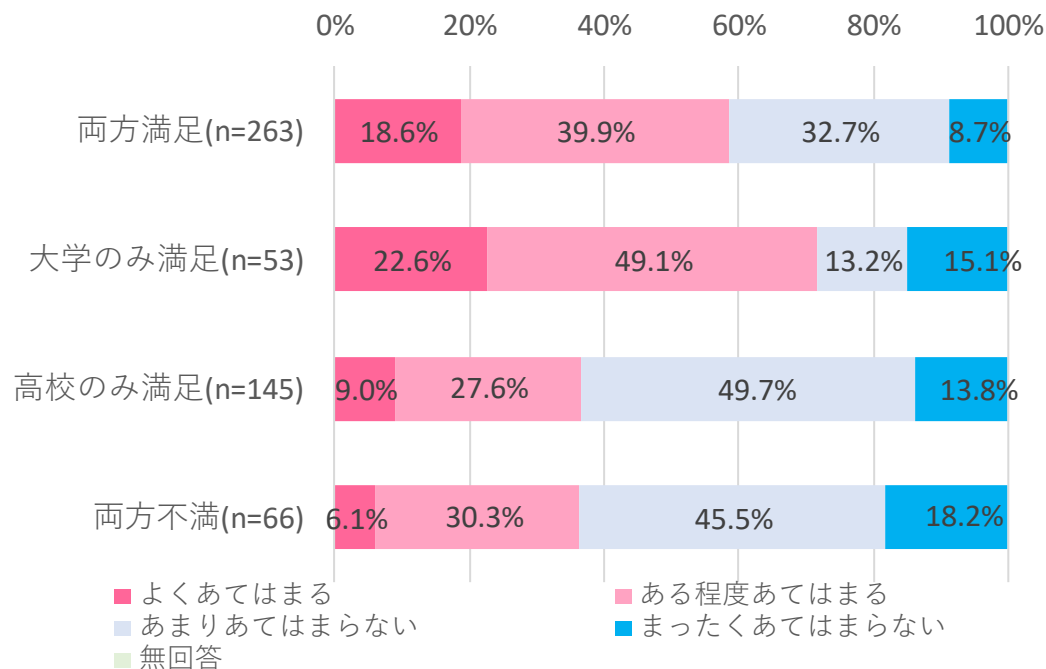
図表 5-32 探究型等授業満足度別 グループワークやディスカッションをする授業が多い
大学・学部



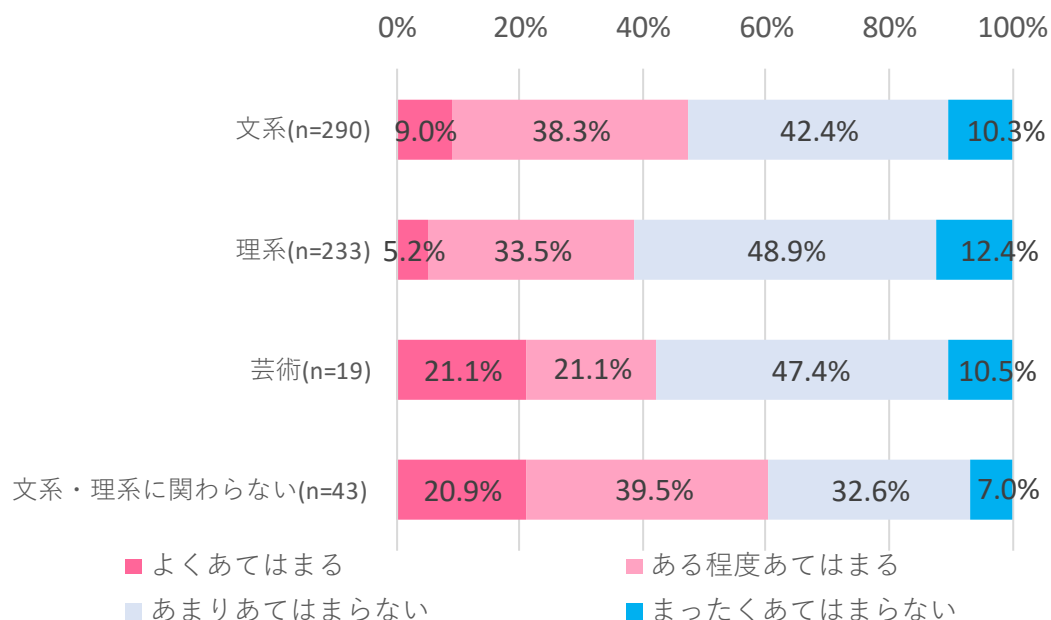
図表 5-33 探究型等授業満足度別 探究型や問題解決学習の授業が多い大学・学部



図表 5-34 探究型等授業満足度別 大学以外の企業や地域の話聞く機会が多い大学・学部



図表 5-35 (参考) 学部分野別 探究型や問題解決学習の授業が多い大学・学部



5-9 まとめ

WWL 事業に参加していた卒業生は、5割が WWL 事業の経験が大学の進路選択に「影響している」と回答しているなど、卒業生アンケート調査から WWL 事業が卒業後も、生徒に影響を与えていることが明らかになった。

また、高校時代の経験は、「プレゼンテーションでの発表」「日本語以外の言語の文章を読む」「グループワークへの参加」など多くの経験が役立っているとの回答となった。また、自由記述をみると、大学の専門講義、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーション、語学・海外交流・留学関係など様々な場面で役立っているということがわかった。

さらに、外国語リテラシーについて、高校卒業時と現在を比較すると、いずれの項目も、高校卒業時から現在で伸びており、卒業後も成長を続けていることがわかった。

次に、卒業生の大学生生活の状況をみると、「友人関係」「学校生活全般」などについて8割近くが満足していると答えている。

一方で、授業については、大学の授業では、「留学や海外研修など海外に行く機会が設けられている」にあてはまる割合は68.7%と高いものの、「グループワークやディスカッションをする授業が多い」は53.0%、「探究型や問題解決学習の授業が多い」は40.8%と、WWL 事業で行っていたような授業形式の活動は大学では半数程度の実施割合となっている。さらに、「グループワークやディスカッション」の満足度は58.6%、「探究型や問題解決学習の授業」は49.2%にとどまっている。教員との関係についても54.8%となっている。

さらに学生生活や授業について、高校時代と比較した場合、「教員との関係」「探究型や問題解決学習の授業」「授業におけるグループワークやディスカッション」について、高校時代の方が満足とする割合が高い。

「探究型や問題解決学習の授業」について、高校時代と大学の満足度の分布をみると、卒業生の約半数は、高校・大学の両方で「探究型や問題解決学習の授業」に満足している。一方で、1/4程度の卒業生は、「探究型や問題解決学習の授業」について高校時代は満足しているが大学では満足していない。探究型学習の高校時代と大学の満足度は、(やや理系の方が高いものの)学部分野での大きな差はなく、学問分野の特性によるものではないといえる。一方で、高校時代は満足しているが大学では満足していない生徒の大学で

は、「グループワークやディスカッションをする授業」「大学以外の企業や地域の話聞く機会」の実施割合も低く、大学の取組状況の違いが、卒業生の満足度に影響していることが伺える。

WWL 事業で培った能力を引き続き伸ばしていけるかは、その後の環境が重要である。今回の卒業生調査からは、引き続き成長できる環境ではない大学がある可能性が示唆された。「将来、世界で活躍できるイノベーティブなグローバル人材を育成」という WWL 事業の最終的な目的の達成のためには、様々な経験をした WWL 卒業生が物足りなくなならないような高大連携、WWL 卒業生の経験を受け止められる大学教育が強く求められるといえる。

第6章 カリキュラム開発拠点校ヒアリング

6-1 事例紹介

最終年度のカリキュラム開発拠点校（令和3年度指定カリキュラム開発拠点校 6校）へのヒアリングを実施した。

カリキュラム開発拠点校は以下の一覧の通りである。

表 6-1 カリキュラム開発拠点校一覧表

所在地	設置者	学校名
北海道	私立	北海学園札幌高等学校
新潟県	公立	新潟県立三条高等学校
愛知県	公立	愛知県立千種高等学校
愛知県	国立	名古屋大学教育学部附属中・高等学校
京都府	私立	京都先端科学大学附属高等学校
奈良県	公立	奈良県立国際高等学校

北海学園札幌高等学校 (管理機関:学校法人 学校法人北海学園)

同校は教育目標の一つに「国際理解教育」を掲げ、ステークホルダー(大学・企業など)にも指導を仰ぎ、SDGs 学習と国際交流を充実させている。SGH アソシエイト校の経験を経て、WWL 事業で更に活動の場を広げている。

■探究型学習、大学との連携、フィールドワークの実施

北海学園札幌高等学校には、国際的に通用する「実践的な英語」を重点的に学ぶ、普通科グローバルコースが設置されている。グローバルコースにおける学校設定科目「Academic English」「多文化理解」「プレゼンテーション」では、定められたテーマについての調べ学習やグループワーク、プレゼンテーションなどの探究型学習が行われている。

グローバルコースの3つの学校設定科目

Academic English	4コマ/週	難しいトピックを選び、生徒たちが英語で学ぶ。グループを作り、それぞれ1つ国を選び、その国の活動や考え方について調べ、発表する。 <例> ・「マラリアと気候変動 - Malaria and Climate Change」 病気と気候変動の関係について調べ、森林伐採などの話につなげる。 ・「障害とインクルーシブ教育 Disability and Inclusive Education」 『もし障害を持っている生徒が同じクラスにいたら』ということなどを考え、学ぶ。
多文化理解	3コマ/週	1クラスを4グループに分け、テーマを決めてアクションプランを考え、実行する。 <例> ・酪農学園大学の飛谷淳一先生の指導のもと農作業をし、収穫した野菜を販売し、カンボジアに寄付をする。 ・北海道インターナショナルスクールを訪問し、英語でプレゼンテーションを行う。 *中学生にはSDGsに関する導入レベルプレゼンテーション *幼稚園児にゴミの分別がなぜ大事かのプレゼンテーション ・手作りのアクセサリを学校祭で売り、カンボジアに寄付する。
プレゼンテーション	2~3 コマ/週	4人グループで SDGs について調べたいテーマを探し、アンケートを作成する。データを集計し、分析や簡単な統計学を利用し統計をする。アクションプランを考え、12月の「GLOBAL DAY」で、プレゼンテーションをする。

《GLOBAL VILLAGE》

5月下旬に、総合的な学習の時間に実施する2日間の研修。1年生全員参加の国際理解のためのプログラムである。

1日目:北海学園札幌高等学校の WWL 運営指導委員長である、北海道大学大学院の山中康裕教授の講義を聞く。環境問題や、アジアの若者のSDGs に関するアクションなどについて学ぶ。講義後は、山中教授が作成したワークシートを用いてワークショップに取り組む。

2日目:北海道大学・大学院の外国人留学生を招待し、バスの中で共にSDGs をテーマに交流する。その後、栗山町の農園や企業の研究施設を訪問。廃材の再利用に関する講義を聞いたり、農園におけるSDGsの取り組みやリサイクル、循環農法などの話を聞いたり、畑仕事の体験などをやる。農業・林業・里山保全を通じてSDGs への興味を喚起する。

GLOBAL VILLAGEの様子



《様々な課外活動》

この他、WWL 事業として全校生徒から希望者を募って実施する、様々な課外活動が開催されている。生徒が興味のある取り組みに関われるよう、講義・フィールドワーク・ワークショップなど10数個の講座を設定、実施している。近隣の大学や企業、公立高等学校等と連携し、農業やアイヌ文化の体験、英語での交流、北国の住まい作り・建設の工夫など、多くの学びの機会がある。

主な課外活動	連携先	内容
農業フィールドワーク	・酪農学園大学	敷地内の空き地を活用して、畑作りをする。飛谷先生から土のベースを提供いただき、肥料を混ぜて苗木を植え、管理・収穫する。作物は学校祭で安価に販売し、カンボジアに寄付をする。5月から、畑を閉じる10月まで取り組む。
歴史と SDGsをつなぐ 地域の観光資源を歩いて	・白老東高等学校	白老東高等学校が主幹校となり、7月、2年生の希望者80名弱で実施。ウポポイの見学や、アイヌ料理を体験する。また、仙台藩元陣屋資料館を見学し、歴史についても学ぶ。白老東高校生による資料館ガイドもある。
GLOBAL SUMMER CAMP	・北海学園大学 ・北海道大学 ・北星学園大学 ・岩田地崎建設株式会社 ・N.Z 協会	2日間のセミナー形式のイベント。外国人との交流の機会もあり、SDGs の多くのテーマに触れる。北海道大学大学院の山中康裕教授や北星学園大学のマシューコッター先生、ステーキホルダーである岩田地崎建設株式会社の方の講義を聞く。それぞれの講義を終えた後、北海道大学大学院の留学生30名程をコーディネーターに意見交流を行う。ニュージーランド協会によるジェンダーを考えたスポーツ交流もある。
探究！アイヌの生活・文化	・平取高等学校 ・平取町教育委員会	平取高等学校が主幹校となり、アイヌ文化の学習活動をする。10～30名程が参加。二風谷アイヌ文化博物館を見学し、教育委員会の方からアイヌ文化に関する講義を聞く。両校の生徒が共同でイメージマップなどを作成し、ワークショップを行う。
ENGINEERING LABO	・北海学園大学	北海学園大学の工学部を訪問し、生徒約30名が「社会環境工学科」「建築学科」「電子情報工学科」「生命工学科」の4学科に分かれて参加する。各学科の講義を受け、実験実証を行い、12月の「GLOBAL DAY」で発表する。

■海外フィールドワーク・留学

≪台湾語学・文化研修≫

全コースの1・2年生を対象に希望者(定員25名)を募り、3月下旬に6泊7日で実施。姉妹校である台湾嘉義市コンコーディア高等学校(台湾基督教協同中學)と交流しながら、1週間滞在する。コンコーディア高等学校の生徒と嘉義市内の施設を見学し、同校内で中国語の授業等を受ける。また、同校の日本語クラスに参加し、日本語や中国語で交流する。その後、2泊3日でホームステイを体験し、最後に北海道・札幌・北海学園札幌高等学校・WWL 活動をテーマにプレゼンテーションを行う。

≪アメリカ合衆国 ポートランド研修≫

グローバルコースの生徒は2年次にアメリカ合衆国ポートランドにおいて研修を実施し、コースの生徒全員が参加する。全員が3週間ホームステイしながら、ポートランド州立大学で語学研修を受け、現地でフィールドワークや高校間交流も行っている。

コンコーディア高等学校との交流の様子



GLOBAL DAYの様子



■高校生国際会議等

拠点校と連携校が一同に会する機会として、「GLOBAL DAY」を設けている。4年間継続予定で、令和5年度が3度目の開催となる。連携校や協働機関とオンラインで繋ぎ、探究活動の発表を行い、コメントやアドバイスをもらう。令和6年度に、高校生国際会議を開催予定。

≪生徒の声≫

～フィールドワークについて～

・1年次に GLOBAL VILLAGE に参加した。その際に、初めて SDGs について詳しく知った。農園で、食料の廃棄についてなどの講義を聞いた。中学時に SDGs についての授業はあったが、詳しくは学ばなかった。今回参加して、2025 年までに何を達成できていれば世界が良くなるかが分かった。(2年生)

～海外研修について～

・2年生のときに台湾語学文化研修に参加した。協定校のコンコーディアハイスクールに行き、パディと学んだりした。ほぼ初の海外だったので、とても刺激を受けた。ホームステイをしたので、毎日英語で話すことに苦労した。たった1週間だったが、普段の旅行では現地の学校に行くことは出来ないもので、勉強になり新しい世界が見えた。「多文化理解」や「プレゼンテーション」の授業のモチベーションが上がった。もっと英語を話したいという向上心につながった。(3年生)

・台湾研修の際、コンコーディア高等学校には英語と中国語、両言語を話せる生徒が多く、日本語を教えてほしいという意欲の高い生徒も多かった。お互いに教え合う交流が出来たのが印象的だった。毎日英語を話すということは挑戦だったが、自分の強みになっていると感じるので、参加して良かった。(3年生)

新潟県立三条高等学校 (管理機関:新潟県教育委員会)

「産業の街」として知られる三条市にあることから、地元企業と連携した取組を数多く実施。国際交流活動と探究型学習を通じて、生徒が世界と地元に関心を向けるカリキュラムを開発している。

■探究型学習、フィールドワークについて、大学との連携

新潟県立三条高等学校は、1年時はSDGsに関するグローバルな社会問題、2年時は地域に関連したテーマで探究型学習を行う学校設定科目「グローバル探究」の授業を実施している。

当初の構想では、1年時に地域をテーマにし、2年時にグローバルな社会課題にテーマを広げる予定だった。しかし、高校生は地域課題よりもグローバルな社会問題に関心を持っており、地域課題になじみが薄いことがわかった。そこで、グローバルな課題に取り組んでから、地域の課題を探究していくカリキュラム構成へと変更した。

「グローバル探究」の3年間の概要は以下のとおりである。

「グローバル探究」の概要

1年生	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsをテーマに、グローバルな社会問題について探究学習を実施。 ・グループ単位で活動する。
2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生時の探究型学習で学んだ内容をふまえて、地域の課題に落とし込んだテーマを設定し、探究型学習を実施。 ・グループ単位で活動する。(グループは2年生進級時に新しく編成する) (※生徒の希望により、グループ及びテーマの継続は認める。)
3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・2年間の探究学習を踏まえて個人で探究テーマを定め、その実現、貢献に向けた自身の進路研究を行う。

「グローバル探究」のフィールドワークによる、地元企業訪問の様子

≪グループ編成時における事前調査の実施≫

グループを編成する際は、関心が近い生徒でグループを組めるよう、事前に生徒の興味関心を調査し、その調査結果を踏まえてグループを編成している。

≪フィールドワークの実施≫

グローバル探究では、フィールドワークも実施している。1年、2年の両学年でフィールドワークを実施する。1年時には、地域探究の入口として学年を6グループにわけ、企業訪問を行い、2年時は地元企業や自治体へ訪問、インタビュー、アンケート実施等のフィールドワークを各グループで積極的に行うこととしている。企業・自治体等の外部とのやり取りは、生徒自身が連絡を取っている。

2年生による、地域をテーマにした探究型学習の例は以下が挙げられる。



2年生の地域をテーマにした探究型学習(一部)

- ・米の新しい使い方 ～三条米のイメージアップ～
- ・燕三条の工場の知名度と利益向上のために
- ・三条市のふるさと納税を用いて地場産業を振興するには ～新たなふるさと納税制度の提案～
- ・燕三条地域で安心して仕事と子育てができる環境を作るためには？
- ・三条をデジタル教育先進地域にしよう

≪地元企業や連携大学によるWWL特別講演の実施≫

同校のある新潟県三条市を含む県央地区は、地元企業によって「産業の街」として発展した街であることにちなみ、地元企業や連携大学である三条市立大学、長岡技術科学大学・新潟大学、自治体による特別講義(WWL 特講)や探究活動に対する助言の機会を設けている。加えて、分野別に各分野で活躍するOB・OGを講師とする社会人講義を開催し、社会課題や地域課題への関心喚起と、探究活動への助言の機会としている。例えば、以下のような講義を開催している。

WWL 特講や社会人講義の例(令和5年度・一部)

講義内容	講師
WWL特講:自治体の地域課題への取組	三条市、燕市、新潟市
WWL特講:統計にみる新潟県	新潟県統計課
社会人講義	医師、会社経営者、コピーライター、DXディレクター、金融機関、大学教授、財務省等

「地元企業や大学による発表会の講評」

「グローバル探究」の授業では、中間発表会、年度末の学年発表会、1・2年生合同によるポスターセッションなど、探究型学習の発表の機会を設けている。特に中間発表会と学年発表会には、連携大学・地元企業も参加し、生徒に講評を行っている。

地元企業や連携大学が参加する、年度末の学年発表会の様子



■外国語や文理の教科を融合した教科・科目

学校設定科目として「グローバル探究」に加えて「WWL 情報」「WWL 論理・表現」の授業を設定している。

「WWL 情報」では1・2年次各1単位、教科「情報」の内容のほか、探究型学習の成果発表を想定し、プレゼンテーションの際に使用するソフトの使い方や、スライド資料の作り方等についても学習する。

「WWL 論理・表現」は1・2年時で各3単位、3年時で2単位設置しており、英語の表現力強化に取り組んでいる。連携大学である長岡技術科学大学の協力を得て、同大学の留学生に対して英語によるプレゼンテーションを行う実践的な機会を設けている。また、グローバル・スタディーズ・プログラムとして1学年、2学年全員を対象に英語のみで、国内大学の留学生を相手にディスカッション、プレゼンテーションに取り組む経験をさせている。

■海外交流の取り組み

令和4年度から、希望者を対象にベトナム研修を行っている。ベトナム訪問は生徒に海外を実体験させる、アジアの持つ発展する社会の空気を体感させることを目的としており、現地での高等学校や新潟県人会との交流のほか、現地大学・企業等の訪問交歓を行っている。

現地訪問のほかにも、台湾の高等専門学校・ラオスの日本人学校・モンゴルの姉妹高校とのオンライン交流を実施している。

また、公益財団法人 AFS 日本協会による交換留学生を毎年受け入れており、日常的に校内で日本人生徒と留学生の交流が行われている。令和5年度は、長期でドイツ人留学生、短期でインド人留学生が在学している。

■高校生国際会議

令和5年10月19日、20日の2日間、高校生国際会議を「三条・大地の学校」と題して開催した。会議には、同校ならびに県内連携校のほか、県外連携校4校、県内の AFS 留学生、モンゴルの連携校、台湾の高等専門学校の生徒151人が参加、加えて長岡技術科学大学と新潟大学の留学生12人や、新潟県国際交流員5人がサポートとして参加した。

1日目は、地元企業による基調講演のほか、各生徒が関心のあるテーマで分科会に分かれ、地元企業であるスノーピークのキャンプフィールドを会場に対話・意見交換を行い、2日目は三条高校を会場に分科会の報告、会議宣言を行った。

「生徒の声」

～探究型学習等について～

・私のグループではシングルマザーの支援策について探究活動を行った。探究型学習は、まずテーマを決めることが大変。1年生のときは SDGs に関連して考えたが、2年生で自分たちの興味があることを地域に関連付けてテーマにすると、「貧困」といっても漠然として広く、どのような支援策が効果的か私たちにはわからないことだった。また、実際に市役所の方のインタビューした結果を受けて、どのような支援が効果的か考えることも大変だった。(2年生女子 A)

・探究型学習は、解決するためにみんなで頭を寄せ合って考えることが面白かった。ただ、中間発表会のときに先生や大学の先生にアドバイスをもらい、自分の研究の進め方などを振り返るよい機会となった。普段からアドバイスをくれる人がそばにいたほうがいい時間になると思う。(2年生男子)

～外国語教科について～

・英語は得意ではなく、抵抗があるほう。英語のプレゼンテーションの実践を行って、うまくいった経験が英語力への自信になった。(2年生女子 B)

愛知県立千種高等学校 (管理機関:愛知県教育委員会)

同校はスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールに指定された経験を活かし、国際教養科にて「グローバル探究」等のカリキュラムを開発。さらに、普通科においても探究の学びを拡げている。

■探究型学習、国内フィールドワークの実施、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

愛知県立千種高等学校には国際教養科と普通科があり、WWL 指定初年度は国際教養科からカリキュラム開発を始めた。国際教養科では、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール指定期間に開発したカリキュラム「国際英語」に、探究的な学びを合わせ、「グローバル探究」を開発した。

「グローバル探究」は、3学年共通で週2時間行う。1時間は探究活動を行い、もう1時間は CLIL (Content and Language Integrated Learning)の教科書を用いて様々な知識を学ぶ。

1、2年生の「グローバル探究Ⅰ・Ⅱ」では、年4回ほど外部の講師の授業を受け、専門的な知識を学びながら、グループでの探究活動を行う。

3年生の「グローバル探究Ⅲ」では、2年間の経験を踏まえて論文作成をする。論文は、ルーブリックを用いて、批判的・建設的・創造的視点が入っているかなどを教科担任が評価する。

国際教養科の探究型学習カリキュラム

1年生	グローバル探究Ⅰ (グループ学習)	探究:3~4人で1グループを作り、探究学習を行い、発表する。 教科書:CLILでSDGsのトピックを学ぶ。外部の講師からの講義を受ける。 内容:SDGsをテーマに広く学ぶ。テーマの大まかな分野はあらかじめ決まっており、その中からグループごとに小規模なテーマを決め、現状分析する。自分たちの解決策をパワーポイントにまとめ、英語で10分程度のプレゼンテーションを行う。
2年生	グローバル探究Ⅱ (グループ学習)	探究:文献に当たるなど先行研究を調べるだけでなく、現場の実態を知るためのフィールドワークや調査も行う。ICTを駆使して効果的な発表をする。 教科書:CLILの発展したテキストを学ぶ。外部講師からの講義を受ける。 内容:分野設定もなく、1つのテーマを掘り下げていく。自分が社会で解決したい課題についてプレゼンし、近い課題のグループを作り探究学習に取り組む。アンケート調査を実施し、裏付けをもとに効果的な解決策を提案する。現実的な提案ができるよう、情報を調べることに重きを置く。中間発表を2回ほど設け、他のグループの発表を聞くことで視野を広げる。
3年生	グローバル探究Ⅲ (個人学習)	探究:卒業論文の作成。テーマは各自が設定(SDGs 関連や、社会的・文化的・科学的に意義のあるもの)し、クラスでグループ代表選出後に発表する。 教科書:CLILのテキストを使い、実践的なトピックについて学ぶ。 内容:文章化を目標に、卒業論文を英語で作成する。テーマ決め・参考文献探しから調査・研究・実験まで個人で行う。

※「グローバル探究Ⅲ」は現在もカリキュラム開発中であり、令和5年度に完成予定。

また、国際教養科は、英語・第2外国語や国際情勢などを重点的に学ぶ教育課程となっているが、個々の生徒の興味・関心や進路希望などに即し、理科や数学も含めた幅広い学びも可能な教育課程を編成している。

《普通科の取り組みと、連携校との交流》

令和4年度から、WWLの活動範囲を普通科にも拡げ、フィールドワークを中心とした探究学習に取り組んでいる。

令和5年度には、希望者を募り課外授業として探究学習を行っている。WWL実行委員会の教員6人の指導のもと、6班に分かれテーマを設定し学習を行う。夏休みにはフィールドワークを実施し、連携校も交えてテーマに合った行先を訪問した。午前中にフィールドワークを行い、午後は同校や訪問先の会議室でテーマに沿ったディスカッションをし、学びを深めている。

「フードバンク愛知」での様子



「メタウォーター下水道科学館なごや」での様子



＜訪問先の例＞

- ・テーマ「多様性を認める社会」…ジェンダー問題に取り組んでいる企業
- ・テーマ「家庭でのフードロス削減」…NPO 特定非営利法人フードバンク愛知
- ・テーマ「プラスチック削減」…メタウォーター下水道科学館なごや、藤前干潟

■海外交流

同校では台湾への海外研修を予定していたが、コロナ禍の影響により中止となり、オンラインを活用した海外交流(大園国際高級中等学校(台湾)と、社会問題など共通のテーマについて意見交換、発表等を行う)で代替した。

また、令和5年度には、ユネスコスクールの海外交流プログラムを利用し、韓国の2校と交流している。国際教養科の1・2年生を対象に希望者を募り、計30名程がメールやSNS、Zoomなどで個人レベル(生徒と生徒、1対1)での文化的交流をしている。

韓国のトルマ高校の生徒との交流の様子



■大学教育の先取り履修等、大学との連携

令和4年度から、名古屋市立大学にて金曜日16時から開講されている講義「心理学入門」の受講が可能となった。単位を修得した場合は名古屋市立大学の単位として認定される。

また、愛知県教育委員会では複数の大学の協力により「知の探究講座」を毎年実施しており、同校からは例年1~2名程度参加している。受講した生徒には、同校の単位が認定される。

この他、普通科・国際教養科の希望者生徒には名古屋大学から、さらに国際教養科の生徒には、神戸大学・京都大学・豊橋技術科学大学からそれぞれ講師を招き、SDGsを中心としたテーマで講義を開催している。

名古屋市立大学	大学の単位
「知の探究講座」 愛知教育大学 名古屋工業大学 豊橋技術科学大学 豊田工業大学 愛知県立大学	高校の単位
名古屋大学	受講のみ
神戸大学	受講のみ
京都大学	受講のみ
豊橋技術科学大学	受講のみ

■高校生国際会議等

令和5年12月に「~わたしたちの未来のためのSDGs~」と題して開催。同校では2年生の希望者が参加する。他に、これまで年間4回の交流会で交流していた連携大学の留学生や、海外連携校の生徒が参加。

同校のグローバル探究は3つに分かれており、「IntermediateA クラス」、「MUN クラス」、「IntermediateB クラス」がある。それぞれのクラスの生徒が探究を深められるよう、「環境」、「貧困・教育」、「社会的不平等」の3つのテーマについて、クラスごとに3つの分科会に分かれてプレゼンテーションする。各分科会に同校の生徒が4名ずつ、連携大学の留学生や、海外連携校の生徒が4名ずつで編成。社会課題の分析と解決策の提案、ディスカッションをし、行動ビジョンを分科会ごとにまとめて発表。

《生徒の声》

~探究型学習について~

・海洋プラスチックの問題をテーマに取り組んだ。先生から「問を立てる時に、結果が見通せるものではない」と言われた。実際にフィールドワークに行った際に、立てた仮説が違っていったことが分かった。仮説が合っていたという結果だけではなく、仮説が間違っていたという結果が、先が見えない問を立てる面白さであると感じた。その分、次にどうしたらいいかを考え、新たな問を立て仮説を立てる中で、考えも深まった。中学生の時に学んだ調べ学習と変わらないと思っていたが、中学時よりも突き詰めて学べた。(2年生女子)

~フィールドワークについて~

・川の生態系を、川の生物でなく人間がきれいにする場合、どれくらいの期間がかかるかということ調べた。フィールドワーク先を決め、訪問して話を聞き、問題点を見つける力や実行する力がついた。川の生態系を保つための課題として、海洋プラスチックがメジャーであり、山のゴミは些細だと思っていたが、実は影響を与えていると知った。実験に使える器具や、フィールドワークに行ける範囲の制限があり、探究を進めるうえで苦労した。(2年生男子)

・夏休みにフィールドワークをするために、相手先へ電話をしたり、場所を決めたりするなど、すべて自分たちで準備した。その後、パワーポイントを使い英語でプレゼン資料をまとめた。1からすべて自分たちで進める経験は初めてで、成長できたと感じる。(2年生女子)

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

(管理機関:国立大学法人 東海国立大学機構名古屋大学)

「協同的探究学習」を教育課程の根幹に、課題研究だけでなく教科教育にも取り入れている。SSH、SGH 指定校を経て、WWL 事業では、コンソーシアム内の連携校と大学との仲介機能を果たすなど、ネットワークを拡げている。

■探究型学習、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

名古屋大学教育学部附属中・高等学校では、「総合的な学習の時間」が指導要領に入る以前から、全校体制で総合学習を実施してきた。その後、SSH、SGH を経て、現在は、探究型学習「STEAM」を行っている。

1年生では、本格的な課題研究の実施に向けて、「データサイエンス」と「アカデミックライティング」の授業で基礎を学ぶ。2年生からは「STEAM」の授業に移り、3年生の夏休みまで個人またはグループで研究に取り組む。

「データサイエンス」では、データの分析手法等を学ぶだけでなく、学外の様々な統計のコンペティションに出展するなど、学びの成果を形にしている。

「アカデミックライティング」では、自分たちの考えをシャッフルし、ブレインストーミングし、考える時間を持つことで研究の基盤となる力を身に付ける。また、同校が作成したロジカルライティングというテキストを使いながら、文章の書き方も学ぶ。

本格的な課題研究のための準備期間を長く設けており、1年次の1~2月頃から、探究テーマ決めをスタートする。その際、文献研究、仮説の設定、研究計画も合わせて行う。探究テーマを決める段階から名古屋大学の大学院生に来てもらい、オープンクエストの質問をしてもらう。2年生の5月頃にテーマが決定する。

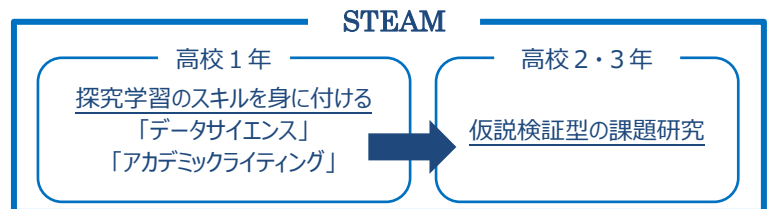
2・3年生「STEAM」は、全教員38人中16人が関わっている。生徒が決めたテーマに即して、16講座に分かれて研究を進める。すべての教科の教員が関わっており、生徒が希望するどんな研究テーマに対応できるようにしている。研究は、問題解決のためのフレームワークである PPDAC (Problem Plan Data Analysis Conclusion) サイクルに沿って、担当教員や専門家との話し合いを挟みながら行っている。

他に、同校では数多くの取組(課外活動含む)を用意している。高大連携の授業も含まれており、生徒は自分に必要なものを選んで受講する。夏休みに愛知県内外の高校・高等専門学校生と学ぶ名古屋大学の「学びの杜」や、連携校の生徒とともに学ぶ「高大接続探究ゼミ」、英語での議論・発表をする「ALE(Active Learning in English)」などがある。

■海外フィールドワーク・留学

令和5年春に、UNIS(米国 NY 州 United Nations International School)を訪問した(希望者のみ参加)。日頃行っている UNIS 生徒とのオンライン交流をもとに、米国社会や米国の教育事情などを体験し、課題研究「STEAM」に繋げた。また、同世代の UNIS の高校生に、日本の文化紹介を英語でプレゼンテーションした。このような経験が、生徒の国際性を高めるとともに、英語運用能力を向上させている。

海外研修に参加できる生徒は一部であるため、生徒全員が海外交流できるよう、学内においても海外交流の機会を用意している。例えば、2年生は全てのクラスに留学生がおり、学内でも外国の方との交流が経験できる。他に、連携大学の留学生と共に学ぶ講座なども用意している。



同校の探究活動のカリキュラム(各1単位全員必修)

1年生	データサイエンス (学校設定教科)	<前期> 定量的な評価の理論・データの分析手法・考察の方法 <後期> 研究計画の立て方・進め方・データの取得方法
	アカデミックライティング (総合的な探究の時間)	<前期> 仮説検証の考え方 資料の探し方・小論文の書き方 倫理的な考え方・情報の収集方法 <後期> 課題の設定とその解決方法 課題の分割とクリティカルリーディング 個人テーマの設定・カウンセリング
2年生	STEAM	個人またはグループで、各教科教員の16の講座に分かれ、研究を進める。
3年生	STEAM	夏休みまでに研究を終える。

※「STEAM」は現在もカリキュラム開発中であり、令和5年度に完成予定。

UNISにて



■大学教育の先取り履修等、大学との連携

名古屋大学の授業を大学生と一緒に受けて大学の単位をもらう、AP (Advanced Placement) 制度を実施している。令和5年度には、連携校の生徒も参加できる体制を整えた。

「基礎セミナー」では、大学1年生が参加しているゼミ形式の15～16人の授業ごとに、高校生がそれぞれ3～4人参加している。ゼミ形式の授業に高校生が参加することで大学生の刺激にもなり、大学側のメリットにもなっている。また、夏季集中講義も開催し、遠隔地の連携校の生徒も参加できるようにした。

令和5年度現在は、高校の授業後に大学に行き、大学の5時間目の授業を受けている。令和6年度以降、現行のAP から一歩進んで、高校の授業時間内でも、大学の授業に参加できるような仕組みを設定する予定である。

令和5年度現在では、例えば、以下のような授業に参加している。

学校設定科目:「AP(Advanced Placement)制度」

授業名	開催時期	参加校数
教養科目(基礎セミナー)	4～8月	4校
教養科目(基礎セミナー夏季集中)	夏休み	5校
Studium Generale B	4～8月	2校
Studium Generale A	10～3月	1校

＜基礎セミナー＞

名古屋大学初年次教育。名古屋大学1年生を対象とした授業であり、多彩な学問分野と人材を背景に、コモン・ベーシックとしての読み(文献調査、考察、検討)、書き(まとめ、報告書作成)、話す(討論、発表)を中心とした多面的な知的トレーニングを通して、「知の探究のプロセス」と「学問の面白さ」を学ばせ、自立的学習能力を育成することを目標としたもの。

夏季集中「基礎セミナー」も名古屋大学の正課授業のため、名古屋大学の学生だけでなく岐阜大学の学生も参加する。

＜Studium Generale Credit Course＞

英語で行われる AP 制度の名古屋大学 G30 International Program 講義。G30 International Program とは英語で学位のとれる国際プログラムであり、学部プログラムと大学院プログラムがある。講義はオンデマンドとオンラインで受講できるため、距離に関係なく参加できる。

＜Studium Generale Open Course＞

「Studium Generale」への参加者を増やすために、「Studium Generale Open Course」を開講した。令和4年度は同校生徒や連携校だけでなく、地域の高校にも提供した。成績と単位が付与される「Studium Generale B」「Studium Generale A」とは異なり、「Studium Generale Open Course」では、規定数以上参加した生徒に修了証が名古屋大学から付与される。

Studium Generale Open Course
ポスター



■高校生国際会議等

令和4年度は、名古屋大学にて「SGDs -What we can do as high school students-」を開催した。(公財)AFS 日本協会や、(公財)YFU 日本国際交流財団と連携し、名古屋・岐阜エリアなどの東海地区内の留学生30～40人(20ヶ国)を招いて実施している。司会は同校の生徒が務める。2日間かけて行うが、1日目の午後と2日目の午前に議論し、その後に発表する。グループセッション時は、名古屋大学の留学生20人ほどがファシリテーターをしている。

＜生徒の声＞

～探究型学習について～

- 以前から環境問題に興味があり、統計の分野には興味がなかった。データサイエンスの授業を通して、統計に興味を持つことができた。環境問題に対して、自分で統計を使い、答えや考えを導くことができることに魅力を感じた。この学校に入らなければ絶対に関わることもなかった分野だったので、自分にとって大きな転機になった。(2年生男子)
- 自分の研究テーマがマニアックで、具体的に見えているようで見えていない倍分がある。大まかな軸は決まっているが、どうアプローチで結果を出すか悩んでいる。データサイエンスに興味があるので、正確性・信憑性のある結果にするためにも、分析というものを自分の研究に持ち込みたい。この先どう進めていくか、データ集めるという意味でも苦戦している。(2年生男子)

～学校の様々な講座について～

- 中学までは英語に苦手意識があった。話すこともできず、筆記やリスニングもあまり良くなかった。高校入学後、国際問題に興味があったので、英語のみで進める講座や、名古屋大学主催の講座に参加した。その後、海外渡航の講座で、英語力が足りず最終選考で落ちた。その悔しい思いもあり、今まで以上に英語に触れるようになった。2週間泊まり込みの国際交流の講座に参加し、英語が少し得意になった。(2年生男子)

京都先端科学大学附属高等学校 (管理機関:学校法人 永守学園)

同校は SGH 指定校時に、「国際コース」と「特進 ADVANCED コース」のカリキュラム開発を実施。WWL で更に発展させるとともに、「特進 BASIC コース」・「進学コース」にも展開している。

■探究型学習、海外フィールドワーク・留学、外国語や文理の教科を融合した教科・科目

SGH 指定校時に、国際コースにおいて、探究学習である「KOA Global Studies(以下、KOA 学)」を開発。同時に、特進 ADVANCED コースが「Science Global Studies(以下、SGS)」の開発を開始した。SGS は当初、1年生のみ対象であったが、令和5年度からは2年生にも対象を拡げた。さらに、特進 BASIC コース・進学コースにおいても、新たな探究型学習カリキュラムである「進路探究学習」を開発した。

国際コース	1年	KOA 学Ⅰ	スキルと知識の獲得:MECE、Problem Tree、7steps モデル、データ収集、長期課題研究・発表 等
	2年	KOA 学Ⅱ	世界を舞台に体験・検証:ビジネスモデル開発、ベトナム/フィリピン/フィンランド・フィールドトリップ、イギリス/カナダ長期留学
	3年	KOA 学Ⅲ	Global Issues 解決への取り組み:高校生国際会議「Global Simulation Gaming」、個人課題研究卒業論文(※英文)
特進 ADVANCED コース	1年	SGS	問題発見能力・データ分析・統計学・プロトタイプング・プレゼン力の育成
	2年		語学力・批判的思考力・プレゼン力の育成、イギリス研修旅行
	3年		プレゼン力の育成・進路実現(成果物のまとめ、総合型選抜入試)
特進 BASIC コース・ 進学コース	1年	進路探究 学習	問題発見能力の育成
	2年		問題解決能力の育成とプレゼン力の育成、アメリカ研修旅行

≪KOA 学(国際コース)≫

1年生

1年生では、下地・素地になる力をつける。英語力に加え、色々な形の社会貢献などを外部ゲストを招きつつ学ぶ。海外を拠点にしたビジネスや社会問題解決に取り組む。基本的にグループで活動を行い、プレゼンの技術や協働の仕方を学ぶ。簡単なポスタープレゼンから始まり、夏休み明けから1月まで長期研究に取り組む。1月に課題選択発表会があり、連携校も参加し成果を発表。その成果を2年次のビジネス開発につなげていく。

2年生

1年次に取り組んだ、海外を拠点にしたビジネスや社会問題解決について、長期課題研究(ビジネス開発)によって検証していく。

5月と7月には、希望者を対象にベトナム・フィリピンへの海外研修を実施。また、長期留学がカリキュラムに組み込まれており、全員が9月から7~10ヵ月間、イギリスまたはカナダに留学する。イギリス留学生を対象とした留学中のフィンランド・フィールドトリップも実施している。さらに、留学期間中に探究型学習の成果を卒業論文にまとめる。

ベトナムフィールドトリップの様子



3年生

留学から帰国した後は、1月開催の高校生国際会議の準備を行う(高校生国際会議の内容は後述)。

≪SGS(特進 ADVANCED コース)≫

1年生

テクノロジー、サイエンス、アートサイエンス、ビジネスのいずれかの分野を選択し、探究活動を行う。活動の単位は個人・グループのどちらでもよい。年度末に、発表会を行い、活動の内容を生徒全員で共有する。学校で具体的なテーマは決めず、生徒個人が何に興味を持つかを重視している。生徒それぞれが、世の中の問題解決にどう貢献できるかを考える。

2年生

2年生からは個人での取り組みとなる。1年次の研究の成果を、大学の勉強や将来にいかに関展的につなげていくか、個人で研究する。

《進路探究学習(特進 BASIC コース・進学コース)》

1年生

問題発見能力の育成に向け、地域企業の社会課題の研究などを行う。

2年生

10月のアメリカへの研修旅行(ホームステイ)に向けて、教員が作成した冊子型の事前学習教材で学ぶ。研修旅行を通じて、地域の課題を世界の課題や観光産業とつなげるためのグループ活動としている。

帰国後はアメリカでの体験と、1年次からの学びとを比較しながら、個人単位の研究活動につなげる。



■大学教育の先取り履修等、大学との連携

管理機関である京都先端科学大学と「中高大連携協議会」を月1回実施している。高校の教頭、中高法人の幹事、大学から副理事長や学長室長・顧問、法人本部長、7名で構成している。中高大連携で実施する授業の審議をし、決定されたものに対してそれぞれ準備を行う。

その他、右記講座を受講する機会を設け、先取り履修ができるようにしている。

京都先端科学大学	京都大学
<ul style="list-style-type: none"> ・Science Global Studies ・KUAS 京都学 ・人文学部特別講座 ・心理学特別講座(夏休み講義) ・看護体験 	<ul style="list-style-type: none"> ・iCeMS キャラバン ・哲学対話

■高校生国際会議等

《高校生国際会議「Global Simulation Gaming」》

高校生国際会議として、立命館大学と東京大学が共同開発した「Global Simulation Gaming(以下、GSG)」を本校向けにアレンジした形で、SGH時から実施している。

参加するのは国際コースの3年生全員と AL ネットワーク連携校からの参加希望者。9月末のキックオフミーティングに始まり、複数の課題の提出とオンラインセッションを経て、1月の GSG 総会を迎える。総会までのアクター間の交渉、折衝はオンライン会議またはメールのやりとりで進められる。GSG 当日には、アクター間で条約、協定の締結、共同声明の発出、総会による決議文の可決に向けた議論を展開する。

「Global Simulation Gaming」



《生徒の声》

～探究型学習等について～

・KOA 学でビジネスプランを考える際、チームのリーダーになることが多かったが、リーダーとしての役割が難しかった。それぞれ熱意や意見が食い違った際、コミュニケーションがとれず、全体の方向性が決まってもうまく伝わらなかった。そこで、チームリーダーに加えて、やりたいこと別にリーダーを作った。やりたいこと別のリーダーがまとめたアイデアの報告を受けて調整を行い、それぞれのリーダーに戻すことで上手くいった。すぐにその工夫ができればよかったが、なかなかそこに行きつかなかった点が困難だった。(3年生男子)

・1年次のSGS で取り組んだ、ロボットのアイデアを競うコンテストで、全国2位を獲れた。結果として、制作意欲が掻き立てられ、表現力に自信が付いた。グループは他に2名おり、役割分担をすることで、お互いの状況を把握しつつ開発をスムーズに進めることの大事さに気づいた。協調性の大切さを学んだ。(3年生男子)

・新聞の見出しを通して、言葉がもつ影響力について探究した。自分が養われたと感じるのはコミュニケーション能力。4人で取り組んだが、それぞれ違う考察が出た。その際、相手の意見を否定するのではなく、一度受け止めてから新たな意見を作る力が養われた。(3年生女子)

～海外フィールドワーク・留学について～

・フィリピンの児童労働や深刻な貧困問題の現実を学んだ。ボランティアに参加し、現地の低所得者向けにお昼の提供を行った。貧困の原因は色々あるとは思っていたが、本当に幅広かった。家庭、人間関係、深い問題であった。(3年生男子)

奈良県立国際高等学校 (管理機関:奈良県教育委員会)

令和2年度に開校した奈良県立国際高等学校は、開校時から、国際社会で活躍できるグローバル人材の育成に重きを置いており、世界にある課題を自分ごととして取り組む「グローバル探究」などのカリキュラム開発を進めている。併設する中学校では、国際バカロレア認定に向けた取り組みも進めている。

奈良県立国際高等学校は国際科単科高校である。同校では、「多様な人々との積極的なコミュニケーションを通し、グローバルな視点でものごとを捉え、国際社会の平和と発展に貢献する資質・能力を育成する」というミッションのもと、WWL 事業の指標とも親和性が高い右記の「6つの力」の育成を目指している。この「6つの力」を育むために、「英語」・「ICT」・「世界の言語」・「グローバル探究」の「4つのまなび」を設定している。

学校設定教科「国際教養」を新たに設定し、教科の中で、複数の科目を融合した内容について英語で探究活動を行う学校設定科目「グローバル探究」や、英語以外の外国語やその文化について幅広く学ぶ「世界の言語」を行っている。

また、「英語」では、高校生国際会議で発表・議論ができ、英語で論文が作成できるようになることを最終目標にしている。全コース共通で総合英語、ディベート・ディスカッション、エッセイライティングを学んでいる。また、海外進学コースでは、英語で他教科を教える「イメージン理数」(後述)や、「EAP(English for Academic Purposes)」など英語に特化した授業を行っている。

■探究型学習、高校生国際会議等

≪「グローバル探究」 全学年3単位(必修)≫

1年生「グローバル探究Ⅰ」

クラス活動。探究のプロセスを行いながら、世界の問題は自分の問題であると実感し、その問題を解決するのは自分であると意識するよう行動変容を促す授業を行う。

例えば、年度前半には、ワークショップやフィールドワークを通して ESD (持続可能な開発のための教育)の感覚を身につける。年度後半では、地域の魅力及び課題について情報収集を行い、発表しあう。

令和5年度からは、クラス数の減少にともない ESD の基本的な考えのもと、3つのゼミに分ける。

2年生「グローバル探究Ⅱ」

6つのゼミで探究活動を開始。各ゼミには、それぞれ大きなテーマがあり、その中で生徒固有のテーマを決めていく。1つのゼミを教員2名が担当する。担当教員と面談をしながらテーマを決定し、情報収集や3年生との探究交流会などを行う。ゼミ内報告会などを経て、発表及びディスカッションを行う。

3年生「グローバル探究Ⅲ」

6つのゼミで探究活動を継続。探究を深め、7月に実施の高校生国際会議において発表・協議する。高校生国際会議は同校生徒、連携校生徒で構成される生徒実行委委員会が運営しており、奈良県教育委員会が主導して進めている。3年生全員が参加し、発表はゼミの代表が行う。基調講演があり、6つのゼミをベースにした分科会で協議しまとめ、提言する。全て英語で行う。

探究活動のまとめとして、グループもしくは個人で論文を作成する。日本語で論文を作成し、エッセイライティングの授業で英語版を作成する。学内で卒業論文検索サイトを立ち上げたため、卒業生の論文を見ることができる。

≪個人探究週間≫

令和4年度から定期考査を全て撤廃し、個人探究週間を設定した。午前中は講演会やワークショップを行い、「たてにつながる探究交流会」など、全学年がそれぞれ一堂に会し、3年生がファシリテーターとなり探究の内容を共有する活動などを行っている。午後は市役所や公立大へ訪問するなど、様々な個人活動の時間としている。

「6つの力」

1. 探究力
知識を活用し課題を解決する力
2. 創造力
新たなアイデアを生み出す力
3. 協働力
協力・協働して互いに高め合う力
4. 寛容さ
文化や考えの違いを大切にする力
5. 挑戦力
試練を克服し前進する力
6. キャリアデザイン力
進路に向けて行動を起こす力

2年生「グローバル探究Ⅱ」スタディツアー



たてにつながる探究交流会

5月 3年生がファシリテーター
同じゼミの2年生や1年生に探究内容を共有

7月 一歩高校生国際会議ー
テーマ:「持続可能な未来のために国際高校生は何をすべきか」



■外国語や文理を融合した教科・科目

≪世界の言語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ≫

1年生(2単位必修)では、全員が中国語・韓国語・スペイン語・フランス語・ドイツ語の5言語を8時間ずつ学ぶカリキュラムを、全国で初めて開発した。

2年生(2単位必修)では、5言語から1言語を選択し学ぶ。3年生(2単位)は選択科目で履修可能である。また、2・3年生では、全ての授業で日本人教員とネイティブ教員のチームティーチングを実施している。言語だけでなく、その背景文化の多様性を学ぶため、言語間の比較から言語そのものへの意識が高まる。

なお、同校では、世界の言語を学ぶ意義として、下記2点を掲げている。

- | | |
|---------------------|--------------------------------|
| 1. 言語やその背景文化の多様性を学ぶ | 2. 言語の比較や規則の推論から言語そのものへの意識が高まる |
|---------------------|--------------------------------|

≪イメージン理数≫

海外進学コースの3年生の選択科目「イメージン理数」では、英語で他教科(理数科目)を学ぶ。英語による「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」及び「書くこと」の言語活動を通して、自然の事物・現象に関わり、科学と数学の見方・考え方を働かせ、見直しをもって観察、実験を行う。また、自然の事物・現象を科学的に探究し、根拠を示しながら考えや判断についての的確な説明をして他に理解を得るために必要な資質・能力を育成する。

■海外フィールドワーク・留学

WWL 指定初年度に計画していたシンガポールや中国清華大学への研修は、新型コロナの影響により国内フィールドワーク(令和3年度:九州方面、令和4・5年度:北陸方面)に代替した。令和6年度は韓国への研修や、「世界の言語」の授業でオンライン交流している連携校との現地での交流を予定している。

一部の生徒については、右記の国へ留学を行った。令和4年度から「世界の言語」を設定したこともあり、英語圏以外にも積極的に留学している。

留学先一覧

令和3年度	7名	アメリカ、カナダ、アイスランド、フランス
令和4年度	6名	アメリカ、フランス、カナダ、イタリア
令和5年度	9名	カナダ、フランス、ドイツ、イタリア、アイルランド

■大学教育の先取り履修等、大学との連携

令和3年度、大阪公立大学・奈良県教育委員会・奈良県立国際高等学校で教育連携に関する協定締結を行った。大阪公立大学の吉田教授を講師に招き、「グローバル探究Ⅰ」の情報分野にて、プログラミング講座やデータサイエンス講座を実施した。プログラミングの授業においては、大阪公立大学の院生がティーチングアシスタントをしている。また、大阪公立大学のゼミに国際高校の生徒が訪問し、課題研究について大学生の前で発表するなど、大学生の刺激にもなっている。

ほかに、「世界の言語」のカリキュラム開発には、奈良教育大学吉村教授の全面的な支援を受けている。立命館アジア太平洋大学や同志社女子大学での研修や授業も行っている。

大阪公立大学の大学生約80名に探究活動の取組を発表する様子



≪生徒の声≫

～探究型学習について～

- これまでは外国の方と関わる機会が無かったが、探究型学習を通して視点が広がった。自分の生まれ育った環境からの視点だけでなく、他の学校とも関わって、他の視点からのアプローチを考えられるようになった。また、社会問題に関心が持てるようになった。日本の高校生は世界や経済の話はあまりしないが、留学先のフランスでは話していた。意欲関心の面で、自分の力が伸びたと感じる。(3年生男子)
- 「物事には答えが無い」ということを強く感じた。中学時の授業では、どんな問題にもすべて答えがあった。しかし、他の視点で見れば、良い面もあれば悪い面もあるということを知った。物事において、メリットの裏側にはデメリットがある。だから答えが無い。探究型学習において、そこに苦労した。(3年生女子)
- 奈良県立国際高等学校に入学して、初めてプレゼンテーションを経験した。非常に緊張してプレッシャーを感じたが、他校の生徒との探究活動やプレゼンテーションを通して、自分の思いを主張することが出来るようになった。また、入学してから自分の知識の無さを強く感じた。インターネットの情報をうのみにすることもあった。今も苦戦している。(3年生女子)

第7章 まとめ

これまでの分析結果から得られた知見は、下記のとおり。

7-1 WWLコンソーシアム構築支援事業の成果

7-1-1 拠点校におけるカリキュラム開発

カリキュラム開発拠点校・拠点校アンケートより、令和5年度現在、33のALネットワークの総計で「共同実施校」は8、「共同実施校以外の国内高校（連携校）」が289、「国内の企業・国際機関等」が145、「海外高校」が119、「国内の大学等高等教育機関」が83、参加していることがわかった。

また、カリキュラム開発拠点校において、以下のようなカリキュラム開発が行われた。

探究型学習	<ul style="list-style-type: none">・1学年は、全ての学校で必修科目化・9割以上の学校が「発表会」を開催。・8割以上の学校が「グループ活動を含んだ内容」「ICT等を活用した内容」「文理両方の複数の教科を融合した内容」「外国語の学習や外国語での活動を含んだ内容」として実施。・半数以上の学校が「生徒自らによる探究課題設定」に特に力を入れて実施。
複数教科の融合科目	<ul style="list-style-type: none">・33校で62科目設定。
短期・長期留学及び海外研修等	<ul style="list-style-type: none">・令和5年度は33校中31校が実施・希望者参加型中心で、合計参加生徒数は2,145名。
高大連携による大学教育の先取り履修	<ul style="list-style-type: none">・24ネットワークで、連携大学数38校、授業数104・「大学・高校両方の単位」になる授業が20.2%、「大学の単位」になる授業が42.3%、「高校の単位」になる授業が16.3%・計1,314名が単位を取得。
高校生国際会議	<ul style="list-style-type: none">・33ネットワーク合計で27回開催・延べ351校、拠点校生徒2,428名、拠点校以外の国内生徒1,392名、海外生徒506名が参加

7-1-2 生徒の成長

生徒の成長として、以下があげられる。

- ・ 6割以上の生徒が WWL 事業に熱心に取組み、満足している。
- ・ WWL 事業の成果目標である「グローバルなマインドセット」「グローバルな資質・能力（グローバル・コンピテンシー）」「PPDAC(探究型行動)」の育成達成度は下記の通り。

目標		達成度（項目平均）
グローバルなマインドセット	他文化の人々の尊重	97.1%
	グローバル思考	80.3%
グローバルな資質・能力（グローバル・コンピテンシー）	異文化対応コンピテンシー	96.8%
	外国語リテラシー	69.3%
PPDAC(探究型行動)		88.7%

- ・ 上記 5 項目について今年度卒業する 3 年生の 3 年間での成長度をみると、いずれの項目も 1 年生時と比較して 2 年生、3 年生と点数が高くなっており、3 年間での成長がみられる。特に特に「外国語リテラシー」については 6 回の調査で大きく上昇している。「PPDAC スキル」については、学年が上がるタイミングでの上昇が大きい。
- ・ WWL 事業の問題点や困っていることについて 3 年間の結果を比較すると、1 年生時と比べ 3 年生では「英語に苦手意識がある」「海外の人と触れ合うのに苦手意識がある」「WWL 事業の課題が難しすぎる」「WWL 事業のテーマに関心が持てない」の回答割合が低下している。WWL 事業を 3 年間続けることで、英語や国際交流、SDGs 等の社会課題に対する苦手意識が軽減されている。
- ・ 将来に対する考え方について、「さまざまな外国へ行ってみたい」など、いずれの項目も 3 年生で「あてはまる」割合が 1, 2 年生の時と比較して大きい。WWL 事業を通じて成長し、進路選択など将来のことを考える機会が増える 3 年生において海外志向やリーダーとして将来活躍するといった志向が高まるのではないかと考えられる。
- ・ 高校生活を通じて身についた・成長したと思うことについて、3 年間の結果を比較すると、「リーダーシップをとれるようになった」「成果の発表ができるようになった」が 3 年時に割合が高い。
- ・ この他、4 割以上の生徒が「さまざまな視点からものを考えられるようになった」「海外

や国際的な課題に対して関心をもった」「自分の弱点や成長させたい事柄がわかった」「社会問題や社会的課題に対して関心をもった」と回答。

なお、WWL 事業の熱心度と生徒の成長の関係をみると、熱心度が高いほど 5 項目の点数は高い。また、熱心に活動している生徒ほど順調に 3 年間での成長がみられる。

ただし、熱心さと成長の関係は、「能力の高い生徒ほど、熱心に活動を行っている」ことを示している可能性もある。そこで「能力」と「熱心さ」の関係を「交差遅延効果モデル」を用いて分析した。その結果、「能力」は「熱心さ」に正の影響を及ぼし、「熱心さ」は「能力」に正の影響を及ぼしていた。熱心に取り組む生徒ほどスキルが高くなり、スキルが高い資質・能力生徒ほど熱心に取り組むという相互作用が確認された。

7-1-3 卒業生の状況

WWL 事業に参加していた卒業生は、5 割が WWL 事業の経験が大学の進路選択に「影響している」と回答しているなど、卒業生アンケート調査から WWL 事業が卒業後も、生徒に影響を与えていることが明らかになった。

また、高校時代の経験は、「プレゼンテーションでの発表」「日本語以外の言語の文章を読む」「グループワークへの参加」など多くの経験が役立っているとの回答となった。また、自由記述をみると、語学・海外交流・留学関係、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーション、大学の専門講義、自分の意見をまとめる、など様々な場面で役立っているということがわかった。

さらに、外国語リテラシーについて、高校卒業時と現在を比較すると、いずれの項目も、高校卒業時から現在で伸びており、卒業後も成長を続けていることがわかった。

7-2 課題等

7-2-1 拠点校等における課題

(1) 学内外体制の整備

WWL 事業を行う上で、多くの学校や教員から課題としてあげられているのが、学内外の連携体制の構築となっている。学内体制については、WWL 事業の担当教員を中心に、「新たな科目に関する教材開発が大変」「他の業務が忙しく、WWL 事業にかけられる時間が限られている」など負荷が大きいことが課題としてあげられる。WWL 事業を継続して行いた

めには WWL 事業の運営担当・授業担当に負担が集中しない体制づくりが求められる。また、学内の教員間の意識あわせも重要な課題となる。これまでにない新たなカリキュラムを開発・運営するためには、教員間の価値観をすりあわせていくことが重要になる。例えば、学内の体制づくりのために「WWL 事業を行う専門部署・委員会の設置」や「職員会議でのアナウンス」などにより、教員への普及を図っている拠点校の事例などもみられた。また、他の教員が授業など行いやすいように、授業指導案や動画などを作成してノウハウを共有することも有効といえる。

また、学外の連携については、AL ネットワークにより、管理機関や外部組織のリソースも活用することも有効である。ただし、連携をすることで負担が増え過ぎないように気を付ける必要がある。「互いにプラスとなる連携を意識する」ことが関係構築において重要なポイントといえる。

(2)自走段階に向けての準備

指定期間が終わり自走段階にある学校も、全て活動を継続していた。ただし、35%の学校は、活動を縮小するなど、指定期間とすべて同じ形での活動を行えるとは限らない。自走段階に向けての準備が必要となる。自走に向けての準備として、すでに自走期間にある学校からは、「学内体制の見直し」「ノウハウの継承」「予算確保」などが課題となるとあげられている。全てを指定期間のまま継続すればいいわけではなく、実施目的を再度捉えなおし、必要性を認識したうえで自走していくことが重要である。

7-2-2 卒業後の活動

WWL 事業に参加した生徒のほとんどが大学に進学しているが、WWL 事業で経験した探究学習のような学習が、必ずしも大学で継続できる環境にないことが明らかになった。今年度実施した卒業生調査では、卒業生の 1/4 が高校と比較して大学の「探究型や問題解決学習の授業」について満足していないことがわかった。また、このような大学では「グループワークやディスカッションをする授業」「大学以外の企業や地域の話聞く機会」の実施割合も低く、大学の取組状況の違いにより、卒業生の WWL 型学習の継続に差が出ていることがわかった。

「将来、世界で活躍できるイノベーティブなグローバル人材を育成」という WWL 事業の最終的な目的の達成のためには、様々な経験をした WWL 卒業生が引き続き成長し続け

ることができる高大連携のあり方を検討する必要がある。